

特別史跡埼玉古墳群

二子山古墳

発掘調査報告書

2023

埼玉県教育委員会



二子山古墳（平成30年3月6日撮影）



土師器 高杯（墳丘造出し出土）



須恵器 杯（墳丘造出し出土）



円筒埴輪（墳丘造出し出土）

序

特別史跡埼玉古墳群は、埼玉県名発祥の地とされる行田市埼玉にあり、9基の大型古墳が密集する、全国でも屈指の規模をもつ古墳群として広く知られています。

埼玉県が主体となり昭和43年度から「さきたま風土記の丘」として整備を開始してから既に55年が経ち、現在は「さきたま古墳公園」として多くの見学者に親しまれています。昭和53年には稲荷山古墳から出土した鉄剣から115文字の銘文が発見され、昭和58年に「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」として他の出土品とともに一括で国宝に指定されています。金錯銘鉄剣は現在の多くの教科書に掲載されるほど著名であり、考古学の範囲を超え、日本古代史を考究する上でも欠かせない資料となっています。その後も各古墳の発掘調査を継続的に実施しており、調査成果を基にした古墳群の整備事業を推進しています。

埼玉古墳群は、地元の人々による熱心な保存運動が昭和13年の国史跡指定へとつながったという歴史をもちます。こうして80年以上にわたって護られてきた経緯や、50年以上にわたる調査・研究・整備の蓄積が評価され、令和2年3月には、全国で63件目となる特別史跡に指定されました。

二子山古墳は埼玉古墳群のほぼ中央に位置し、埼玉県下最大の前方後円墳として知られています。埼玉県教育委員会では、二子山古墳について、昭和43年度の「さきたま風土記の丘」整備事業の中で堀や中堤の整備を行いました。内堀を水堀として復原したことから墳丘の一部に崩落が生じてしまいました。このため、平成24年度から内堀の埋立工事を行い、これと並行して墳丘の状況を確認するための発掘調査を行いました。

調査では、本来の墳丘裾が昭和43年度に造成された土で保護されていた点や、内堀、中堤の平面形状が現況の姿とは異なる点が明らかになりました。遺物としては、墳丘造出しで須恵器や土師器がまとまって出土したほか、線刻をもつ円筒埴輪が見つかりました。また、早稲田大学の御協力のもとに実施した地中レーダー探査の結果、新たな知見も得られました。

本書は、二子山古墳の発掘調査の内容や記録を報告書としてまとめたものです。今後は、この調査成果を二子山古墳の整備事業にいかしてまいります。あわせて、本書が学術的、教育的にも広く活用されることを願っております。終わりに、発掘調査から本書の刊行に至るまで、御指導・御協力をいただきました文化庁及び特別史跡埼玉古墳群保存整備協議会をはじめ関係の全ての皆様から御礼を申し上げます。

令和5年3月

埼玉県教育委員会教育長

高 田 直 芳

例 言

- 1 本書は、埼玉県行田市埼玉に所在する、特別史跡埼玉古墳群二子山古墳の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、埼玉県教育委員会が文化庁文化財保存事業費関係国庫補助を受けて実施した。
- 3 発掘調査は平成25年度から平成30年度までの、平成26年度を除く5か年で実施した。内堀の埋立工事と並行して実施したもので、埋立工事の実施期間は平成24年度から平成26年度までの3か年である。
- 4 本事業は、文化庁の指導助言を受け、史跡埼玉古墳群保存整備協議会（現 特別史跡埼玉古墳群保存整備協議会）の検討結果に基づき、埼玉県教育委員会が実施した。
- 5 事業の組織、調査担当者は第1章第1節に掲載した。
- 6 遺構の写真は各調査の担当者が撮影した。遺物についてはナワビ矢麻が行った。
- 7 出土品の整理はナワビが担当して、令和元～3年度に接合、復元、図化作業を行い、令和4年度に製図と編集、執筆を行った。
- 8 本書の執筆は主にナワビが行い、第2章第9節は水口由紀子が行った。平成25・27～30年度に実施したテフラ分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託した結果である。
- 9 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々と機関から御指導、御協力を賜った。（敬称略・五十音順）

文化庁・行田市教育委員会・鴻巣市教育委員会・さいたま市立博物館・栃木県立博物館・東松山市教育委員会・早稲田大学高等研究所・早稲田大学文学部考古学コース

青木 敬・大谷 徹・太田博之・小泉玲子・酒井清治・城倉正祥・杉崎茂樹・鈴木一有・高田大輔・塚田良道・伝田郁夫・中久保辰夫・野口達郎・日高 慎・藤野一之・右島和夫・山崎 武

凡 例

- 1 図版中に示した座標（X・Y）は世界測地系国土標準平面直角座標系第 IX 系に基づく座標値である。
- 2 遺構図版の縮尺は原則として1/80としたが例外もある。各図版中に縮尺とスケールを明示した。遺物図版は下記の縮尺とした。
円筒埴輪（大型）=1/5
円筒埴輪（破片）、形象埴輪、須恵器、土師器、その他=1/4
- 3 遺構の表記記号は以下のとおりである。
S K・・・土坑
- 4 過去の調査トレンチの呼称は「調査年度 - 調査トレンチ名」であり、トレンチ番号等は既報告に準拠した。「行」は行田市教育委員会による調査を示す。
- 5 既刊報告書内の遺物の、本書内での呼称、記号は以下のとおりである
「(報告書 No.) - (図版番号) - (図番号)」
報告書 No.5、No.8はそれぞれ下記の報告書を示す。
No.5=1987『埼玉古墳群発掘調査報告書第 5 集 二子山古墳』
(昭和42・49・55・59年度の調査報告)
No.8=1992『埼玉古墳群発掘調査報告書第 8 集 二子山古墳・瓦塚古墳』
(平成 2 年度の調査報告)
- 6 本報告では、調査年度順の記載ではなく、調査区を便宜上 4 区に分けて報告する。調査区の区分けは図 9 に示した。I 区は墳丘西側の造出し周辺、II 区は造出しを除く墳丘、III 区は中堤、IV 区は外堀と中堤造出し周辺である
- 7 トレンチの表記は「調査年度（平成表記）」-「トレンチ番号」に統一している。平成27年度の第 5 トレンチは 3 本のトレンチをまとめて第 5 トレンチとしたため、西から順に「27-5T-1」、「27-5T-2」、「27-5T-3」と枝番を付け、表記上分離した。本報告で登場しない「29-5T」は 29-2T の拡張に伴い欠番扱いとなったトレンチである。
- 8 本報告における古墳各部の名称は下図に示したとおりである。
内堀・外堀：濠・溝の使用法もあるが、既刊の報告書に準拠する。
両者を合わせて周堀とも呼称する。
テラス面：墳丘の段築で作出された平坦面をテラス面と呼称する。

9 断面図中に示した土層注記は、可能な限り統一を図ったが調査年度や調査担当者の違いにより表記が異なる場合がある。

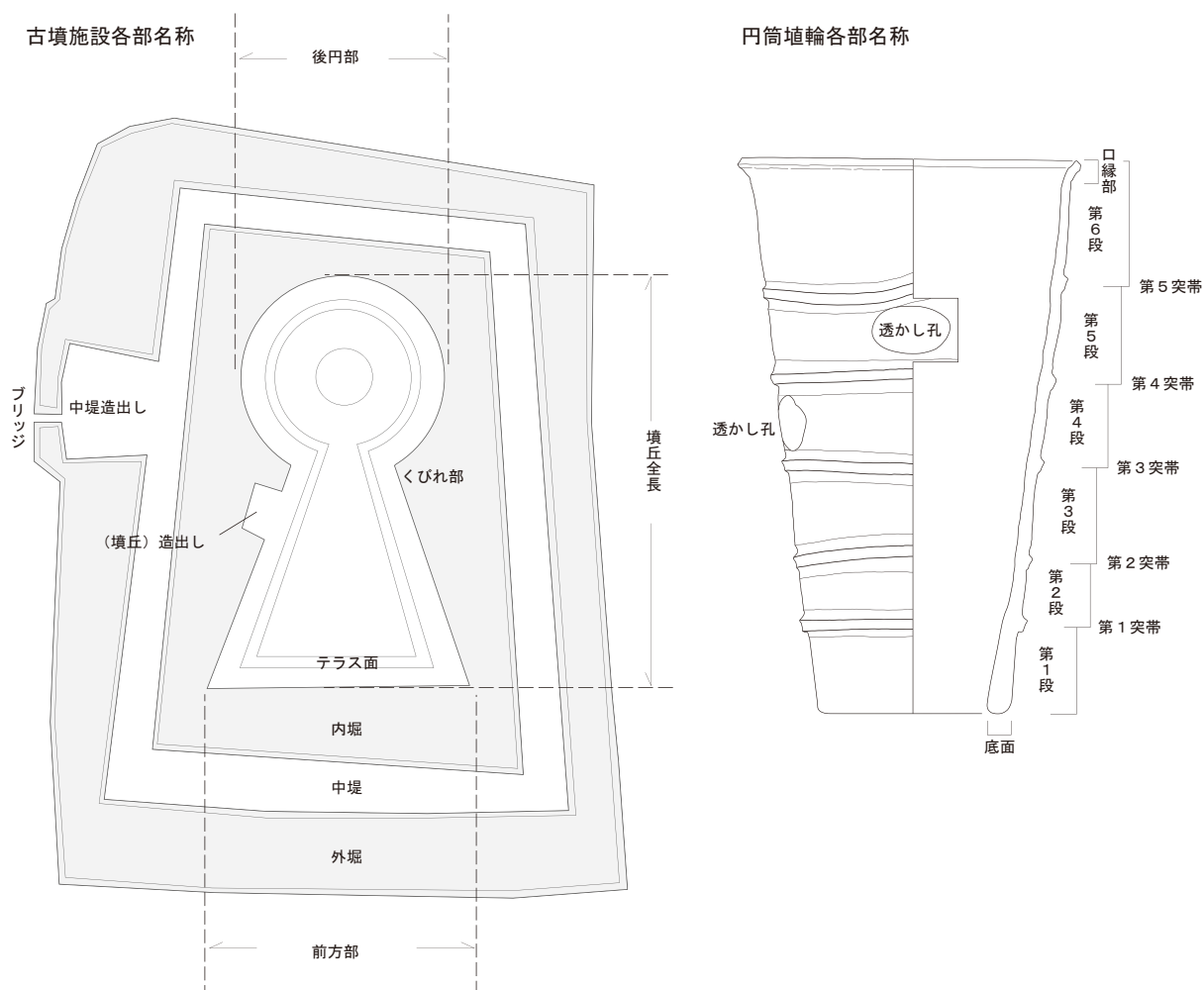
10 本報告内での遺物の観察表の凡例は、以下のとおりである。

- ・口径や器高等の数値の欄で、[] は推定値、() は遺存値を示す。単位は cm。
- ・色調は『新版 標準土色帖』に準拠した。
- ・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
- ・円筒埴輪の突帯、段の呼称は、便宜的に5条6段と仮定して数値を示した。
- ・含有物は胎土中で観察可能であった混入物を記載した。記号は下記参照。

A石英 B長石 C角閃石 D酸化鉄 Eチャート F白色針状物質 G雲母

H片岩 Iパミス J砂粒

11 第2章第8節に提示した土師器の図版は、上下2段から成り、両者は同じ資料である。器壁が薄く破損しやすい資料である点、坏部と脚部の接合部の断面の計測が困難である点等を考慮し、外面および断面の記録は写真による三次元計測を基とし、観察に基づく調整を記入した。



目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

目次

第1章 発掘調査とその経過

第1節 発掘調査に至る経緯と調査組織	1
第2節 発掘調査の経過	5
第3節 立地と環境	11
第4節 過去の調査と整備の概要	22
第5節 発掘調査の概要	26

第2章 発掘調査の成果

第1節 I区の調査成果	31
第2節 II区の調査成果	49
第3節 III区の調査成果	67
第4節 IV区の調査成果	77
第5節 円筒埴輪	93
第6節 形象埴輪	137
第7節 須恵器	149
第8節 土師器	171
第9節 その他の時代の遺構・遺物	189

第3章 科学分析等

第1節 土壌・テフラ分析	197
第2節 地中レーダー探査	211

第4章 活用事業

第5章 発掘調査のまとめ

第1節 調査成果について	217
第2節 出土遺物について	221
第3節 整備について	225

挿図目次

図1	関東地方の主要古墳と埼玉古墳群の 位置.....	13	図26	29-1T 平面図・断面図 (S=1/80).....	51
図2	周辺の遺跡分布図.....	15	図27	27-1T 平面図・断面図 (S=1/80).....	53
図3	埼玉古墳群.....	19	図28	27-2T 平面図・断面図 (S=1/80).....	54
図4	昭和12年の測量図.....	20	図29	27-3T 平面図・断面図 (S=1/80).....	55
図5	過去の調査トレンチと今回調査トレンチ	23	図30	25-1T 平面図・断面図 (S=1/80).....	57
図6	過去の調査で出土した主な遺物.....	24	図31	25-2T 平面図 (S=1/80).....	59
図7	過去の整備.....	25	図32	25-2T 断面図① (S=1/80).....	60
図8	年度別調査トレンチ.....	28	図33	25-2T 断面図② (S=1/80).....	61
図9	調査区 区分け図.....	29	図34	25-3T 平面図 (S=1/80).....	63
図10	二子山古墳全測図.....	30	図35	25-3T 断面図① (S=1/80).....	64
図11	昭和23年撮影航空写真 (UR1242) 国土地理院所蔵.....	31	図36	25-3T 断面図② (S=1/80).....	65
図12	昭和39年撮影航空写真 (MKT64-09X) 国土地理院所蔵.....	31	図37	残存する中堤盛土 (昭和42年度調査時)	67
図13	I 区平面図.....	32	図38	III区平面図.....	68
図14	昭和42年度 42-10T 南拡張区 写真	33	図39	27-4T 平面図 (S=1/160)・ 断面図 (S=1/80).....	70
図15	29-2,3,4,6T 平面図 (S=1/160).....	34	図40	27-5T 平面図 (S=1/80).....	72
図16	29-2,6T 断面図① (S=1/80).....	36	図41	27-5T 断面図 (S=1/80).....	73
図17	29-2,6T 断面図② (S=1/80).....	37	図42	25-4T 平面図・断面図 (S=1/80).....	74
図18	29-2T 造出し微細図 位置図 (S=1/80).....	42	図43	25-5T 平面図・断面図 (S=1/80).....	75
図19	29-2T 微細図・土器集中 上・中・下層 (S=1/20).....	43	図44	25-6T 平面図・断面図 (S=1/80).....	76
図20	29-2T 微細図・土器集中 上層 (S=1/20).....	44	図45	中堤造出し形状 (堀形状は一部推定)	77
図21	29-2T 微細図・土器集中 中層 (S=1/20).....	45	図46	IV区平面図.....	78
図22	29-2T 微細図・土器集中 下層 (S=1/20).....	46	図47	30-1T・28-1T・28-2T 平面図 (S=1/120).....	80
図23	29-2T 微細図・埴輪 (S=1/20).....	47	図48	30-1T (北壁・西壁)・28-1T (北壁) 断面図 (S=1/80).....	81
図24	29-3T 微細図 (S=1/40).....	48	図49	30-1T (中央壁・東壁) 断面図 (S=1/80).....	82
図25	II 区平面図.....	50	図50	30-1T 土坑遺物出土状況 (S=1/40)	84
			図51	30-1T SK1出土の角閃石安山岩.....	85
			図52	30-2T・28-3T・28-4T 平面図 (S=1/100).....	86

図53	30-2T 断面図① (S=1/80)	87	図86	須恵器⑤	162
図54	30-2T 断面図② (S=1/80)	88	図87	須恵器⑥	163
図55	28-5T 平面図 (S=1/80)	90	図88	土師器①	178
図56	28-6T 平面図 (S=1/80)	90	図89	土師器②	179
図57	28-7T 平面図・断面図 (S=1/80)	91	図90	土師器③	180
図58	28-8T 平面図・断面図 (S=1/80)	92	図91	土師器④	181
図59	円筒埴輪①	101	図92	土師器⑤	182
図60	円筒埴輪②	102	図93	土師器⑥	183
図61	円筒埴輪③	103	図94	土師器⑦	184
図62	円筒埴輪④	104	図95	縄文土器	189
図63	円筒埴輪⑤	105	図96	中世の遺物①	191
図64	円筒埴輪⑥	106	図97	中世の遺物②	193
図65	円筒埴輪⑦	107	図98	その他の時代の遺物 出土位置	196
図66	円筒埴輪⑧	108	図99	テフラ組成ダイヤグラム (左:29-6T 墳丘 下位土層地点、右:30-1T・中央壁東部)	207
図67	円筒埴輪⑨	109	図100	土層柱状図①	208
図68	円筒埴輪⑩	110	図101	土層柱状図②	209
図69	円筒埴輪⑪	111	図102	分析試料 写真	210
図70	円筒埴輪⑫	112	図103	二子山古墳 地中レーダー探査の成果	212
図71	円筒埴輪⑬	117	図104	平成29年度 現地説明会	215
図72	円筒埴輪⑭	118	図105	平成30年度 現地説明会	215
図73	円筒埴輪⑮	119	図106	平成29年度 現地説明会資料 (抜粋)	216
図74	円筒埴輪⑯	120	図107	平成30年度 現地説明会資料	216
図75	円筒埴輪⑰	122	図108	二子山古墳墳丘推定復原図	219
図76	円筒埴輪⑱	123	図109	墳丘横断図	220
図77	円筒埴輪⑲	124	図110	線刻をもつ埴輪 (線刻部分、抜粋) ..	222
図78	形象埴輪 出土位置	141	図111	土師器(高坏) 重ね合わせ図(N=31) ..	224
図79	形象埴輪①	142	図112	埋立前の様子 (平成25年2月撮影)	225
図80	形象埴輪②	143	図113	埋立後の様子 (平成27年3月撮影)	225
図81	形象埴輪③	144			
図82	須恵器①	158			
図83	須恵器②	159			
図84	須恵器③	160			
図85	須恵器④	161			

表目次

表1	円筒埴輪観察表	125	表7	分析対象	197
表2	形象埴輪観察表	145	表8	テフラ検出分析成果	206
表3	須恵器観察表	164	表9	テフラ組成分析成果	207
表4	土師器観察表	185	表10	屈折率測定結果	207
表5	縄文土器観察表	194	表11	活用事業一覧	213
表6	中世の遺物観察表	194			

写真図版目次

図版1	昭和42年度調査時の航空写真	図版25	Ⅲ区25-6T
図版2	昭和42年度調査	図版26	Ⅳ区30-1T 全景
図版3	I区全景 埴丘造出し完掘状況	図版27	Ⅳ区30-1T 外堀覆土
図版4	I区全景・29-2T 完掘状況	図版28	Ⅳ区30-1T SK1・2・4 遺物出土状況
図版5	I区29-2T	図版29	Ⅳ区28-1T・28-2T
図版6	I区29-2T 遺物出土状況(1)	図版30	Ⅳ区30-2T 全景
図版7	I区29-2T 遺物出土状況(2)	図版31	Ⅳ区30-2T・28-3T・28-4T
図版8	I区29-2T 遺物出土状況(3)	図版32	Ⅳ区28-5T・28-6T
図版9	I区29-2T 遺物出土状況(4)	図版33	Ⅳ区28-7T・28-8T(1)
図版10	I区29-2T 遺物出土状況(5)	図版34	Ⅳ区28-7T・28-8T(2)
図版11	I区29-6T	図版35	調査風景
図版12	I区29-6T 遺物出土状況	図版36	調査風景・整理作業風景
図版13	I区29-6T 南壁(1)	図版37	円筒埴輪(1)
図版14	I区29-6T 南壁(2)	図版38	円筒埴輪(2)
図版15	I区29-3T 全景・遺物出土状況	図版39	円筒埴輪(3)
図版16	Ⅱ区27-2T	図版40	円筒埴輪(4)
図版17	Ⅱ区29-1T(1)	図版41	円筒埴輪(5)
図版18	Ⅱ区29-1T(2)	図版42	円筒埴輪(6)
図版19	Ⅱ区25-1T	図版43	円筒埴輪(7)
図版20	Ⅱ区25-2T	図版44	円筒埴輪(8)
図版21	Ⅱ区25-3T	図版45	円筒埴輪(9)
図版22	Ⅲ区27-4T	図版46	円筒埴輪(10)
図版23	Ⅲ区27-5T-2・25-4T	図版47	円筒埴輪(11)
図版24	Ⅲ区25-5T	図版48	円筒埴輪(12)

図版49 円筒埴輪 (13)
図版50 円筒埴輪 (14)
図版51 円筒埴輪 (15)
図版52 円筒埴輪 (16)
図版53 円筒埴輪 (17)
図版54 円筒埴輪 (18)
図版55 形象埴輪 (1)
図版56 形象埴輪 (2)
図版57 形象埴輪 (3)
図版58 形象埴輪 (4)
図版59 形象埴輪 (5)
図版60 形象埴輪 (6)
図版61 須恵器 (1)
図版62 須恵器 (2)
図版63 須恵器 (3)
図版64 須恵器 (4)
図版65 須恵器 (5)

図版66 須恵器 (6)
図版67 須恵器 (7)
図版68 須恵器 (8)
図版69 須恵器 (9)
図版70 土師器 (1)
図版71 土師器 (2)
図版72 土師器 (3)
図版73 土師器 (4)
図版74 土師器 (5)
図版75 土師器 (6)
図版76 土師器 (7)
図版77 土師器 (8)・縄文土器
図版78 中世遺物
参考1 塚山古墳群出土 円筒埴輪
(栃木県立博物館蔵)
参考2 東宮下出土人物埴輪
(さいたま市立博物館蔵)

第1章 発掘調査とその経過

第1節 発掘調査に至る経緯と調査組織

二子山古墳における調査は、「さきたま風土記の丘整備事業」に伴う昭和42（1967）年度の発掘に端を発する。この調査は、周堀の形態や墳丘規模の把握を目的に実施され、長短40以上のトレンチが設定された。翌43（1968）年度には、調査結果を基に内堀を中心に掘削による整備が行われ、「水堀」の状態で復原された。しかし、整備が終わって約40年が経つ頃より、水位の変動による墳裾の崩落が確認されるようになった。また、水難事故発生の危険性に関しても懸念があった。平成19（2007）年3月に墳丘東側の墳裾において崩落が確認され、崩落防止工事が行われた。平成21（2009）年8月には墳丘西側くびれ部付近及び前方部東南隅角部、平成22（2010）年8月には前方部西側側面の一部が崩落し、墳丘の保護について早急な対策が求められた。

そこで、平成24（2012）年度より3か年かけて内堀の埋立工事が実施された。埋立は前方部前面側から反時計回りに墳丘を一周する形で行われ、並行して発掘調査を実施した。発掘調査は当初、昭和43（1968）年度の公園整備工事での内堀掘削が周堀・墳裾・墳丘下方に与えた影響の確認と、その後の水位変化による墳丘・中堤の崩落状況の把握を目的に実施した。なお、昭和55・59（1980・1984）年度の調査の際に行われた自然科学分析により、古墳築造当時は水堀ではなかった点が確認されている。

事業を実施するに当たって、有識者を中心にした「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」を組織し、助言を受けながら調査を実施した。

史跡埼玉古墳群保存整備協議会および調査組織は下記に示す通りである。なお、令和2（2020）年3月の埼玉古墳群特別史跡昇格を受け、史跡埼玉古墳群保存整備協議会は令和2年度より特別史跡埼玉古墳群保存整備協議会と名称を変更している。

史跡埼玉古墳群保存整備協議会 委員（平成25年度～令和元年度）

特別史跡埼玉古墳群保存整備協議会 委員（令和2年度～4年度）

※五十音順 敬称略 所属は在任時最新のもの

青木 繁夫 （東京藝術大学客員教授 平成25年度～令和2年度）

石島 きく江 （行田市文化財保護審議会委員 平成29年度～令和4年度）

井上 尚明 （元埼玉県立自然の博物館長 立正大学講師 平成29年度～令和4年度）

梅沢 太久夫 （元埼玉県立歴史資料館長 平成25年度～28年度）

大澤 由子 （行田市社会教育委員 平成25年度～28年度）

大野 康夫 （埼玉県行田県土整備事務所長 平成25年度）

柿沼 幹夫 （元埼玉県立自然史博物館長 平成25年度～30年度）

梶島 邦江 （元埼玉大学教授 平成25年度～令和3年度）

佐藤 信 （東京大学名誉教授 平成25年度～4年度）

須田 勉 （元国土館大学教授 平成25年度～28年度）

園田 誠司 (元埼玉県行田県土整備事務所長 平成26年度～28年度、令和3・4年度)
高久 健二 (専修大学教授 平成25年度～令和4年度)
滝沢 誠 (筑波大学教授 令和元年度～令和4年度)
田中 裕 (茨城大学教授 平成27年～令和4年度)
吉野 悠一郎 (元埼玉県東松山県土整備事務所副所長 平成25年度～令和2年度)
若狭 徹 (明治大学教授 平成29年度～令和4年度)

事務局

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 前島 富雄 (平成25年度4～7月)
関根 郁夫 (平成25年度7月～平成28年度)
小松 弥生 (平成29年度6月～令和元年度)
高田 直芳 (令和2年度～4年度)
教育長職務代理者 藤崎 育子 (平成29年度4～6月)

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

課長 代島 常造 (平成25年度) 課長 佐藤 裕之 (平成26年度)
課長 芋川 修 (平成27～29年度)

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課

課長 横松 伸二 (平成30年度) 課長 案浦久仁子 (令和元～2年度)
課長 衛藤 一憲 (令和3年度) 課長 松本 光司 (令和4年度)

文化財活用・博物館、指定文化財保護、埋蔵文化財担当

副課長 書上 元博 (平成25年度) 副課長 関 義則 (平成26・27年度)
主幹 村田 章人 (平成28年度) 副課長 村田 章人 (平成29年度)

文化財活用・博物館、指定文化財、埋蔵文化財担当

副課長 末木 啓介 (平成30年度)

文化財活用・博物館、指定文化財、史跡・埋蔵文化財担当

副課長 末木 啓介 (令和元年度)

文化財活用、博物館・美術館、指定文化財、史跡・埋蔵文化財担当

副課長 末木 啓介 (令和2年度) 副課長 栗岡真理子 (令和3年度)

文化財活用・博物館、指定文化財、史跡・埋蔵文化財担当

副課長 村田 章人（令和4年度）

指定文化財保護担当（史跡担当）

主幹 末木 啓介（平成25年度）

主幹 岡本 健一（平成26・27年度）

主幹 栗岡眞理子（平成28・29年度）

指定文化財担当（史跡担当）

主幹 栗岡眞理子（平成30年度）

史跡・埋蔵文化財担当

主幹 佐藤 康二（令和元年度）

主査 小島 学（令和2・3年度）

主幹 野中 仁（令和4年度）

主事 宮原 正樹（令和元・2年度）

主任 中井 歩（令和3年度）

主任 倉澤麻由子（令和4年度）

事務局（発掘調査・整理・報告）埼玉県立さきたま史跡の博物館

館長 浅野 晴樹（平成25年度）

書上 元博（平成26・27年度）

関 義則（平成28・29年度）

村田 章人（平成30～令和2年度）

末木 啓介（令和3年度）

栗岡眞理子（令和4年度）

副館長 鈴木 進（平成25年度）

西島 和夫（平成26～27年度）

樋田 明男（平成28～30年度）

石原 雅樹（令和元・2年度）

小久保達夫（令和3年度）

小林 裕一（令和4年度）

総務・公園管理担当部長

大谷 嘉明（平成25・26年度）

堀米 俊孝（平成27・28年度）

大木久美子（平成29～令和元年度）

野村 浩（令和2～4年度）

総務・公園管理担当課長

加藤 浩一（平成25・26年度）

坂田 直樹（平成27～29年度）

野村 浩（平成30～令和元年度）

小林 礼（令和2年度）

金子 雅則（令和3年度）

渡辺 優（令和4年度）

広報・学習支援、資料・展示、史跡整備担当 主席学芸主幹

鈴木 秀雄（平成25・26年度）

田中 正夫（平成27年度）

西口 正純（平成29年度）

書上 元博（平成30年度）

関 義則（令和元・2年度）

伴瀬 宗一（令和3年度）

広報・学習支援、資料・展示、史跡整備担当 学芸主幹

石坂 俊郎（平成28年度）

佐藤 康二（令和4年度）

史跡整備担当 学芸主幹

岡本 健一（平成29・30年度）★

栗岡真理子（令和元・2年度）

史跡整備担当 主任学芸員

岩田 明広（平成25・26年度）★

佐藤 康二（平成25～28年度）★

山田 琴子（令和元年度）

史跡整備担当 学芸員

堀口 智彦（平成25・26年度）★

山田 琴子（平成27～30年度）★

中井 歩（平成28～30年度）★

ナワビ矢麻（令和元～4年度）

田邊 えり（令和2・3年度）

宮原 正樹（令和3・4年度）

吉田修太郎（令和4年度）

専門員兼学芸員

井上 尚明（平成27年度）★

※発掘調査の担当者には★を付した。

発掘調査・整理作業参加者

○発掘調査

石島光芳・猪野芳江・梅沢敏男・大野時雄・川島邦子・川瀬さゆり・川村良子・木本常子・
熊谷晋祐・小林幸子・小松原重雄・佐藤和一・澤田春雄・柴田寿久・白岩千江子・
鈴木千代子・関口信一・田島由紀子・田中憲三・田中瑞木・田村喜代子・沙魚川耕二・
原島正・福田浩子・福本正美・保泉真結美・前田悦三・宮本修・森保夫・山崎豊・
渡部光太郎

○整理作業・報告書作成

岡本千里・菊地歌織・木島芳江・齊藤真理子・菅谷操・高尾智恵子・室久佳代子・
山崎えり子

第2節 発掘調査の経過

(1) 平成25年度 調査面積 99㎡ 調査期間 平成25年9月10日～11月26日

発掘調査費用 3,442 (千円)

①補助事業及び現状変更手続き

平成25年3月13日 国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書（以下交付申請書）を文化庁へ提出（教生文第2191-3号）。

平成25年5月15日 交付決定通知（25庁財第62号）。

平成26年3月27日 国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書（以下実績報告書）を文化庁へ提出（教生文第393号）。

平成25年6月7日 史跡現状変更等許可申請書（発掘調査）を文化庁へ提出（埼博第98号）。

平成25年7月21日 許可通知（25受庁財第4号の528）。

平成26年2月18日 現状変更等終了報告を文化庁へ提出（埼博第346-1号）。

平成25年8月9日 文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教育長へ提出（埼博第400-2号）。

平成26年2月12日 コンテナ6箱分の出土遺物について、埋蔵物発見届を行田警察署へ提出。

平成26年5月1日 埋蔵物の文化財認定通知。

②調査日誌抄録

9月10日 前方部南西隅において25-1トレンチを設定し、表土掘削を開始する。

9月17日 25-2トレンチの掘削開始。25-1トレンチ内のサブトレンチの掘削開始。

9月19日 25-3トレンチの設定。25-2トレンチの上方で板碑出土。

中世墓の可能性があるのでため周辺を調査する。

朝日新聞（2013.9.19）で内堀の埋立について記事化。

9月20日 25-2トレンチの中段テラスと見られる面で骨片・小円礫・炭化物検出。

9月24日 25-2トレンチの内堀内の落ち込みは湧水のため追えず。

9月26日 25-2トレンチ中世墓地遺構確認、25-3トレンチ表土掘削。

25-2、25-3トレンチの状況からみて、中世以降の墓地造成により、前方部前面斜面には階段状に掘削され中段テラスが破壊されたと判断。

10月3日 25-4トレンチ掘削、図面・写真撮影後、埋め戻す。

10月4日 25-5、25-6トレンチ掘削、図面・写真撮影後、埋め戻す。

10月10日 25-2トレンチ完掘、写真撮影。

10月17日 25-3トレンチ完掘、写真撮影。

10月22日 25-1トレンチ埋め戻し完了。

10月24日 25-2・25-3トレンチの図化作業。

11月26日 25-2・25-3トレンチを埋め戻し、調査終了。

(2) 平成27年度 調査面積 178m² 調査期間 平成27年12月1日～平成28年3月10日
発掘調査費用 1,762 (千円)

①補助事業及び現状変更手続き

平成27年2月12日 交付申請書を文化庁へ提出(教生文第2179-1号)。
平成27年4月9日 交付決定通知(26庁財第542号)。
平成27年12月1日 計画変更承認申請書を文化庁に提出(埼博第307号)。※稲荷山工事
平成27年12月17日 計画変更承認通知(27受庁財第12号の259)。
平成28年2月2日 計画変更承認申請書を文化庁に提出(埼博第363号)。※稲荷山工事
平成28年2月18日 計画変更承認通知(27受庁財第12号の376)。
平成28年4月6日 実績報告書を文化庁へ提出(教生文第2682-1号)。

平成27年5月28日 史跡現状変更等許可申請書(発掘調査)を文化庁へ提出(埼博第108号)。
平成27年7月17日 許可通知(27受庁財第4号の428)。
平成28年4月13日 現状変更等終了報告を文化庁へ提出(埼博第18-1号)。

平成27年8月11日 文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教育
長へ提出(埼博第193-2号)。
平成28年3月11日 コンテナ3箱分の出土遺物について、埋蔵物発見届を行田警察署へ提出。
平成28年5月11日 埋蔵物の文化財認定通知。

②調査日誌抄録

10月29日 基準点測量立会。
12月1日 二子山古墳の墳裾、27-1、2トレンチ掘削開始。27-2トレンチ上部で墳丘面確認。
12月10日 27-1トレンチで墳丘面を検出。
12月17日 27-3トレンチ掘削開始。
1月20日 重機で27-4トレンチ掘削開始。北東側中堤コーナーのプランを検出。
1月21日 重機で27-5トレンチ掘削開始。
1月22日 27-4、5トレンチで中堤のコーナーを検出。中堤が長方形となることが判明。
2月25日 27-4、5トレンチ埋め戻し開始。
3月10日 27-1～3トレンチ埋め戻し、調査終了。

(3) 平成28年度 調査面積 144m² 調査期間 平成29年2月14日～3月9日
発掘調査費用 1,731 (千円)

①補助事業及び現状変更手続き

平成28年2月12日 交付申請書を文化庁へ提出(教生文第2195-1号)。

平成28年4月1日 交付決定通知（27庁財第612号）。
平成28年5月11日 計画変更承認申請書を文化庁に提出（埼博第61号）。※鉄砲山調査
平成28年5月31日 計画変更承認通知（28受庁財第12号の7）。
平成28年12月7日 計画変更承認申請書を文化庁に提出（埼博第255号）。※丸墓山工事
平成28年12月27日 計画変更承認通知（28受庁財第12号の272）。
平成29年3月31日 実績報告書を文化庁へ提出（教生文第2739-1号）。

平成28年3月9日 史跡現状変更等許可申請書（発掘調査）を文化庁へ提出（埼博第404号）。
平成28年4月22日 許可通知（27受庁財第4号の2168）。
平成29年3月30日 現状変更等終了報告を文化庁へ提出（埼博第368号）。

平成28年5月17日 文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教育
長へ提出（埼博第75-2号）。
平成29年3月14日 コンテナ1箱分の出土遺物について、埋蔵物発見届を行田警察署へ提出。
平成29年4月17日 埋蔵物の文化財認定通知。

②調査日誌抄録

2月14日 二子山古墳外堀西側で掘削開始（28-1～8トレンチ）。
中堤造出しに沿った外堀のプラン検出を目的とする。
2月17日 二子山古墳の墳裾、27-1、2トレンチ掘削開始。27-2トレンチ上部で墳丘面確認。
2月21日 28-6、7トレンチで外堀覆土のプランを確認。
2月24日 28-1トレンチ清掃。黒色土から形象埴輪が数点出土。
3月1日 中堤造出しに沿った形で外堀のプランを検出。
3月3日 28-4トレンチ東端にて外堀の落ち込みと考えられる箇所を検出。
3月6日 28-1トレンチ内ピットを掘り下げ。後世の攪乱の可能性あり。
3月9日 埋め戻し。

（４）平成29年度 調査面積 241㎡ 調査期間 平成29年9月5日～平成30年3月5日
発掘調査費用 6,784（千円）

①補助事業及び現状変更手続き

平成29年2月7日 交付申請書を文化庁へ提出（教生文第2225-1号）。
平成29年4月3日 交付決定通知（28庁財第624号）。
平成30年4月1日 実績報告書を文化庁へ提出（教文資第2701-1号）。

平成29年5月11日 史跡現状変更等許可申請書（発掘調査）を文化庁へ提出（埼博第76号）。
平成29年6月16日 許可通知（29受庁財第4号の374）。
平成30年3月13日 現状変更等終了報告を文化庁へ提出（埼博第372号）。

平成29年 8月16日 文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教育
長へ提出（埼博第181号）。

平成30年 3月 9日 コンテナ44箱分の出土遺物について、埋蔵物発見届を行田警察署へ提出。

平成30年 5月 1日 埋蔵物の文化財認定通知。

②調査日誌抄録

- 9月 5日 調査開始。後円部トレンチ（29-1トレンチ）の設定、表土掘削。
- 9月 8日 29-1トレンチで墳丘面を一部検出。
墳丘造出しにトレンチを設定（29-2トレンチ）。表土の掘削。
- 9月14日 29-1トレンチでテラス面の検出。
造出しは覆土が厚く堆積しており、埴輪や須恵器の破片が多く出土。
- 9月15日 29-1トレンチのテラスでは埴輪列は確認できず。
中段テラスより下の墳丘面は明瞭であるが、上は攪乱を受けている可能性。
29-2トレンチの北に平行するように29-3トレンチを設定。
- 9月21日 29-1トレンチ完掘、写真撮影。29-4トレンチ設定、表土掘削開始。
- 10月 5日 29-2トレンチで須恵器坏や甕、土師器高坏が重なった状態で出土。
29-2トレンチと29-3トレンチの間に29-5トレンチを設定し掘削開始。
29-6トレンチを設定。
- 10月10日 29-2トレンチの遺物出土状況図を作成。
29-5トレンチで多数の埴輪片出土。29-6トレンチ掘削開始。
- 10月12日 29-4トレンチと29-6トレンチを接続。
- 10月18日 29-3トレンチの平面図作成。
- 10月26日 台風の影響で内堀が冠水。遺構や遺物に影響はなし。
29-2トレンチ平面図作成。
- 10月31日 29-2トレンチに2 m×2 mの区を設定し、区ごとに遺物取り上げ。
引き続き須恵器・土師器が多量に出土。完形に復元できる個体が多い。
29-3トレンチで墳丘面を検出。
- 11月 1日 29-3トレンチで多量に埴輪が出土。
- 11月 2日 29-2トレンチ写真撮影。遺物取り上げ後、埴輪が樹立した状態で出土。
- 11月 7日 29-3トレンチで遺物出土状況の写真撮影。学芸員研修・研修生参加。
- 11月 9日 29-2トレンチ拡張。拡張地点から須恵器・土師器が出土。
- 11月10日 29-3トレンチ平面図作成。
29-6トレンチで墳丘面検出。遺物出土状況写真撮影。
- 11月17日 29-2トレンチ遺物出土状況写真撮影。
- 11月21日 29-2トレンチ遺物出土状況図面作成。
29-6トレンチ遺物出土状況写真撮影。
- 11月24日 29-6トレンチで造出しの肩部を検出。落ち込みから埴輪片が出土。

- 1月16日 29-2・6トレンチで造出しの裾部を検出するために拡張。
- 1月24日 22、23日に降った大雪のため、雪かき。
- 1月30日 29-2トレンチ遺物取り上げ。雪かき、現地説明会に向けての準備。
- 2月3日 現地説明会開催。274名の参加があった。
- 2月13日 土器集中区の実測、造出し北端の埴輪実測。
- 2月15日 造出し土器取り上げ。
造出し床面から浮いた土器が多いが、最下部では床面に接する個体も確認できた。
- 2月23日 平板測量、セクション図作成。
- 2月27日 埋め戻し開始。
- 3月5日 重機による埋め戻し。

(5) 平成30年度 調査面積 234㎡ 調査期間 平成31年1月15日～3月8日
発掘調査費用 5,633 (千円)

①補助事業及び現状変更手続き

平成30年2月8日 交付申請書を文化庁へ提出(教生文第2252-2号)。

平成30年4月2日 交付決定通知(29庁財第635号)。

平成31年4月4日 実績報告書を文化庁へ提出(教文資第2397-2号)。

平成30年10月10日 史跡現状変更等許可申請書(発掘調査)を文化庁へ提出(埼博第250号)。

平成30年11月16日 許可通知(30受文庁第4号の114)。

平成31年3月14日 現状変更等終了報告を文化庁へ提出(埼博第386号)。

平成30年12月5日 文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を県教育
長へ提出(埼博第303号)。

平成31年3月14日 コンテナ8箱分の出土遺物について、埋蔵物発見届を行田警察署へ提出。

令和元年5月8日 埋蔵物の文化財認定通知。

②調査日誌抄録

- 1月15日 調査開始。30-1トレンチ掘削。埴輪片がまばらに出土。
- 1月16日 30-2トレンチの掘削開始。
- 1月17日 30-1トレンチを北側に拡張し、28-1トレンチを検出。
- 1月18日 30-1トレンチにおいて28-1トレンチで検出された土坑を確認。
- 1月22日 30-1トレンチでいくつか土坑を確認。
30-2トレンチで中堤造出しの立ち上がりを検出する。
- 1月24日 土坑から埴輪、川原石、角閃石安山岩が出土。
- 1月31日 土坑の掘り下げ。中堤造出しの精査。
- 2月2日 発掘調査現地説明会を実施。314名の参加があった。

2月12日 30-2トレンチで外堀コーナーと考えられる箇所を検出。
30-1トレンチ土坑の遺物出土状況図化。
2月14日 30-1トレンチ土坑上層の遺物取り上げ。
30-2トレンチの清掃、写真撮影。
2月21日 土坑内下層の遺物取り上げ。形象埴輪含む。
2月22日 30-1トレンチの清掃、写真撮影。
3月1日 図面作成終了。
3月5日 土層注記、埋め戻し準備。
3月6日 重機による埋め戻し。
3月8日 道具の撤収、片付け。調査終了。

(6) 平成31・令和元年度 整理作業費用 1,458 (千円)

平成31年1月29日 交付申請書を文化庁へ提出(教生文第1977-1号)。
平成31年4月1日 交付決定通知(30文庁財第1189号)。
令和2年4月8日 実績報告書を文化庁へ提出(教文資第2160号)。
出土遺物の洗浄・接合作業等を実施。

(7) 令和2年度 整理作業費用 2,986 (千円)

令和2年1月29日 交付申請書を文化庁へ提出(教文資第1724-1号)。
令和2年4月1日 交付決定通知(元文庁第2042号)。
令和3年4月7日 実績報告書を文化庁へ提出(教文資第1913号)。
図面整理、出土遺物の洗浄・接合作業等を実施。

(8) 令和3年度 整理作業費用 3,236 (千円)

令和3年2月3日 交付申請書を文化庁へ提出(教文資第1500-1号)。
令和3年4月1日 交付決定通知(2文庁財第2181号)。
令和4年3月31日 実績報告書を文化庁へ提出(教文資第1869号)。
出土遺物の実測・拓本作業等を実施。

(9) 令和4年度 整理作業費用 3,705 (千円) ※見込

令和4年2月3日 交付申請書を文化庁へ提出(教文資第1507-1号)。
令和4年4月1日 交付決定通知(3文庁第2706号)。
令和5年1月16日 計画変更承認申請書を文化庁へ提出(教文資第1429号)。
令和5年1月25日 計画変更承認通知(4受文庁第12号の387)。
令和5年3月 実績報告書を文化庁へ提出予定。
写真撮影、原稿執筆、図版作成を実施。発掘調査報告書を刊行。

第3節 立地と環境

(1) 埼玉古墳群の地理的環境

埼玉古墳群は埼玉県名発祥の地、埼玉県行田市埼玉に立地する。直線距離で、秩父鉄道行田市駅からは南東に約2.5km、JR高崎線吹上駅からは北東に約3.5kmに位置する。

現在、古墳群の南西側を荒川が南に向かって流れ、北側を利根川が東流している。荒川は山梨・埼玉・長野の三県にまたがる甲武信ヶ岳（標高2,475m）に端を発し、中流の鴻巣市御成橋付近で最大川幅となり、東京湾に注いでいる。埼玉古墳群周辺に目を向ければ、山岳部を抜け傾斜が緩やかになる寄居町付近を扇頂とし、荒川扇状地を形成していたとされる。荒川扇状地は両岸に櫛引台地、江南台地の名で知られる河岸段丘を形成し、縄文時代以降になると現在の植松橋付近を扇頂とする新たな扇状地形を形作る。これは荒川新扇状地（新荒川扇状地、熊谷扇状地とも呼ばれる）と呼ばれ、現在の熊谷市が扇端の一部とされる。埼玉古墳群の立地する行田市はその東側に位置し、扇状地に続く氾濫原になっていたと想定されている。熊谷市内から流れる忍川や星川の両岸には自然堤防状の微高地が点在しており、自然堤防の背後には広大な後背湿地が広がっている。

利根川は、三国山脈の大水上山（標高1,831m）に水源をもち、現在では関東平野を北西から南東へ流れ千葉県銚子市で太平洋へと注ぐ。江戸幕府による瀬替えにより現在の姿に近い形へと流路が変わる以前は、行田市付近から始まる氾濫原を南下し中川低地を経由し東京湾に注いでいた（九学会連合利根川流域調査委員会1971）。加須低地に大きな谷を刻んだ痕跡がないため、約5,000年前までは荒川筋を流れていたとする見方もある（田辺2008）。荒川扇状地の発達と関東造盆地運動に伴う加須低地の埋没により利根川の流路は荒川筋から離れ、東へ動いたとされる（菊地1981）。利根川の流路東漸の時期や位置については諸説あるが、流路は安定せず、複数回にわたり流路を変えていたようである（魚水2020）。榛名山噴出物である角閃石安山岩転石の分布から、埼玉古墳群の東方を流れる星川が転石の確認される最も西であることがわかっている。古墳群造営当時、星川まで利根川が到達していた事実が推定可能である（秋池2000）。埼玉古墳群が造営された古墳時代後期に、利根川の流路が変遷したとする説もある（柿沼ほか2011、熊谷市教育委員会2018）。低地を流れることになった利根川は複数の流路をもち、一部は埼玉古墳群の近傍を流れていた可能性も指摘されている。

埼玉古墳群を含む一帯は、現在の地形区分上では加須低地に属する。加須低地は東西を中川低地、妻沼低地に接し、南北を大宮台地と館林台地に挟まれている。大宮台地、館林台地は加須低地に向かうに従い徐々に高度を下げ、鴻巣市付近まで明瞭であった低地との比高が徐々に失われ、低地の中心部では沖積面に埋没している。これは関東造盆地運動と呼ばれる沈降現象によるもので、いわゆる埋没ローム台地を形成している。埋没ローム台地とは、ローム層に覆われる台地が沖積層の堆積によって埋没した地形を示す（江口ほか1999）。この一帯では埋没や河川の浸食により独立した台地が形成され、その標高は河川沿いに形成された自然堤防とほぼ同じで、湿地との比高差も約1～3mとわずかである。

埼玉古墳群が立地する基盤はローム台地であり、独立した島状の微高地に立地する。非常に狭い範囲に大型古墳が密集して造られるという状況は、埼玉古墳群を特徴づける要素でもある。埼玉古

墳群を含む加須低地は、単純な低地ではなく、埋没台地や自然堤防による島状の微高地、後背湿地、河畔砂丘など複雑な地形が見られる。埼玉古墳群の周囲には水田や住宅があり、土取りなどの地形改変を受けた地域も多いため、現況での微地形の判読は困難である。関東造盆地運動の作用を多分に受けていると考えられるが、古墳時代に埼玉古墳群が造られた台地の比高の様相については現在より明確であったとする説もあるが、不明である。

埼玉古墳群の北側には旧忍川が東流し、その流路は稲荷山古墳の外堀の一部と重なっている。旧忍川は江戸時代、享保年間の開削と考えられてきたが、近接する白山愛宕山古墳の周堀がローム上に堆積した黒褐色土を掘りこんで造られている点が明らかにされた（篠田2016）ことにより、旧忍川がある位置には谷地形があり、少なくとも古墳時代には既に埋没していたことが明らかになった。埼玉古墳群とその北側に広がる白山古墳群との関係を考える上でも重要な点である。埼玉古墳群を取り巻く周辺の地形復原は未だ研究の途上ではあるが、更なる発掘調査やボーリングなどの地質学的調査、自然科学分析などの隣接分野の研究成果を援用した総合的な解釈が求められる。

（２）関東地方における埼玉古墳群

日本一の広大な面積をもつ関東平野のやや北よりに埼玉古墳群は立地する。図1には、関東地方に立地する、古墳時代後期を中心とした古墳の分布を示した。

群馬県域では、山間部を除きほぼ全域で古墳が築造されている。埼玉古墳群と同時期の古墳としては、関東地方最古の横穴式石室をもつ安中市築瀬二子塚古墳、前橋市大室古墳群、総社古墳群、高崎市保渡田古墳群、綿貫古墳群、佐野古墳群（浅間山古墳）、八幡古墳群、藤岡市白石古墳群（七興山古墳）など、大型の古墳から成る複数の古墳群が存在する。

一方栃木県域では、群馬県で見られたような様相とは異なり、古墳時代後期の大型古墳は思川流域に偏った分布を見せる。5世紀後半から6世紀前半に連続して造られた小山市摩利支天塚古墳、琵琶塚古墳や、終末期の大型円墳として知られる壬生町壬生車塚古墳などが存在する。

茨城県においては、現在の霞ヶ浦沿岸、特に西浦の北部に古墳が多く分布している。高浜入の沿岸に特に集中しており、小美玉市舟塚古墳やかすみがうら市風返稲荷山古墳、行方市三昧塚古墳が中期後半から後期の大型前方後円墳として知られる。北浦と鹿島灘に挟まれた地域には鹿嶋市宮中野古墳群が、那珂川流域には壁画古墳として有名なひたちなか市虎塚古墳がある。

千葉県内に目を向けると、城山1号墳で知られる香取市城山古墳群や、印旛沼東の栄町竜角寺古墳群、公津原古墳群など大規模な古墳群が造営された。市川市には国府台古墳群があり、法皇塚古墳が知られる。内房には、市原市菊間古墳群、姉崎古墳群、富津市内裏塚古墳群が存在する。太平洋側では、栗山川、成東川、境川、木戸川、作田川流域に多くの古墳が築かれた。栗山川流域には、旭市御前鬼塚古墳、多古町北条塚古墳などの後期前方後円墳が存在する。成東川流域には、駄ノ塚古墳など知られる山武市板付古墳群、木戸川流域には横芝光町中台古墳群（殿塚・姫塚古墳）や山武市朝日の岡古墳などが立地する。

埼玉県を含む旧武蔵国の後期古墳は特徴的な分布を示す。大型の古墳は埼玉古墳群を中心として北武蔵に集中する。旧埼玉郡以外では、羽生市永明寺古墳、久喜市栢間天王山塚古墳、東松山市おくま山古墳、朝霞市柊塚古墳などがある。一方、南武蔵地域には大田区・世田谷区にまたがる荏原

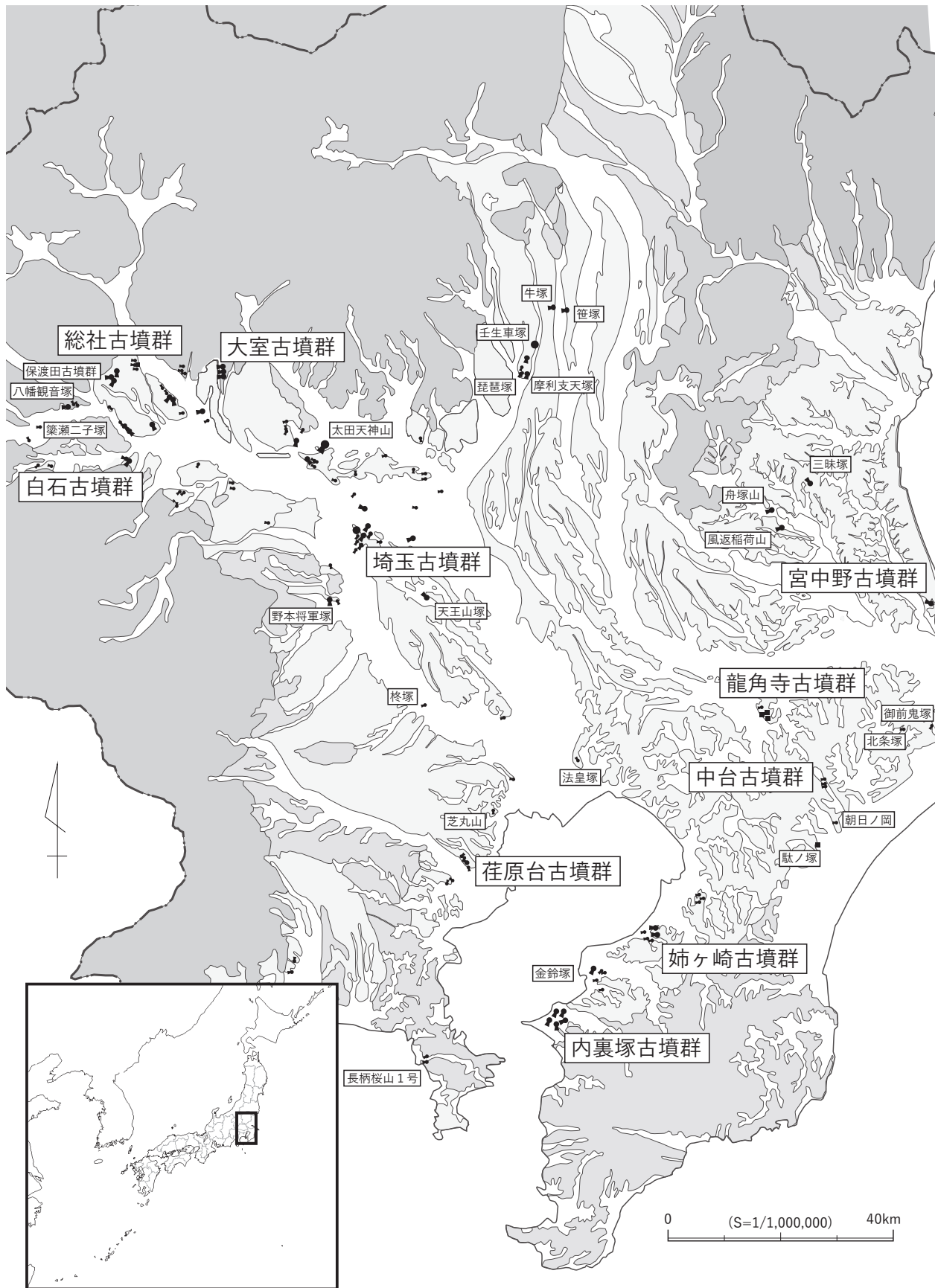


図1 関東地方の主要古墳と埼玉古墳群の位置

台古墳群や狛江市狛江古墳群が知られるが大型の古墳は少ない。相模地域においても同様の傾向を示し、逗子市・葉山町長柄桜山古墳が知られるが、大型前方後円墳の分布は希薄である。

（３）周辺の遺跡分布

埼玉古墳群を中心として、周辺に立地する古墳や関連遺跡について俯瞰する。図２は埼玉古墳群周辺の遺跡分布図である。埼玉県北部の利根川右岸の沖積低地には、行田をはじめ熊谷、羽生、加須市内に古墳群が多く確認されている。利根川の氾濫域である点は沖積層の堆積から明らかであるが、古墳時代においては広域にわたり開発が行われ、生産性の高い地域として存在していた可能性が考えられる。

埼玉古墳群の主体は、８基の前方後円墳と２基の大型円墳、１基の方墳、小円墳を含む一帯である。古墳の分布は更に南北に広がっており、北には旧忍川を隔てて白山古墳群が、南には奥の山古墳と武蔵水路の間に古墳の存在が知られている。白山古墳群は、稲荷山古墳の北方に展開するすべて円墳から成る古墳群である。白山古墳（白山１号墳）、神明山古墳、白山愛宕山古墳（白山４号墳）の３基は墳丘が現存し、調査で周堀の存在が明らかになった８基、クロップマークで存在が指摘される７基を合わせ１８基ほどが存在したと考えられている。

大人塚（うしづか）古墳は埼玉古墳群の西方にあり、前方後円墳だと考えられている。墳丘長は約４５ｍと推定されている。円筒埴輪のほか人物埴輪が出土しており、桜山窯で焼かれたと考えられる個体の他、生出塚埴輪窯産の円筒埴輪の存在も指摘されている。大人塚古墳の更に西方には円墳から成る佐間古墳群が展開する。墳丘が現存する大日塚古墳や諏訪古墳の他、１３基の古墳の周堀が見つまっている。これらは、旧忍川沿いの自然堤防上に築かれている。大日塚古墳からは緑泥石片岩製の箱式石棺１基と、上層から２基の粘土槨が見つかっており、５世紀末から６世紀前半の造営が推定されている。

埼玉古墳群の東方約７００ｍには若王子古墳が存在する。墳丘長９２ｍの前方後円墳で、墳丘は残存していない。周堀は一重の方形で、緑泥石片岩と角閃石安山岩を組み合わせた横穴式石室を持っていたと推定されている。昭和９（１９３４）年に墳丘が破壊され、今では石室に使われた緑泥石片岩を転用した日露戦役記念碑が、前玉神社で見られるばかりである。脚付長頸壺と横瓶が確認されており、TK43～TK209型式と考えられているが、埴輪を持たないため、中の山古墳併行期と見る考えもある。隣接する愛宕塚古墳、愛宕通１～３号墳（いずれも円墳）と合わせて若王子古墳群と称される。

埼玉古墳群の北方２ｋｍには若小玉古墳群が展開する。７０基以上から構成された古墳群であるが、干拓に伴う土取り工事などで多くが破壊され、八幡山古墳と地藏塚古墳の２基のみが残存する。埼玉古墳群とほぼ同時期の５世紀末頃から古墳群の築造が始まったとされる。若小玉古墳群は、墳丘径２０ｍ以下の小型の円墳を中心とする群集墳であるが、６世紀前半には大型前方後円墳である三方塚（三宝塚）古墳が築かれる。墳丘は現存しないが、墳丘長は７０ｍを超え、方形の周溝が巡る。三方塚古墳に続き愛宕山古墳が築かれたとされる。墳丘全長７２ｍと推定され、昭和２２年に墳丘が失われるまで現存していた記録が残っている（行田市教育委員会２０１８）。八幡山古墳は若小玉古墳群の最も南に位置しており、羨道、前室、中室、奥室から成る巨大な横穴式石室と、漆塗木棺の出土で



図2 周辺の遺跡分布図

よく知られる。墳丘は径80mの円墳であると推定されており、終末期において国内最大級の規模である。石室には角閃石安山岩や緑泥石片岩、比企丘陵地域の砂質凝灰岩などが使用されており、広域からの石材供給が想定される。地蔵塚古墳は八幡山北方にある一辺28mの方墳と考えられる古墳である。主体部は緑泥石片岩と角閃石安山岩から成る横穴式石室であり、水鳥や弓矢をもった人物、舟などの線刻画をもつことでも著名である。この地蔵塚古墳をもって若小玉古墳群の築造は終焉を迎えたとされる。

若小玉古墳群の更に北方には小見真観寺古墳と虚空蔵山古墳が立地する。小見真観寺古墳は墳丘長102mの前方後円墳で2基の横穴式石室をもつ。周堀が確認されない他、埴輪の樹立も確認されていないため、終末期に築かれた前方後円墳と考えられている。埼玉古墳群より早く、昭和6(1931)年に国史跡に指定されている。虚空蔵山古墳は墳丘長50mの前方後円墳である。現在は後円部と前方部南側が削平されている。主体部は破壊されており不明であるが、墳頂のお堂へ向かう渡石や真観寺境内に緑泥石片岩が存在しており、これらの石材が構築材として想定されている。埴輪が出土しており、小見真観寺古墳に先行すると考えられている。

埼玉古墳群の東方4kmには真名板高山古墳がある。関東造盆地運動の作用を受けて約3m埋没しており、現況では104mの墳丘長は本来、127mに達すると推定されている(塚田・中島1997)。この墳丘規模は二子山古墳に次いで県下第2位である。築造時期は出土遺物から6世紀後半に位置づけられる。

栢間天王山塚古墳は埼玉古墳群の南東約13kmに位置する前方後円墳である。西方を流れる荒川の方角に前方部を向けて東西方向の主軸をもち、現況での墳丘長は107mと鉄砲山古墳と同規模である。墳丘を対象とした発掘調査が行われていないため諸説あるが、築造時期は表採された埴輪片や須恵器片などから6世紀後半であるとされ、鉄砲山古墳と同時期である。栢間天王山塚古墳の北方2.5kmには、墳丘長約57mの東浦古墳が所在する。生田塚埴輪窯からの埴輪供給が報告されており、年代は6世紀第2四半期と天王山塚古墳に先行することがわかっている。

若王子古墳、小見真観寺古墳、真名板高山古墳、栢間天王山塚古墳は、埼玉古墳群が造営された時期に近縁して築かれた100m規模の前方後円墳として注目されており、埼玉古墳群との関係が論じられている(関2013)。

埼玉古墳群の北側、現在の利根川の右岸には犬塚古墳群、酒巻古墳群、斎条古墳群が立地する。犬塚古墳群は利根川沿いの自然堤防上に築かれており、墳丘長69mの前方後円墳であるとやま古墳が知られている。とやま古墳は、墳丘は現存しないが盾形周堀をもち、稲荷山古墳より先行するとする説もある。酒巻古墳群は出土埴輪が重要文化財にも指定されている酒巻14号墳などで著名であり、近接する斎条古墳群とともに関東造盆地運動と河川の氾濫による堆積により埋没していることが知られている。

北東に目を向けると、現在の利根川右岸に墳丘長73mの前方後円墳の永明寺古墳が存在する。埼玉古墳群からの直線距離は約13kmである。

南西には丸墓山古墳に次ぐ規模をもつ円墳、甲山古墳が存在する。甲山古墳の北東に隣接して、とうかん山古墳が荒川を見下ろす位置に築かれている。

南側には前期古墳の野本將軍塚古墳や、帆立貝式前方後円墳のおくま山古墳が位置する。おくま

山古墳からは盾持人埴輪のほか、外面に線刻を施された円筒埴輪が出土している。周堀から榛名山ニツ岳の火山灰の堆積が確認されたため、6世紀初頭には築かれていたとされる。

古墳時代に属する近隣の遺跡には、築道下遺跡、小針遺跡、北大竹遺跡などがある。築道下遺跡は埼玉古墳群の南方約3kmにあり、元荒川沿いの微高地に築かれた港湾施設および大規模な集落跡から成る遺跡である。小針遺跡は、これまでの発掘調査で10棟以上の建物が検出されたほか、人名と考えられる「丈部鳥麻呂」の名が刻まれた紡錘車が見つまっている。後世編纂された万葉集内に、「埼玉の津」という言葉があり、埼玉周辺に舟運の拠点があったと考えられている。「津」の位置については諸説あるが、築道下遺跡や小針遺跡をその候補地として捉える説もある。

北大竹遺跡は、若小玉古墳群に隣接した遺跡である。古墳時代後期の大規模な集落跡であり、多くの土器の他、大量の子持勾玉や石製模造品が出土したことで知られている。6世紀中頃から7世紀にかけて継続して子持勾玉と須恵器甕を用いた祭祀行為が行われたとされ、近接する若小玉古墳群や造営時期が重なる埼玉古墳群との関係も想定されている。

続いて埼玉古墳群周辺の埴輪窯に着目する。最も至近にあるのは、鴻巣市生出塚埴輪窯である。関東地方最大級の埴輪窯跡として知られ、40基の窯が発掘により確認されている。生出塚産の埴輪は赤褐色の色調や共通性の高い製作技法などが特徴で、集中的な生産体制が整っていたと考えられる。窯体は灰原を共有し八つ手状に切り合うため、窯の前後関係が調査により確定している。大きく北支台と南支台に分かれており、操業当初は南支台で生産されていたが、二子山古墳・瓦塚古墳への供給を契機として北支台に拠点が移り、本格的な大量生産が始まったとされる（城倉2010）。生出塚産の埴輪が供給された可能性が高い古墳として33古墳が明らかになっており、創業時から徐々に南へ供給圏を拡大していった事実も明らかになっている。遠方では、市原市の山倉1号墳や横浜市の北門1号墳からも埴輪が確認されている。

生出塚埴輪窯跡の南方約3kmには馬室埴輪窯跡が位置する。現在の荒川の左岸の河岸段丘上にあり、台地の斜面を利用し築窯されている。至近には埴輪工人の居住域も確認されている。10基以上の窯が確認されており、生出塚埴輪窯と同時期に操業されていたようである。

生出塚埴輪窯と馬室埴輪窯跡の対岸、荒川右岸には和名埴輪窯跡が立地する。これまでの調査で5基の窯跡が見つまっている。他に、埼玉古墳群の南西約17kmに桜山窯跡がある。野本將軍塚古墳の都幾川を挟んだ対岸、南西約3kmに位置する。6世紀前半から後半にかけて操業されたとされ、これまで埴輪窯17基、須恵器窯2基、工房とみられる竪穴住居跡が見つまっている。二子山古墳では、桜山窯で焼台として使われた埴輪との同工品が確認されており、今は発見されていないが桜山窯跡周辺の窯から埴輪が供給された可能性が指摘されている（城倉2011）。埼玉古墳群への供給が確認されている窯には他に末野窯跡があり、中の山古墳に須恵質埴輪を供給したとされている。埼玉古墳群からは真西に約29kmと遠方であるが、荒川上流の左岸に立地しており、河川を通じた輸送が想定されている。

（4）二子山古墳の位置付け

二子山古墳は埼玉古墳群のほぼ中央に位置している（図3）。昭和10（1935）年度に史跡仮指定を受けた3古墳のうちの1基である。墳丘西側には愛宕山古墳が、南側には瓦塚古墳が近接する。

二子山古墳外堀と愛宕山古墳外堀との距離は約20m、西側の天祥寺裏古墳とは約15m、北側の埼玉7号墳とは約10mと密接する。現況で県道を挟んではいるものの、瓦塚古墳の外堀とも近接し、約35mと推定できる。墳丘の形態は前方後円墳で、墳丘の西側くびれ部に造出しをもつ。墳丘規模は全長132.2mと古墳群中で最大であり、埼玉県下のみならず、旧武蔵国においても最も大きな前方後円墳であることが知られている。昭和13（1928）年、墳丘の国指定時の申請用調査表には墳丘長128mとされていた。昭和43（1968）年度の整備時に内堀を掘り窪めたために見かけ上の全長が大きくなり、水堀を湛えていた頃には135m、または138mとされていた。後円部径は67m、前方部幅は83.2m、くびれ部の幅は46mであり、いずれも古墳群内で最大規模である。主軸方位は南北軸から東に約40°傾いており、この角度は稲荷山古墳、鉄砲山古墳と近似する。古墳時代の旧表土は場所により異なるが17.4m～18.3mで検出されており、概ね18.1mとした場合、後円部高11.7m、前方部高13.7mと比高は約2mである。墳丘の西側くびれ部付近には1か所造出しが設けられており、現況では付け根の幅が約18m、外側に約12m突出するなど規模が大きい。この造出しは昭和42（1967）年度の調査で検出され、翌年半円状の平面形に復原された。既往の調査では須恵器の破片が多く見つかっており、半円状のプランに沿って分布する点も確認された。

段築構造については、平成25（2013）年度以前は墳裾以外の墳丘調査は行われておらず不明点が多く、三段築成と考えられてきたものの、後世の改変も多く明確な証拠は見つかっていない。東側くびれ部には広い平坦面が観察でき、墳頂にかけて急斜面となっている。ここにはかつて観音寺が建っていたとされ、近世瓦の散布も確認されている。地籍図を見ても、墳丘東側くびれ部付近の内堀は畑地となっており、付近に観音寺の存在を推定できる。

埋葬施設は、未発掘であり不明である。後円部墳頂に円形の穴があり、盗掘坑と考えられるが周辺に石の散布は確認されていない。現状では主体部の構造や副葬品等の情報は無い。

周堀は二重に巡り、昭和43年度の工事で内堀は盾形に外堀は方形に復原された。しかし、昭和49年度、平成27年度の発掘調査により、内堀の形状は盾形ではなく方形となることが明らかになった。内堀は主軸長で176mを測り、後円部にかけて狭くなる台形状を呈する。内堀の堀底の標高は16.5mであり、旧表土面からの深度は約1.6mである。外堀の堀底の標高は16.5～16.8mと内堀より高く、外堀の方が浅い造りであったことが分かる。外堀の平面形態については、トレンチ調査が主体であり不確定要素が多いが、主軸に対し非対称な方形である。西側に中堤造出しが設けられているが、この付近では外堀の幅が広がっている。昭和55・59（1980・1984）年度の調査の際、花粉分析と珪藻分析を実施しており、周堀は常時滞水しておらず、沼沢地的景観であったと推定されている。

内堀と外堀の間には中堤が存在し、現在は園路として整備されている。昭和43年度の整備により現況では目立たないが、中堤盛土が一部残存している。中堤盛土の遺存は埼玉古墳群中で唯一であり、整備前には長さ40m、幅約15mの高まりとして存在していた。この盛土の範囲は、昭和13年の国指定の際、墳丘と合わせて指定を受けている。平成2（1990）年度に発掘調査が行われ、盛土直下の古墳時代旧表土層の標高は17.6mと記録されている。墳丘下で確認された旧表土と比較するとやや低い、盛土の上面の標高が約18.6mであるため、この地点では少なくとも1m以上の盛土で構築されたと考えられる。西側には方形の中堤造出しをもつ。外側に向かって約28m突き出し

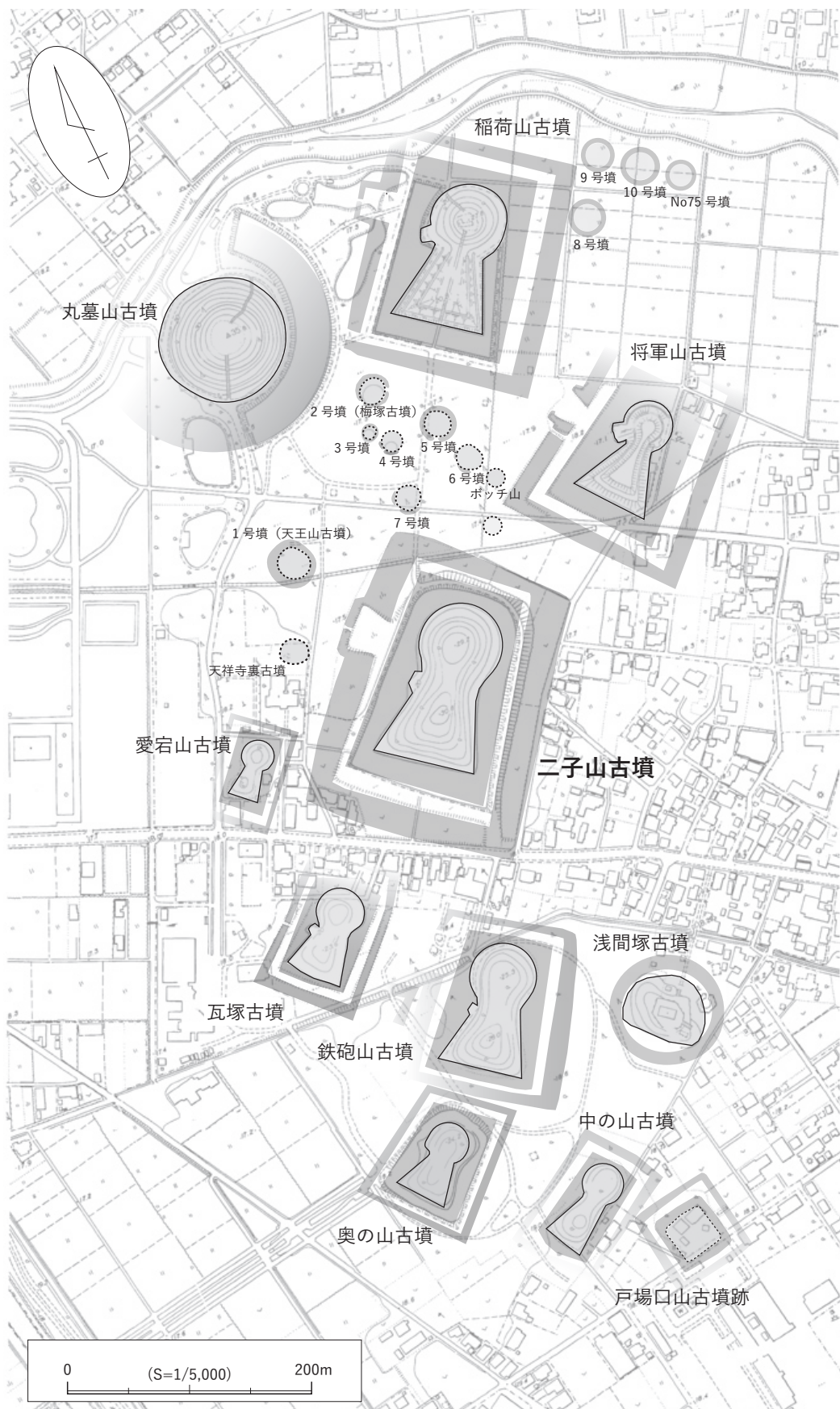


図3 埼玉古墳群

ており、外に向かうにつれ撥状に広がる。中堤の付け根の幅は約31m、外側端部の幅は約43mと大規模である。稲荷山古墳と同様、外堀の一部が幅約1mほど掘り残された、ブリッジ状の施設が設けられる。

二子山古墳が現れる最古の記録は江戸時代『五街道分間延絵図（五海道其外分間見取延絵図）』内の「館林道」であるとされる。「観音寺」に隣接して「水塚」の表現があり、これが二子山古墳を指すと考えられる。文字記録では、旧忍村在住の郷土史家、清水雪翁が記した『北武八志』内に下記の記述があり、三段築成と認識されていたことがわかる（清水1907）。

「両子山 全村にあり又観音寺山とも云ふ高さ五丈位周囲七八町是は唯に本村の已ならず殆ど本國中の大塚にして之を望むに天然の丘陵の如く車塚の制にして前方後圓壇三成儼然として其形を存せり」 ※全村は埼玉村を指す。

『史蹟埼玉』には下記の記述が見られ、中堤盛土に着目されていたことがわかる（高木1936）。観音寺の存在についても言及されている。

「丸墓山の南方約三百九米の處に在って、本村に於ける前方後圓墳の最大なるものである。周塹ありしも今は田となる。塹外西部に壘址を有することは、この古墳に於いてのみ見る特徴とする。東麓に畑地があり、昔時観音寺ありし址なりといふ、観音寺山の稱ある所以である。」

測量図は昭和12年に後藤守一、三木文雄らによって初めて作成された（図4）。これが二子山古墳で行われた最初の学術的調査であったともいえる。等高線間隔1mで作成されたこの測量図からは、前方部が後円部よりも1m近く高い点、東側のくびれ部付近の墳裾が大きく抉られている点等が看取できる。

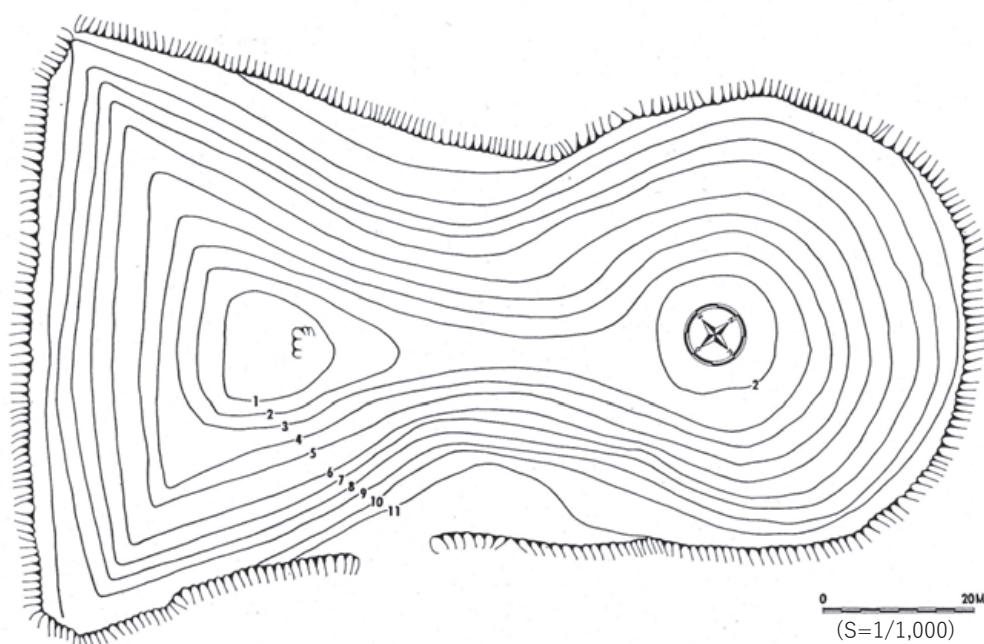


図4 昭和12年の測量図

引用文献（「第3節 立地と環境」に関わるもの）

- 秋池武2000「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第21号
- 魚水環2020「加須低地における分析成果から考える利根川の氾濫と流路」『研究紀要』第34号 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 江口誠一・村田泰輔1999「関東平野中央部加須低地における完新世の環境変動史」『地理学評論』72巻4号
- 菊地隆男1981「先史時代の利根川水系とその変遷」『アーバンクボタ』No.19
- 九学会連合利根川流域調査委員会1971『利根川—自然・文化・社会—』株式会社弘文堂
- 行田市教育委員会2018『行田市の遺跡③北大竹遺跡（若小玉古墳群）』
- 熊谷市教育委員会2018『熊谷市史 通史編上巻 原始・古代・中世』熊谷市
- 篠田泰輔2016「8. 行田市白山愛宕山古墳（3・4次）の調査」『第49回遺跡発掘調査報告会 発表要旨』埼玉考古学会
- 清水雪翁1907『北武八志』川島書店
- 城倉正祥2011『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 須貝俊彦・松島（大上）紘子・水野清秀2013「過去40万年間の関東平野の地形発達史—地殻変動と氷河性海水準変動の関わりを中心に—」『地学雑誌』122号
- 関義則2013「埼玉古墳群の構造変遷」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第7号
- 高木豊三郎1936『史蹟埼玉』埼玉村教育會
- 田辺晋2008「東京低地北部から中川低地にかけての沖積層の基盤地形」『地質調査報告研究』59巻11/12号
- 塚田良道・中島洋一1997「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究報告』第4集 行田市郷土博物館
- 堀口万吉1981「関東平野中央部における考古遺跡の埋没と地殻変動」『地質学論集』第20号

第4節 過去の調査と整備の概要

二子山古墳においては、本報告が対象とする平成25～30（2013～2018）年度の発掘調査以前に、数次にわたり発掘調査が実施されている。本節では過去の発掘調査の成果と整備について述べる。

昭和42（1967）年度に、周堀を中心に40以上のトレンチを設定し調査を行った。この調査は埼玉古墳群の確認調査としては初めて行ったもので、風土記の丘整備に伴う周堀復原のための調査であった。調査により、二重の周堀の存在の他、くびれ部に造出しをもつ点、方形の中堤造出しをもつ点などが確認された。翌43（1968）年度、内堀の工事が行われた。この時の整備で、内堀は角が丸みを帯びた盾形に近い形に、外堀は方形に、水を湛えた堀として復原された。

昭和49（1974）年度には、後円部北側の外堀及び中堤造出し周辺で調査が行われた。この調査により、中堤造出しとその外側とを結ぶブリッジ状の施設を検出した他、周堀の平面形が方形である可能性が指摘された。

昭和55（1980）年度には、後円部北側の外堀隅角の把握のために、面的な調査が行われた。しかし、方形と推定された外堀の隅角部の残存状況は良好でなく、明瞭な形状は検出されていない。

昭和56（1981）年度には、二子山古墳の西側の市道に沿う形で、下水排水路整備工事に伴う発掘調査が行われた。この調査は行田市教育委員会によって行われ、調査区の幅は約1.3mと狭小ではあるものの外堀の外側立ち上がりを検出している。なお、この調査区は市道全体の南側に当たり、同時に行われた北側の市道の調査では天祥寺裏古墳の堀の一部が発見され、円筒埴輪とともに人物埴輪や馬形埴輪が出土している（斎藤・中島1994）。

昭和59（1984）年度には前方部南側の外堀を対象に調査を実施した。平成2（1990）年度には前方部南側の公有地化に伴い調査を実施した。調査区は面的に広く設定し、その後、調査箇所の内堀復原工事を実施した。

最後の復原工事から16年が経過した平成18（2006）年度、二子山古墳の墳丘に亀裂が確認され、墳裾の一部で小崩落が発生した。平成19（2007）年12月にも再崩落したため、東側くびれ部において矢板護岸工法による護岸工事を実施した（井上2009）。しかし、内堀に接する墳裾及び中堤の崩落が懸念されたため、平成24～26（2012～14）年度に内堀の埋立工事を実施した（佐藤2015）。この埋立工事により、従来は滞水により危険であった墳裾部や内堀側の中堤法面の調査が可能となり、平成25（2013）年度より発掘調査を開始した。

引用文献（「第4節 過去の調査と整備の概要」に関わるもの）

井上尚明2009「二子山古墳の内堀護岸整備について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

斎藤国夫・中島洋一1994『行田市文化財調査報告書第31集 愛宕山古墳天祥寺裏古墳 二子山古墳 中の山古墳 陣馬遺跡（6次・7次）』行田市教育委員会

佐藤康二2015「二子山古墳の再整備について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第8号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

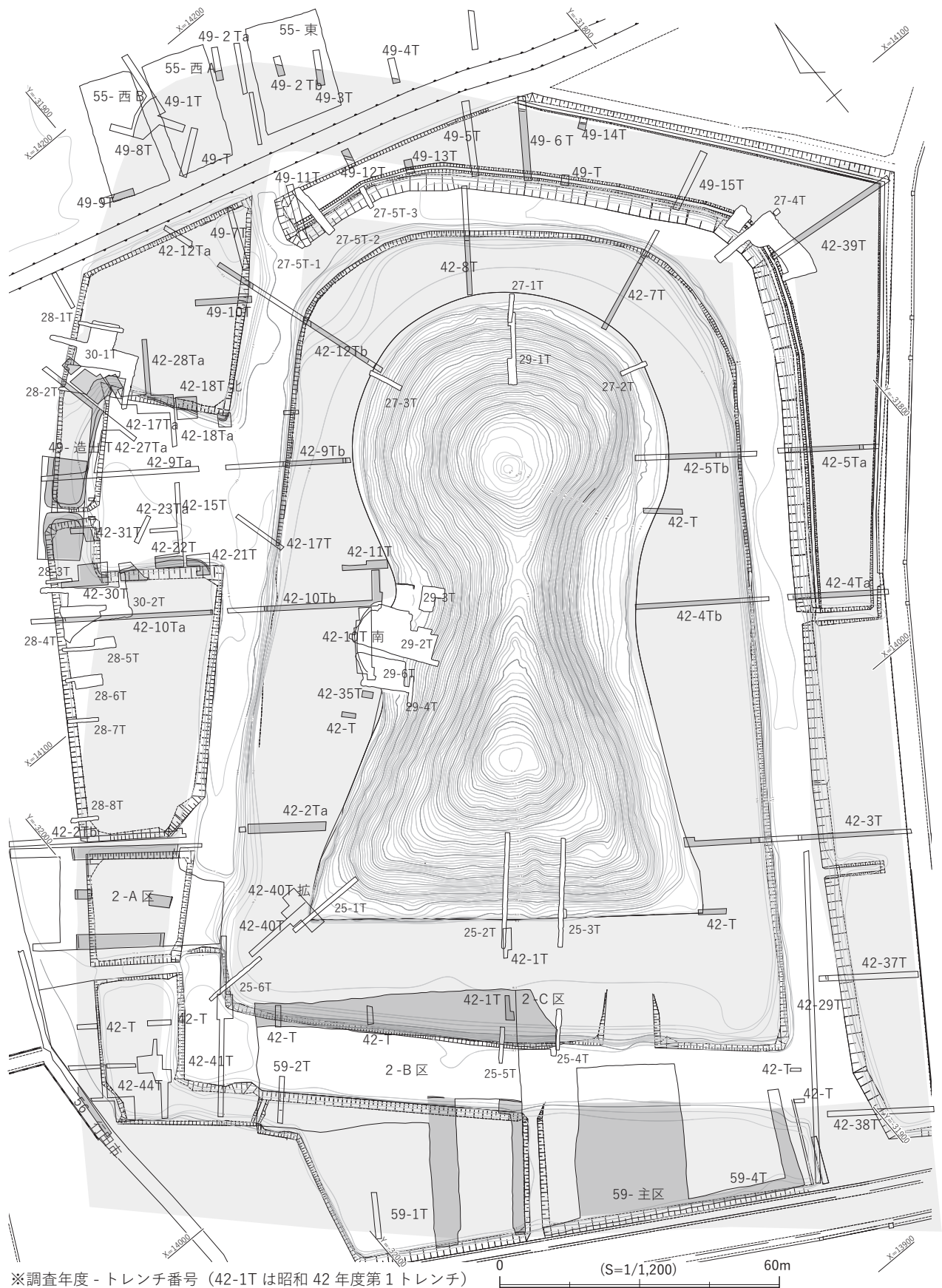


図5 過去の調査トレンチと今回調査トレンチ

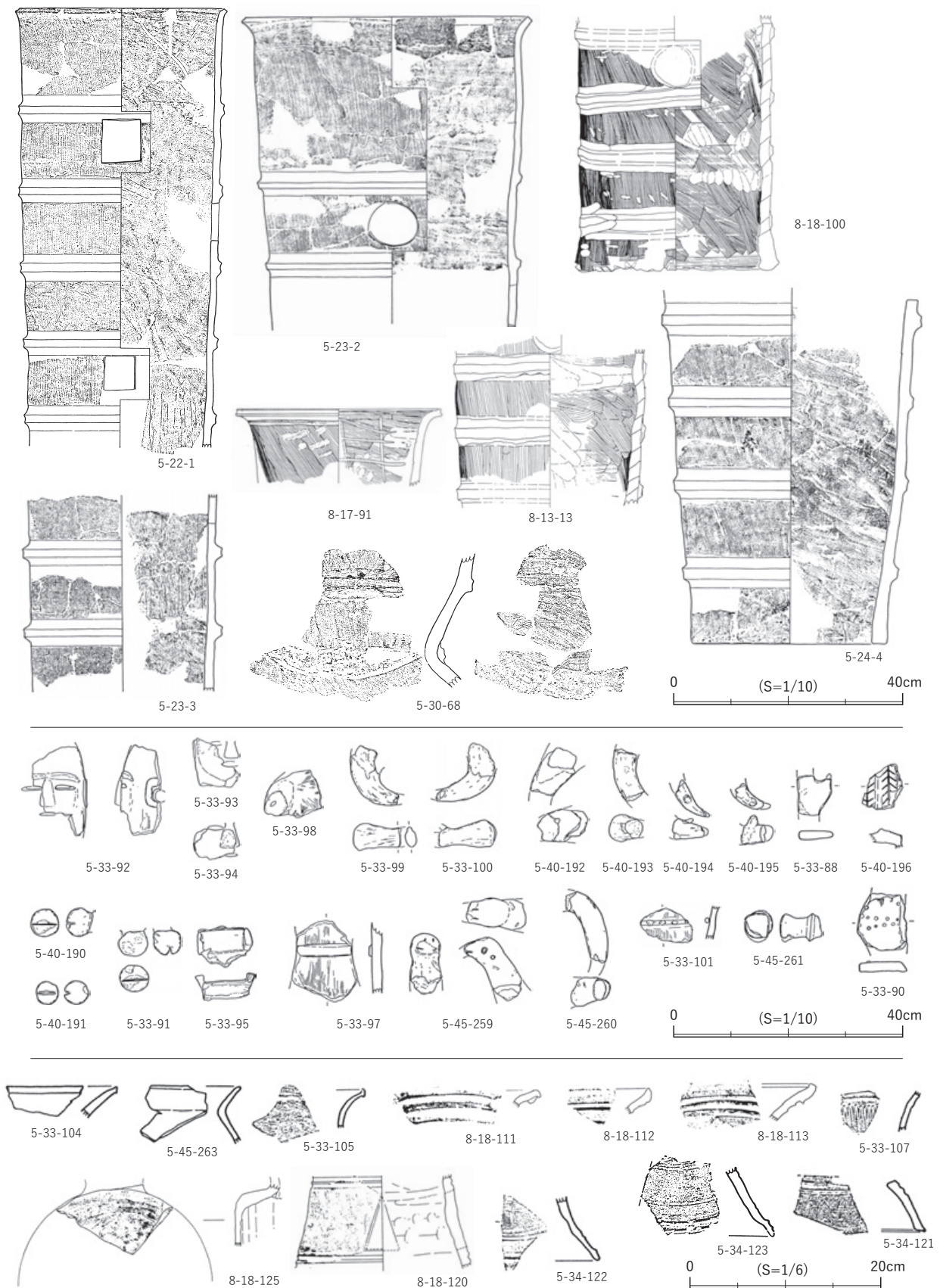


図6 過去の調査で出土した主な遺物



←昭和 61（1986）年
二子山古墳航空写真
昭和 43 年度の工事後の
様子。南側の内堀が公有
地化の関係でクランクし
ている。

↓平成 21（2009）年
二子山古墳航空写真
平成 2（1990）年度の公
有地化後、発掘調査の成
果を参考に追加整備を実
施した。



図 7 過去の整備

第5節 発掘調査の概要

（1）平成25（2013）年度

平成25年度の調査は、二子山古墳の内堀の埋立工事後に開始した。調査目的は、墳丘の崩落状況の確認と昭和43年度の整備後の墳裾の状態の把握である。前方部前面に3か所と、これに対応する対岸の中堤裾部に3か所のトレンチを設定した。調査の結果、前方部前面トレンチからは墳裾部に客土が厚く堆積している状況が確認され、墳丘本体の崩落がなかった点が明らかになった。墳裾部は墳丘斜面の傾斜を保ったまま堀内に続き、幅50cm程度のテラスを形成している点も判明した。このテラスより下層は昭和43年度の整備で失われ、堀底も検出されなかった。墳丘上では、現況でテラス面のように見える地点から中世の墓地と見られる遺構が検出されたため、段築構造は失われていると考えられた。埴輪列等の痕跡も確認されなかった。

中堤側のトレンチからは、墳丘側トレンチと同様のテラスが確認された。整備に伴う掘削のためか、堀底は検出されなかった。

（2）平成27（2015）年度

平成27年度の調査は、後円部墳裾及び内堀隅角が想定される地点で行った。周堀、中堤の範囲確認及び墳丘規模・形態の確認、崩落状況の確認のために発掘調査を行った。

現況の中堤の外側隅角部を対象に北東側1か所、北西側3か所のトレンチを設定した。北東側の隅角部は現況では緩やかな弧を描くように復原されているが、調査の結果、ほぼ直角に屈曲する中堤外側隅角部を検出した。北西側隅角部においては、現況で外堀として復原されている範囲から内堀が検出された。内堀及び中堤に関して、現況の復原形態と大きく異なる点が明らかになった。周堀は内堀、外堀ともに方形であると判明した。

墳裾部には3地点にトレンチを設定した。調査の結果、現況の墳裾部が客土で護岸されている点、墳丘盛土直下に黒色土が約1m堆積する点等が明らかになった。同時に、水位の変動による土の崩落が、墳丘本体には及んでいなかった点も確認できた。

（3）平成28（2016）年度

平成28年度の調査は、墳丘の西側の外堀・中堤の検出を目的として、8か所のトレンチにより行った。西側外堀は昭和43年度に、後円部付近で幅広く、前方部に向かうに従い狭小になる形態に復原されている。そこで、中堤造出しを囲む外堀の形状把握のために現況の中堤造出しの南北にそれぞれトレンチを設定し発掘を行った。調査では複数のトレンチで外堀を検出し、本来の形状が整備された現況と異なる点が明らかになった。中堤造出し南側の28-4Tから外堀の屈曲が確認され、外堀が中堤造出しに沿う形である可能性が高まった。また28-1Tでは大型の埴輪片が出土する近世以降の土坑が確認された。

（4）平成29（2017）年度

平成29年度の調査は、墳丘の保存状況や形態を把握するために、後円部と墳丘造出しに調査区

を設定し実施した。後円部には、墳丘の段築構造を把握するためにトレンチを設定した。墳丘造出しは昭和43年度の整備の際、半円形に復原されていた。そのため、造出しの全容把握に努めた。昭和42年度の調査時に設定した面積より範囲を拡大し調査区を設けた。

その結果、後円部ではテラス面の可能性がある平坦面を確認した。埴輪列は検出できなかったが多くの埴輪片が出土した。西側くびれ部では、外側に約9 m突き出す、幅約14mの造出しが残存している点が明らかになった。墳丘造出しの先端及び北側は一部削平されている可能性が高いが、墳丘造出しが上下2段から成ることがわかった。造出し上段は方形を呈する状況も把握できた。墳丘造出しの中央部からは土師器や須恵器が大量に出土した。原位置を保った円筒埴輪も検出しており、外縁を埴輪列が巡っていた様相が想定される。

（５）平成30（2018）年度

平成30年度の調査は、平成28年度に引き続き、中堤造出しの立ち上がりの把握を目的として実施した。中堤造出しの南北に設けた調査区は、一部平成28年度のトレンチと重複している。

北側のトレンチ（30-1T）では遺構の残存状況が良好でなく、外堀の明確な形状は検出できなかった。複数の古墳時代以降の土坑が検出されており、埴輪片や加工痕をもった角閃石安山岩等が出土している。

南側のトレンチ（30-2T）では、中堤造出しに沿う形で外堀が検出された。平成28年度調査で示唆された内容を追認することとなり、二子山古墳の中堤造出しの形状が、稲荷山古墳などと共通することが確認された。

（６）本報告における調査区・トレンチの記載方法について

5か年にわたる調査であったため、過年度の調査トレンチと重複するように新たなトレンチを設定する場合もあった（図8）。そこで本報告では、調査年度順の記載ではなく、調査区を便宜上4区に分けて報告する。調査区の区分けは図9に示した。I区は墳丘西側の造出し周辺、II区は造出しを除く墳丘、III区は中堤、IV区は外側周堀と中堤造出し周辺とし、次章よりI区から順に記録した情報を提示する。

トレンチの表記は「調査年度（平成表記）」-「トレンチ番号」に統一している。平成29年度の第2トレンチであれば「29-2T」と表記した。なお、平成27年度の第5トレンチは3本のトレンチをまとめて第5トレンチとしていたため、西から順に「27-5T-1」、「27-5T-2」、「27-5T-3」と枝番を付け、表記上分離した。本報告で登場しない「29-5T」は、設定したものの29-2Tの拡張に伴い欠番扱いとなったトレンチである。

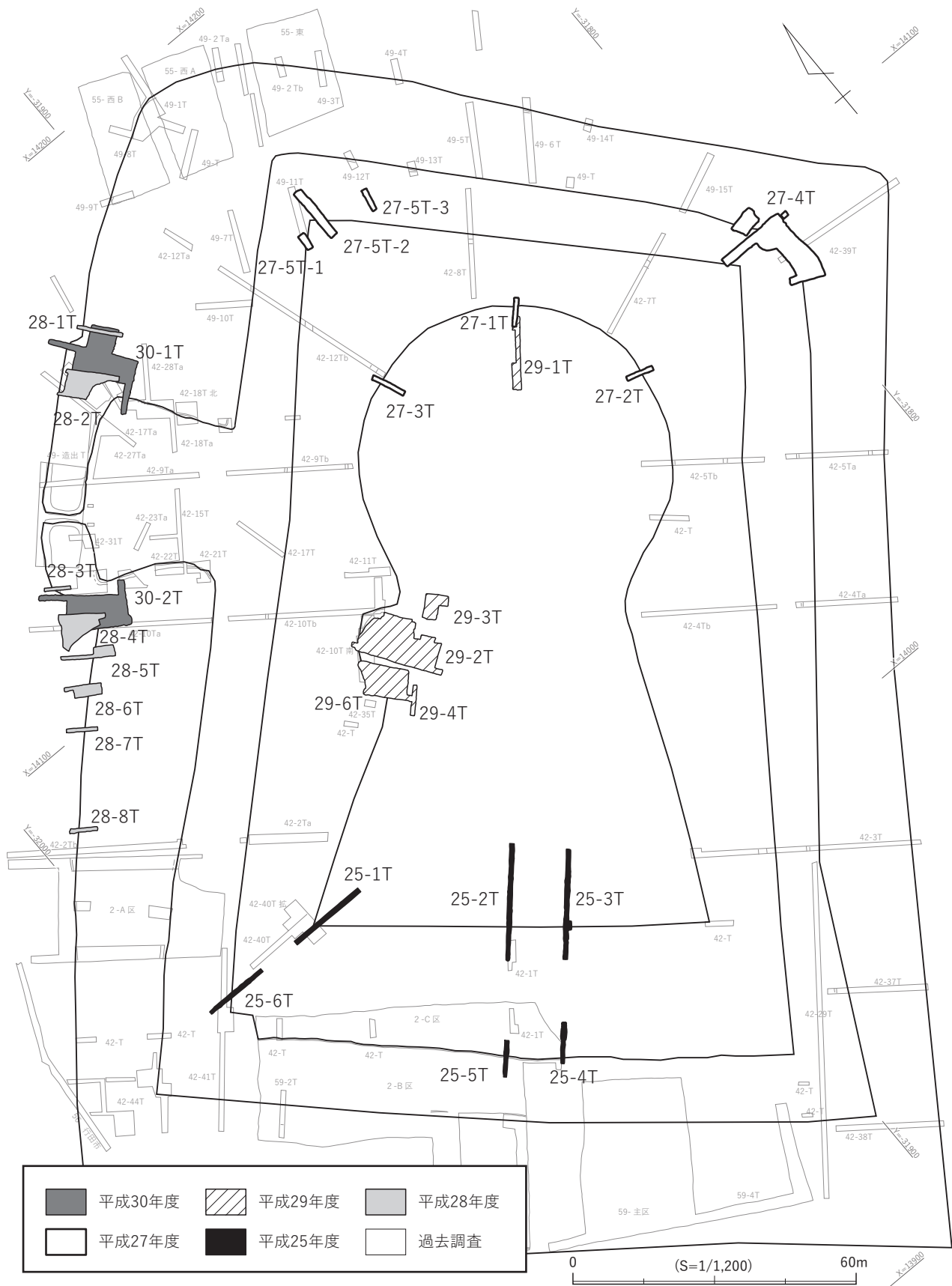


図8 年度別調査トレンチ

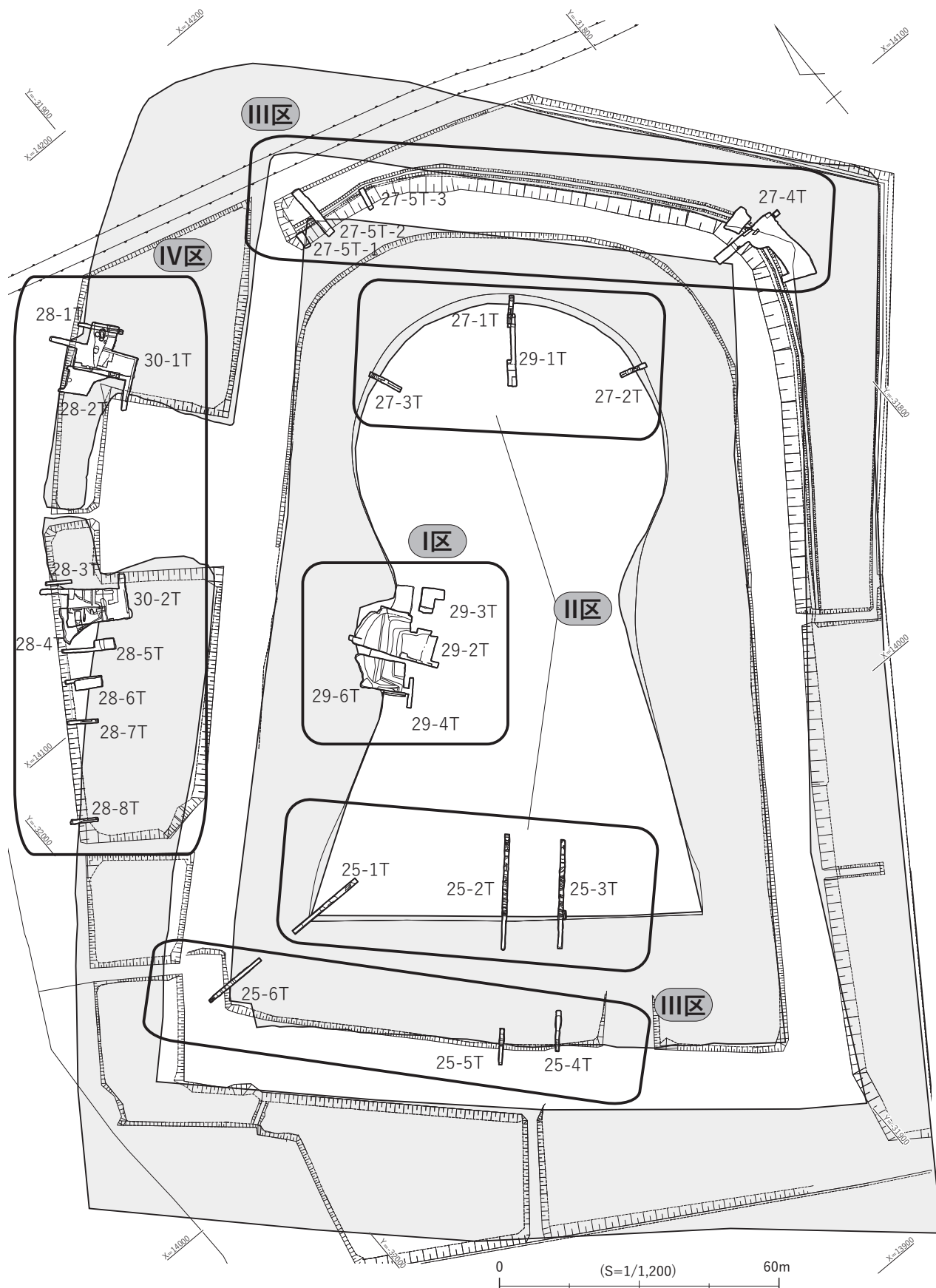


図9 調査区 区分け図

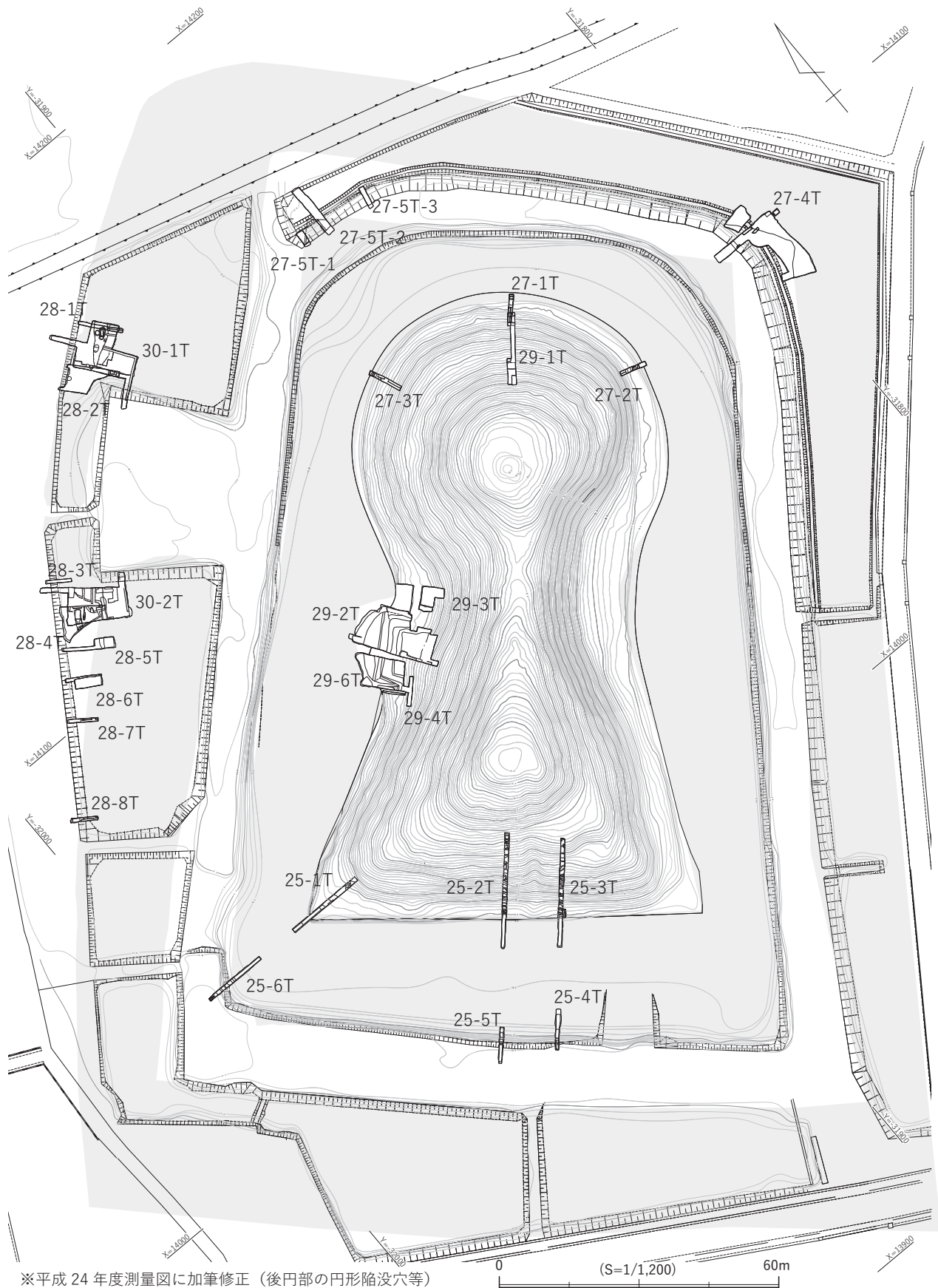


図 10 二子山古墳全測図

第2章 発掘調査の成果

第1節 I区の調査成果

①概要

I区は、二子山古墳の墳丘西側の造出し周辺に設定したトレンチをまとめた調査区である(図13)。

二子山古墳の墳丘造出しの存在は、昭和42年度の墳丘西側の調査の際初めて確認された。昭和12年に作成された測量図(図4)には墳丘造出しは反映されておらず、昭和23年、昭和39年に撮影された空中写真(図11・12)でも確認できない。古墳築造から昭和12年までの間に、何らかの理由で外観での視認が困難になったものとみられる。二子山古墳に関する昭和42年度以前の記録を振り返っても、中堤盛土に言及する記録はあるものの墳丘造出しに関する記述は管見の限り見られない。

昭和42年度発掘調査では、墳丘造出しから中堤上面まで内堀を横断するように設定された42-10Tbで、墳丘造出しの輪郭を検出した。42-10Tbに直行するように、南側に設定された42-10T南拡張区からは半円形の造出し先端を検出したと記録が残っている。調査日誌には、当初くびれ部や内堀、中堤の検出を目的とした42-10Tbにおいて、造出しの可能性があるプランを検出したため、南側へ拡張したとの経緯も記録されている。昭和42年度の調査成果について記載した報告書には、二子山古墳の墳丘造出しについて、「全容は不明だが、楕円状の平面プランで、幅は約20m、弧状に9m突出するもの」と報告されている(杉崎ほか1987)。

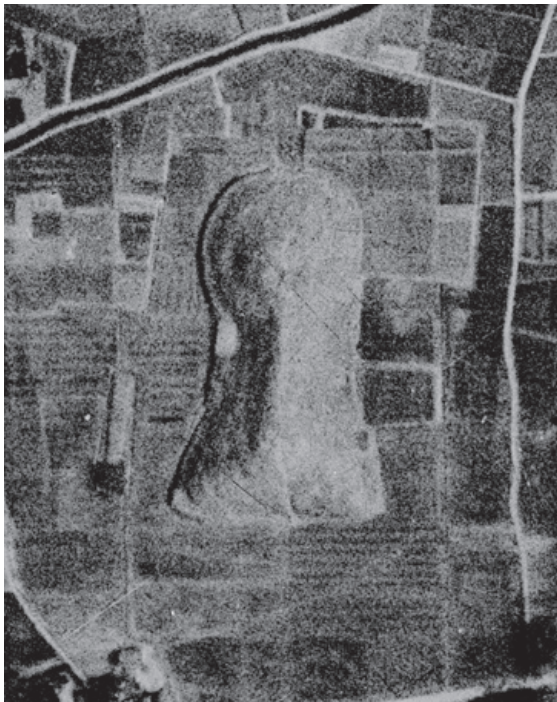


図11 昭和23年撮影航空写真(UR1242)
国土地理院所蔵



図12 昭和39年撮影航空写真(MKT64-09X)
国土地理院所蔵

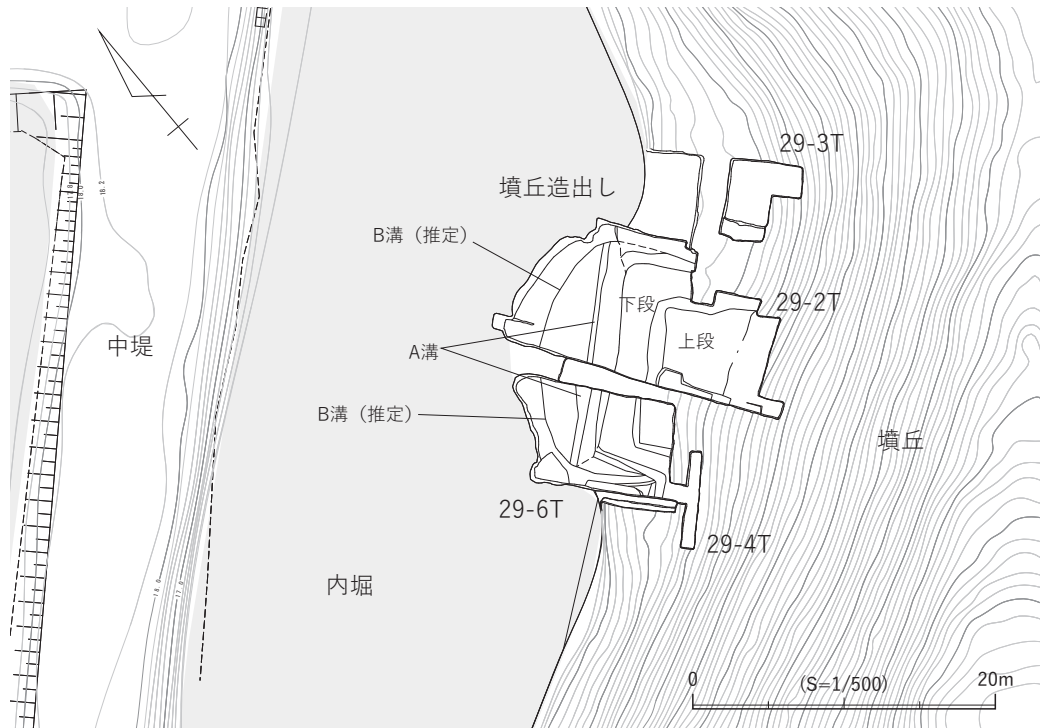


図 13 I 区平面図

昭和42年度の調査日誌には、墳丘造出しに沿うように後世の溝が半円状に巡っている記述がある。また、半円形の溝の他にも、墳丘に沿うように溝が確認されたと書かれており、これをA溝、半円形の溝をB溝と仮称している。本報告でもこれを踏襲し、A溝、B溝と呼称する。なおA溝、B溝ともに検出されたのは42-10Tb、42-10T南拡張区のみである。調査日誌には、墳丘造出し周辺から須恵器が多く出土する点や半円形に遺物が分布する点なども記載されている。

墳丘造出し周辺からは、昭和42年度の発掘調査やその後の表採により、多くの須恵器が見つっている。既に報告されている中には、須恵器の器台の脚部や提瓶、甕、壺、甕等の器種が含まれるが、いずれも小破片である。その他墳丘から転落したとみられる円筒埴輪の破片も報告されている。

昭和43年度には内堀、中堤、外堀の整備工事が行われ、墳丘造出しは昭和42年度の調査成果を受けて、円弧の形状のみを残し内堀底を掘り抜くことで半円形状に整備された。しかし、昭和42年度の調査では墳丘までトレンチが及んでおらず調査面積も限定的であり、墳丘造出しの全体の形状や規模、墳丘との接続状況について課題が多く残されていた。また、検出された半円形状が後世の溝（B溝）によるものであり、墳丘造出しの本来の形ではないという可能性も指摘されてきた。そこで、平成29年度には昭和42年度の調査区から範囲を拡大し、墳丘造出しの全容を明らかにすることを目的として発掘調査を実施することとなった。

I 区は墳丘造出し付近に設定した調査区であり、いずれも平成29年度に設定した29-2T、29-3T、29-4T、29-6Tが含まれる。本調査区の目的は、墳丘造出しの本来の構造や規模の把握、墳丘西側くびれ部の検出である。また、墳丘の正確な形状を明らかにするために、墳裾の検出も目的とした。

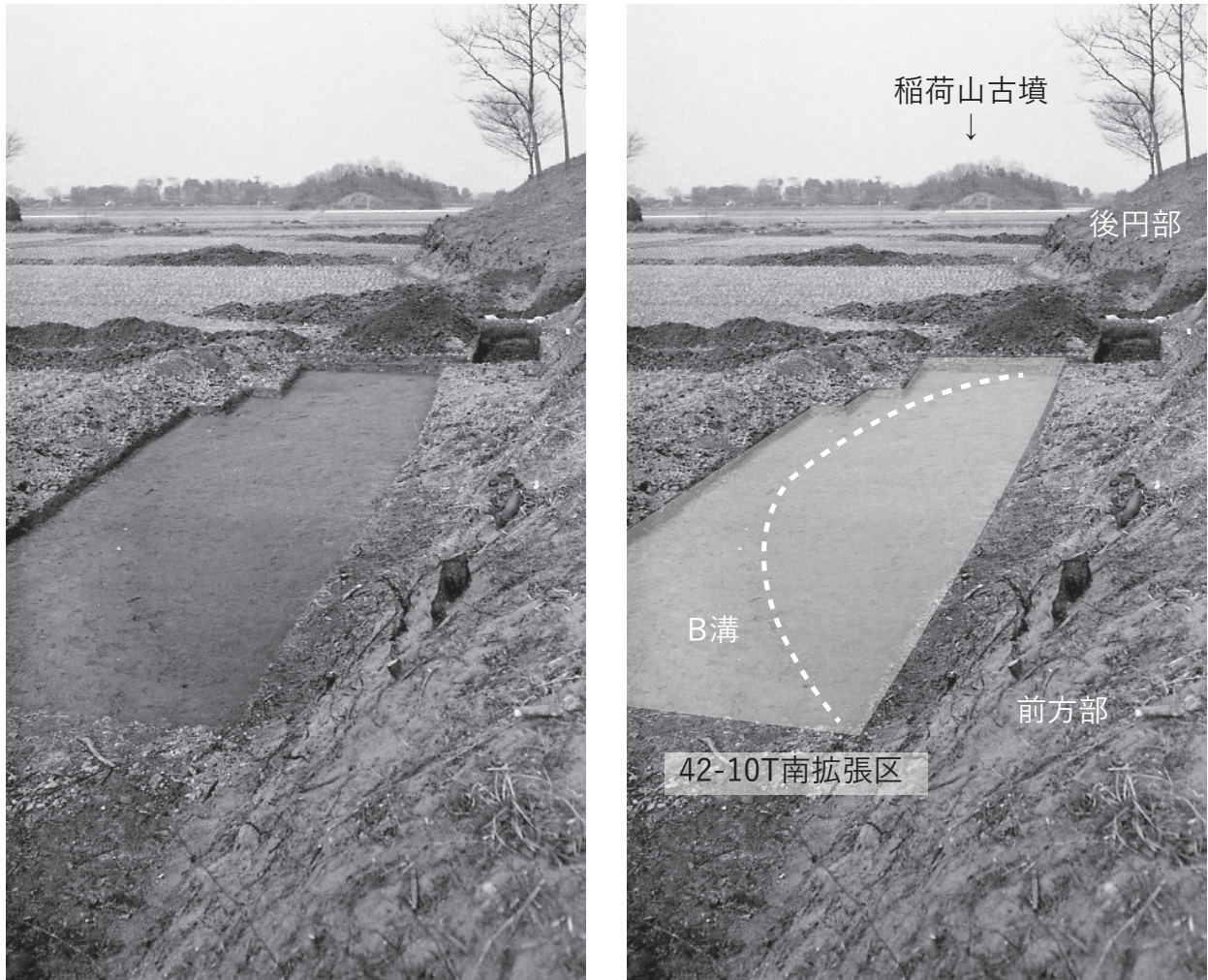


図 14 昭和 42 年度 42-10T 南拡張区 写真

調査の結果、過去の調査では明確にできなかった造出しと墳丘の接続部が確認できた。墳丘造出しは最大幅が約15m、長さ約9mの範囲で残存していることが確認された。墳丘造出しは上下2段から成り、下段は先端と北側が削平され形状は不明であったが、上段は方形を呈することが明らかになった。下段の削平面と平行するように後世の溝があり、造出し下段を削平し溝が掘られたと想定可能である。この溝と接するように、半円形状のプランを検出した（図15）。

墳丘造出しからは多くの出土遺物が確認されており、特に造出しの上段からの出土が多い。須恵器は完形に近い形で坏（身・蓋）が確認された他、提瓶や甕、大型器台の脚部の破片が出土している。土師器は高坏が主体を占める。円筒埴輪片も多く出土しており、造出し上段の縁辺部には樹立した状態で2点の円筒埴輪の底部を確認した。円筒埴輪の中には、器壁に線刻や記号が施された個体が確認された。形象埴輪の出土は少ない。

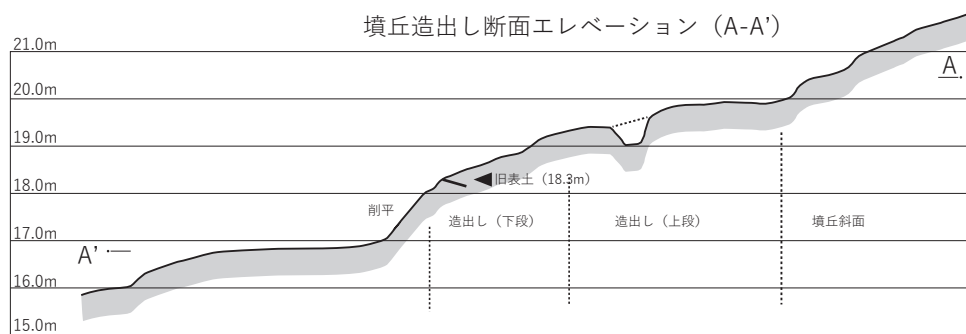
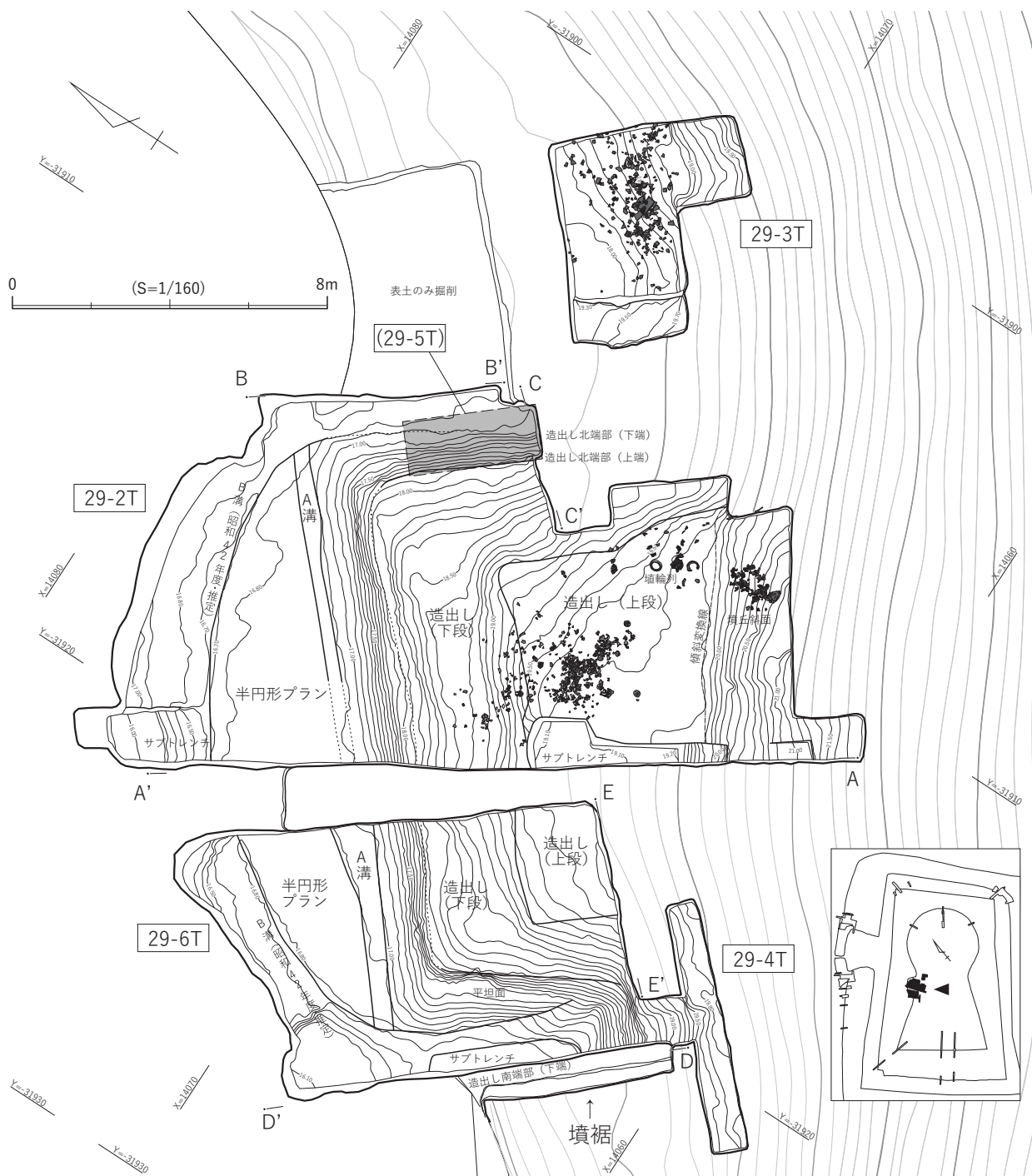


図 15 29-2,3,4,6T 平面図 (S=1/160)

②29-2T・29-4T・29-6T

29-2Tは、墳丘造出しの規模や形態、墳丘との接続について把握するために、現況の墳丘造出しに設定したトレンチである。最終的なトレンチ面積は約127.8㎡である。29-2Tは当初、墳丘面から墳丘造出しの裾にかけて、幅1mで設定した細長いトレンチであった。29-2Tで約1mの深さで黒色のしまりの良い土を検出したため、トレンチ中腹の北側を約1mの幅で拡張した。その後、29-5Tを29-2Tと29-3Tの間に幅約1mで設定している。29-2Tは墳丘面の続きを追うために北側へ、また墳丘造出しの裾を検出するために西側へ拡張を重ね、図15に示す平面形態となった。最終的に、29-2Tの北側への拡張に伴い29-5Tは欠番となるが、資料への注記を29-5Tとしている個体がある。29-4Tは、前方部の墳丘面の検出を目的として設定した。当初細長く設定した29-2Tに対して、直行する方向に長軸をもつトレンチである。29-4Tは長さ約6.4m、幅約0.8mで約5㎡である。29-6Tは墳丘造出しの形態や規模、墳裾の検出や昭和43年度の整備の際の造成土の範囲の確認を目的としたトレンチである。29-4Tと直行方向に設定され、何度かの拡張を経て、平面図のような平面形態となった。29-6Tの面積は約65.8㎡である。29-4Tと29-6Tではそれぞれ墳丘盛土を検出しており、検出面の整合性を確認するために最終的に両トレンチ間のベルトを一部断ち割っている。このため、両トレンチは一部がつながった平面形状を呈している。

調査の結果、墳丘に接続する形で墳丘造出しが残存していることが明らかになった。幅約15m、長さ約9mの範囲が残存しており、2段から成っている。上段は幅約9m、長さ約6mの方形状に残っていたが、下段は先端および北側が削平され、本来の規模や形状を確認することはできなかった。下段は幅約12m、長さ約5mが残存している。下段の削平面に沿うように溝を検出しており、この溝により造出しの先端が削平されたとみられる。削平は上段に及んでいないとみられ、上段は方形プランを呈すると想定される。

墳丘造出しが削平を受けていることを確認したが、昭和42年度調査時に検出した半円形のプランや溝との関係を整理する必要がある。

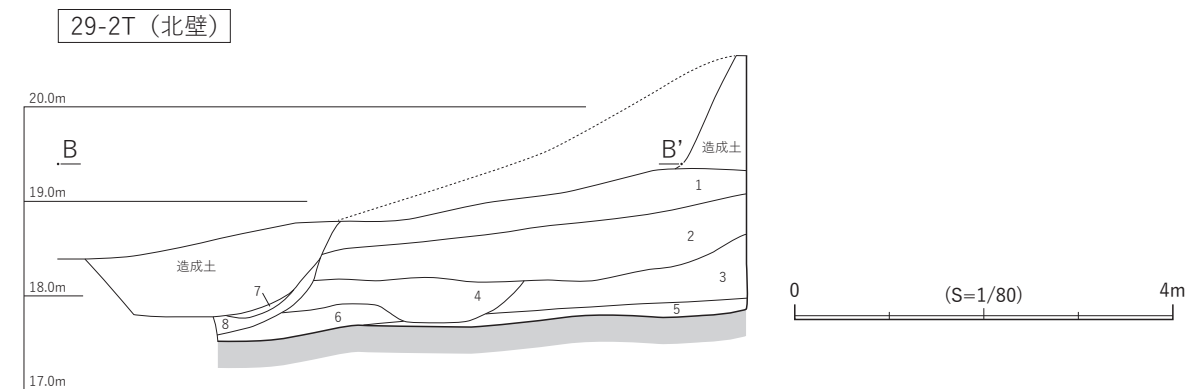
墳丘造出しについて、報告書内での昭和42年度の調査成果としての言及は形状と規模についてのみであるが（杉崎ほか1987）、調査写真や調査日誌を確認すると、墳丘造出しに関する調査担当者の所見が記録されている。昭和42年度の調査写真には、墳丘造出し周辺のトレンチの様子が写っている（図14、写真図版2）。写真には、半円状のプランとそれに沿った溝が写っている（写真図版2上段）。発掘調査日誌には、「半円状のロームの高まりとそれを取り巻く粘土状の褐色土」との記述があり、「張り出し部との境界に確認した溝（＝B溝）」の存在が模式図とともに記載されている。B溝については、「B溝の土の状態は砂質粘土で、溝の壁もしっかりしている。」とあり、写真から読み取れる以上に明確な溝であったと考えられる。写真図版2の下段の写真は、42-10Tbで検出されたB溝の写真である。42-10Tbと42-10T南拡張区の境界に当たる箇所を、墳丘に正対して西側から撮影された写真である。

また、42-10Tb東端及び北側拡張区、42-10T南拡張区で、前方部側面に沿う形で溝が検出されている。調査日誌にはA溝と記録される。A溝については、「堆積の状況は砂質粘土で鉄分を含んでいた」と記述があるが、調査トレンチの略図の他は深さやB溝との切り合い等の情報は記録されていない。



29-2T (南壁)

- 1 灰褐色 (10YR4/2) しまりなし 粘性なし 根を多量に含む 表土
- 2 暗褐色 (10YR3/2) しまりやや強 粘性なし ローム粒子わずかに含む 堆積層
- 3 灰黄褐色 (10 YR4/2) しまり非常に強 堆積層
- 3' 暗褐色 (10YR3/2) しまり強 堆積層
- 4 灰褐色 (10YR4/1) しまり強 粘性弱 ブロック含む 堆積層
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり弱 粘性なし ローム粒子まばらに含む 粒子均一 堆積層
- 6 灰褐色 (10YR4/2) しまりやや強 粘性弱 ローム粒子わずかに含む 堆積層
- 7 灰褐色 (10YR4/2) しまりやや弱 粘性弱 ローム粒子わずかに含む 5層に似る 粒子均一 堆積層
- 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり非常に弱 粘性弱 ロームブロックやや含む 攪乱
- 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり弱 粘性弱 ロームブロックやや含む 攪乱
- 10 にぶい黄褐色 (10 YR4/3) しまりやや強 粘性弱 ロームブロック多く含む 攪乱
- 11 暗褐色 (10YR3/1) しまり強 粘性弱 ロームブロック (黄褐色) と黒色ブロックの混じり
- a 黒褐色 (10YR3/1) しまり強 粘性やや弱 墳丘盛土
- b 黄褐色 (10YR5/4) しまり非常に強 粘性やや弱 黄褐色土と黒褐色土 (a層) の混じり 墳丘盛土
- c 灰褐色 (10YR3/2) しまりやや強 粘性弱 ローム粒子や黒色ブロック多く含む 墳丘盛土
- d 灰褐色 (10YR3/2) しまり非常に強 粘性弱 ロームブロックわずかに含む 墳丘盛土
- e ロームブロック (小) や粒子を含む 粘性の強い灰褐色の土を含む 造出し盛土
- f ロームブロック (小) や粒子を含む 粘性の強い灰褐色の土を含まない 造出し盛土
- g ロームブロック (小) や粒子を含む 粘性の強い灰褐色の土を含む 造出し盛土
- h ブロックから成る層で非常に厚い ポロポロと崩れる 造出し盛土

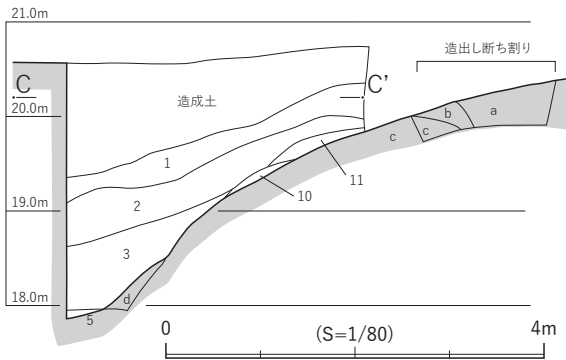


29-2T (北壁)

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりやや強 粘性弱 ローム粒子 (径1mm以下) 少量含む 埴輪片含む キメ細かい 堆積層
- 2 暗褐色 (10YR3/3) しまりやや弱 粘性弱 ローム粒子 (径1mm以下) 多く含む 埴輪片含む 黒いシミのようなモヤモヤ 堆積層
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや強 粘性やや強 ローム (径5mm~10mm) 多く含む 埴輪片含む 堆積層
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) しまり強 粘性やや強 色調は3層に似る ローム (径1mm~5mm) 多く含む ロームブロック (径50mm) 少量含む 堆積層
- 5 褐色 (10YR4/4) しまり非常に強 粘性やや強 ロームブロック多く含む 堆積層
- 6 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや強 粘性やや強 ローム (径5mm~10mm) 多く含む 埴輪片含む 3層と同じ 堆積層
- 7 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや強 粘性やや強 削平後の堆積層
- 8 褐灰色 (10YR4/1) しまり強 粘性強 埴輪片 削平後の堆積層

図 16 29-2,6T 断面図① (S=1/80)

29-2T (東壁)

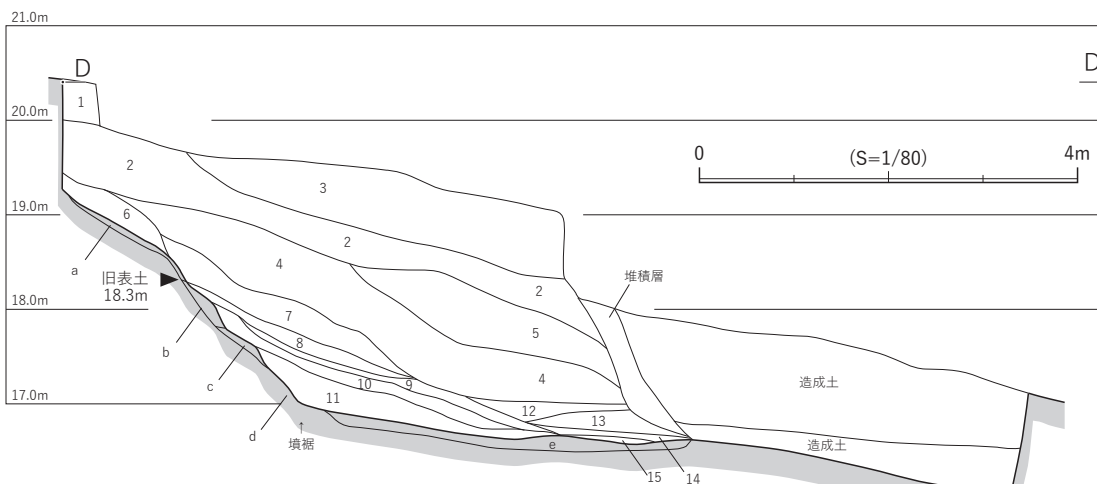


29-2T (東壁)

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりやや強 粘性弱
ローム粒子 (径1mm以下) 少量含む 埴輪片含む キメ細かい 堆積層
- 2 暗褐色 (10YR3/3) しまりやや弱 粘性弱
ローム粒子 (径1mm以下) 多く含む 埴輪片含む 黒いシミのようなモヤモヤ 堆積層
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや強 粘性やや強
ローム (径5mm～10mm) 多く含む 埴輪片含む 堆積層
- 5 褐色 (10YR4/4) しまり非常に強 粘性やや強 ロームブロック多く含む 堆積層
- 10 黒褐色 (10YR3/2) しまりやや強 粘性弱 ローム (径5mm～10mm) 少量含む 堆積層
- 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり弱 粘性弱 ローム (径30mm) 少量含む 堆積層

- a にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりやや強 粘性なし
ローム・暗褐・赤褐 (径30～50mm) のブロックから成る 造出し上段の盛土
- b にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり弱 粘性弱 ロームブロック (径30mm) 少量含む 堆積層
- c 黒褐色 (10YR3/2) しまり強 粘性やや弱 ローム混じる 造出し基底部か
- d 地山

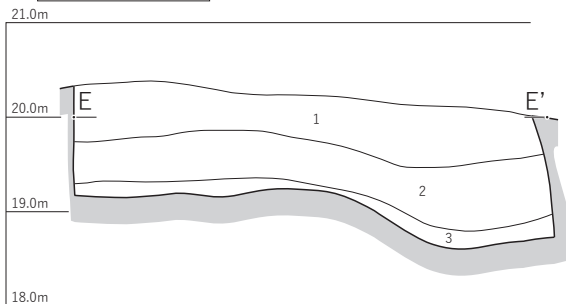
29-6T (南壁)



29-6T (南壁)

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり非常に弱 粘性なし 根を多量に含む 表土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり非常に弱 粘性なし 根をやや含む 土器や埴輪含む 堆積層
- 3 褐灰色 (10YR5/1) しまり非常に強 粘性なし 大小のロームブロック含む 根を多く含む 公園造成土
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) しまり強 粘性弱 ローム粒子 (径5mm) 多く含む 厚い堆積層
- 5 黒褐色 (10YR2/3) しまりやや弱 粘性弱 ローム粒子 (径1mm) やや多く含む オレンジ色の不純物 (径50mm)、炭化物含む 埴輪片含む 堆積層
- 6 黄褐色 (10YR4/6) しまり強 粘性弱 ローム粒子多く含む 墳丘盛土に近い 崩落土
- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりやや強 粘性弱 まばらな大きさのロームブロック・粒子 (径1mm～30mm) 多く含む 堆積層
- 8 灰褐色 (10YR2/1) しまり非常に強 粘性やや強 ローム粒子 (径1mm～10mm) 多く含む 酸化により赤褐色に変色した部分がある 粒子細かい 堆積層
- 9 にぶい黄灰色 (10YR3/2) しまりやや弱 粘性やや弱 ローム粒子 (径10mm程度) 多く含む 粒子粗い 10、11層とよく似る 堆積層
- 10 灰褐色 (10YR2/1) 9層と同じ 粒子細かい 堆積層
- 11 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや強 粘性やや強 ローム粒子わずかに含む 9～10層と比較するとロームの混じりが少ない 2～15 堆積土
- 12～15 堆積土
- a 灰黒褐色 (10YR3/2) しまり強 粘性やや強 ローム粒子をやや含む 墳丘盛土
- b 黒褐色 (10YR2/3) しまり非常に強 粘性強 ローム粒子 (径5mm～10mm) わずかに含む キメ細かい 地山
- c 灰褐色 (10YR4/2) しまり強 粘性弱 暗黄褐色のブロックを含む 粒子やや粗い 地山
- d 明黄褐色 (10YR6/4) しまり強 粘性やや弱 ローム層 地山
- e 暗黄褐色 (10YR4/3) しまり非常に強 粘性強 ロームブロック (径30mm) 多く含む ローム (暗) 地山

29-6T (東壁)



29-6T (東壁)

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり非常に弱 粘性なし 根を多く含む 表土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまり非常に弱 粘性なし 根をやや含む 土器や埴輪含む 堆積層
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりやや強 粘性弱 ローム粒子多く含む

図 17 29-2,6T 断面図② (S=1/80)

平成29年度の発掘調査では、29-2T・29-6Tで墳丘造出しの下段の削平面に平行するように走る溝が検出された。位置や形状から、昭和42年度に検出されたA溝に対応すると考えられる。A溝は29-2Tの南壁の断面図上には現れていないが、墳丘造出しの削平面と接しているため、墳丘造出しはA溝によって削平されたものと考えられる。A溝は昭和42年度の発掘調査でも検出されていることから、墳丘造出しは昭和42年度以前には削平されていたと推定される。また、29-2T南壁の断面で地山と昭和43年度整備工事による造成土との間に薄い堆積土（断面図中の3層及び3'層）が確認されていることから、墳丘造出しの削平と昭和43年度の整備工事との間には時期差があったことが分かる。

一方、昭和42年度に検出された円弧状のB溝については、昭和42年度に検出されたような明確な溝は確認できなかったが、半円形状のプランを検出することができた。半円形プランは固くしまったローム土壌で、黄褐色を呈する。半円形プランの外側はゴミが多く混じる灰褐色土が堆積していた。このことから、平成29年度調査で検出した半円形プランは昭和43年度整備工事の際にB溝に沿って内堀を掘り抜いて形成されたものであると想定される。

墳丘造出しの先端はA溝で大きく削平されているものの側面の残存状況は比較的良好である。29-2Tで確認された墳丘造出し北側でも削平面が確認され、後世の改変を受けているようである。一方で、29-6Tで検出された墳丘造出しの南端は、残存状況は良好で、大きな改変を受けていないと考えられる。29-6Tでは、墳丘造出しの裾部も検出しており、墳丘裾と造出し裾の交点も検出している。29-6Tの南壁の断面図にも、墳裾は明確に現れている。墳裾上には9層～11層が堆積している。9層、10層はしまりがやや弱く、粘性の弱い堆積土で、11層はしまり、粘性ともにやや強い堆積土である。いずれもローム粒子を含んでおり、古墳築造後の初期の堆積土であるとみられる。9層より上は薄い堆積土が続き、ローム粒子を含むしまりの強い4層が厚く堆積する。3層は昭和43年度の整備時の造成土であり、現在の見かけ上の墳裾を形成している。現状の墳裾はほぼ直立して立ち上がっており、水堀による造成土の崩落の進行具合がわかる。

現況の墳裾付近の堆積土は29-2Tと同様に削平を受けており、堆積土13層まで達している。削平面には堆積層があり、その堆積層の上に造成土がのっている。この造成土は昭和43年度の整備によるものである。堆積層の削平はA溝と関連している可能性が高く、削平後に堆積層が見られることから、この削平は整備によるものではないことがわかる。昭和43年度の整備により内堀の底面は失われているものの、墳丘造出しの南端や前方部の墳裾には達していないことが確認された。

以上、平成29年度の発掘調査により墳丘造出しの残存状況が明らかとなった。また、昭和42年度調査日誌の内容と照らし合わせることで、墳丘造出しの本来の形態や改変の様相をさらに考察することができる。まず、昭和42年度以前にA溝によって墳丘造出しの先端は大きく削平されたと考えられる。さらに、円弧状に巡るB溝に沿って昭和43年度に半円形状の墳丘造出しが復原された。このB溝が本来の墳丘造出しの形態を反映しているのかという点が課題であった。平成29年度の調査で墳丘造出しが上下2段からなることが明らかとなり、上段は大きな改変を受けずに残存し方形であったことが分かった。このことから、削平された下段についても本来は方形であった可能性が想定される。さらに、埼玉古墳群の他の前方後円墳では半円形の造出しは認められないことから、二子山古墳も上下段ともに方形の墳丘造出しを有していた可能性が高いと考えられる。

平成29年度の調査後は、廃土の埋め戻しにより原状復旧しているため、現在も半円形の墳丘造出しとなっているが、今回の調査成果を踏まえて今後の整備等の方向性を検討していく必要がある。

29-2T内では、墳丘盛土と造出しの接合部を検出した。墳丘斜面と墳丘造出し上段の平坦面との間に傾斜の変換するラインがあるが、これが接合部に当たる。墳丘造出し上段には原位置を保った状態の円筒埴輪が2点見つかったため、大規模な改変を受けていないとみられる。

29-2T（南壁）に一部サブトレンチを設定しており、断面図（A-A'）上で接合部の土層の堆積状況が確認できる（図16）。断面図中のa～h層は旧表土上の盛土層である。a～d層は墳丘の盛土であり、e～h層は墳丘造出しの盛土である。d層とe層の間に傾斜変換点があり、e層がd層の上に堆積することから、墳丘盛土→造出し盛土という築造順序が確認できる。造出しが墳丘築造過程のどの段階で設計され、築造されたかは不明であるが、少なくとも墳丘の盛土と同時ではなく、墳丘盛土の後に造られたことがわかる。

墳丘面と造出しはどちらも古墳築造時に盛土によって築造されるが、土壌の性質が大きく異なっている点を確認された。墳丘盛土は粘性の強い黒色系の土から成り、固くしまっているが、一方で墳丘造出しは上下段ともにロームブロックを多く含む土で造られており、墳丘盛土と比較して非常にもろい。このため、墳丘造出しは上下2段から構成されるが、段差が不明瞭な箇所がある。

旧表土は墳丘造出し下段の先端、削平面で検出された。29-2T南壁（A-A'）、29-6T南壁（D-D'）で標高18.3mの位置で検出されている。旧表土上の盛土は、29-2T（南壁）のa～d層（墳丘盛土）、e～h層（造出し盛土）の他に、29-2T（東壁）の断ち割り検出されたa～c層（墳丘盛土）、29-6T（南壁）のa層（墳丘盛土）が断面図上で記録されている。

墳丘盛土と造出しの盛土の境界は標高20.0m付近にあたり、傾斜変換線に7層、6層が堆積している。造出しの直上には5層が堆積しており、造出し上段中央に攪乱が1か所みられる。8～10層は攪乱の埋土である。5層の上には2層が堆積する。

29-2T、29-4T、29-6Tからは多くの遺物が出土しており、その量は他の調査区を凌駕する。各遺物の詳細については第2章第5節以降に詳述するが、ここでは遺物の平面図を提示するとともに、出土状況について述べる。遺物の平面図は、便宜的に上層・中層・下層に分けて記録しているため、本報告においても3層に分けて図面を提示する（図20～22）。

墳丘造出し上段の中央付近で土師器と須恵器が特に集中して出土している。土器は墳丘造出しの堆積土中から出土しており、遺物は床面から浮いた状態の出土が大多数で、墳丘造出しの床面に接した状態で検出された遺物は少なかった。土器の多くは重なった状態で出土しており、原位置を保持していることが確実な資料は確認されていない。須恵器の坏蓋の中には複数の重なった状態で出土したものがある。最下部で出土した個体の中には床面から数cmの位置で見つかった土器もあり、これらの土器が墳丘造出しに置かれていた状況を推定可能である。ただし並べ置かれているような状況を示す個体はなく、全体に雑然とした印象である。

土師器と須恵器の出土位置に明確な分布傾向はなく、混在している。断面図の観察からは、墳丘造出し上面は大きな攪乱を受けた可能性は低い。遺物の集中域は上段から下段に及んでおり、各層位での遺物の分布を見ると、上段では床面付近（下層）から、下段からは中・上層からの出土量が多い。先述したように、墳丘造出し盛土はもろく崩れやすい性質であるため、当初は上段に置かれ

ていた土師器・須恵器が、墳丘造出し盛土とともに下段へと流出したものとみられる。

土器は、土師器は高坏、須恵器は坏（身・蓋）が主体であり、須恵器には他に甕や甗、提瓶、横瓶、大型器台の破片が含まれる。これらの器種は、昭和42年度の発掘調査の他、平成2年度の表採でも確認されている。須恵器の坏は最少で身19個体、蓋23個体、土師器の高坏は最少で39点と多く確認されている。大型器台は最少で3個体、提瓶は最少で4個体、甕も複数個体存在すると見られ、坏や高坏の集中域に客体的に混じる。二子山古墳の墳丘造出しにおいて、飲食器を伴う祭祀が行われた可能性が考えられる。

墳丘造出しの上段の北端において、円筒埴輪が樹立した状況で発見された。両資料ともに上部は残存しておらず、底部から1条目の突帯が残る。墳丘に近い方から、E002、E003（図59）である。墳丘造出し上段の端を取り囲むように円筒埴輪が並べられていたと考えられる。両埴輪の中心（芯）間の距離は約95cm、縁から縁までで約65cmを測る。他にも円筒埴輪の破片が多く出土しており、外面や内面に線刻をもつ埴輪も確認されている。29-2T、29-4T、29-6Tから見つかった円筒埴輪のうち、E002～E019、E021、E023、E026、E028～E036、E038の31個体が径を復元可能であった（図59～66）。線刻をもつ埴輪は、E033、E063・E064、E066～E069、E071、E082～E085、E091、E095～E098、E100～E107の25個体が確認されている（図65、71～73）。一方で、円筒埴輪と比較すると形象埴輪の出土は非常に少なく、K002（人物）、K028・K031（家）、K040（不明）の4点である。墳丘造出し上の遺物の残存状況を考慮すると、墳丘造出しに形象埴輪が樹立された様相は考えにくい。

以上のように墳丘造出しは、先端部が直線的に削平されているものの、円筒埴輪の樹立状況や土器の出土状況から平坦面、特に上段は比較的良好に残存しており、墳丘造出しにおいて、円筒埴輪で囲まれた内側に土器が集積されていた状況が考えられる。

③29-3T

29-3Tは当初後円部のラインの検出を目的として、現況の墳丘造出しの北側の墳丘に設定したトレンチである。前方部からの墳丘ラインと合わせ、墳丘西側のくびれ部の検出を最終目的としている。トレンチ面積は約19.8㎡である。西側くびれ部付近に当初の29-2Tに平行するように設定した。

地表下約1mの深さで埴輪が集中して出土し、一部はトレンチの南側壁面に埋まった状態を確認した。墳丘から転落した埴輪の破片と考えられたため、トレンチの南側を1m拡張した。テラス面等は確認されなかったが、後円部の等高線の流れが屈曲しており、墳丘のくびれ部を確認した。

遺物は円筒埴輪が主体である。遺物の出土状況は図24に示した。本報告で掲載した円筒埴輪以外の遺物は、形象埴輪はK017（馬）、K039（不明）の2点（図80・81）、須恵器はカキ目のある小破片であるS058の1点のみである（図84）。原位置を保った状態で出土した遺物は確認されていない。

29-3Tから発見された円筒埴輪では、E001、E020、E022、E024、E025、E027、E037の7個体が径を復元可能であった（図59～66）。

線刻をもつ埴輪片も出土しており、E065、E070、E072～E081、E086～E090、E092～E094、E099、E108、E109の23個体が確認されている（図71～73）。本報告に掲載した線刻をもつ

埴輪は全体で48個体存在するため、約半数が29-3Tから出土したことになる。小破片も多く同一個体も含まれるであろうが、埴丘造出しのやや北寄りに設定した29-3Tからまとまった量が出土したことは、線刻をもつ埴輪の配置を考える上で重要な事実である。線刻をもつ円筒埴輪が埴丘造出しに置かれたことは確実であろうが、その周囲の埴丘テラスやくびれ部周辺にも線刻の埴輪が置かれていた可能性がある。内面にヘラ記号をもつ円筒埴輪片も多く確認されており、E110～E112、E114～E122、E124、E125の14個体を数える（図74）。線刻やヘラ記号をもつ円筒埴輪について、トレンチ内での出土の分布に傾向は見られない。

引用文献（第2章第1節～第8節に関するもの）

岩田明広2013「行田市埼玉古墳群（鉄砲山古墳・二子山古墳）の調査」『第47回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館

岡本健一2019「行田市埼玉古墳群（奥の山古墳・二子山古墳）の調査」『第52回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館

城倉正祥2011『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

杉崎茂樹ほか1987『二子山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会

中井歩2018「行田市埼玉古墳群（二子山古墳）の調査」『第51回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館

中井歩2019「《速報》二子山古墳埴丘造出しの調査について―平成29年度発掘調査成果を中心として―」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第12号 埼玉県立史跡の博物館

若松良一ほか1992『二子山古墳 瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会

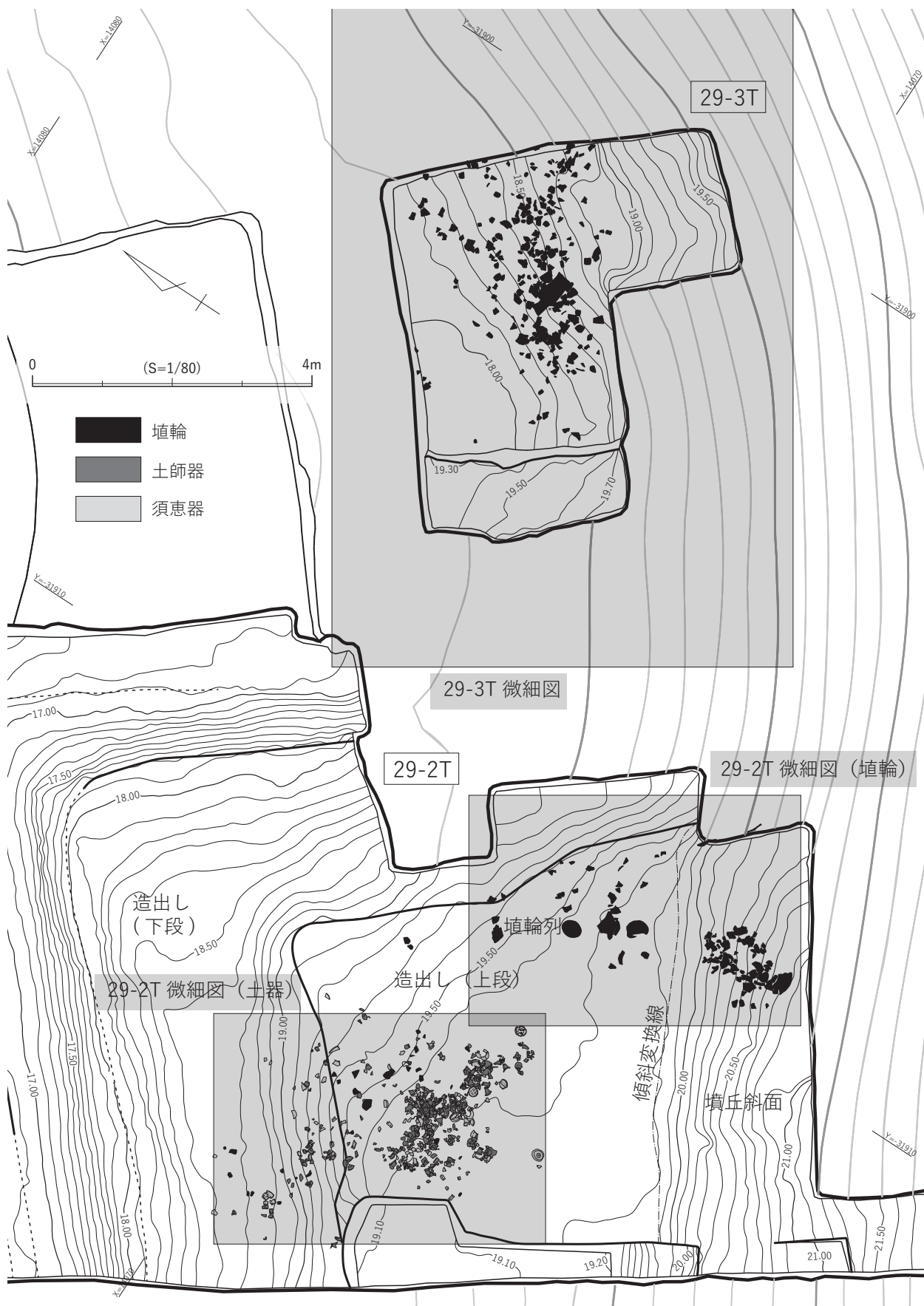


図 18 29-2T 造出し微細図 位置図 (S=1/80)

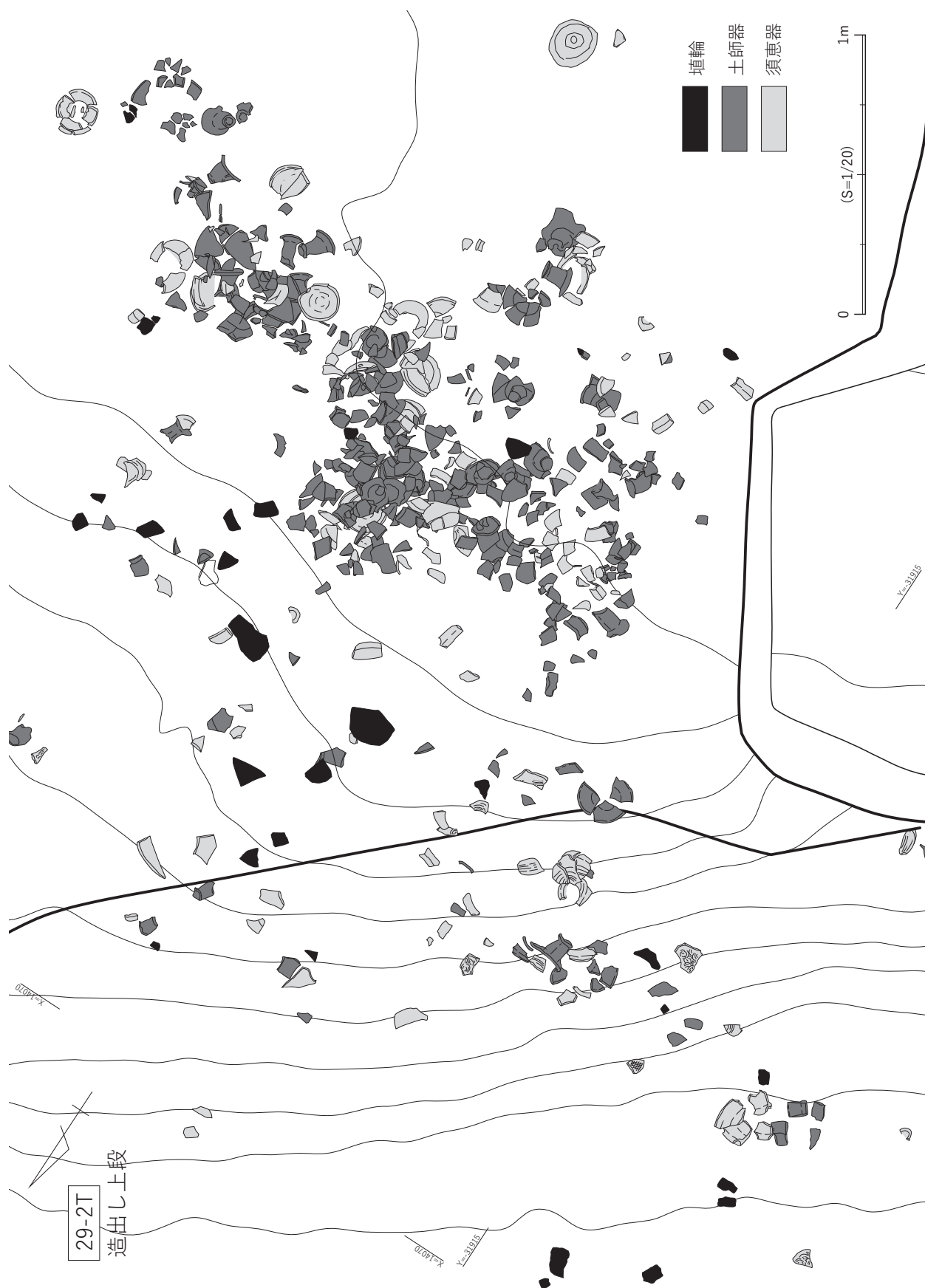


図 19 29-2T 微細図・土器集中 上・中・下層 (S=1/20)



図 21 29-2T 微細図・土器集中 中層 (S=1/20)

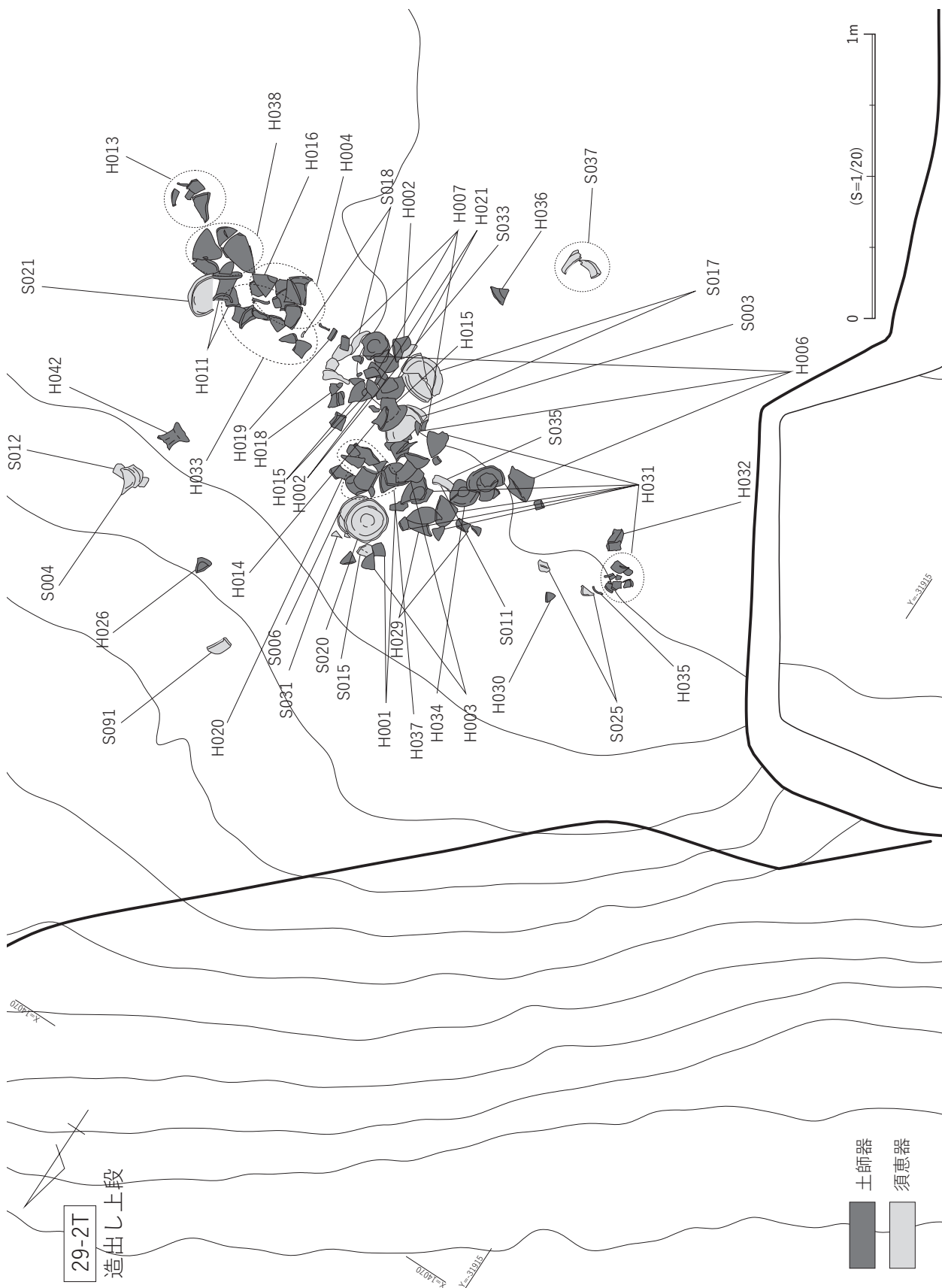


図 22 29-2T 微細図・土器集中 下層 (S=1/20)

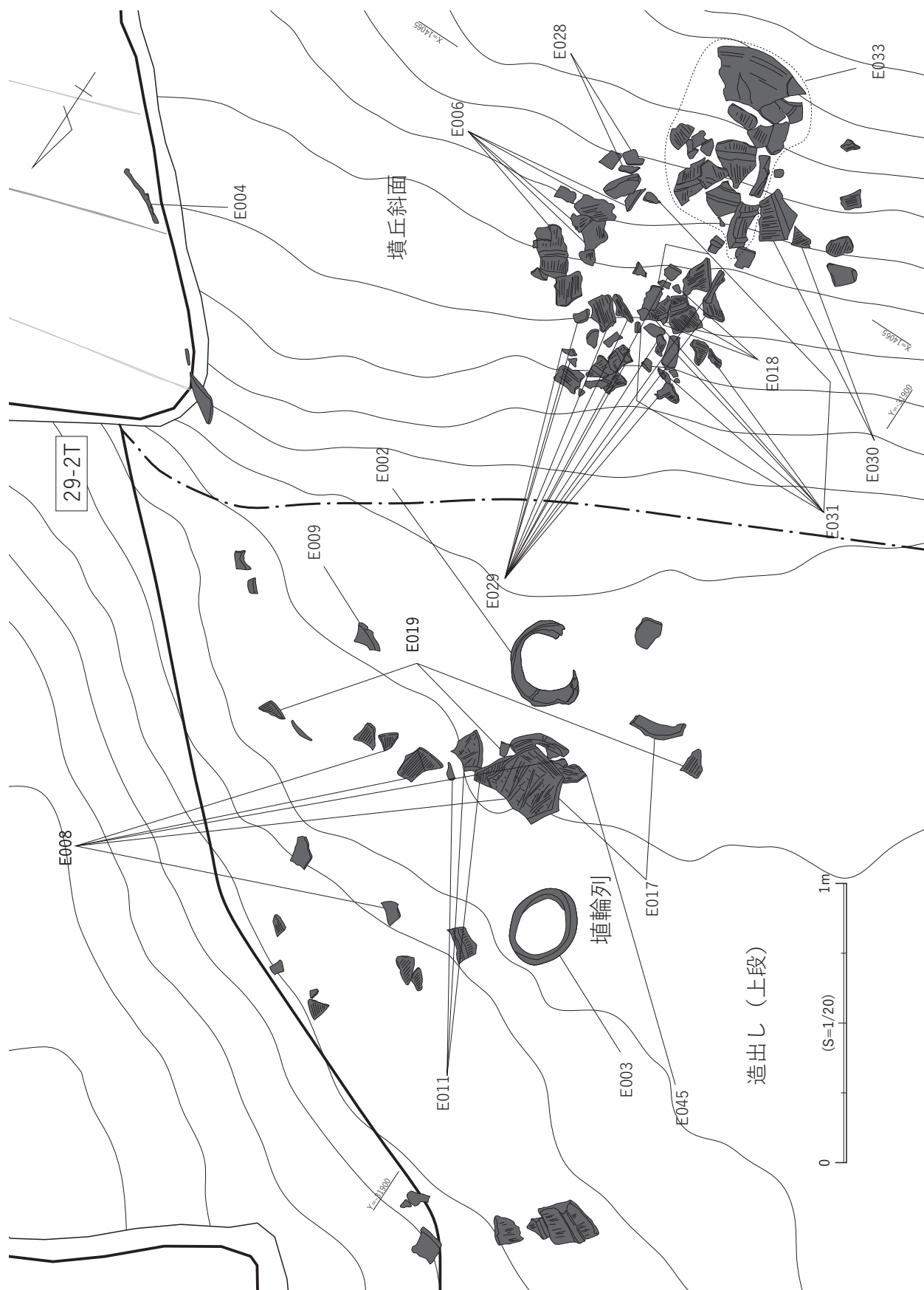


図 23 29-2T 微細図・埴輪 (S=1/20)

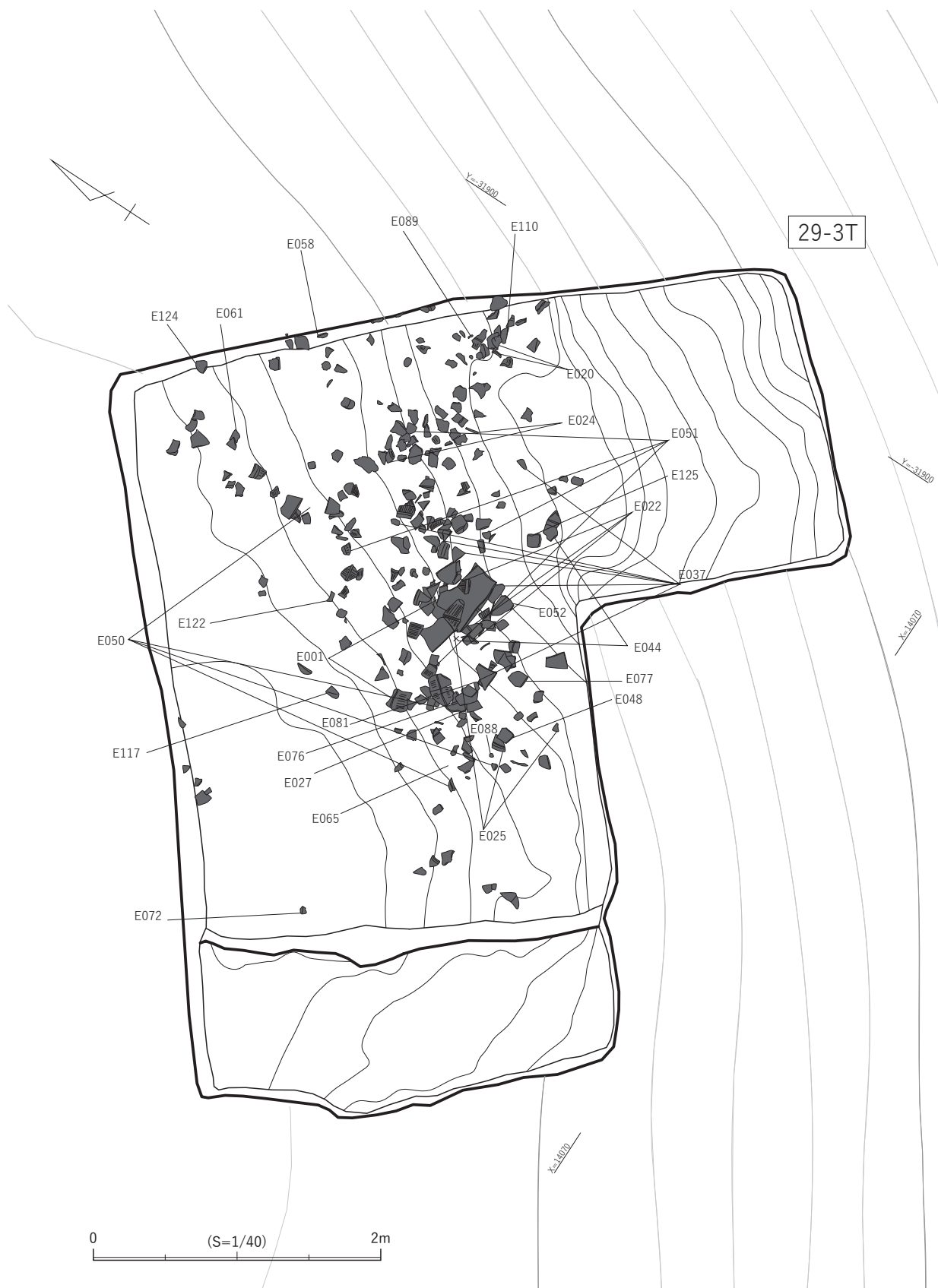


図 24 29-3T 微細図 (S=1/40)

第2節 II 区の調査成果

①概要

II 区は二子山古墳の造出しを除く墳丘部分に設定したトレンチをまとめた調査区である（図25）。墳丘の正確な長さや形状を明らかにするために墳裾の検出を主目的とした。墳丘の上部まで達するトレンチでは墳丘の立面的な構造、段築の把握や、旧表土、墳丘盛土面の検出を目的として調査を行った。昭和42年度にも墳丘の調査が行われたが、その調査範囲は主には墳裾と内堀部分であり、テラス面まで至る調査区は設定されなかったため、段築構造は今回の発掘調査により確認する必要があった。

二子山古墳では、昭和42年度の調査後に、昭和43年度に水堀として復原されたために、墳丘の崩落が生じており、平成24年度より3か年で内堀の埋立工事を実施している。当初整備時の墳丘の保護措置や内堀掘削については記録がなく、墳裾部の不自然な平坦面とあわせて不明点が多い状況であった。そのため、平成25年度の発掘調査は、埋立工事により安全な整備が可能であるか否かの検証、墳裾の崩落状況・二次盛土の状況・保護の状況の把握、内堀の覆土の遺存状況の確認を目的として実施した。

平成25年度に前方部の前面に3トレンチ、平成27年度に後円部に3トレンチ、平成29年度に後円部主軸上に1トレンチ、計7トレンチを設定し調査を行った。

29-1Tを除く6トレンチにおいて、墳丘盛土の直下から旧表土を検出した。後円部については、平成27年度の調査で検出した旧表土標高が27-1Tで17.5m、27-2Tで18.2m、27-3Tで17.4mと概ね80cm以内に収まる。他方前方部では、前方部前面の25-1T～3Tで旧表土を検出した。25-1Tでは17.9m、25-2Tでは18.3m、25-3Tでは17.9mと、40cm以内に収まる。なお、I区では標高18.3mの位置で旧表土を検出している。過去の調査では、中堤盛土のトレンチの17.6mの標高で旧表土を検出したとの報告があり、この結果から乖離しないことが明らかになった。二子山古墳築造前の古墳時代の表土は、微弱な凹凸はあるものの大きく傾斜していなかったことがわかる。

二子山古墳は、これまで三段築成とみられており、測量図からも後円部斜面に平坦面が二面確認されていた。平成29年度の調査で後円部にテラス面が発見され、段築構造をもつことが判明したが、埴輪列は検出されず、三段築成といえる明確な根拠は見出せなかった。前方部前面にも同様に平坦面が観察できるが、平成25年度の調査でこの平坦面は墳丘本来の構造ではなく、中世に造成された墓地に起因するものであることがわかった。前方部のトレンチは墳裾から墳丘の上部まで設定し調査したが、墳丘の改変が著しく、段築構造や埴輪列は検出されなかった。25-2T、25-3Tでは板碑や火を受けた人骨を伴う土壌を検出しており、中世に土壌が複数造られ、前方部前面の広い範囲にわたって墓域が展開していた可能性がある。

また、墳裾付近の平坦面は昭和43年度整備時の造成である点が明らかになった。後円部の調査トレンチでは本来の墳裾を検出し、内堀の埋土も一部で検出した。一方で、前方部のトレンチでは本来の墳裾や内堀覆土は確認できなかった。

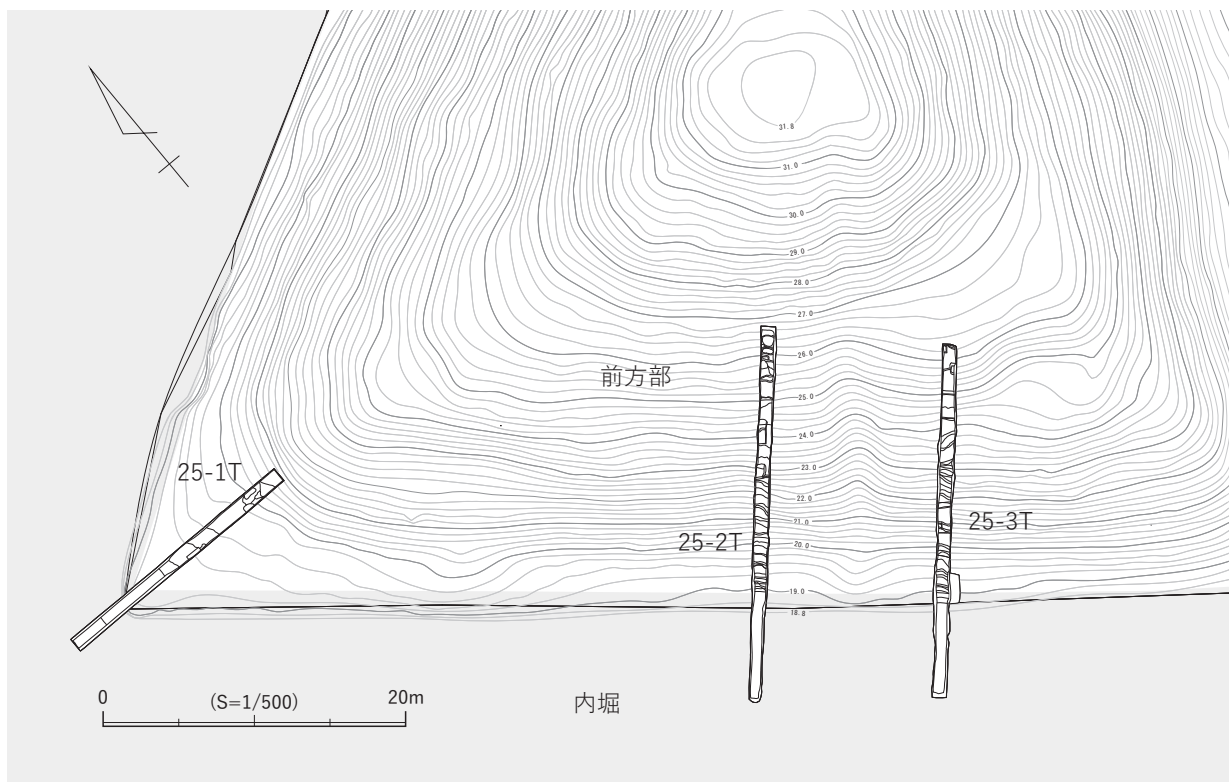
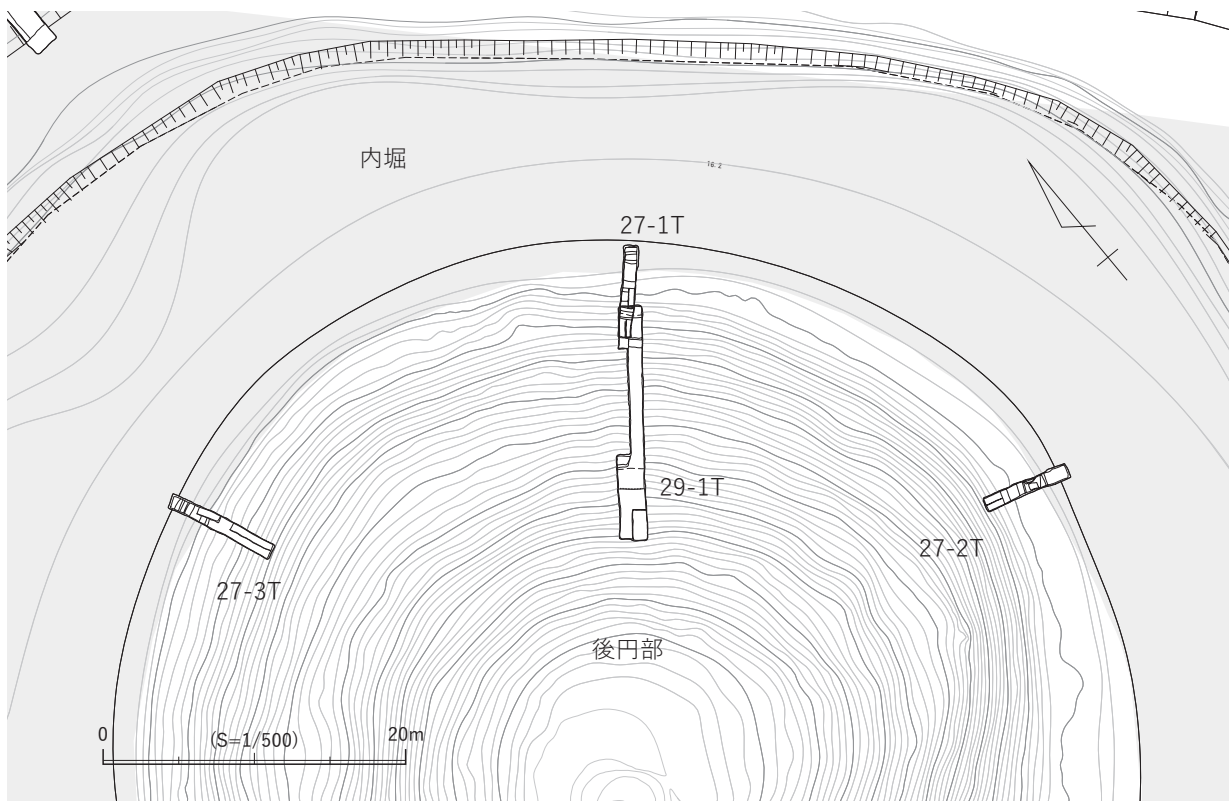


図 25 II 区平面図

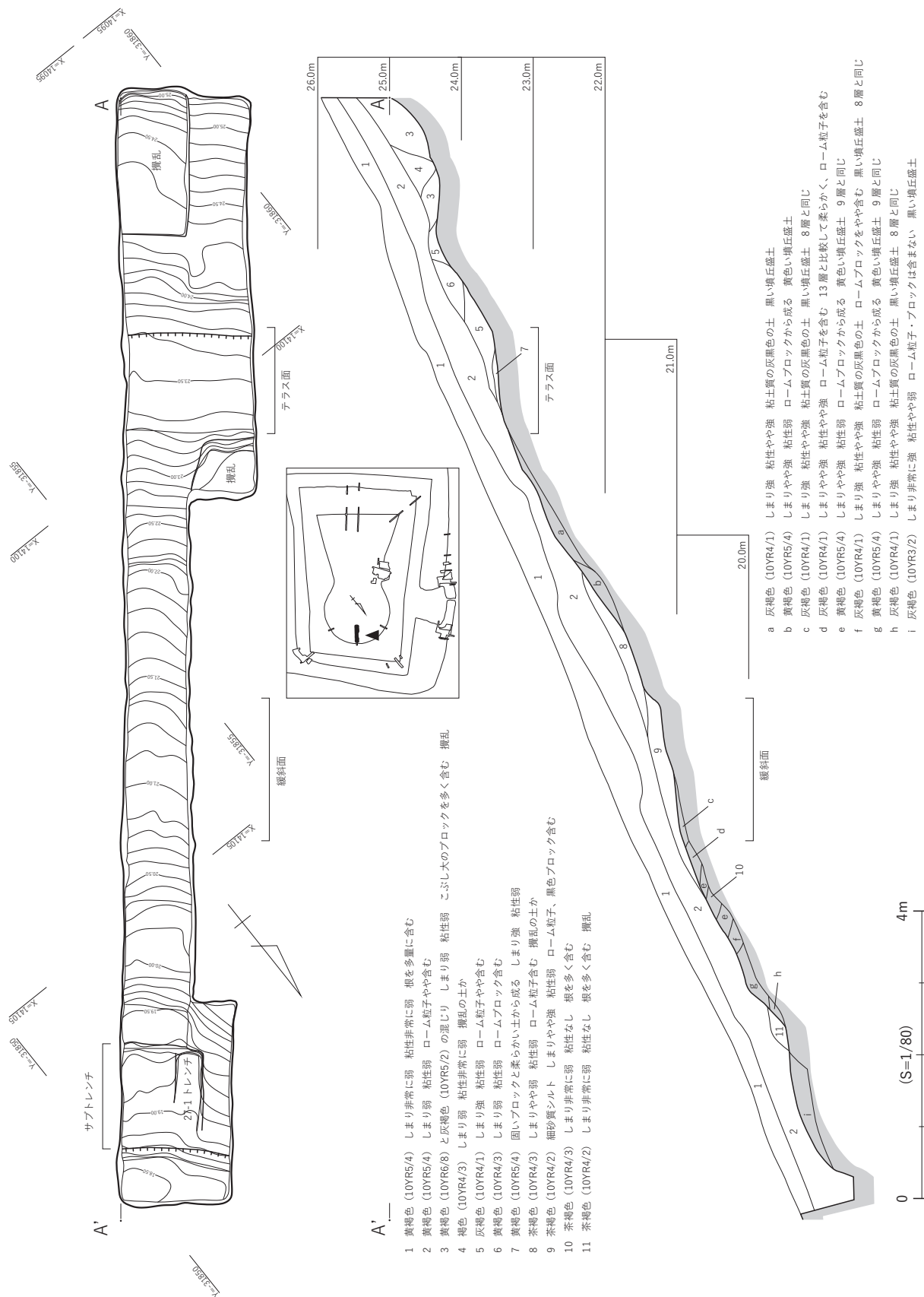


図 26 29-1T 平面図・断面図 (S=1/80)

②29-1T (図26)

墳丘の保存状況や段築構造を把握するために後円部に設定したトレンチである。後円部の北側、ほぼ墳丘主軸上に設定した。トレンチ幅1mで長さは約15.6m、トレンチ上端部、下端部をそれぞれ西側に約1m、約0.5m拡張している。トレンチ面積は22.7㎡。

トレンチ墳頂側は攪乱を受けており墳丘面の傾斜は西側でのみ確認できる。トレンチの上端より約3.3m付近からは平坦面となっており、テラス面とみられる。平坦面の水平距離は約1.5mである。断面図中の7層は古墳築造後の初期の堆積層、5層も同様にテラス面への堆積層であり、しまりは強い。断面図の傾斜の観察からは、トレンチ上端から標高23.8m付近まで傾斜をもち、標高23.6m～23.3mの範囲で緩やかになる点がわかる。標高23.3mから再び傾斜が急な角度に戻り、標高21.3m～20.9m付近で再び緩斜面となる。この平坦部は一部攪乱を受けているが、下段のテラス面の可能性もあるが、不確定である。9層、8層は平坦面への堆積土である。この平坦面の幅は約2mである。平坦面の下部は多少の緩急はあるものの角度を保ったままトレンチ下端に至る。墳裾から上段のテラス面までは墳丘盛土を明瞭に把握できたが、上段のテラス面より上は攪乱が多く、残存状況は良くない。本トレンチから旧表土と明確に判断できる層は検出されず、墳丘盛土の範囲に収まっていると考えられる。盛土は単位が明瞭に確認でき、黒色系と黄色系の土とが互層になっている状況が記録されている。黄色系の土層にはロームブロックが多く含まれ、黒色系の土層にはあまり含まれていない。特に、i層とh層にはロームブロックが全く含まれておらず、粘土質でしまりが強い。

29-1Tからは多くの円筒埴輪片が出土したが、テラス面における樹立状況は確認されず、上段テラスでは西側に拡張したものの埴輪列は検出できなかった。円筒埴輪のE132、E133(図75)が出土している。E132は黄白色系の円筒埴輪片で、上段のテラス面より上方からの出土である。方形透かし孔をもつ円筒埴輪も出土している。本トレンチからは方形透かし孔をもつ橙褐色系、黄白色系、赤褐色系の3系統の円筒埴輪の破片を確認しており、この状況はI区29-2Tと同様の傾向である。形象埴輪の出土は確認されていない。

なお、調査年度が異なるため平面図を分けているが、トレンチ下端で27-1Tと重複している。

③27-1T (図27)

墳裾の遺存状況や墳丘盛土面、旧表土層の検出のために、墳丘の主軸上、後円部北側に設定したトレンチである。一部前述した29-1Tと重複している(調査年次は27-1Tが先である)。トレンチの幅は約1m、長軸は約6mである。墳丘面の東壁側は一部墳丘盛土を断ち割るサブトレンチを設定している。トレンチ面積は約6㎡。

過去の整備の造成土が厚く堆積しており、本来の墳丘面は内側に位置することがわかる。二次盛土の状況は後述する27-2T、27-3Tでも確認可能であり、過去の整備により墳丘の埴裾部分が一回り大きく造られている状況がわかる。内堀の滞水により崩落していた土は客土であったと考えられ、結果的に本来の墳丘面の保護につながった。埴裾の造成土により墳丘は一回り大きく見えており、近年まで二子山古墳の墳丘全長は138mとされることもあったが、今回の調査により想定埴裾が内

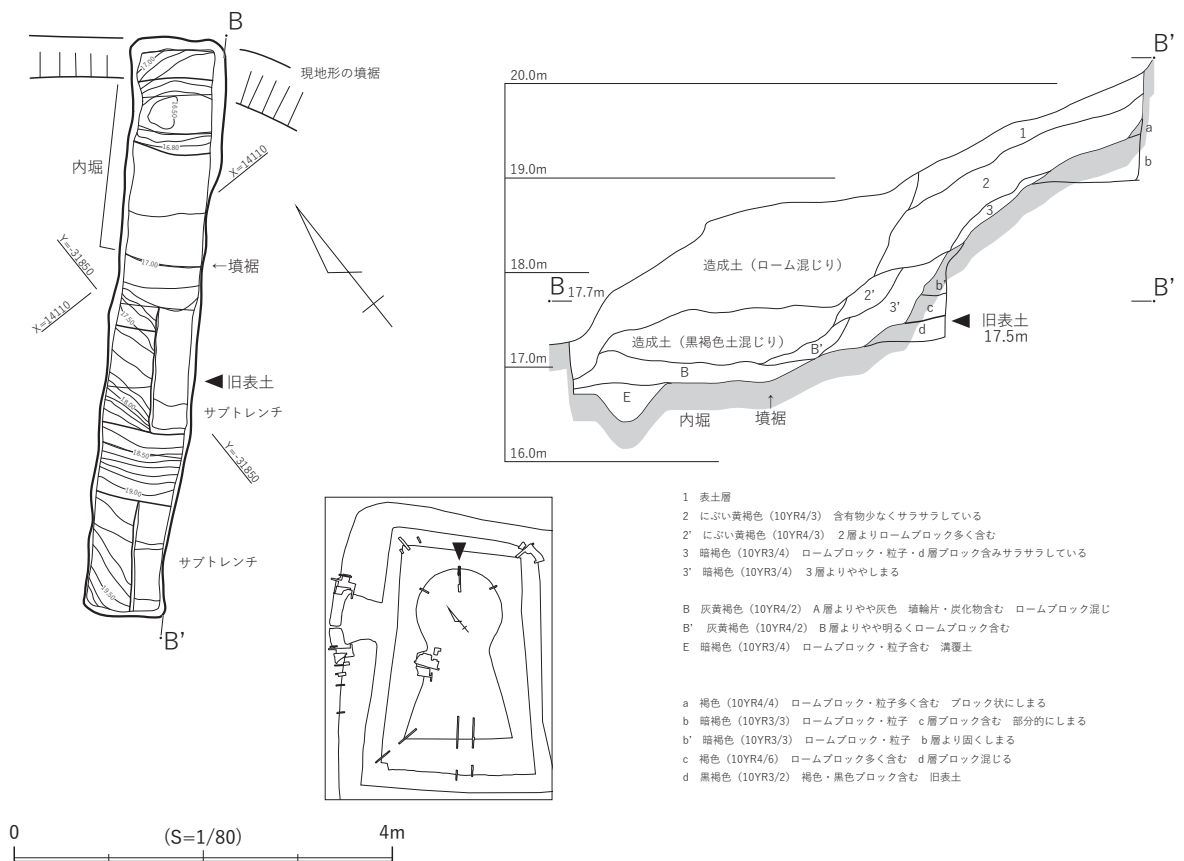


図 27 27-1T 平面図・断面図 (S=1/80)

側に移動し、調査後は132.2mが計測値として採用されている。27-1Tにおいて二次盛土は場所によっては約1mと特に厚く、ローム混じりの土が主体である。

旧表土が標高17.5mで確認されており、断面図中のd層がこれにあたる。d層より上部のa～c層は埴丘盛土であり、しまりはよくロームブロックを多く含んでいる。トレンチで検出した埴丘面は急斜面であり、旧表土付近で傾斜が緩やかになる。標高約16.8mに傾斜変換線があり、この点を境界としてトレンチ下端に向かって地山は平坦になる。この傾斜変換線が埴裾に相当する。E層、B層には埴輪片が含まれ、埴裾への堆積土、周堀の埋土であると考えられる。周堀の埋土の上層には造成土がのっており、造成時に削平を受けていると考えられるが、堀の底面は残っており、その標高は16.7～16.8mである。トレンチから発見された遺物はいずれも円筒埴輪片であり、胴部の小片である。形象埴輪やその他の遺物は現在のところ確認されていない。

④27-2T (図28)

後円部東側の埴裾の遺存状況や埴丘盛土、旧表土の検出を目的とした調査区である。トレンチは幅1m、長さは約6mである。昭和42年度の42-7Tと42-5Tbの中間地点に位置する。トレンチ内の埴丘面の南側には埴丘盛土や旧表土の検出を目的としたサブトレンチを設定した。トレンチの面積は約6㎡。

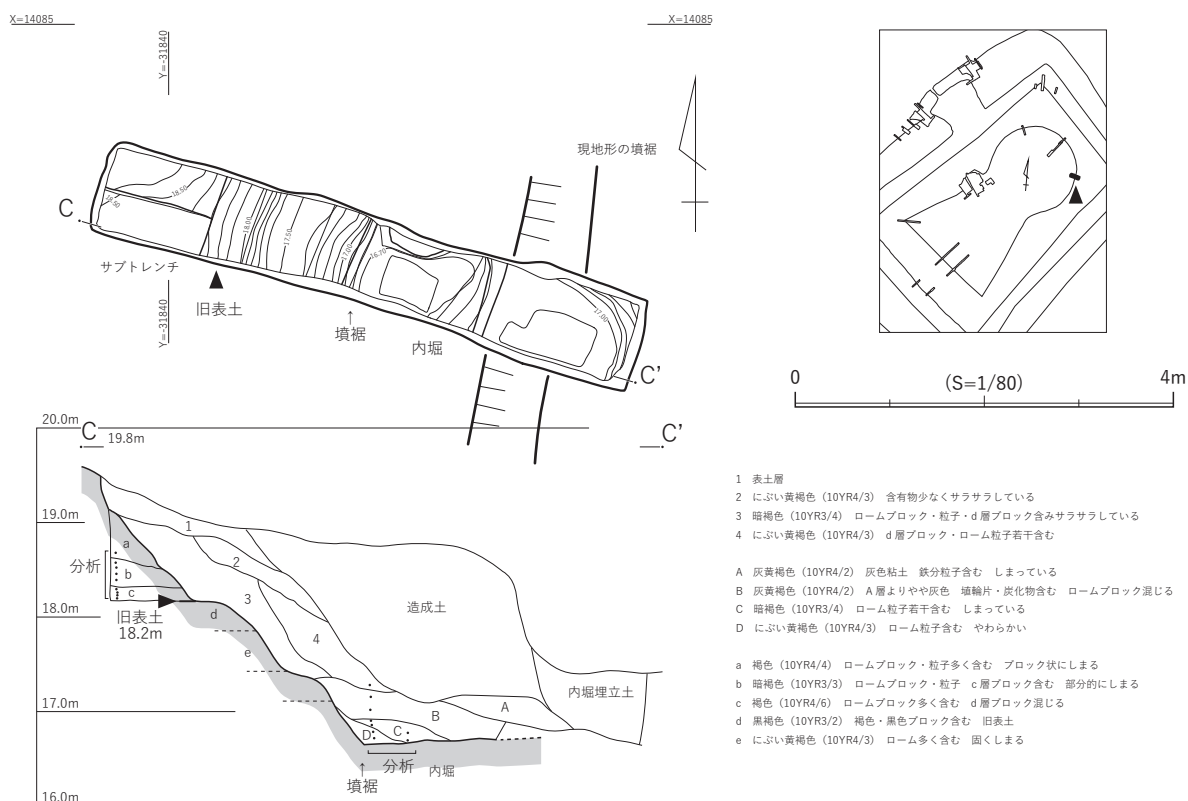


図 28 27-2T 平面図・断面図 (S=1/80)

27-1T同様、二次盛土が埴堀部に厚く堆積している。この盛土の造成により、本来の埴堀より見かけ上の埴堀が約2m外側に位置している。埋め立てられた現状での内堀の底面から埴堀までは約1.2mの比高差があり、埴堀部分には2m近い造成土が盛られているため、本来の埴堀への滞水等による影響は軽微であったと考えられる。本来の埴堀はトレンチの上端から約3m、トレンチのほぼ中央で検出された。標高16.7m付近の傾斜変換線がこの埴堀に当たり、この埴堀より下が内堀である。断面図中のA～D層は埴堀の堆積土、内堀の埋土であると考えられる。埋土中からは埴輪片が検出されている。内堀埋土の残存状況は良好でないが内堀の底面は遺存しており、標高は16.7m～16.8mである。旧表土は埴堀から約1m上の高さで検出されている。18.2mが旧表土の上面であり、d層がこれにあたる。傾斜をもった埴丘盛土面は旧表土付近で一度角度が緩やかになり、約50cm緩斜面が続き再び傾斜をもち埴堀に至る。この緩斜面は旧表土上面に対応している。埴堀の上部にもテラス状の平坦面があり、幅は50cmほどである。

d層より上のa～c層は埴丘盛土である。29-1T（後円部北側）で検出された埴丘盛土はロームを多く含む黄色の層と黒色の層とが互層になっていたが、27-2Tの旧表土直上の埴丘盛土では異なる状態が確認された。埴丘盛土はしまりがよく、ロームブロックを多く含んでいる。土層の色調は褐色から暗褐色を示す。昭和42年度の調査では後円部東側で埴堀は明確に検出されていなかった

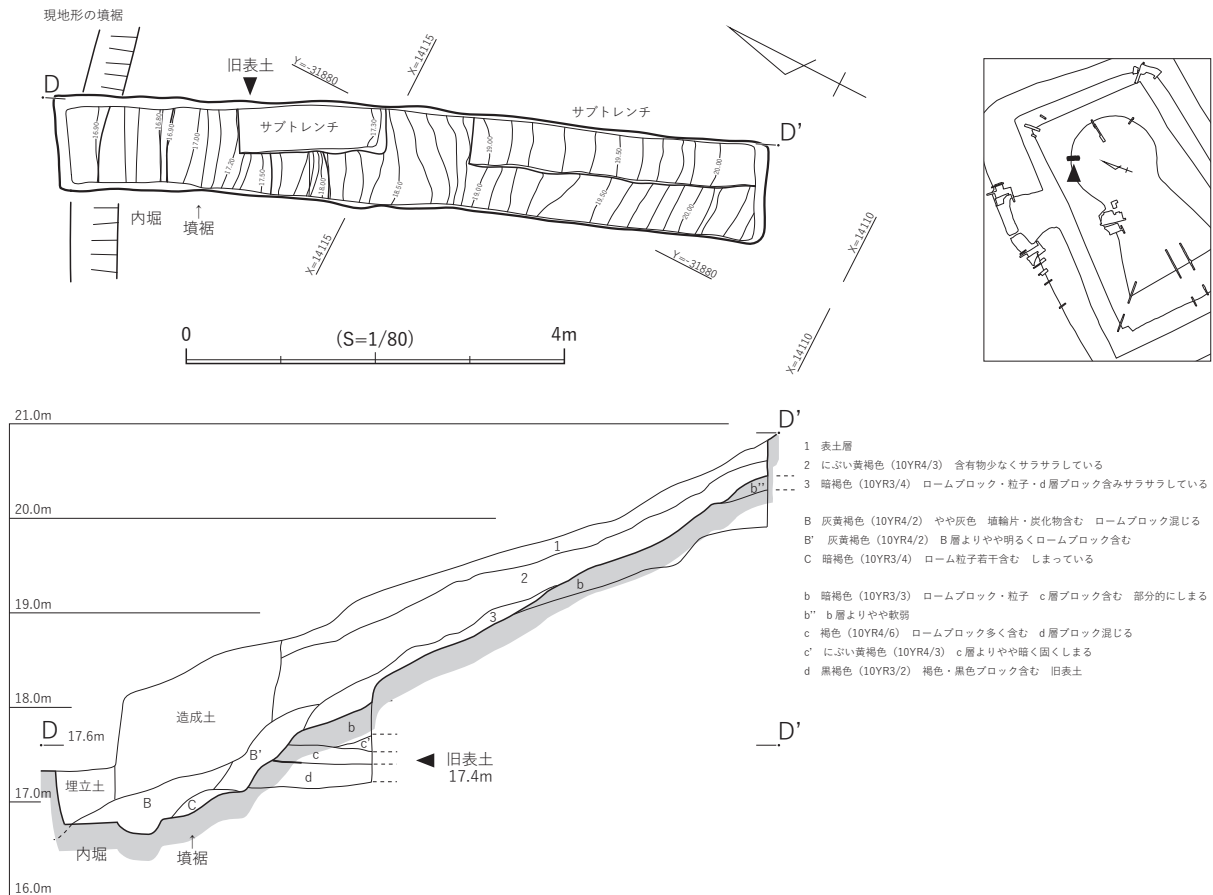


図 29 27-3T 平面図・断面図 (S=1/80)

ため、墳丘の本来の形状を把握することができた点は大きな成果といえる。

27-2Tからは円筒埴輪片が少量出土している。また、形象埴輪に分類できる遺物として、K041 (図81) が出土しているが種類は不明である。

⑤27-3T (図29)

後円部西側の埴堀、墳丘盛土、旧表土の検出を目的に設定したトレンチである。このトレンチは概ね南北軸に長軸をもち、現況の墳丘から埴堀にかけて設定した。昭和42年度調査の42-12Tbに近接する。墳丘の主軸を境界線として、27-2Tと概ね対称の位置にあたる。トレンチの幅は約1m、長さは約7.5m、トレンチの面積は約7.5㎡である。断面図を記録したトレンチの東壁側には、盛土や旧表土の検出のために50cm幅のサブトレンチを2か所設定し調査を行った。

他の後円部に設定したトレンチと同様、埴堀付近には厚い造成土が認められた。場所によっては約1.5mの厚さに及んでおり、内堀の滞水が本来の埴堀に影響を与えていないことがわかる。トレンチの下端から70cmほどの位置に現況の埴堀がある。本来の埴堀はトレンチ下端から水平距離で1.5mの位置から検出された。トレンチ上端から墳丘の斜面が続いており、傾斜が変化する地点が埴堀にあたる。埴堀よりトレンチ下端までは、本来の内堀にあたる。内堀の底面は多少の凹凸があ

るが、標高は約16.7mである。後円部に設定したトレンチでは周堀の底面を平坦面として検出しており、その標高は16.7m～16.8mである。昭和42年度の調査の断面図からは内堀堀底の平坦面はどのトレンチでも標高16.6m前後であるため、今回の調査結果と符合する。

墳丘盛土の傾斜は旧表土の少し上付近でも一度緩やかになり、その後再び角度をもって墳裾に至る。墳裾の上部にも同様に幅の狭いテラス状の構造をもつ。この緩斜面の幅は50～70cm程度であり、27-2Tや前方部のトレンチでも確認された、墳裾部のテラス状の構造と同種と考えられる。旧表土はd層に該当し、標高は17.4mである。d層より上層のb'、b、c、c'層は墳丘盛土の単位であり、土層中にロームブロック・粒子を含んでいる。しまりは基本的によく、c'層は固くしまっている。B、B'、C層は墳裾に堆積した土、あるいは内堀の埋土である。C層は初期の堆積層であると考えられ、色調は暗褐色を呈しローム粒を含んでいる。B、B'層は灰黄褐色を呈し、埴輪片を含んでいる。トレンチ上端は標高21.0mに達するが、明確なテラス面は確認できなかった。なお後円部に設定した29-1Tでは標高21.3m～20.9m付近で平坦面を検出している。

昭和42年度に後円部西側を対象とした42-12Tb、42-9Tb、42-8Tのうち、42-9Tb、42-8Tでは墳裾は検出されなかった。近接する42-12Tbで墳裾とした位置と、本調査で検出した墳裾の位置とは2～3mほど南北方向にずれがある。

円筒埴輪片の出土はわずかであり、径が復元可能であった個体はない。形象埴輪は種別不明であるK042（図81）が一点出土するのみである。

⑥25-1T（図30）

25-1Tは平成24年度に埋め立てた前方部西側隅角部に設定したトレンチである。安全な発掘調査が可能であるかの検証、墳裾の崩落状況・盛土の状況・保護の状況の把握、内堀の埋土の遺存状況の確認を目的として調査を実施した。トレンチの前方部の西側隅角部と前方部墳頂を平面上で結ぶ角度で設定した。主軸に対し約45°の傾きをもっている。本トレンチは東西方向に長軸をもち、トレンチの幅は1m、長さは17.6mである。トレンチの面積は17.6㎡である。25-1Tは長さ17.6mと長大であるが、トレンチ下端部から約3mの範囲は崩落の危険性が高く調査が不可能であった。昭和42年度調査で42-40T及びその拡張区とトレンチ下部で一部重複している。なお、本トレンチ内堀の対岸、中堤側の位置には、25-6Tを設定して調査した（III区の調査成果で詳述する）。なお平成25年度の調査は、墳丘面の調査トレンチとそれを延長した位置にそれぞれ対岸の中堤を調査するためのトレンチを設定している。25-1Tと25-6T、25-2Tと25-5T、25-3Tと25-4Tが対応関係にある。本報告上ではII区（25-1T～3T）とIII区（25-4T～6T）に分かれるため、異なる節で取り扱う。

断面図中の3層は整備の際の造成土である。後円部調査区で検出した墳裾付近の造成土と状況は似ており、場所によっては2m以上の厚さをもつ。現在の墳裾付近に見られる平坦面はこの二次盛土によるものである。1層は平成24年度の工事による埋立土である。1層と3層は、水堀として整備されていた頃のヘドロ層＝5層の上に造成されている。5層よりトレンチ下部の遺存状況は悪く、湧水も生じたため、地山の確認は困難であった。昭和43年度の造成で墳裾に盛られた土により、水位の変動による崩落が本来の墳丘に達していないことがわかる。25-1Tが位置する前方部の西側隅角部の稜線には、テラス面状の平坦面がある。25-1Tはトレンチ上端の標高が約20.5mと他の前方

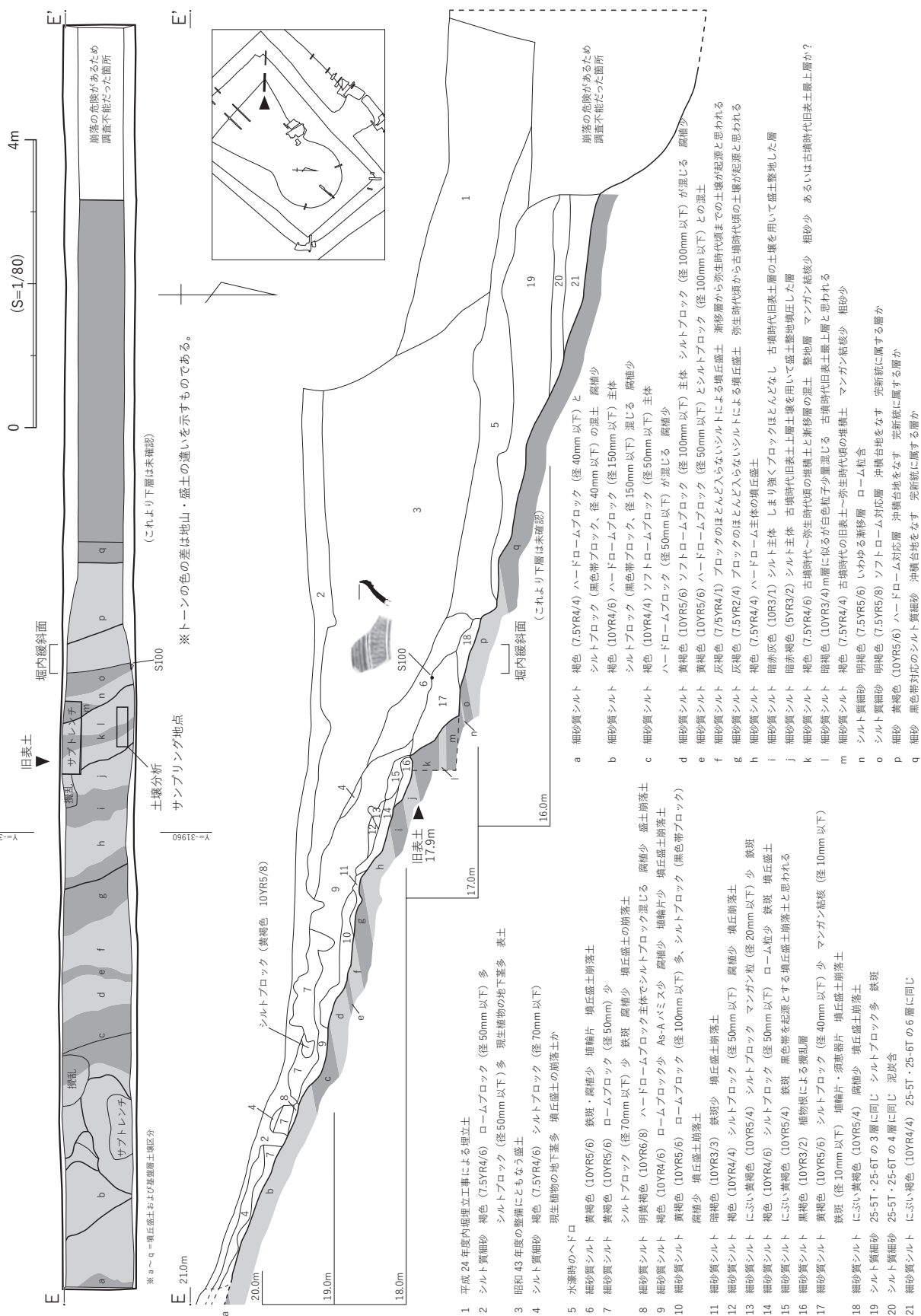


図 30 25-1T 平面図・断面図 (S=1/80)

部に設定したトレンチと比較すると墳丘の上部に達していない。II区の後円部北側、29-1Tではテラス面と墳丘下位に平坦面が検出されており、下位の平坦面の標高は約21.3m～20.9m付近である。墳丘面の残存状況が良好であったとしても、本トレンチは下位の平坦面に至っていない。

旧表土は17.9mで、断面図中のk層がこれに相当する。k層直上のj層、i層はシルト主体の層でしまりが強く、ロームはほぼ含んでいない。このような土層の状況から、古墳時代の旧表土層を用いて盛土、整地した層であると考えられる。i層の更に上のh層はハードローム主体であり、墳丘盛土の特徴を備える。その上のg層、f層は灰褐色のシルト主体の層である。これより上層の墳丘盛土層にはロームブロックが含まれている。旧表土より上の墳丘盛土の単位は明確に把握できるが、墳丘面の傾斜は一定でなく凹凸がある。攪乱も多く、盛土層中からも腐植土が検出されるなど、残存状況は良好ではない。前方部西角部においては、墳丘上部が崩落しており、墳丘本来の面は遺存していないと想定される。一方、旧表土下では、地山の検出を目的としたサブトレンチを設定し、ソフトローム層(o層)、ハードローム層(p層)を検出している。サブトレンチの下端より約50cmの位置からは、傾斜が緩やかになっている。ハードローム層(p層)を検出した地点と対応するが、この緩斜面は約50cmにわたりテラス状に内堀方向に続いている。旧表土付近に段はなく、堀内に傾斜が続き、ハードローム層に至ってテラス状の構造をもつ。27-2T、27-3Tで検出した平坦面と同様のものである。この堀内の平坦面以下は昭和43年度の整備の際に掘削され、内堀埋土も含めて墳裾は失われている。

墳丘面への堆積層は墳丘盛土の崩落層が主であり、遺物も少量である。17層、18層は、墳裾付近の幅が狭いテラス状の構造への古墳築造後の初期の堆積層である。円筒埴輪片の他、須恵器の甕の破片が出土している。円筒埴輪はいずれも小破片であり、大きな個体でも突帯が扁平なE137(図76)程度である。S100(図87)は須恵器の甕の口縁部破片であり、初期の墳丘崩落土である17層から、トレンチ北壁に刺さった状態で出土した。須恵器はI区の墳丘造出しからの出土が大半を占めるが、甕という器種に限ればI区以外からも出土している。

⑦25-2T (図31～33)

25-2Tは平成24年度に埋め立てた前方部前面主軸上に設定したトレンチである。25-1Tと同様、墳裾の残存状況の確認及び墳丘盛土の状況の把握を目的として設定した。トレンチの幅は1m、長さは約25mである。墳丘盛土の単位を把握するために、トレンチの西壁に沿うようにサブトレンチを設定した。トレンチの面積は約25㎡である。墳裾の状況把握のため、現況の内堀内にもトレンチがかかるよう設定したが、現況の内堀内は湧水があり、土の堆積状況等の把握が困難であった。なお、対岸の中堤側には25-5Tを設定し調査を行っている。

1層は平成24年度の工事による埋立土である。II区の墳裾に設定した他のトレンチでは、昭和43年度の整備工事により墳裾が造成されている状況が確認可能であるが、本トレンチでは整備による造成土は確認されなかった。1層(埋立土)の直下では、水堀時に沈殿したヘドロ層を検出している。墳裾は削平されており、内堀の埋土も失われている。旧表土は18.3mで検出した。断面図中のs層がこれに相当する。旧表土以下も墳丘上部からの斜度を保っており、ハードローム層(z層)に達する地点で傾斜が緩やかになる。z層の上はソフトローム層のy層であり、z層の更に下のA層以

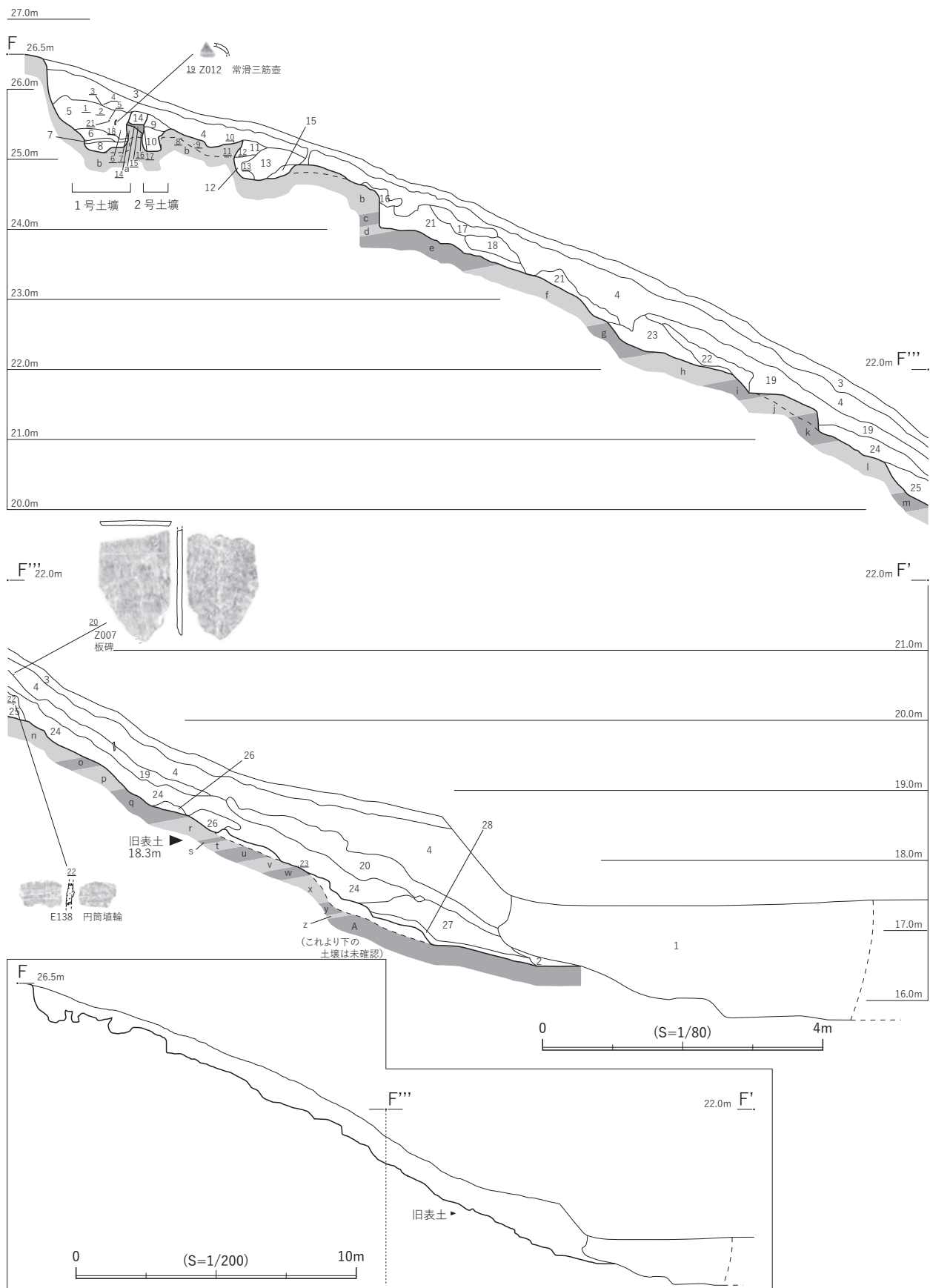


図 32 25-2T 断面図① (S=1/80)

25-2T 土層注記

- 1 平成 24 年度の内堀埋立工事の埋立土
- 2 昭和 43 年度の水濠工事によるヘドロ層
- 3 細砂 暗褐色 (10YR3/4) 現生草本の根と多量の腐植の入る表土 ソフトロームと細砂の層
- 4 シルト質細砂 褐色 (10YR4/4) 3 層よりソフトロームの割合高 現生草本の根と多量の腐植入る As-A バミス少量含む
- 5 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトロームブロック (径 20mm 以下) とシルトブロック (径 30mm 以下) 主体でハードロームブロック (径 10mm 以下) 少との混土
板碑・陶器片・円礫含む 骨片多く混じる
- 6 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック (径 30mm 以下) 主体でソフトロームブロック (径 20mm 以下) 少ハードロームブロック (径 20mm 以下) 少との混土
- 7 シルト質細砂 暗褐色 (10YR3/3) 多量の炭化物の混じる層 骨片少
- 8 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒主体でハードロームブロック (径 30mm 以下) 多とシルトブロック (径 30mm 以下) 少の混土
- 9 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) 5 層に似る 骨片を含まない
- 10 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトローム粒主体でハードロームブロック (径 20mm 以下) 少を含む埋土
- 11 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 20mm 以下) とソフトローム及びシルトの混土
- 12 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 20mm 以下) とソフトロームの混土
- 13 シルト質細砂 暗褐色 (10YR3/4) ソフトロームとシルトの混土 有機質 ハードロームブロック (径 10mm 以下) 少含 ※11～13 は倒木痕
- 14 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ソフトローム主体 シルトブロック (径 20mm 以下) 少含
- 15 シルト質細砂 暗褐色 (10YR3/3) 6 層に似る 骨片含まない
- 16 細砂質シルト 明黄褐色 (10YR6/8) 盛土中のハードロームブロックの崩落土
- 17 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 墳丘崩落土 ハードロームブロック (径 50mm 以下) とソフトロームブロック (径 30mm 以下) 主体 シルトブロック (径 30mm 以下) の混土 鉄斑含
- 18 シルト質細砂 褐色 (10YR4/4) ソフトローム主体 ハードロームブロック (径 20mm 以下) 多 ソフトロームブロック (径 20mm 以下) 多 シルトブロック (径 30mm 以下) 多 腐植少
- 19 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 中世以前の旧表土 上層との層理面に遺物含 ローム粒混る 現生草本の根が繁殖する限界深度の層
- 20 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 墳丘起源のソフトロームに腐植・細砂が混じる 遺物含む
- 21 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 50mm 以下) とソフトロームブロック (径 30mm 以下) 主体 シルトブロック (径 30mm 以下) の混土
- 22 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトローム及びシルト主体 ハードロームブロック (径 10mm 以下) 少 ソフトロームブロック (径 10mm 以下) 少
- 23 細砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック (径 10mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 50mm 以下) 少 ソフトロームブロック (径 30mm 以下) 少 腐植含む
- 24 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) とシルトブロック (径 30mm 以下) 主体の墳丘盛土崩落土
- 25 細砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルトブロック (径 50mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 10mm 以下) とソフトロームブロック (径 30mm 以下) の混土
- 26 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) 主体 シルトブロック (径 30mm 以下) 含む
- 27 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) とシルトブロック (径 30mm 以下) の混土 ハードロームブロック (50mm 以下) 多
- 28 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ソフトローム主体 ハードロームブロック (径 10～30mm) 多 周堀壁崩落土に砂が混じった層

- a 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 30mm 以下) とシルトブロック (径 40mm 以下) の混土 ローム粒多 マンガン結核少
- b 細砂質シルト 褐色 (10YR4/6) ハードロームブロック (径 20mm 以下) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) の混土 シルトブロック (径 10mm 以下) 少
- c シルト質細砂 褐色 (10YR4/6) ハードロームブロック (径 10mm 以下) ソフトロームブロック (径 30mm 以下) シルトブロック (径 20mm 以下) の混土
- d シルト質細砂 暗褐色 (10YR3/4) シルトブロック (径 50mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 5mm 以下) 少
- e 細砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルトブロック (径 100mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 10mm 以下) 少 ソフトロームブロック (径 20mm 以下) 多 マンガン結核多
- f 細砂質シルト 褐色 (10YR4/6) ハードロームブロック (径 100mm 以下) 主体 ソフトロームブロック (径 20mm 以下) 少 シルトブロック (径 10mm 以下) 少
- g 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) シルトブロック (径 100mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 5mm 以下) 少 マンガン結核多
- h 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) シルトブロック (径 20mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 5mm 以下) 少 ソフトロームブロック (径 10mm 以下) 多
- i シルト質細砂 褐色 (10YR4/6) ハードロームブロック (径 20mm 以下) とソフトロームブロック (径 30mm 以下) の混土 シルトブロック (径 5mm 以下) 少
- j 細砂質シルト 褐色 (10YR4/6) シルトブロック (径 30mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 10mm 以下) 多 ソフトロームブロック (径 10mm 以下) 多 マンガン結核少
- k 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) シルトブロック主体 ローム粒多
- l シルト 黒褐色 (10YR3/2) シルトブロックのみに由る盛土
- m 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 10mm 以下) 少 ソフトロームブロック (径 20mm 以下) 多 シルトブロック (径 20mm 以下) 多
- n シルト質細砂 褐色 (10YR4/4) ソフトロームブロック (径 40mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 5mm 以下) 少 シルトブロック (径 5mm 以下) 少
- o シルト質細砂 褐色 (10YR4/6) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) 主体 ハードロームブロック (径 20mm 以下) 少
- p 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) シルトブロック (径 20mm 以下) 主体 ソフトロームブロック (径 10mm 以下) 多
- q シルト質細砂 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 5mm 以下) 少 ソフトロームブロック (径 20mm 以下) 多 シルトブロック (径 20mm 以下) 多
- r 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 5mm 以下) 少 ソフトロームブロック (径 40mm 以下) 多 シルトブロック (径 30mm 以下) 多
- s 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) 古墳時代旧表土 マンガン結核少 鉄斑少 腐植少
- t 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) s 層に似るが白色粒少量混じる 古墳時代旧表土最上層か
- u 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) 弥生時代から古墳時代前期の堆積層 マンガン結核多 焼土少 炭化物少
- v シルト 暗褐色 (10YR3/3) 弥生時代から古墳時代前期の堆積層 白色粒多 炭化物少 腐植少
- w 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトローム粒多 マンガン結核少 鉄斑紋少 縄文時代中期の遺物包含層
- x 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) いわゆる漸移層
- y 細砂質シルト 黄褐色 (10YR5/8) いわゆるソフトロームに対応する層 水成因子の強い土壤に火山灰が混じり粘性土となったもの
- z 細砂 褐色 (10YR4/6) いわゆるハードローム対応層 水成堆積による層
- A 細砂 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 50mm 以下) を多く含む細砂層 直下に泥炭の混入層あり

25-2T 出土遺物

- | | |
|---------|----------------|
| 1 火葬人骨 | 12 火葬人骨 |
| 2 火葬人骨 | 13 火葬人骨 |
| 3 火葬人骨 | 14 火葬人骨 |
| 4 火葬人骨 | 15 火葬人骨 |
| 5 火葬人骨 | 16 火葬人骨 |
| 6 火葬人骨 | 17 火葬人骨 |
| 7 火葬人骨 | 18 火葬人骨 |
| 8 火葬人骨 | 19 常滑焼 (Z012) |
| 9 火葬人骨 | 20 板碑 (Z007) |
| 10 火葬人骨 | 21 円筒埴輪 |
| 11 火葬人骨 | 22 円筒埴輪 (E138) |
| | 23 縄文土器 (Z002) |

図 33 25-2T 断面図② (S=1/80)

下は滞水もあり調査が困難であったため確認できなかった。

旧表土上はローム粒子を多く含む墳丘盛土である。墳丘面は黄色系の層と黒色系の層が互層になっている。墳丘盛土面は攪乱等の影響で凹凸が激しく、q層やe層周辺に平坦面をもつほかは傾斜が一定ではない。墳丘上部は中世以降の造成のため崩落が特に激しい。墳丘盛土の表面は遺存しておらず、古墳の段築構造や埴輪列は失われている。墳丘盛土面への堆積は中世の土壌の埋土や盛土の崩落土が主体である。

現地形で、テラス面に見える傾斜変換線は、中世以降の造成に起因する。トレンチの上部は斜面が緩く平坦であり、中世に属すると見られる土壌が4基検出されている。残存状況は悪く、土壌の内外で攪乱も多く見られ、墳丘盛土を著しく改変している。これらの土壌や周辺からは多くの骨片と小石が出土しており、中世の陶器の小片も出土している。土壌からやや離れた4層中からは、標高20.7m付近から板碑（Z007、図96）が出土している。この板碑は基部が残っており、トレンチ上方の土壌に立っていたものが転落したと考えられる。1号土壌内からは細かな骨片とともに常滑焼の破片（Z012、図97）が出土している。土壌群の下部には1条の溝が等高線に沿うように走っており、中世墓地に関わる遺構の可能性がある。

人骨はいずれも火を受け白く変色しており、熱を受けたであろう痕跡から、これらの土壌は火葬墓である可能性が高い。部位同定が可能なほど遺存状態は良好でないが、長管骨が多数残存している。性別や年齢を判定できる部位は残存していない。骨片と共伴する小石については、表面に加工痕はなく中世墓に利用された可能性が高い。

⑧25-3T（図34～36）

25-3Tは平成24年度に埋め立てた前方部前面の過去の調査が及んでいない箇所に設定したトレンチである。対応する対岸の中堤側のトレンチは25-4Tである。トレンチの幅は1m、長さは約23.3mである。現況墳裾の上部に、長さ2m程度のサブトレを外側に拡張して調査を実施した。トレンチ内部にもサブトレンチを設定し調査を行った。トレンチの面積は約25.3㎡である。1層は平成24年度の整備工事による埋立土である。現況の内堀にあたる部分から湧水があり、1層（埋立土）より下、トレンチ下端部付近は調査を行えず、地山面の検出に至っていない。2層は昭和43年度の整備時の造成土であり、水位変動による崩落が墳丘に及んでいない点を確認された。断面図中のt層が旧表土に相当し、その標高は17.9mである。旧表土以下も墳丘盛土面から続く傾斜を保っており、ハードローム層（z層）に至って緩斜面となる。しかし墳裾は本トレンチからは検出されず、内堀覆土も整備時の掘削により既に失われている。t層直下のu層は灰黄褐色の層であり、含有物として白色粒子を含んでおり、調査担当者の観察によるとHr-FAの可能性が指摘されている。

旧表土より上はロームブロックやローム粒子を含む墳丘盛土であり、明るい黄色系の層と暗い黒色系の層とが互層を成している。墳丘上部を中心に崩落しており、築造時の墳丘面が遺存していない。25-2Tと同様、墳丘盛土は中世の土壌による改変が著しい。現況で墳丘のテラス面に見える傾斜変換線付近は、中世に墓地として平坦に造成されており、古墳の段築や埴輪列は検出されず不明である。中世以降に整地された後に土壌が掘り込まれ、埋葬、埋め立て、盛土が行われたと考えられる。中世以降の造成に関わる盛土や埋め戻し土を除けば、残存する墳丘面上は墳丘崩落土が主体

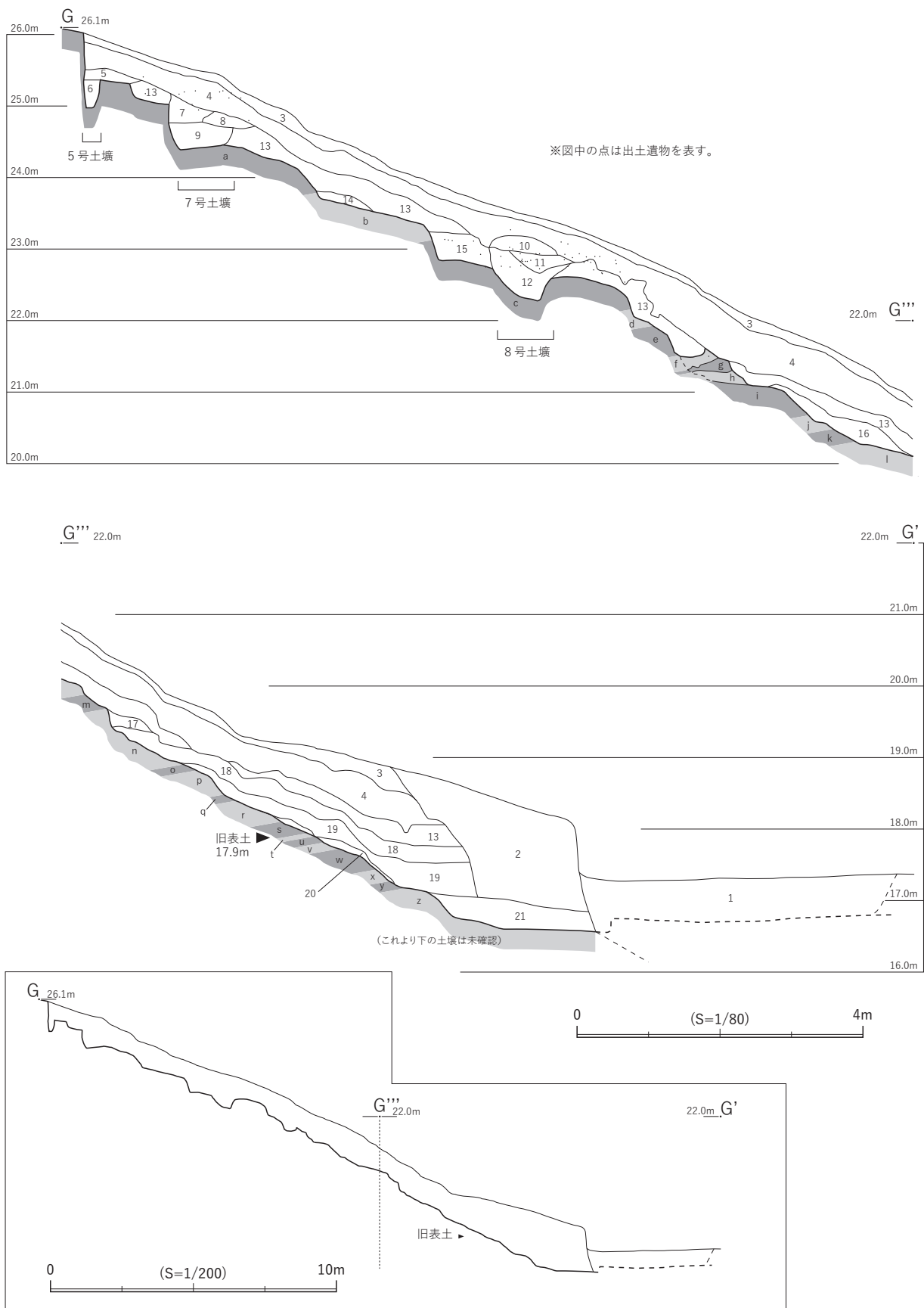


図 35 25-3T 断面図① (S=1/80)

25-3T 土層注記

- 1 平成 24 年度の内堀埋立工事の埋立土 産出地は利根川浚渫
- 2 昭和 43 年度の盛土層 填据保護のために盛ったハードロームブロック主体の公共残土 産出地は不明
- 3 細砂 暗褐色 (10YR3/4) 現生草本の根と多量の腐植の入る表土 ソフトロームと細砂の層
- 4 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) 現生草本の根と多量の腐植の入る表土 As-A バミス少 ソフトローム粒主体
- 5 細砂質シルト 褐色 (7.5YR4/4) ソフトロームブロック主体の填丘崩落土 現生草本の根と多量
- 6 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) 少 現生草本の根少 中世の堆積土壤
- 7 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトローム主体でシルトブロック (径 50mm 以下) との混土 現生草本の根少 腐植少 鉄斑多 中世の堆積土壤
- 8 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 20mm 以下) 少とソフトロームブロック (径 30mm 以下) 多とシルトブロック (径 50mm 以下) の混土 現生草本の根多 中世土壌埋戻し土
- 9 シルト質細砂 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 10mm 以下) 少とソフトロームブロック (径 30mm 以下) 多とシルトブロック (径 50mm 以下) の混土 現生草本の根多 中世土壌埋戻し土
- 10 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトロームとシルトブロックの混土にハードロームブロック (径 20mm 以下) が混じる 現生草本の根多 腐植少 中世土壌盛り土
- 11 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトロームとシルトの混土にハードロームブロック (径 20mm 以下) 少が混じる 人骨片多 現生草本の根やや多 腐植少 中世土壌盛り土
- 12 細砂質シルト 褐色 (10YR6/4) ソフトロームとシルトの混土にハードロームブロック (径 20mm 以下) が混じる 人骨粉少 現生草本の根少 腐植少 中世土壌埋戻し土
- 13 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) 中世以前の旧表土 上層との層理面に遺物含 ローム粒混る 現生草本の根が繁殖する限界深度の層 25-2T の 19 層に同じ
- 14 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 10mm 以下) 多とソフトロームブロック (径 30mm 以下) 多とシルトブロック (径 30mm 以下) 多の混土 腐植少
- 15 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 30mm 以下) とハードローム粒 (径 30mm 以下) 多との混土 人骨粉少 腐植少
- 16 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) とシルトブロックの混土 現生草本の根少 腐植少 25-2T の 24 層に同じ
- 17 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ソフトローム主体 ハードロームブロック (径 50mm 以下) とシルトブロックが混じる 腐植少
- 18 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトロームとシルト主体でハードロームブロック (径 30mm 以下) が混じる 腐植少
- 19 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) ハードロームブロック主体でソフトロームブロックが混じる
- 20 細砂質シルト 灰褐色 (7.5YR4/4) シルトブロック主体でハードロームブロック (径 30mm 以下) が少量混じる填丘崩落土
- 21 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ソフトローム主体 ハードロームブロック (径 10 ～ 30mm) 多 周堀壁崩落土に砂が混じった層 25-2T の 28 層に同じ

- a 細砂質シルト 褐色 (7.5YR4/6) ハードロームブロック (径 20mm 以下) 主体でソフトロームブロック (径 30mm 以下) と灰色シルトブロック (径 20mm 以下) の混土 腐植少 填丘盛土
- b 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 30mm 以下) とソフトロームブロック (径 20mm 以下) ・灰色シルトブロック (径 20mm 以下) の混土
- c 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 10mm 以下) と灰色シルトブロック (径 10mm 以下) の混ぜ土、ローム粒多
- d 細砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR4/3) ハードロームブロック (径 20mm 以下) とソフトロームブロック (径 10mm 以下) と灰色シルトブロック (径 20mm 以下) の混土
- e 細砂質シルト にぶい黄褐色 (10YR4/3) ハードロームブロック (径 20mm 以下) とソフトロームブロック (径 20mm 以下) と灰色シルトブロック (径 30mm 以下) の混土 マンガン結核多
- f 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 50mm 以下) 多とシルトブロック (径 30mm 以下) 少とソフトロームブロックの混土
- g 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトローム主体のシルトとの混土 腐植少
- h 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ソフトローム主体 多量のシルトブロックとの混土
- i 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) ソフトロームと灰色シルト主体でハードロームブロック (径 10mm 以下) とソフトロームブロック (径 10mm 以下) が混じる
- j 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) 灰色シルト主体でハードロームブロック (径 10mm 以下) とソフトロームブロック (径 10mm 以下) を少量含む
- k 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/4) ハードロームブロック (径 50mm 以下) とソフトロームブロック (径 60mm 以下) の混土 中世整地面
- l 細砂質シルト 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂と灰色シルトの混土 中世整地面
- m 細砂質シルト 明黄褐色 (10YR6/8) ハードローム主体 ソフトロームブロック (径 30mm 以下) と灰色シルトブロック (径 10mm 以下) の混土
- n 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 50mm 以下) とソフトロームブロック (径 20mm 以下) 主体で灰色シルトブロック (径 10mm 以下) が混じる 腐植多
- o 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 70mm 以下) 主体 ソフトロームブロック (径 30mm 以下) と灰色シルトブロック (径 40mm 以下) が混じる 腐植少
- p 細砂質シルト 暗褐色 (10YR3/3) ソフトロームブロック (径 50mm 以下) と灰色シルトロームブロック (径 50mm 以下) 主体の層 ハードローム粒 鉄斑少
- q シルト 暗褐色 (10YR3/4) 暗褐色シルト主体 ローム粒混じる 鉄斑多 マンガン結核少
- r シルト 暗褐色 (10YR3/4) 暗褐色シルト主体 鉄斑多 マンガン結核少
- s 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ハードロームブロック (径 20mm 以下) とソフトロームブロック (径 30mm 以下) と灰色シルトブロック (径 20mm 以下) の混土
- t 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ソフトロームブロック (径 20mm 以下) と灰色シルトブロック (径 40mm 以下) の混土 填丘築造時の整地層 (古墳時代表土層土壤による盛土)
- u シルト 灰黄褐色 (10YR4/2) 古墳時代旧表土 Hr-FA の可能性のある白色粒含む 鉄斑
- v シルト 灰黄褐色 (10YR4/2) 弥生時代から古墳時代前期頃の堆積土及び旧表土
- w シルト 灰褐色 (7.5YR4/2) ローム粒多 マンガン結核多 縄文時代の土壌 (縄文中期土器含む)
- x 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) いわゆる漸移層 ローム粒多 鉄斑少
- y 細砂質シルト 褐色 (10YR4/4) ソフトローム対応層
- z シルト質細砂 黄褐色 (10YR5/6) ハードローム対応層

25-3T 出土遺物

- | | | |
|----------------|--------------|---------|
| 1 円筒埴輪 | 18 石 | 36 火葬人骨 |
| 2 円筒埴輪 | 19 石 (骨壺蓋石か) | 37 火葬人骨 |
| 3 不明 | 20 石 | 38 火葬人骨 |
| 4 円筒埴輪 | 21 石 | 39 火葬人骨 |
| 5 円筒埴輪 | 22 板碑 (Z010) | 40 石 |
| 6 円筒埴輪 (E140) | 23 石 | 41 火葬人骨 |
| 7 円筒埴輪 (E143) | 24 板碑 (Z008) | 42 火葬人骨 |
| 8 欠 | 25 火葬人骨 | 43 火葬人骨 |
| 9 円筒埴輪 (E140) | 26 板碑 | 44 火葬人骨 |
| 10 円筒埴輪 | 27 火葬人骨 | 45 火葬人骨 |
| 11 円筒埴輪 (E142) | 28 火葬人骨 | 46 火葬人骨 |
| 12 円筒埴輪 | 29 火葬人骨 | 47 火葬人骨 |
| 13 円筒埴輪 | 30 火葬人骨 | 48 石 |
| 14 縄文土器 (Z001) | 31 火葬人骨 | 49 埴輪 |
| 15 石 | 32 火葬人骨 | 50 板碑 |
| 16 中世陶器 (Z013) | 33 火葬人骨 | 51 火葬人骨 |
| 17 鉄製品 | 34 火葬人骨 | |
| | 35 火葬人骨 | |

図 36 25-3T 断面図② (S=1/80)

である。

トレンチの上端部付近から3段にわたって平坦面が造成されている。25-3Tからは、整地された平坦面に4基の土壙を確認した。トレンチ上端にかかる位置に5号土壙と6号土壙、標高24.5mを底面とする7号土壙、標高22.4mを底面とする8号土壙が、それぞれ異なる平坦面に造られている。これらの土壙は隅丸の方形に近い平面プランをもつ。5号、6号土壙周辺では希薄であるが、7号、8号土壙周辺においては多くの遺物が出土した。7号土壙周辺では、板碑（Z008・Z010、図96）の破片や常滑焼の底部の破片（Z013、図97）が出土しているほか、骨片の散布も認められた。板碑はいずれも表土下直近から出土しているため、7号土壙または5号、6号土壙に立っていた板碑が転落した可能性が高い。裏面には加工痕が残っているが、裏面を天に向けた状態で出土した。8号土壙周辺からは多くの骨片や小石の他、円筒埴輪片も出土している。

人骨は火を受け白色に焼きしまっており、25-2Tで出土したものと同様高温で焼かれた火葬人骨であると考えられる。小片が多く長管骨が多数残存する他、椎骨を一点確認した。性別や年齢を判定できる部位は残存していない。

第3節 III 区の調査成果

①概要

III区は中堤の外側および内側に設定したトレンチをまとめた調査区である。25-4T、5T、6T、27-4T、5TがIII区に属する。各トレンチの距離は離れるが、中堤を対象としたトレンチであるため1つの調査区としてまとめた（図38）。

埼玉古墳群において、二子山古墳は唯一中堤盛土が残存するとされている。他の箇所は土地利用の関係もあり、中堤はローム面以下でしか遺存していない。昭和43年度の整備により中堤を盛り上げて復原したため一見するとわからないが、整備前には長さ約40m、幅約15mの盛土が存在していた（図37）。この中堤盛土は昭和13年度の指定の際に史跡範囲となっている箇所である。

既往の調査においても中堤を対象としたトレンチは多く、二子山古墳を全周するように配置されている。昭和42年度には、内堀、外堀両側の立ち上がり部が多く調査区で確認された。残念ながら隅角部に当たる箇所に調査区は設けられず、内堀、中堤の形状は十分な情報が不足したまま復原された。しかしながら、中堤立ち上がり部の事実誤認はなく、各トレンチでは正確な内堀と中堤、中堤と外堀の境界線を把握できている点は強調したい。

前方部前面側の内堀から中堤、外堀の検出を目的として行われた平成2年度の調査では、内堀中堤立ち上がり側は良好に遺存していたと記録され、主軸付近では特に明瞭な立ち上がり状況を示すと既報告書に記載されている。遺物は立ち上がり部に集中する分布を見せ、立ち上がり付近にロームブロックを多く含む内堀覆土が確認されている。この時の調査で検出された内堀の底面標高は16.6mであり、この数値は既往の調査や今回の調査結果とも矛盾しない。平成2年度の調査では前方部前面の中堤の立ち上がりラインが主軸の延長と直行しない点も言及され、稲荷山古墳と異なり内堀・中堤が不整な方形である点も指摘されている。

平成2年度には、唯一残存する中堤盛土に対して、2-A区を延長する形でトレンチを設定し調査が行われている。この調査で、十分にしまった水平堆積の中堤盛土と、その直下に旧表土層を確認した。旧表土の標高は17.6mであり、今回の調査で確認した墳丘盛土下の標高と比較し

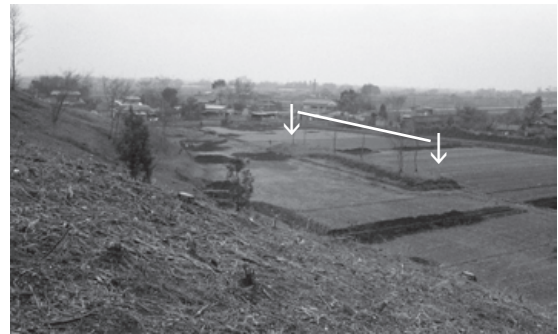


図37 残存する中堤盛土（昭和42年度調査時）

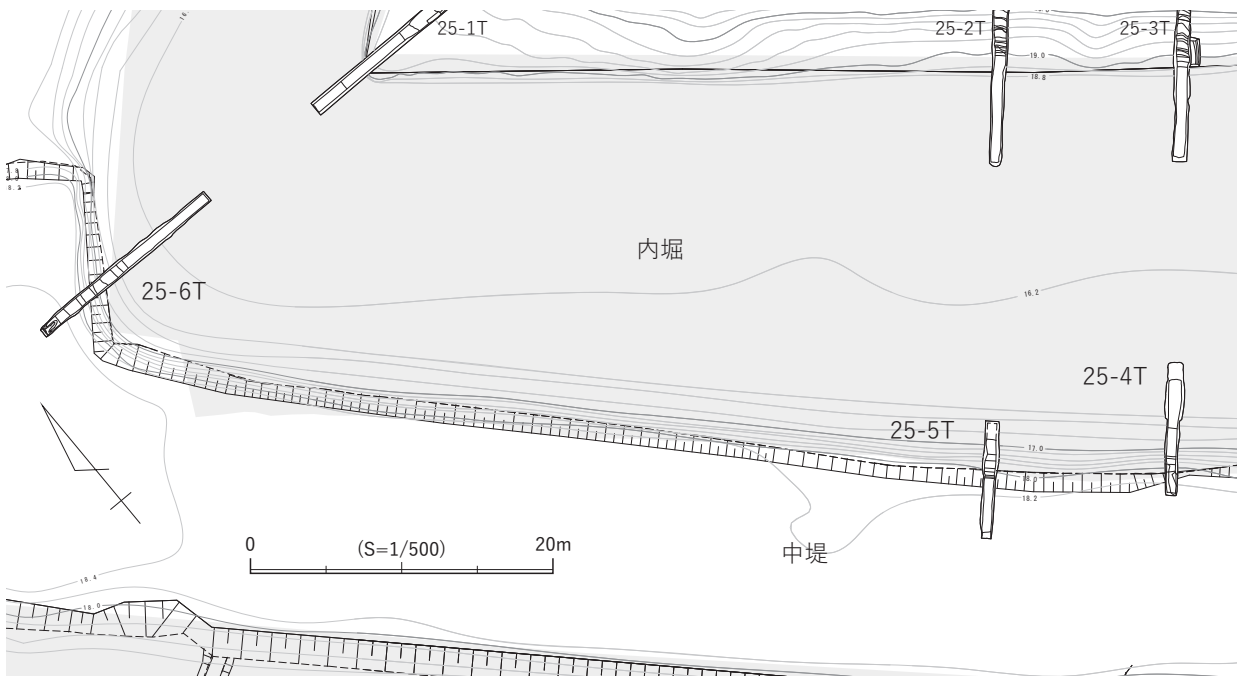
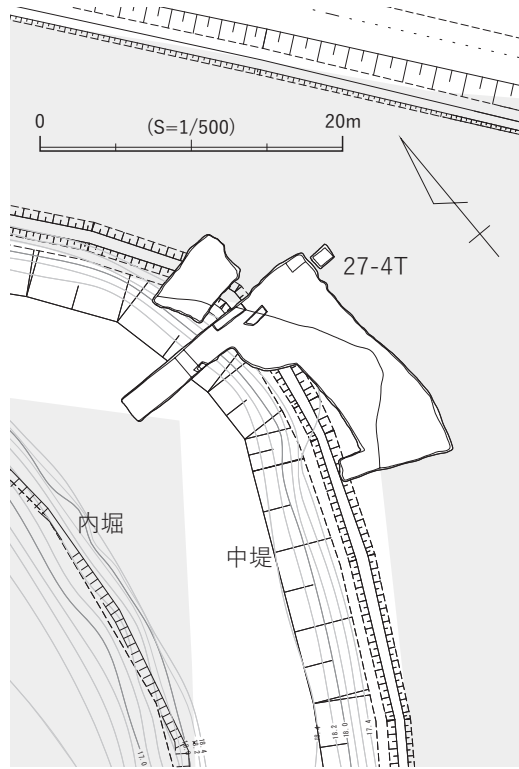
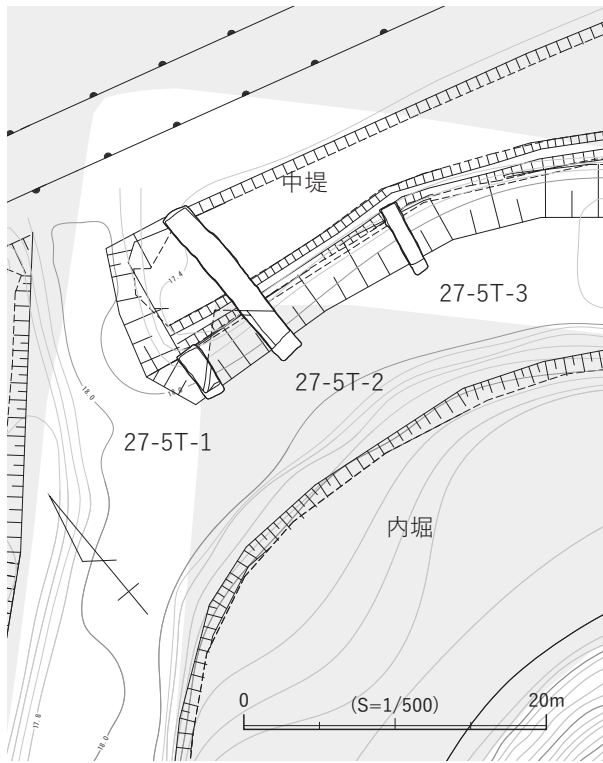


图 38 III 区平面图

ても違和感はない。盛土上面の高さが18.6mであるため、最低でも1m程度の高さがあったとみられる。

上記の発掘調査成果を踏まえ、墳丘北側の中堤隅角部及び前方部前面側の中堤の状況を把握するために平成25・27年度に発掘調査を行った。その結果、後円部側では、内堀、中堤が現在整備された姿と大きく異なり、明確な隅角部をもつことが明らかになり、中堤の立ち上がりを検出するなど、新たな知見が得られた。また、内堀覆土、底面の存在を確認し、完全には堀底が失われていない点、その標高が概ね16.5mである点を確認した。一方前方部側では、内堀の法尻は確認できず、内堀の底面が失われている状況を把握した。中堤の検出面は地山に達しており盛土は削平され残存していないものの、前方部（墳丘側）のトレンチで認められたテラス状の構造をもつ点を確認した。

②27-4T（図39）

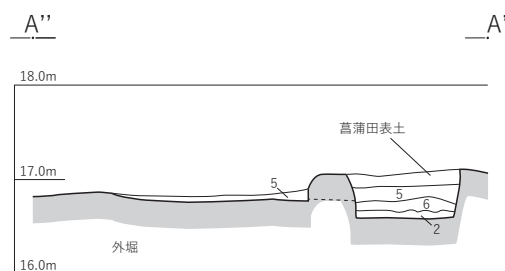
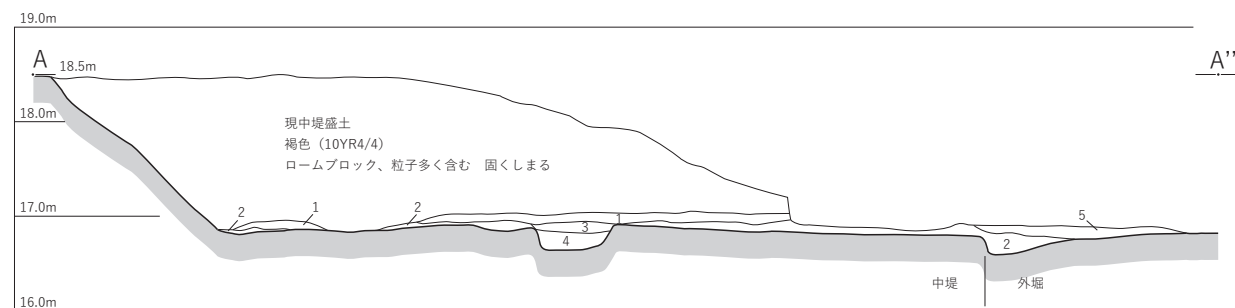
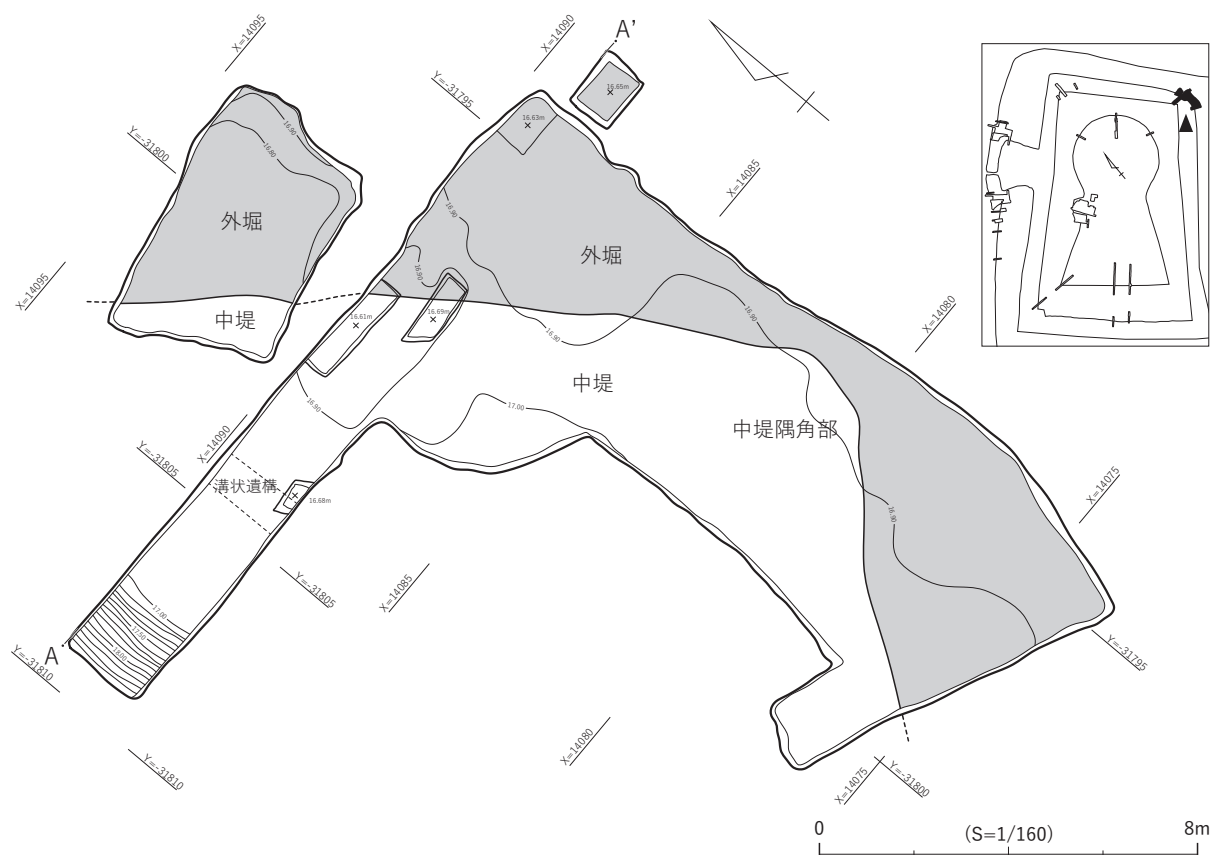
中堤外側の北東隅角部の検出を目的に設定した調査区である。図39には、トレンチ全体の平面図（S=1/160）と北壁の断面図（S=1/80）を示した。東西軸上に設定した16m×2mのトレンチを南側に大きく拡張しており、調査区全体の平面形はコの字形を呈する。北側と南側に拡張区を設定している。面積は広く、拡張区を合わせると123㎡である。昭和42年度の調査の際に設定された42-39Tと一部重複している。42-39Tは、後円部東側の外堀の検出を目的としたもので、調査により外堀の外側、中堤側の立ち上がりを検出している。

二子山古墳の中堤は昭和43年度の整備の際、後円部側の隅角が丸みをもった釣鐘型に整備されている。現在中堤は園路として整備されており、県道側から古墳群の北側を巡る際のアクセスにも利用されている。この形は内堀の形状と合わせて整備されたものと考えられる。昭和42年度の発掘調査は狭い範囲で行われたもので、現在の視点からも内堀や中堤、外堀の平面形態を確定する根拠としては弱いと言わざるを得ない。既往の調査では後円部側の内堀、中堤の隅角部は発掘で確認されておらず、整備の際には多分に推定が含まれていたと考えられる。

27-4Tは、こうした状況を踏まえ、整備された現況の中堤から外堀にかけての部分に設定したトレンチである。現況の中堤盛土部分は固くしまった造成土が厚く堆積していたが、現況の外堀にあたる範囲は埋土が非常に薄く、10～20cmほどで遺構面に達した。過去の整備時の土の掘削や、外堀部分は水田や菖蒲田として使用されていた影響も考えられる。トレンチの中堤側は壁を立てず、斜面として残した。

トレンチでは中堤と外堀の境界をプランで確認しており、隅角部も検出した。断面図上では、現況での中堤の裾部よりも約2m外側の位置である。中堤と外堀の境界にはわずかな段差があり中堤の最下部のみ残存している状況である。二子山古墳においては、前方部の西側に一部が残る他は、中堤盛土は完全に失われており、墳丘周辺の開発や整備により、盛土以下もほとんど失われているようである。この状況は過去の航空写真からも観察できる。この外堀の範囲は昭和43年度の調査時に検出した結果（42-39T）と概ね一致する。既往の調査において中堤で確認された旧表土は標高約17.6mであり、さらに土を盛り上げることで中堤を形作ったと考えられる。27-4Tで確認された中堤面は16.9mであり、大きく削平されている。

中堤の残存ラインの隅角部は直角よりやや大きい角度を成している。隅角部が90°より大きい角



- 1 灰褐色 (7.5YR4/2) ローム粒子含む 旧水田面 (鉄分含有)
- 2 ソフトローム
- 3 にぶい黄褐色 (10YR3/4) 現中堤下溝覆土 2層ブロック含む 固くしまる
- 4 暗褐色 (10YR3/3) 現中堤下溝覆土 2層ブロック、黒色土ブロック含む
- 5 暗褐色 (7.5YR3/3) 外堀覆土 褐色粒子若干含む しまりあり
- 6 黒褐色 (7.5YR3/2) 外堀覆土 ソフトロームブロック、褐色粒子含む 固くしまる 埴輪片混じる

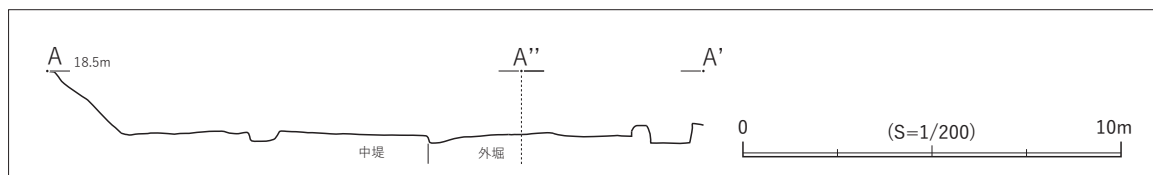


図 39 27-4T 平面図 (S=1/160) ・断面図 (S=1/80)

度をもつことから、27-5Tや過去の調査で検出されたラインと合わせると、二子山古墳の中堤、内堀は整った長方形ではなく、後円部側辺が短く前方部側辺が長い台形に近い平面形態をもっている。

現況の中堤盛土下からは南北方向に直線的に走る溝が1本検出された。溝の幅は約90cmで、暗褐色の4層とにぶい黄褐色の3層が順に堆積している。各層ともにロームブロックが混じっており、しまりは比較的良好。埴輪等古墳時代の遺物は出土しない。上層に昭和43年度の造成土が厚く堆積していることから、整備以前に掘られた溝であると考えられるが性格は不明である。

断面図中の5層、6層は外堀覆土である。5層は褐色粒子を含みしまりのある暗褐色の層で、6層は黒褐色でソフトロームブロックを含み、非常に固くしまっている。6層はトレンチ東側の拡張区の断面図から認められるのみであるが、この6層からは埴輪片が出土している。

出土遺物は少なく、いずれも小破片である。円筒埴輪はE149～151（図77）、形象埴輪は家形埴輪の一部の可能性のあるK036（図81）が出土している。

③27-5T（図40・41）

昭和43年度の整備で中堤の北西隅が丸い形に復原されているが、昭和49年度に発掘された49-12Tでは、復原された位置とは異なる地点で中堤と外堀の境界が検出されたことから、中堤の形状について正確に把握する必要があった。内堀の北側隅角部の検出を目的として設定したトレンチである。27-5Tと呼称するが、3本の独立するトレンチであるため、便宜上西から27-5T-1、27-5T-2、27-5T-3と枝番を付けて記録した。各トレンチはともに内堀の検出を目的としており、現況の中堤にかかる位置に設定した。北側の中堤隅角部は現状緩やかなカーブを描くように整備されているが、トレンチは中堤の斜面に対し直交するように設定した。図40にトレンチ全体の平面図（S=1/80）を、図41に各トレンチの断面図（S=1/80）を示した。3本ともに長方形平面であり、27-5T-1は1.5m×4m、27-5T-2は2m×12m、27-5T-3は1m×5mで、総面積は約35㎡である。昭和49年度の49-11Tが近接し、27-5T-1、27-5T-2と一部重なっている。

現況の整備された位置から見ると中堤の外側から外堀にかけて設定したトレンチであるが、調査の結果、中堤の内堀側の立ち上がりが検出された。27-5T-1の東壁の断面図では、整備された造成土が認められるが、旧水田の堆積土の下より内堀覆土が検出されている。本来の中堤の上部は削平されており、内堀との比高はわずか30cm程度である。内堀の底面の標高は16.5mである。27-5T-2でも内堀と中堤を検出した。内堀底面は削平されず残存しており、底面は27-5T-1と同様の標高である。中堤盛土は完全に失われており、内堀との標高差は約20cmである。内堀底面は平坦であるが、墳丘側に向かって緩やかに傾斜をもち深くなる。覆土にはロームブロックを多く含んでおり、固くしまっている。27-5T-3からは堀の境界は検出されず、削平された中堤の基底面付近を検出している。トレンチ底面の標高は16.8～16.9mである。過去の整備で造成された盛土が厚く堆積している。

27-5T-1で検出した内堀のラインは南西-北東に傾いており、27-5T-2で検出した内堀と中堤の境界は南東-北西に傾く。内堀のラインの延長上は両トレンチの間でほぼ直角に交差する。現況整備された中堤の外側に、本来の内堀の隅角が存在している。27-4Tの成果と合わせれば、二子山古墳の内堀は角をもった長方形の平面形を有していたことがわかる。

出土した遺物は少量であり、内堀覆土中からの出土は小破片のみである。形象埴輪は馬形埴輪の

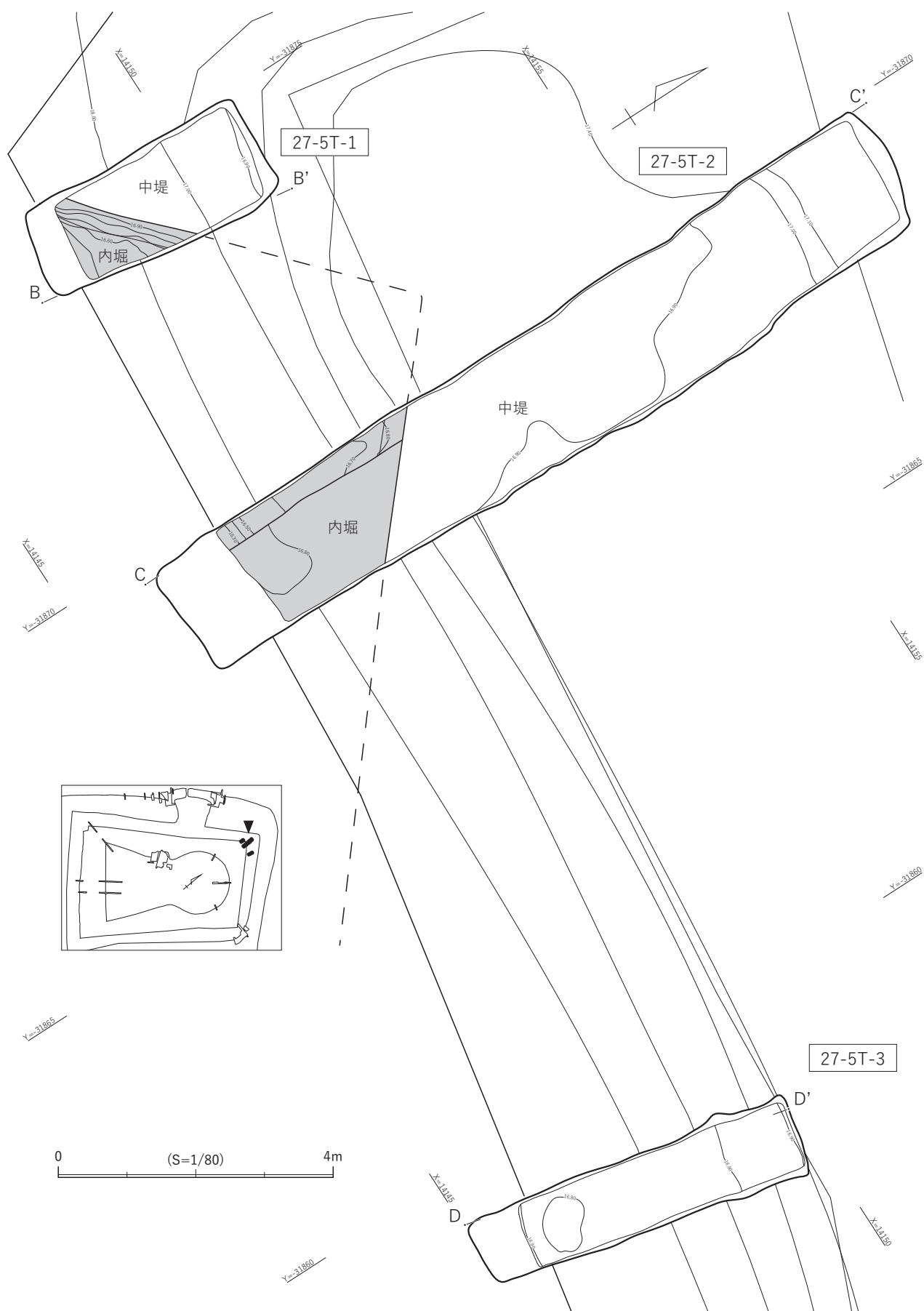


图 40 27-5T 平面图 (S=1/80)

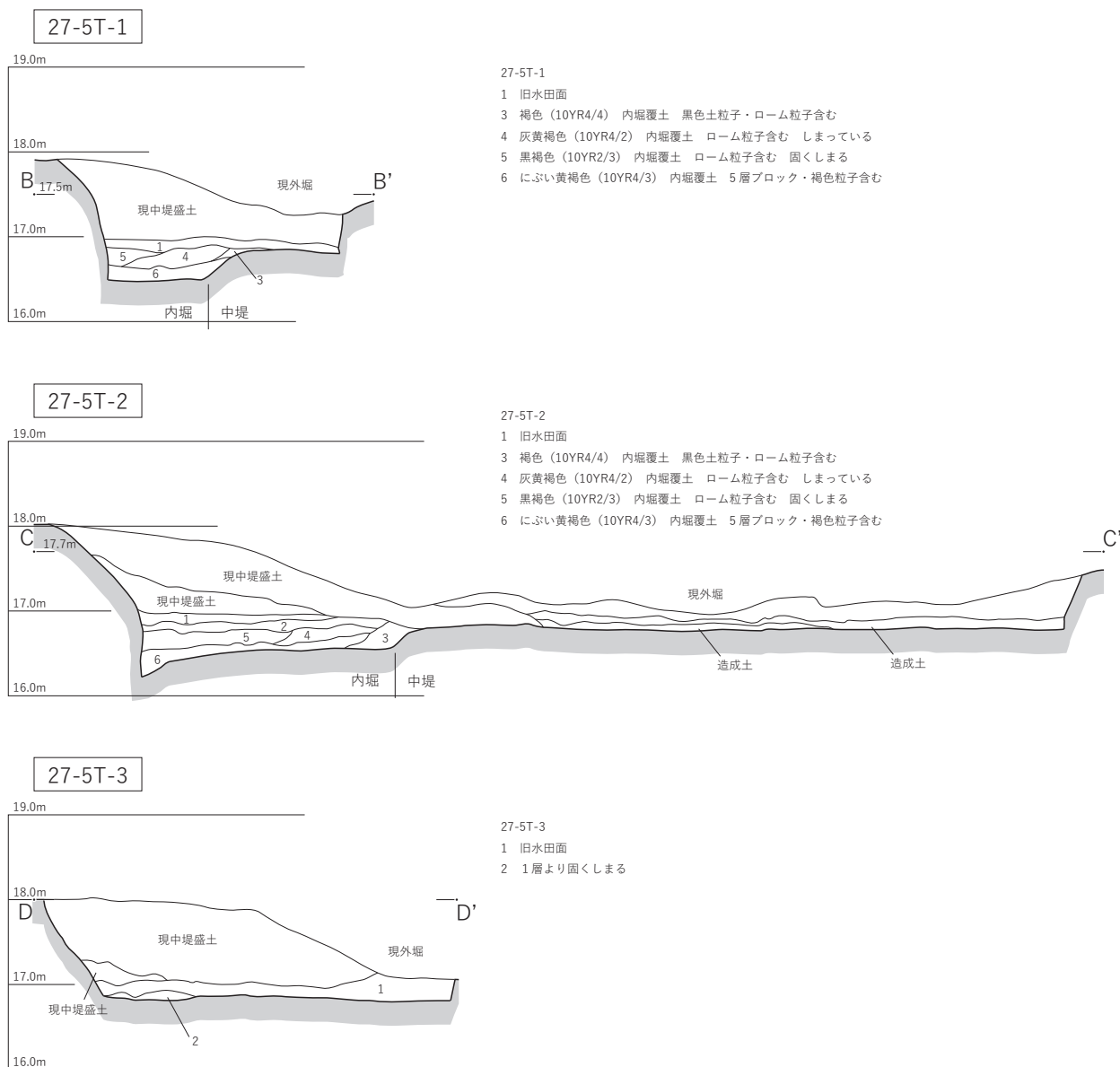


図 41 27-5T 断面図 (S=1/80)

破片 (K021、図80) が 1 点見つかったのみである。

④25-4T (図42)

25-4Tは、中堤の内堀側裾部の崩落状況の把握と内堀覆土の残存状況の確認のために設定したトレンチである。墳丘側 (II区) の25-3Tを中堤に延長した位置にあたる。長さ8.8m、幅約1mの長方形で、面積は約9㎡を測る。図42に平面図とトレンチ東壁の断面図 (S=1/80) を示した。ただし、トレンチの内堀側 (墳丘側) では、地下水が湧出し調査区内が水没してしまった。また、前年度に埋立工事を実施した範囲を掘削しており、崩落の危険性も考えられたため調査を行えなかった。結果的に情報の取得、計測が可能であったのはトレンチ全体の中堤側半分程度となった。後述する

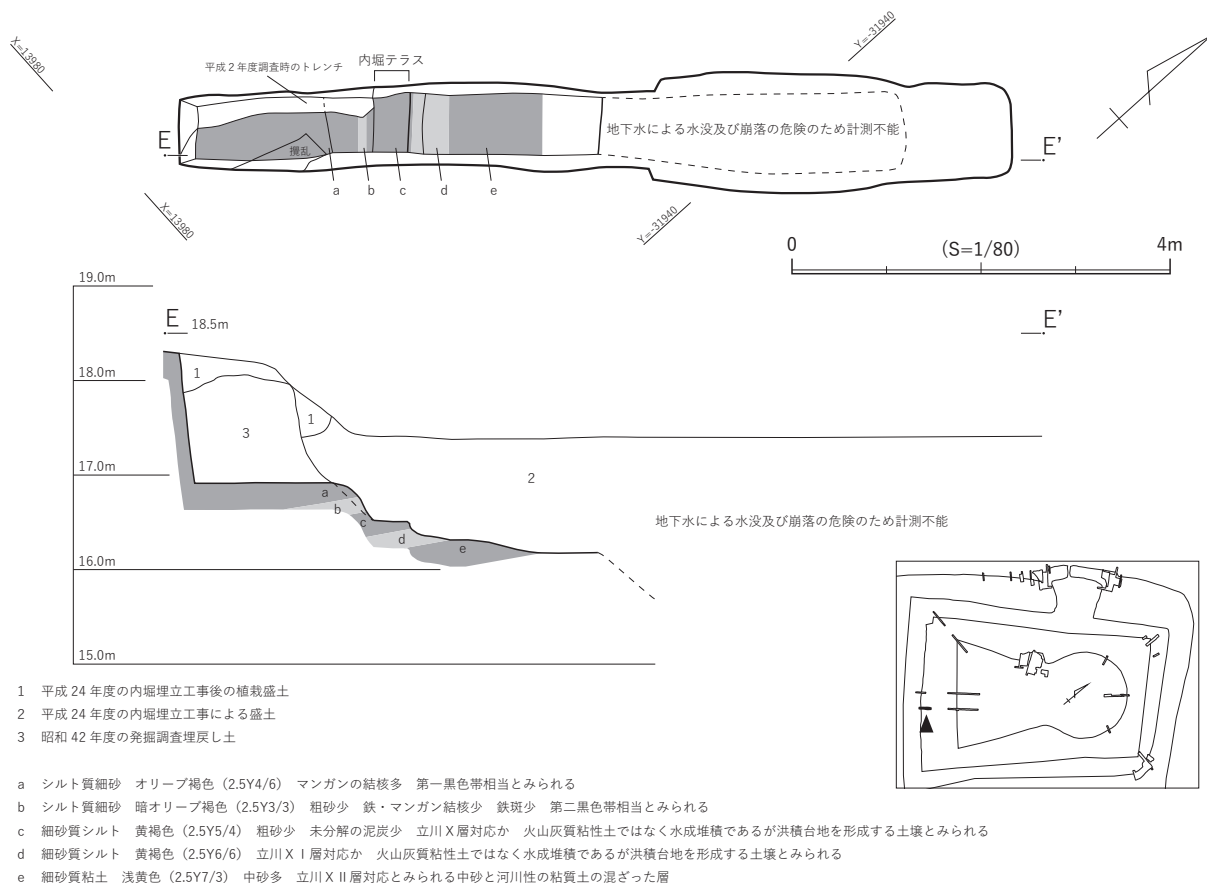


図 42 25-4T 平面図・断面図 (S=1/80)

25-5T、6Tも状況としては同様である。平成2年度に調査が行われた2-C区と南西側の一部が重複している。

中堤側のトレンチにおいても、ハードローム対応層に緩斜面をもつことが確認された。ただし、この緩斜面の直上に平成24年度の内堀埋立土が存在するため、古墳時代当時の構造か否かは現時点で不明である。緩斜面以下の内堀側の中堤立ち上がり部や内堀の覆土は、昭和43年度整備時に失われていたようである。中堤の表面は、過去の調査時に古墳時代の旧表土以下に削平されており、中堤盛土は発掘調査で確認できなかった。

内堀の埋土は確認されず、トレンチ内で確認された底面の標高は16.2mであり、これは後円部側で確認された内堀底面(16.5m)より低く、前方部側の内堀は底面から削平されている可能性が高い。出土遺物は確認されなかった。

⑤25-5T (図43)

25-5Tは、中堤の内堀側の崩落状況および内堀覆土の残存状況の把握のために設定したトレンチである。墳丘側(Ⅱ区)の25-2Tを中堤側に延長した位置に設定した。図43に平面図とトレンチ東壁の断面図(S=1/80)を示した。25-5Tは平成2年度に設定された調査区である2-B区と完全に重なっており、断面図上で確認できる堆積は平成2年度の埋め戻し土と平成24年度の内堀埋立工事

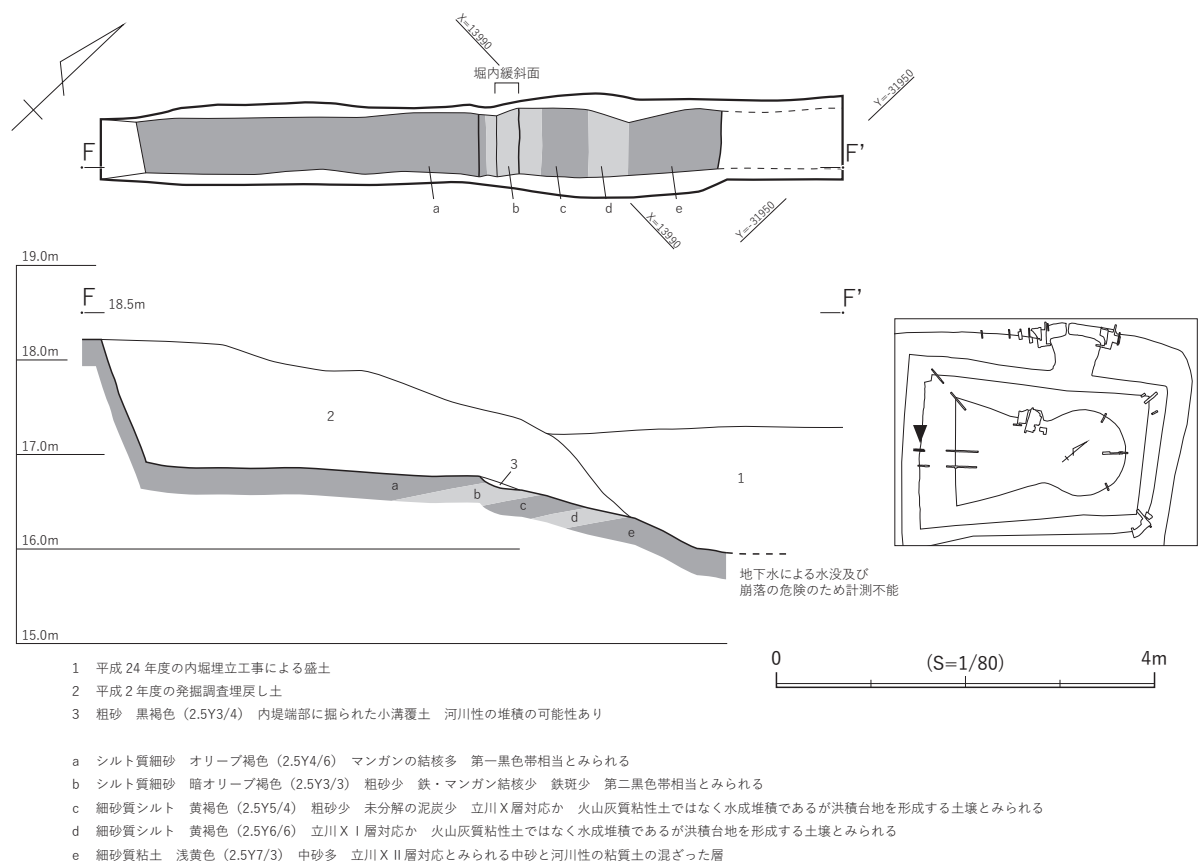


図 43 25-5T 平面図・断面図 (S=1/80)

による客土である。地山直上に埋め戻し土、埋立土が堆積しているため、昭和43年度時点で中堤、内堀は完全に削平されていたと考えられる。トレンチの長さは7.8m、幅は約1mと25-4Tより短く、面積は約8㎡である。現中堤造成土下は平坦であり、中堤盛土は完全に失われている。平坦な地形は内堀に向かい緩やかに傾斜し、トレンチ墳丘側の端は地下水による湧水及び崩落の危険性があったことから情報を得ることができなかった。

緩斜面の存在が記録されており、墳丘側のトレンチ (II区) に設けられるテラス状の構造と同様のものであると考えられる。標高はハードローム層に達する約17.0mであり、傾斜の幅も対岸のトレンチで確認された構造と近似する。古墳時代の土層の堆積が認められないため、築造当初の地形を保っている確証は今回の発掘では得られなかった。平成2年度に調査された2-B区で明確に内堀と中堤の境界が検出されているが、本調査では2-B区の確認面には達したものの中堤の立ち上がりは把握できなかった。

内堀の覆土は確認されず、墳丘側のトレンチ端で計測された内堀の標高は約16.0mである。内堀の底面の想定される標高は16.5～16.8mであり、築造時の内堀底面は残存していない。トレンチで掘削した土は全て造成土であり、遺物の出土も確認されていない。

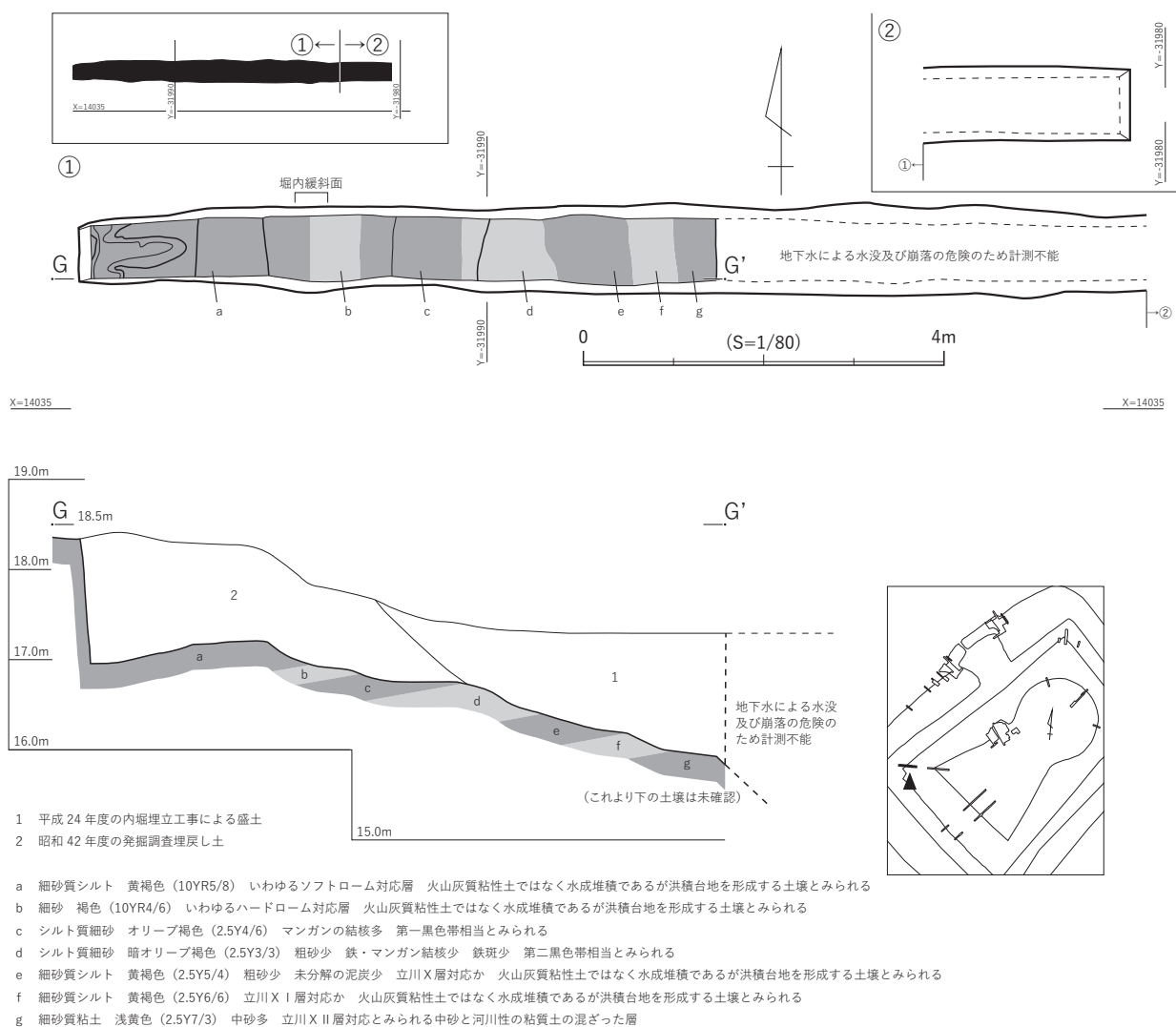


図 44 25-6T 平面図・断面図 (S=1/80)

⑥25-6T (図44)

25-6Tは、中堤の内堀側の崩落状況および内堀覆土の残存状況の把握のために設定したトレンチである。墳丘側 (II区) の25-1Tを中堤に延長した位置にあたる。図44に平面図とトレンチ南壁の断面図 (S=1/80) を示した。現況の中堤の隅角付近に設定しており、長さ14.2m、幅約1mで、面積は約14.2㎡である。昭和42年度に調査が行われた42-41Tと一部重複する。内堀側は崩落の危険が大きいため調査を行えず、断面等の観察も湧水の影響で困難であった。調査可能であったのは中堤側の約7mの範囲である。

墳丘裾部に見られる緩斜面がハードローム層 (b層) 付近で見られ、堀内緩斜面として記録されている。地山は平坦ではなく凹凸をもっており、内堀へ向かって徐々に低くなり、g層を境に湧水により確認できなくなっている。g層が確認できる標高は16.0mであり、深く掘削されている状況が認められる。内堀覆土も検出されておらず、出土遺物も確認されていない。

第4節 IV区の調査成果

①概要

IV区は、墳丘西側の外堀の状況の把握、および中堤造出し周囲の外堀の形状を明らかにする目的で10本のトレンチで設定した調査区である（図46）。平成28年度に調査した28-1T～8T、平成30年度に調査した30-1T、30-2TがIV区である。

埼玉古墳群の前方後円墳の中で、稲荷山古墳、二子山古墳、將軍山古墳、鉄砲山古墳において中堤造出しが確認されているが、二子山古墳以外の3古墳では外堀が中堤造出しに沿って屈曲し、巡ることが明らかになっている。現状では、二子山古墳の中堤造出しの平面は台形状に復原されているが、これは昭和42年度の調査成果を基にした整備によるものである。中堤造出しの輪郭の検出を目的として、北から、42-18Ta、42-18T北、42-28Ta、42-17Ta、42-28Ta、42-27Ta、42-9Ta、42-31T、42-30T、42-22T、42-21Tが設定され、調査の結果外側に向かって広がる台形状のプランをもつことが明らかになった。

これとは別に、昭和49年度に中堤造出しの前端部において発掘調査が実施され(49-造出T)、中堤造出しの前端部側の外堀が一部掘り残され、ブリッジ状に外堀外側と中堤造出しをつないでいることが判明した。このブリッジ状の構造は埼玉古墳群の他の前方後円墳でも認められ、稲荷山古墳、鉄砲山古墳の中堤造出しで同様の構造が見られる他、將軍山古墳の中堤造出しは外堀外側と前端部が接合しており、その南側近傍にもブリッジ状の構造が見つかった。また、瓦塚古墳の西側外堀の一部もブリッジ状に掘り残されている。中堤造出しから目を転じると、稲荷山古墳の外堀南西隅角部も外堀が一部途切れブリッジ状の構造をもつことが知られており、奥の山古墳の中堤南西隅



図45 中堤造出し形状（堀形状は一部推定）

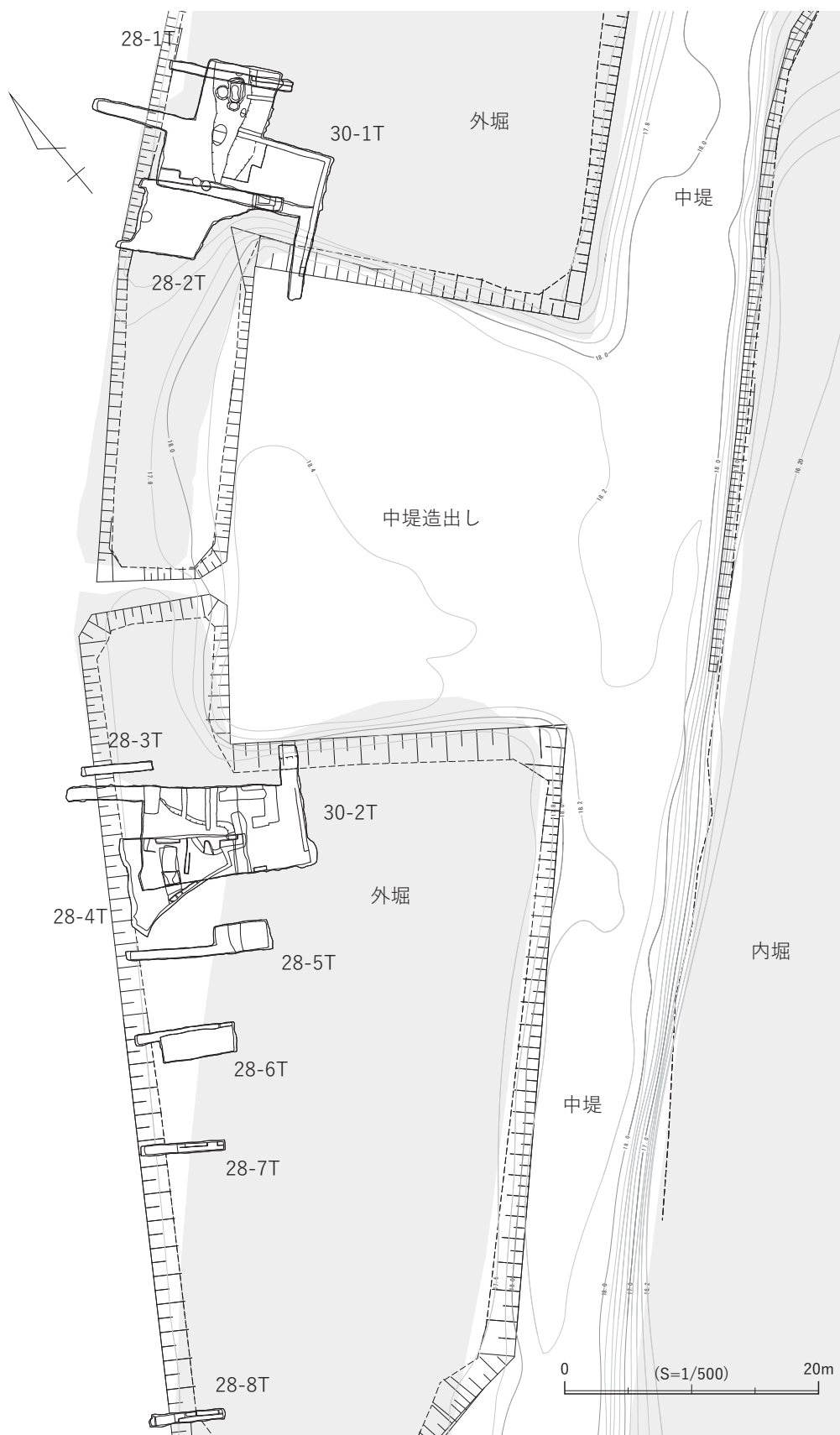


図 46 IV区平面図

も外側に突出する構造をもつことが平成30年度の調査により新たに明らかになっている。埼玉古墳群内の小円墳にも堀を一部掘り残したブリッジ状の構造が認められる。外堀と中堤とを接続する構造は、稲荷山古墳段階から鉄砲山古墳段階に至るまで確認されており、古墳築造の際に中堤や更に奥の墳丘へのアクセスが重要視されていたことを物語っている。現時点で二子山古墳において確認されている中堤への接続は、前述した中堤造出し外側の狭小なブリッジのみである。

外堀の外縁は、49-造出Tでも検出されているが、現在の直線的な形状に復原された際の根拠となったのは昭和42年度の調査結果である。昭和42年度には外堀外縁に、北から42-17Ta、42-9Ta、42-10Ta、42-2Tbのほか、小規模なトレンチが設定され、調査が行われた。調査トレンチは、中堤造出し周辺の外堀外側の立ち上がりの形状を正確に把握できるほどの面的な広がりをもたず、検出された立ち上がりラインを直線的につなぐようにして昭和43年度に復原整備が行われた。

このような状況を踏まえ、外堀外縁の本来の形状を確認するために、平成28年度と30年度に調査トレンチを設定した。その結果、外堀の外縁ラインを複数のトレンチで検出することができた。

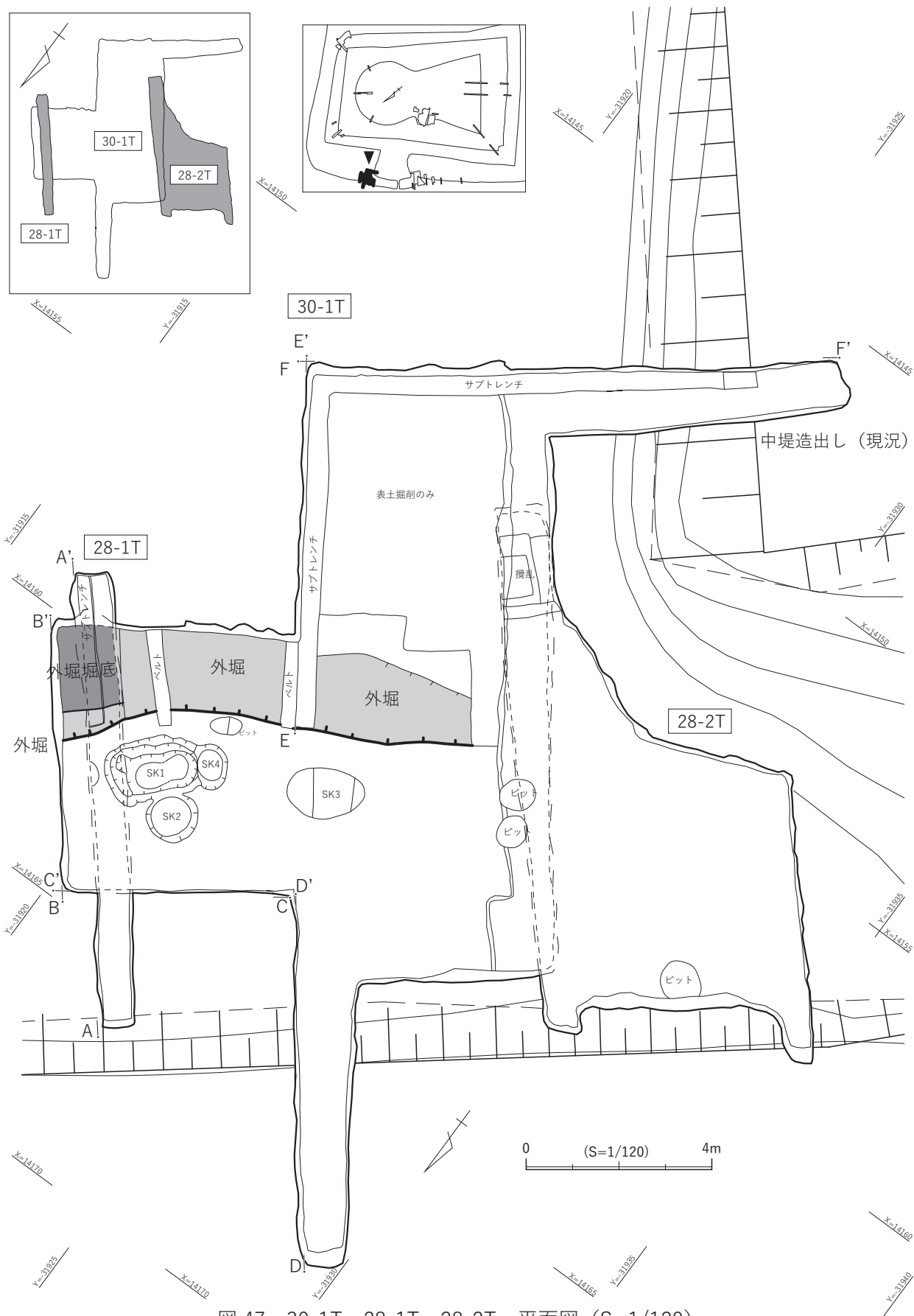
中堤造出し周辺のトレンチにおいても外堀外縁のラインを検出しており、中堤造出しに沿って屈曲する形状である点を確認した。その結果、二子山古墳も埼玉古墳群中の中堤造出しをもつ他の前方後円墳と同様の特徴を示すことが明らかになった。中堤造出し周辺トレンチからは多くの形象埴輪片が出土しており、この地点に集中した分布を示す。形象埴輪には、人物埴輪・家形埴輪・動物埴輪・器財埴輪が含まれ、中堤造出しにこれらが並んでいた可能性がある。ただし、いずれも小破片であり、全容が明らかになった個体はない。

また、外堀の覆土の残存状況も確認・記録した。外堀底面が残存しており、覆土中には白色の粘土層が認められた。この粘土層を含めた外堀覆土を中心に土壌サンプルを採取し、テフラ・土壌分析を実施したが覆土中からはHr-FA（榛名山ニツ岳渋川テフラ）由来の火山ガラスは検出されなかった。外堀底面の標高は、30-1Tで約16.3～5m、30-2Tで約16.3～5m、28-7Tで16.3m、28-8Tで16.4mである。内堀の底面の標高は約16.5mであるため、二子山古墳の内堀・外堀の深さは、概ね同じである点が明らかになった。

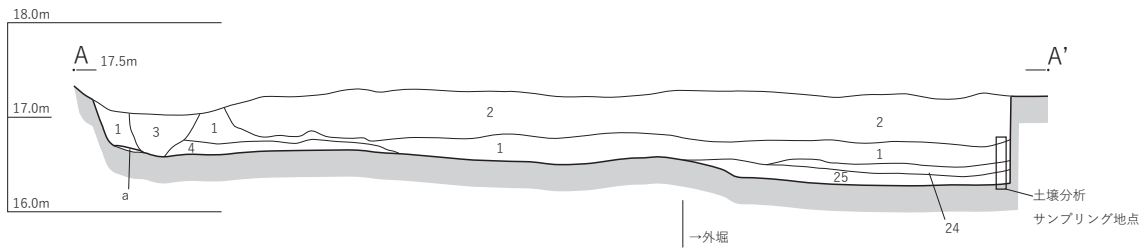
二子山古墳の外堀は土壌分析の結果から閉鎖系環境下にあったと考えられるが、白色系の粘土層は水成堆積物であると考えられ、ある程度の面的な広がりを持つことがわかっている。層位はHr-FAとAs-Bの間であり、この期間中には818（弘仁9）年地震など大きな震動が発生した可能性が高い。周辺の開発とともに、歴史的に記録された地震との関係も考慮しながら、遺構への堆積過程を復原していくこともまた重要である。白色系粘土層は上記の地震や洪水の結果とみることも可能である。

②30-1T・28-1T・28-2T（図47～49）

中堤造出しの北側に設定したトレンチで、平成28年度に調査した2本のトレンチと、平成30年度に設定した30-1Tが重なっている。いずれも外堀外縁部の中堤造出し北側における平面形態の把握を目的としたトレンチである。28-1Tは長さ約10m、幅0.6mの長方形で面積は6㎡、28-2Tは当初長方形であったが中堤造出し方向に拡大し、最終的に東側が一部突出した正方形のような形をしている。面積は約43.9㎡を測る。30-1Tは28-1Tと28-2Tの間に設定したトレンチである。現況の



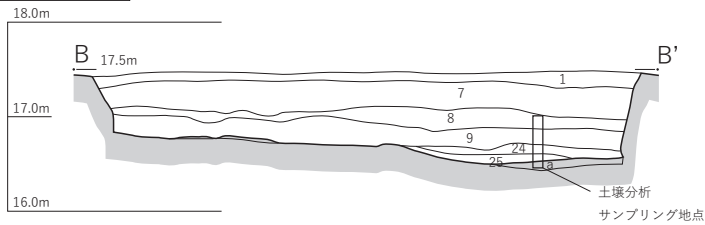
28-1T（北壁）



28-1T（北壁）

- 1 褐灰色（7.5YR4/1）しまり非常に強い 粘性弱 一部粘土を含む ローム粒子をまばらに含む 埴輪片含む 表土 + 造成土
- 2 灰褐色（10YR5/1）しまり非常に強い 粘性弱 鉄分を多く含む 表土 + 造成土
- 3 褐灰色（7.5YR4/1）しまり弱 粘性あり 鉄分をやや含む 表土 + 造成土
- 4 にぶい黄褐色（10YR4/3）しまり弱 粘性弱 ローム粒子を多量に含む
- 24 黒色粘土（5Y3/1）と灰白色粘土（7.5Y5/1）の混合層 しまり強 粘性非常に強い 鉄分をまばらに含む 28-7T と異なり、黒色粘土と灰白色粘土が各々層を成していない 両者は混じり合う
- 25 にぶい黄褐色（10YR5/4）しまり弱 粘性やや弱 ローム粒子をまばらに含む 埴輪片は含まず
- a 明褐色（7.5YR5/8）しまり強 粘性弱 ロームブロック主体 地山

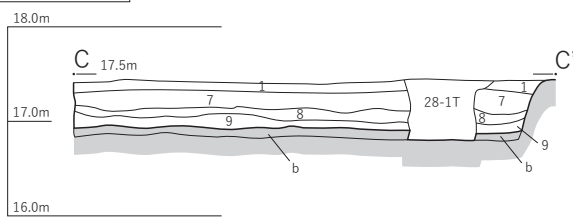
30-1T（北壁）



30-1T（北壁）

- 1 表土
- 7 灰黄褐色（10YR4/2）粘性なし しまり非常に強 根を多く含む
- 8 褐灰色（10YR4/1）粘性やや弱 しまり強 褐色の不純物を多く含む
- 9 黒褐色（10YR2/3）粘性やや弱 しまり強 ローム粒子を多く含む 白色粒子（径1mm以下）多く含む 埴輪片わずかに含む
- 24 黒褐色（2.5Y3/1）粘性非常に強 しまり強 黒色粘土、灰白色粘土、ローム粒子の混じる層 外堀覆土
- 25 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘性弱 しまり弱 ローム粒子を多く含む

30-1T（西壁）



30-1T（西壁）

- 1 表土
- 7 灰黄褐色（10YR4/2）粘性なし しまり非常に強 根を多く含む
- 8 褐灰色（10YR4/1）粘性やや弱 しまり強 褐色の不純物を多く含む
- 9 黒褐色（10YR2/3）粘性やや弱 しまり強 ローム粒子を多く含む 白色粒子（径1mm以下）多く含む 埴輪片わずかに含む
- b 褐色（10YR4/6）粘性弱 しまり強 一部褐色不純物含む

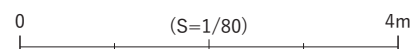
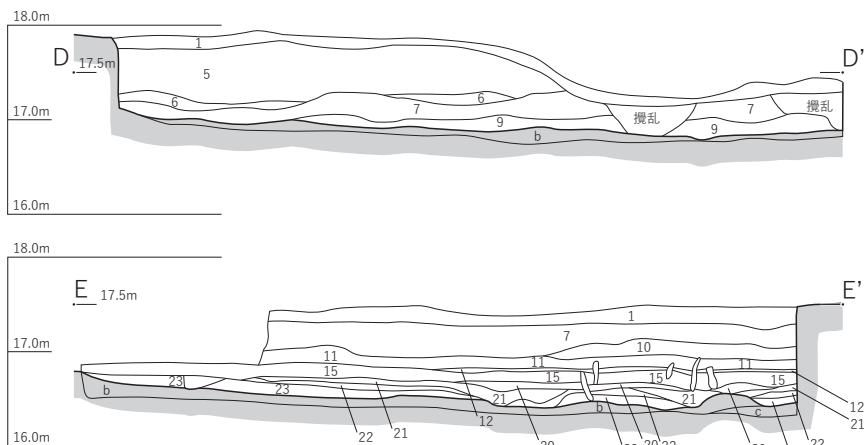


図 48 30-1T（北壁・西壁）・28-1T（北壁） 断面図（S=1/80）

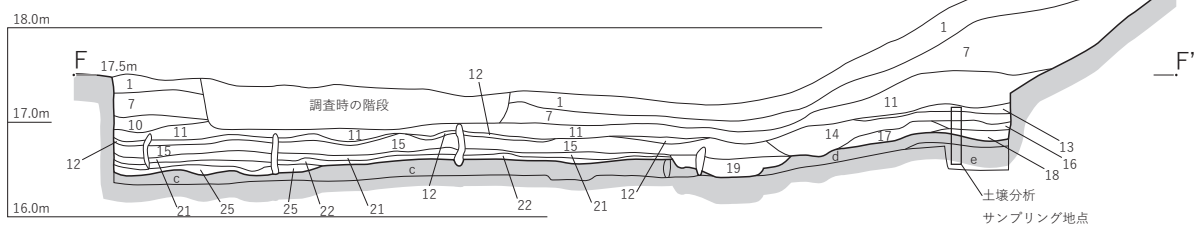
30-1T（中央壁）



30-1T（中央壁）

- 1 表土
- 5 明黄褐色（2.5Y6/8）粘性なし しまり強 軽石などの不純物多く含む 公園造成土
- 6 黄灰色（2.5Y5/1）粘性弱 しまり非常に強 白色粒子（径1mm）、褐色粒子、不純物多く含む 公園造成土
- 7 灰黄褐色（10YR4/2）粘性なし しまり非常に強 根を多く含む
- 9 黒褐色（10YR2/3）粘性やや弱 しまり強 ローム粒子を多く含む 白色粒子（径1mm以下）多く含む 埴輪片わずかに含む
- 10 褐灰色（10YR4/1）粘性強 しまり強 まだらに褐色化している 埴輪片をわずかに含む 灰色粘土層
- 11 明黄褐色（2.5Y6/8）粘性なし しまり強 5層に似る
- 12 褐灰色（10YR5/1）粘性非常に強 しまり強 ローム粒子含む 22層より薄い 灰白色粘土層
- 15 褐灰色（10YR4/1）粘性やや弱 しまり強 ローム粒子を多く含む 埴輪片を多く含む 白色粒子（径10mm以下）多く含む
- 21 黒褐色（2.5Y3/1）粘性非常に強 しまり強 ローム粒子含む 黒色粘土層
- 22 黄灰色（2.5Y6/1）粘性非常に強 しまり強 ローム粒子を含む 場所によってブロック状を呈する 灰白色粘土層
- 23 灰黄褐色（10YR4/2）粘性やや弱 しまり強 ローム粒子をやや含む 外堀覆土
- b 褐色（10YR4/6）粘性弱 しまり強 一部褐色不純物含む
- c 黒褐色（10YR3/1）粘性やや強 しまり強 ロームブロック（小）を多く含む 地山（黒）

30-1T（東壁）



30-1T（東壁）

- 1 表土
- 7 灰黄褐色（10YR4/2）粘性なし しまり非常に強 根を多く含む
- 10 褐灰色（10YR4/1）粘性強 しまり強 まだらに褐色化している 埴輪片をわずかに含む 灰色粘土層
- 11 明黄褐色（2.5Y6/8）粘性なし しまり強 2層に似る
- 12 褐灰色（10YR5/1）粘性非常に強 しまり強 ローム粒子含む 10層より薄い 灰白色粘土層
- 13 灰黄褐色（10YR4/2）粘性やや強 しまりやや強 褐色不純物多く含む
- 14 黒褐色（10YR3/2）粘性弱 しまりやや弱 ローム粒子わずかに含む 粒子粗い
- 15 褐灰色（10YR4/1）粘性やや弱 しまり強 ローム粒子を多く含む 埴輪片を多く含む 白色粒子（径10mm以下）多く含む
- 16 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘性やや弱 しまりやや強 ロームブロック多く含む
- 17 灰黄褐色（10YR4/2）粘性やや強 しまりやや強 黒色不純物多く含む 埴輪片わずかに含む
- 18 灰黄褐色（10YR4/2）粘性弱 しまり強 ロームブロックやや含む
- 19 黒褐色（10YR3/1）粘性強 しまりやや強 ローム粒子やや含む ベタベタした灰色の土 攪乱の覆土
- 21 黒褐色（2.5Y3/1）粘性非常に強 しまり強 ローム粒子含む 黒色粘土層
- 22 黄灰色（2.5Y6/1）粘性非常に強 しまり強 ローム粒子を含む 場所によってブロック状を呈する 灰白色粘土層
- 25 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘性弱 しまり弱 ローム粒子を多く含む 外堀覆土
- c 黒褐色（10YR3/1）粘性やや強 しまり強 ロームブロック（小）を多く含む 地山（黒）
- d 黄褐色（10YR5/6）と黒（10YR2/1）のまだら 粘性なし しまり非常に強 ロームブロックと黒色ブロックの混じり 地山（黄）に似る
- e 黒褐色（7.5YR2/2）粘性なし しまり非常に強 地山（黒）に似る

0 (S=1/80) 4m

図 49 30-1T（中央壁・東壁）断面図（S=1/80）

外堀、中堤造出し方向にそれぞれ細長くトレンチを延長している。30-1Tは面的に広い調査区で、面積は115.9㎡である。図47には3つのトレンチの平面図（S=1/120）を、図48・49（S=1/80）には断面図を提示した。

28-1T、30-1Tでは外堀の外側立ち上がりのラインを確認した。トレンチの東側隅では外堀の覆土及び堀底面を確認している。外堀の立ち上がりラインは中堤造出しに近接するにつれ浅くなり、輪郭が不明瞭になった。中堤造出しに沿う形で設定した28-2Tからは外堀の立ち上がりラインは検出されていない。28-2Tは大部分が過去の調査トレンチと重なっており、このことが外堀プランの確認を困難にしている可能性がある。外堀プランが中堤造出しに沿って屈曲するかは不明である。

28-1Tの外堀検出範囲にサブトレンチを設定し掘削した。サブトレンチを設定した28-1T北側壁面の断面図（S=1/80）を図48に示した（A-A'）。この地点で外堀堀底に当たる平坦面を検出した他、最深部でテフラ分析用の土壌サンプルを採取した。外堀の底面の標高は約16.3mである。外堀外側の地山の標高は約16.6～16.7mと高くなく、造成土が地山直上で見られることから削平を受けているとみられる。断面図中に見られる25層は外堀底面直上の覆土である。ローム粒子を含むしまりのやや弱い土で、埴輪は出土しない。24層は25層の上層であり黒色粘土と白色粘土が混じり合う。なお28-1Tでは30-1Tで全容が明らかになるSK1の縁辺を検出しており、埴輪や石が確認されている。

28-2Tでは外堀や中堤造出しに関連する構造は検出されなかった。トレンチの東端では方形の攪乱を検出した。平成30年度に実施した現地説明会において、近隣住民より中堤造出しの外側周辺に家屋があったという情報を得ており、この攪乱やSK1等の土坑群がこれに関係していた可能性も考えられる。

30-1Tの北壁（B-B'）、中央壁（E-E'）、東壁（F-F'）の断面図からは、外堀底面および覆土の堆積状況が観察可能である。外堀の底面の標高は約16.3～16.5mである。30-1Tの北壁では28-1Tと同様、粘土質の24層、外堀底面直上の覆土である25層が断面中で確認できる。中央壁（D-D'、E-E'）の断面図からは、外堀の外側にも造成が成されていることがわかる。5層や6層がこれに当たり、昭和43年度の整備工事の際の造成土と考えられる。23層は外堀底面直上の覆土で、22層はその上に堆積する灰白色の粘土層である。東壁（F-F'）の断面図からは、外堀覆土（25層）や灰白色粘土層（22層）が確認可能である。

22層の灰白色粘土層は中堤造出し南側のトレンチでも確認されており、面的に広い分布を示している。外堀覆土中の白色粘土層は、外堀の最下層付近に当たると考えられる。二子山古墳の外堀は土壌分析によると閉鎖的環境であったと想定されており、灰白色粘土層は古墳築造後の河川の氾濫や地震に起因する洪水等による滞水、沈殿の結果である可能性もある。30-1T中央壁、東壁の断面に見られる灰色粘土層（10層）、灰白色粘土層（12層）も均一な薄い堆積状況を示しているため、時期は不明であるが、古墳時代以降の洪水等による一時的な沈殿層であると考えられる。過去の報告書では白色粘土層直下を堀底と認識していたようであるが、本調査でその下のローム層が堀の底面であることが明らかになった。しかしながら外堀覆土の最下層からは埴輪が出土せず、埴輪の出土は灰白色粘土層の上からに限られる点は留意が必要である。

28-1Tと30-1Tでは、トレンチの北側壁面で検出された外堀覆土を含む堆積土を対象に地質調査・

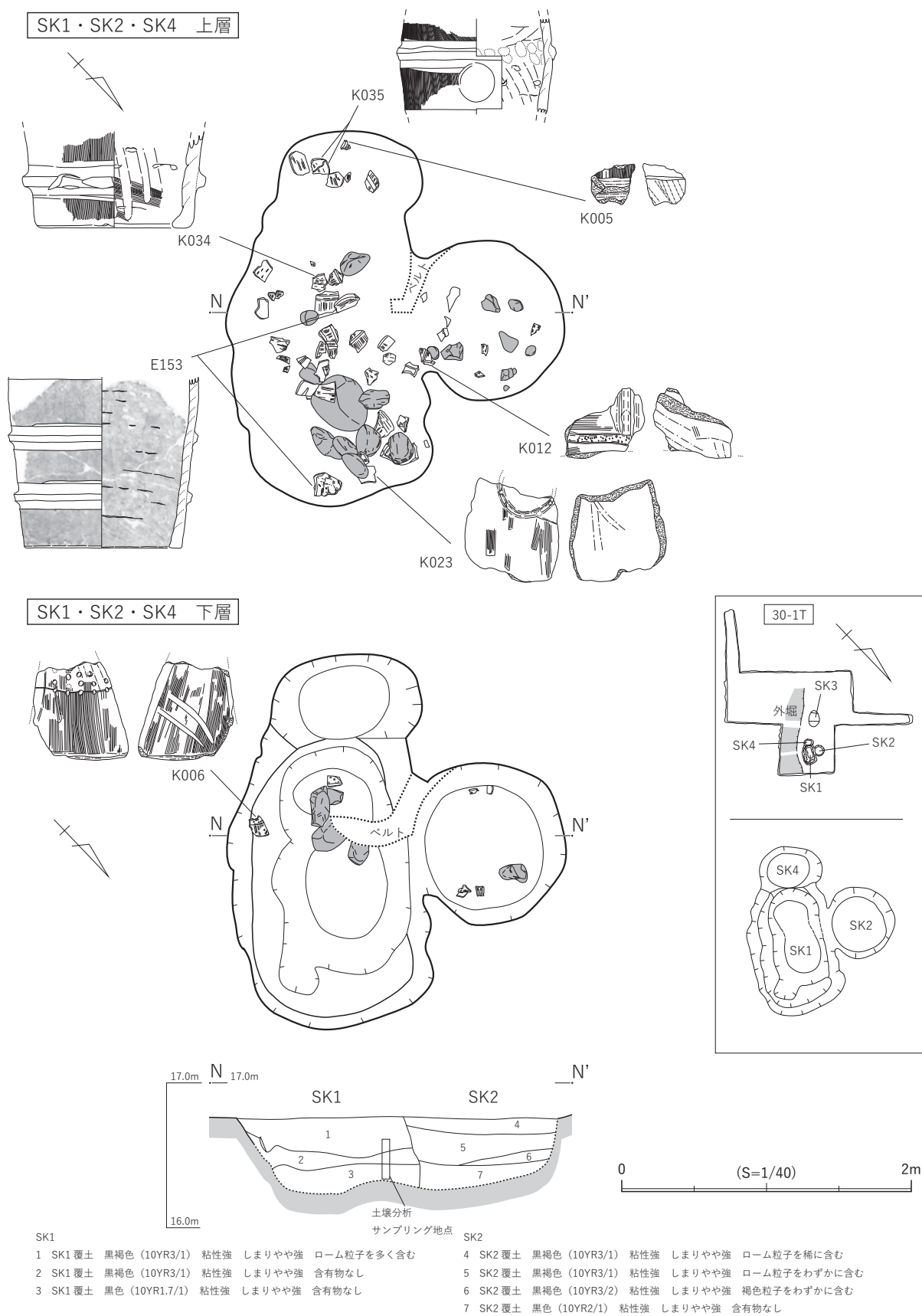


図 50 30-1T 土坑遺物出土状況 (S=1/40)

土壌分析を実施している。採取ポイントは近接しており、両者の分析結果は整合する。分析結果は第3章で改めて触れるが、現状では、外堀覆土基底部からHr-FA（榛名二ツ岳渋川テフラ）に由来する可能性のある角閃石などが含まれていることが確認されたが、Hr-FAに特徴的な火山ガラスは検出されなかった。30-1Tの北壁では外堀の底面下まで掘り下げ、分析を行っている。外堀の底面下に、降灰層が堆積している状況ではないものの、Hr-FAに由来する火山ガラスが



図 51 30-1T SK1 出土の角閃石安山岩

検出された。このことから、二子山古墳の外堀がHr-FA降下後に巡らされた可能性を指摘できる。

28-1T、30-1Tの調査では、外堀の更に外側に円形の土坑が数基検出された。土層の状況からこれらの土坑は近世以降に掘削されたものと考えるが、覆土には古墳時代の遺物が多く含まれるなど、その性格は不明である。古墳時代の遺構ではないが、便宜的にSK1～SK4とし、平面図・断面図（S=1/40）を記録した。図50に示すとおりであるが、上層の掘削の時点で石や埴輪など多くの遺物が出土したため、上層、下層に分け平面図を作成した。SK1、SK2、SK4は近接して掘削され、西側に隣接してSK3が存在する。このうちの1基、SK1からは多くの埴輪片とともに、加工された人頭大の角閃石安山岩が出土した（図51）。角閃石安山岩は、鉄砲山古墳の横穴式石室の側壁で使用されており、SK1から出土した角閃石安山岩も古墳に関する石材である可能性が考えられる。SK1の堆積土のテフラ分析からは、大型の角閃石安山岩の包含層中にAs-A（浅間A軽石）に由来する粒子が確認された。堆積土に天明3（1783）年の浅間山噴出物（As-A）を含むことから、近世の遺構と推察される。

SK1～SK4からは、加工痕をもつ角閃石安山岩の他に、多くの埴輪片の出土を確認した。これらの土坑から出土した遺物のうち本報告書に掲載したものは、K005（人物）、K006（鎮止め表現のある人物）、K012（馬形埴輪の鞍）、K023（馬形埴輪の円形杏葉）、K034、K035（器財の器台部）である（図79～81）。円筒埴輪では、底部の残るE153が径を推定可能であった（図77）。SK2はより真円に近い形状をしており、井戸の可能性はあるが詳細は不明である。SK2からは遺物の出土は少なかった。

③30-2T・28-3T・28-4T（図52～54）

中堤造出しの南側に設定したトレンチで、平成28年度に調査した28-4Tと、平成30年度に設定した30-1Tが重なっており、30-1Tの北側近傍に28-3Tが位置している。調査年度が異なっているが各トレンチの調査結果は矛盾しないため、合わせて図面を提示し、報告する。これらのトレンチは中堤造出し南側の外堀外縁の把握を目的とした。図52には3つのトレンチの平面図（S=1/100）を、図53・54（S=1/80）には断面図を提示した。28-3Tは幅約0.7m、長さ約5.5mの長方形で、現況の外堀立ち上がり部に直行するように設定している。面積は3.9㎡である。28-4Tは28-2Tと形状は似ており、30-2Tに大部分が重なっている。二等辺三角形のような形をしており、面積は約45.2㎡である。30-2Tは面的に広いトレンチである。長さ約14m、幅約8.2mの長方形を基本とし、西側の短

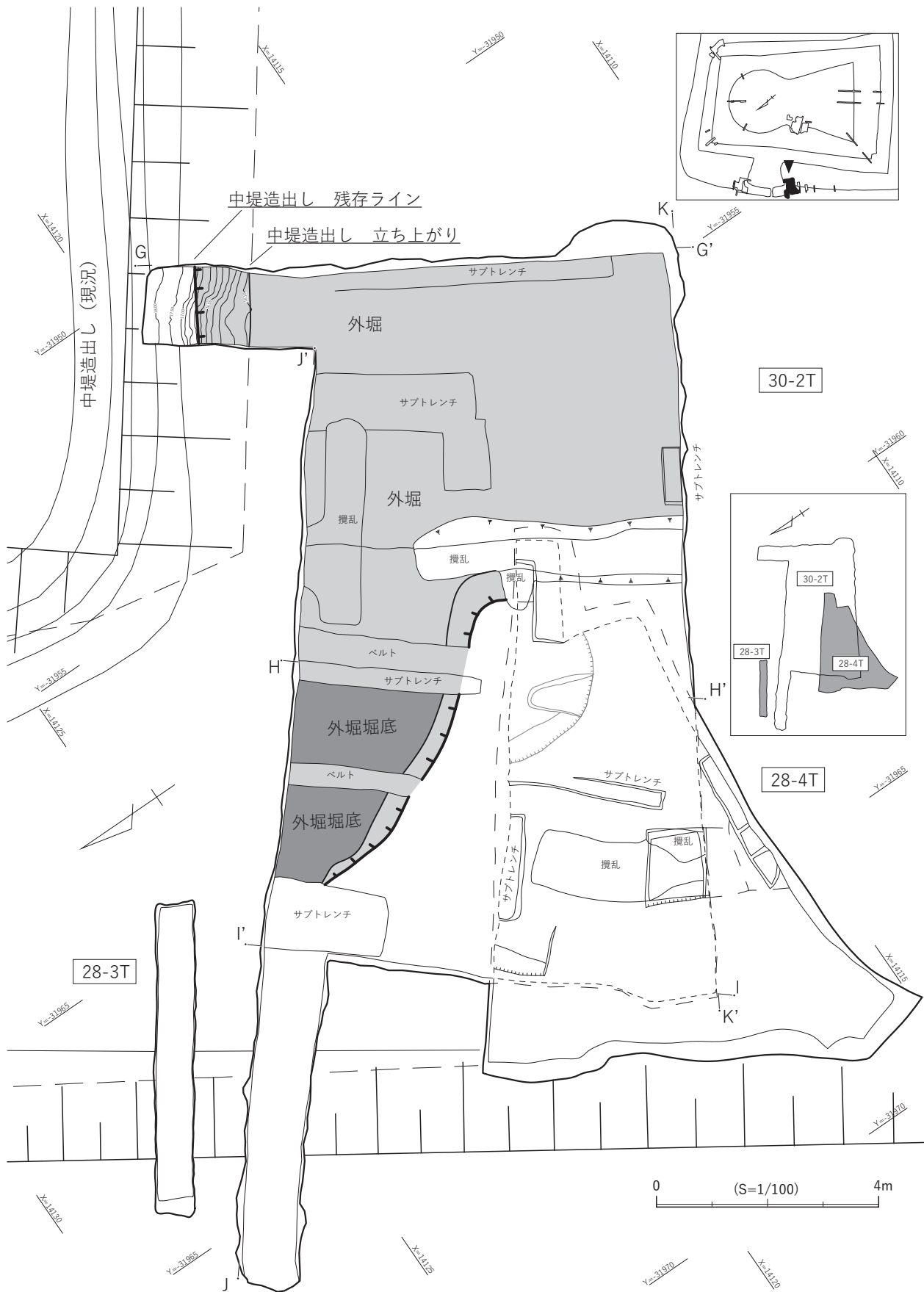
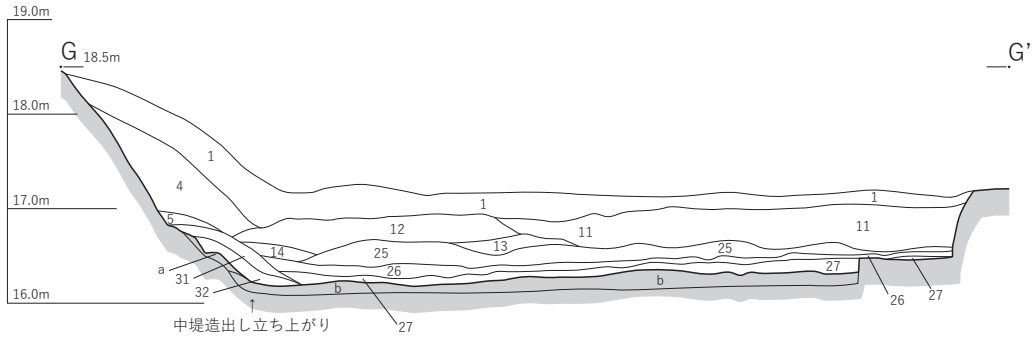


図 52 30-2T・28-3T・28-4T 平面図 (S=1/100)

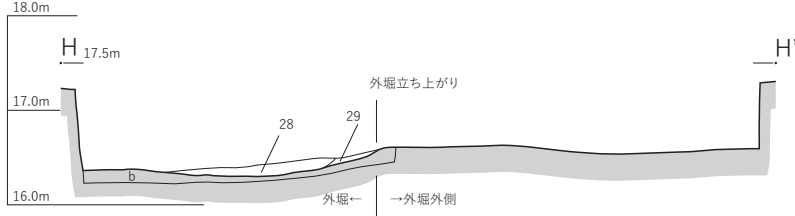
30-2T (東壁)



30-2T (東壁)

- 1 表土
 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘性弱 しまり強 軽石などの不純物多く含む 公園造成土
 5 褐灰色 (10YR5/1) 粘性なし しまり強 黒色不純物と赤褐色の不純物 (径 10mm) を多く含む 埴輪片わずかに含む 公園造成土
 11 暗褐色 (10YR3/3) 粘性弱 しまりやや強 ローム粒子、灰色粘土が混じる 根がやや多い 白色粒子 (径 1mm 以下) を多く含む 埴輪片わずかに含む 堆積層
 12 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや強 しまりやや強 ローム粒子多く含む 灰白色粘土をわずかに含む 埴輪片わずかに含む
 13 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性強 しまりやや強 12 層に似るが黒色粘土を含む
 14 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘性強 しまりやや強 灰色粘土、ローム粒子を多く含む
 25 黒色 (10YR2/1) 粘性強 しまり強 赤褐色の不純物多く含む 白色粒子 (径 1mm 以下) を多く含む 灰白色粘土をやや含む 黒色粘土層 埴輪片わずかに含む 浅間 B のブロックを含む
 26 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性非常に強 しまり強 赤褐色の不純物多く含む 灰白色粘土層
 27 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや強 しまりやや強
 31 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや強 しまりやや弱 黒色不純物、灰色粘土、ローム粒子含む 中堤造出し堆積層
 32 暗褐色 (10YR3/4) 粘性やや強 しまり弱 ロームブロック含む
 a 地山 (黄)
 b 地山 (黒)

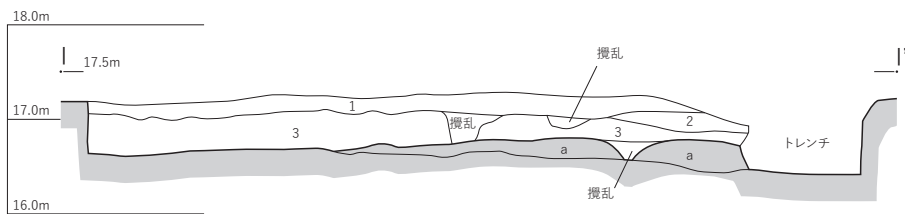
30-2T (サブトレ東壁)



30-2T (サブトレ東壁)

- 28 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘性やや強 しまりやや強 ロームブロック、灰色粘土多く含む 外堀覆土か
 29 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘性強 しまりやや強 ローム粒子やや含む 灰色粘土多く含む 外堀覆土か
 b 黒褐色 (10YR2/3) 粘性やや弱 しまり強 ローム粒子 (径 10mm) をまれに含む 地山 (黒)

30-2T (西壁)



30-2T (西壁)

- 1 表土 根を多く含む
 2 明黄褐色 (10YR6/8) 粘性なし しまり強 軽石などの不純物多く含む 公園造成土
 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘性なし しまり非常に強 根を多く含む 公園造成土
 a 黄褐色 (10YR5/6) 粘性弱 しまり強 ブロック含む 地山 (黄)

図 53 30-2T 断面図① (S=1/80)

辺から外堀外縁方向に、北側の長辺から現況中堤造出し方向にトレンチを延伸し調査を実施した。30-2Tの面積は117.7㎡である。

28-3T、28-4Tからは外堀に関連する遺構は検出されなかった。28-3Tは30-2Tで検出された外堀外縁部が検出されてもよい位置であったが、その痕跡はなかった。遺物の出土も非常に少ない。28-4Tも同様であり、外堀の痕跡は確認されなかった。トレンチ内部は攪乱が多く、微妙な凹凸はあるものの外堀覆土として明瞭に峻別はできなかった。

30-2Tでは外堀外縁のプランおよび外堀覆土、堀底面を検出した他、中堤造出しの立ち上がりラインを確認した。現況の中堤造出しにかかるように延伸した30-2Tの東壁断面図（G-G'）からは、中堤造出しの裾を検出している。31層、32層は中堤造出しの立ち上がり部分の初期堆積土であり、ロームブロック、ローム粒子を含んでいる。26層は他トレンチでも認められる灰白色の粘土層である。1層、4層は造成土および表土であり、昭和43年度整備時の復原整備によるものである。

30-2Tで検出した外堀外縁のプランは明瞭であり、現況の外堀外縁のラインとは一致していない。中堤造出しに沿うような形で円弧を描き、南側の端部付近、28-4Tと重なる地点付近でほぼ直角に屈曲する。屈曲地点以南の外縁ラインは、攪乱の影響もあり明瞭ではない。北側のトレンチ（30-1T・28-1T・28-2T）では屈曲は認められなかったが、外堀は中堤造出しに沿って屈曲するとみてよい。検出した外堀のプランにサブトレンチを設定し、外堀堀底まで掘削している。サブトレンチ東壁の断面図（H-H'）では、外堀覆土と外堀底面を検出している。南壁の断面図（K-K'）においても外堀覆土（30層）を確認した。30-2Tで検出した外堀底面の標高は、約16.3～5mである。外堀の外側は緩やかに傾斜しながら立ち上がり、外側は削平を受けているようで堀底面との標高差は少ない。二子山古墳の外堀の外側立ち上がりはなだらかな形状であるため、明確な堀としての把握が難しい。もっとも、埼玉古墳群全体を見ても外堀外側の立ち上がりは不明瞭であることが多く、外堀のなだらかな立ち上がりは古墳群の特徴であるという見方もできる。

外堀底面の上層には灰白色の粘土層（26層）の薄い堆積が認められる。粘性が強いこの層は、30-1Tや28-7T、28-8Tでも確認された層と同質で、古墳時代以降の河川の氾濫・洪水等による水成堆積物であると考えられる。この水成堆積物の層は、ある程度の広がりをもつと考えられ、その層位はHr-FAとAs-B（浅間Bテフラ、1108（弘仁9）年に浅間山から噴出）の間である。これより上の層でも同様の白色系の粘土層の堆積が認められ、二子山古墳の外堀は数次にわたり洪水による滞水があったと考えられる。

30-2Tにおいては、東壁、北側、中堤付近の3地点でサンプルを採取しており、テフラ・土壌分析を実施している。その結果、外堀基底部で降灰層準を示すような産状ではないものの、Hr-FAに由来する可能性が高い火山ガラスが検出された。その上位では東壁でAs-Bをブロック状に認めることができた。これらのことは、二子山古墳の外堀がHr-FAより上位であることを示唆しており、他箇所、他年度のテフラ分析の結果と整合する。

30-2Tからは円筒埴輪や形象埴輪の破片が出土した。形象埴輪としては、人物埴輪（K011）、馬形埴輪（K014、K019）、家形埴輪（K029）等が出土しており（図79～81）、30-1Tの出土傾向と合わせて、中堤造出しに形象埴輪が並んでいた状況が推定できる。

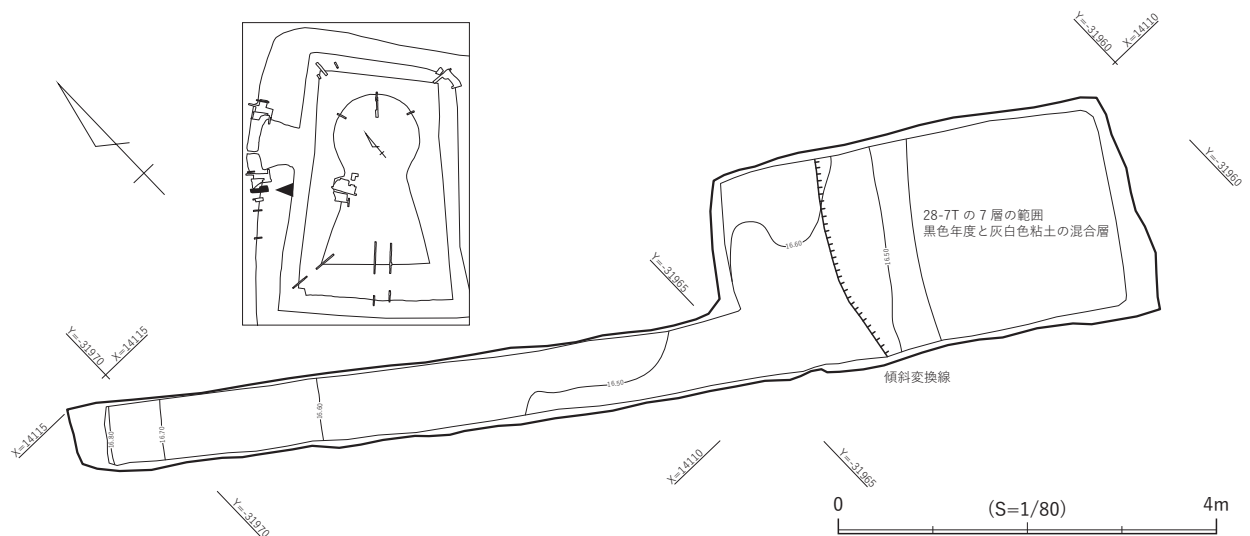


図 55 28-5T 平面図 (S=1/80)

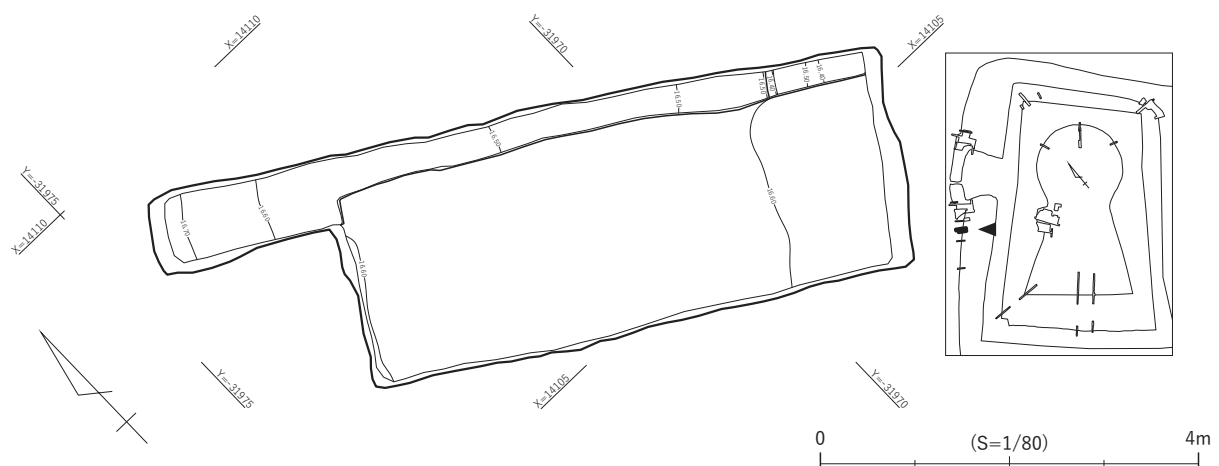


図 56 28-6T 平面図 (S=1/80)

④28-5T (図55)

28-5Tは、現況の外堀から外堀外縁にかけて設定した、東西に長軸をもったトレンチである。28-4Tの南側に隣接して設定しており、28-6Tの北側に位置する。28-4T以南の28-5T、6T、7Tは10m間隔で設定されている。外堀の外側立ち上がりとは外堀覆土の残存状況の把握を目的としている。長さは12m、幅は1m、トレンチ東側4.5mは拡幅しており幅約2.4mである。面積は約18.3㎡である。図55に平面図 (S=1/80) を示した。

28-5Tからは明瞭な外堀の外側立ち上がりラインは検出されなかった。トレンチ東側に傾斜変換線が認められ、東に向かって緩やかに標高を下げる。この傾斜変換線が外堀の外側ラインである可

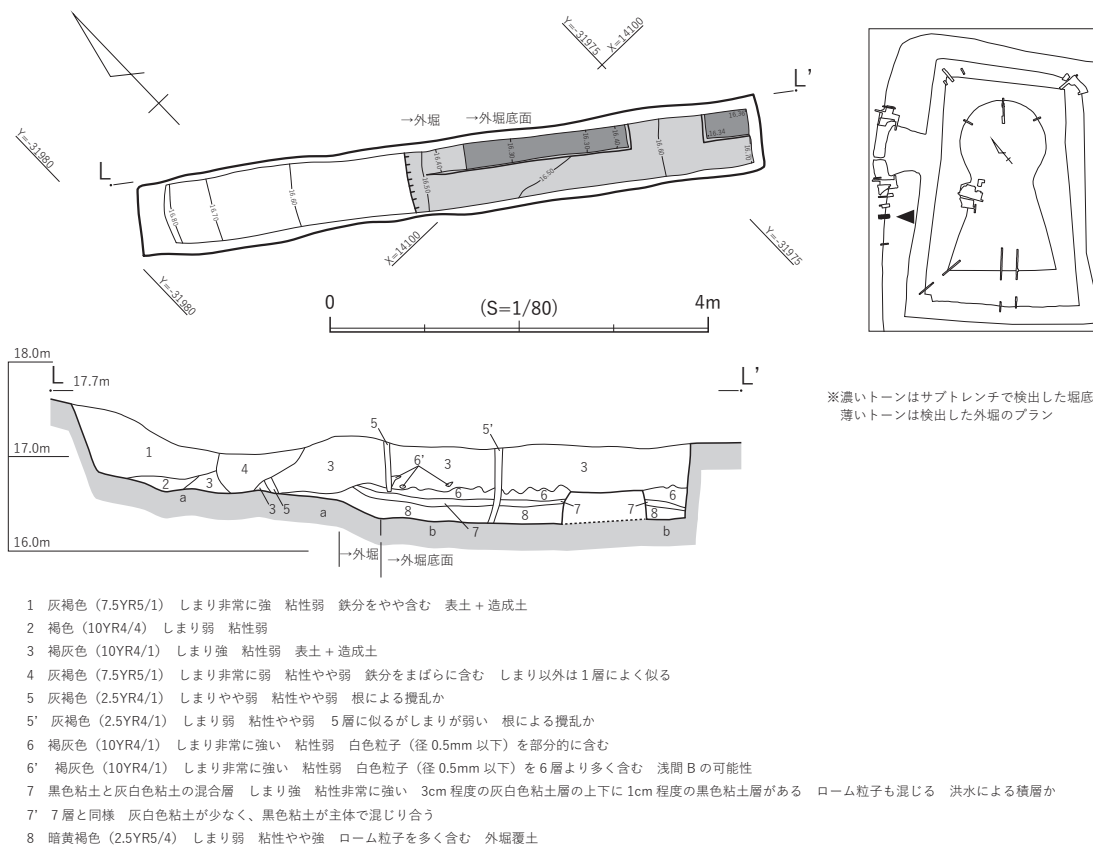


図 57 28-7T 平面図・断面図 (S=1/80)

能性はあるが断定できない。傾斜変換線の東側、外堀堀内にあたる位置には黒色と灰白色の粘土の混合層が広がっており、外堀の範囲を示している可能性がある。遺物は確認されなかった。

⑤28-6T (図56)

28-6Tは、外堀立ち上がりラインの検出を目的として設定したトレンチである。東西に長軸をもつ長方形を呈し、現況の外堀外側ラインに直行するように設定した。28-5T、28-7Tのちょうど中間に位置する。幅2.4m、長さは約8mである。面積は約16㎡である。図56に平面図 (S=1/80) を示した。本トレンチからは外堀のプランは確認されなかった。トレンチの北壁に沿ってサブトレンチを設定し深く掘削したが、外堀覆土や外堀外側立ち上がりは認められなかった。

⑥28-7T (図57)

28-7Tは、外堀立ち上がりのラインと外堀覆土の状況を確認するために設定したトレンチである。長さ約6.7m、幅は約0.8mの長方形で、面積は約5.7㎡である。平面図と断面図 (S=1/80) を図57に示した。

トレンチ中央部より外堀のプランが検出された他、トレンチ北側に設定したサブトレンチにおいて外堀の覆土と底面を確認した。外堀の底面の標高は約16.3mである。外堀の外縁は、トレンチ西端から3mの位置で南北方向の傾斜変換線として検出している。平坦であったトレンチ西側の底面の地形が、この地点を境に傾斜が水平距離で約60cm続き、再び平坦 (外堀底面) に戻る。北壁の

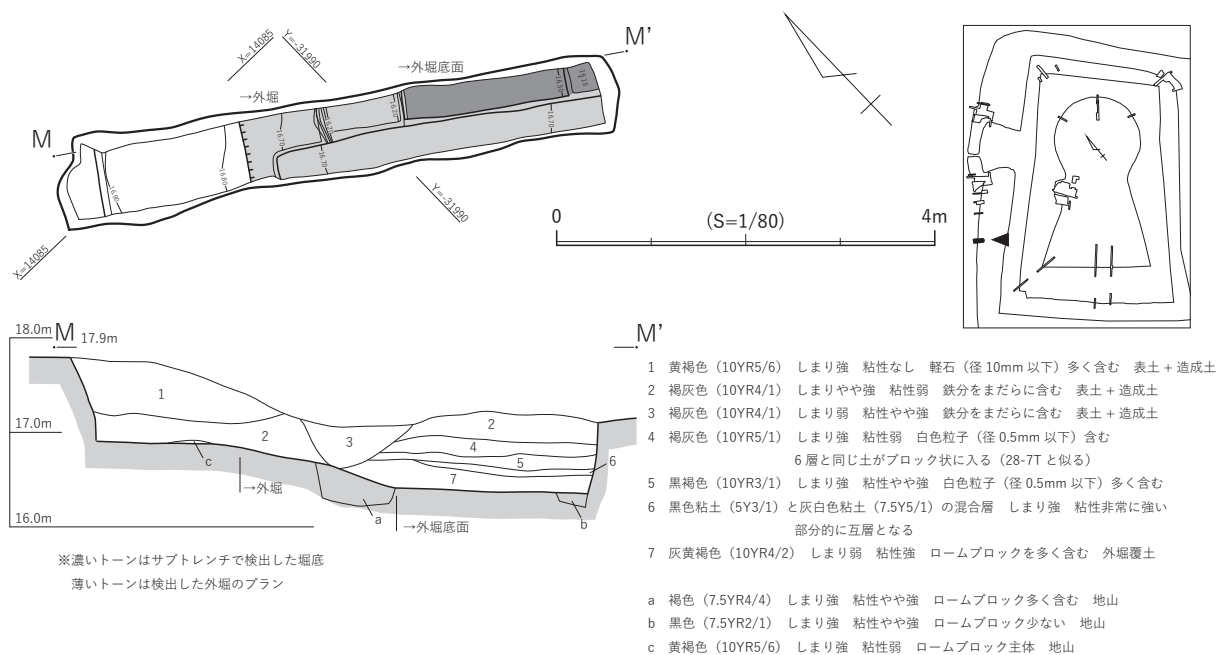


図 58 28-8T 平面図・断面図 (S=1/80)

断面図における 1～4 層は表土および昭和43年度の工事の際の造成土からなり、外堀の外側は大幅に造成されている点が見える。外堀の外側の肩部に当たる地点は既に失われている可能性が高い。5 層、5' 層は植物の根攪乱である。造成土以下は外堀に堆積した土が残っており、最下層の 8 層は初期の外堀覆土であると考えられる。8 層の上の 7 層は粘性の非常に強い灰白色の粘土質の土層である。この灰白色の粘土層は 30-1T、30-2T 等で確認した層と同質であり、薄い堆積状況も近似する。灰白色の粘土層を含め外堀底面付近の土壌はサンプルを採取の上、分析を行っている。分析結果は改めて別に示すが、覆土から Hr-FA に由来する火山噴出物は検出されていない。28-7T からの出土遺物は非常に少ない。

⑦28-8T (図58)

28-8T は、外堀外縁のラインと外堀覆土の把握のために、現況の外堀外側ラインに直行するように設定したトレンチである。28-7T の南側、約 20m に位置する。長さは約 6m、幅 0.8m で、面積は 4.8 m² である。平面図と断面図 (S=1/80) を図 58 に提示した。

トレンチ中央、やや西よりで外堀の外縁のラインを検出した。外堀のプラン検出後は、トレンチ北壁に沿ってサブトレンチを設定し調査を行った。サブトレンチにおいて、外堀覆土と底面を検出している。1 層、2 層、2' 層は過去の整備における造成土であり、厚く堆積している。外堀底面は標高 16.4m である。7 層が外堀覆土に当たり、粘性の強いロームブロックを多く含む土である。6 層は黒色粘土と灰白色粘土が混じり合う層であり、他のトレンチで薄い堆積が確認できる粘土層と同質のものである。外堀覆土、底面付近の土壌はサンプルを採取しており、テフラ・土壌分析を実施している。外堀覆土からは Hr-FA 由来の火山ガラスは検出されず、降灰後に外堀が巡らされたと考えられる。トレンチからの出土遺物は少ない。

第5節 円筒埴輪

①概要

本発掘調査により多くの遺物が出土したが、その9割以上が円筒埴輪片である。円筒埴輪は普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の存在が確認された。朝顔形円筒埴輪で径が推定可能な個体はなく、肩部から花卉部へ屈曲が変わる破片から識別可能だった個体のみを掲載した。普通円筒埴輪に関しても、口縁部から底部まで復元できた個体はなかったため、突帯の条数、段数が明らかになった個体はない。E001は方形透かし孔をもつ円筒埴輪で、底部から4条の突帯が残存し、上部に横方向のナデがあるためもう1条突帯をもつと想定できる。E001は2段目、3段目、5段目に透かし孔があるため、最上段が非穿孔領域であるという原則に基づけば、全体が残存していないものの6段目の存在は明らかである。今回の調査で、5段目に穿孔されないことが明らかな普通円筒埴輪は確認されておらず、5段目は穿孔領域で、透かし孔が2か所あったと推測できる。二子山古墳の昭和43年度の調査で出土した方形透かしの個体（第5集第22図-1、P.24、図6中の5-22-1）は、口縁部が残存し底部を欠損する個体であるが、透かし孔の形状や穿孔領域・位置等の特徴がE001と非常に近似する。E001と5-22-11とが同様の作りであると仮定すると、2、3、5段目に方形透かし孔をもち、5条6段構成に復元可能である。E030も同様に底部から4条分の突帯が残存し、口縁部を欠損する個体である。5段目に円形透かし孔があるため、口縁部の属する段が非穿孔領域であるという仮定に立てば、5条以上の突帯をもつと考えられる。E034は底部が欠損するが口縁部から5条の突帯が残る個体である。下端の器壁は分厚くなっており、底部に近い位置と考えてよい。最下段の突帯部分の径も狭小であるため、E034も5条6段の構成をもつと考えてよい。

既報告においても口縁部から底部まで残存する個体は確認されておらず厳密には分らないが、上記の観察結果から、二子山古墳には5条6段構成の円筒埴輪が並べられていたと推定可能である。本報告では、円筒埴輪のすべてが5条6段構成をもつと仮定し表記する。段や突帯の条数の表記は、凡例に示すとおりである。

埼玉古墳群で出土する円筒埴輪は、形態や色調、胎土、含有物、製作技術により3系統が確認されている。すなわち黄白色系統、橙褐色系統、赤褐色系統の3系統であり、各系統は明らかに別の工人集団によって作られたものと報告されている（埼玉県教育委員会1997）。過去の埼玉古墳群の報告書内では、赤褐色系統をA類、橙褐色系統をB類と呼称している場合があるが、ここでは混乱を避けるために～色系統の呼称を用いる。大型品は橙褐色系統と赤褐色系統のいずれかに分け、観察表に明記したが、破片資料や器壁が摩耗し明確な峻別が難しい資料は（赤）・（橙）・（黄）のように表記した。

二子山古墳からは黄白色系統、橙褐色系統、赤褐色系統の3系統の出土を確認している。稲荷山古墳段階で多く見られる黄白色系統は、二子山古墳からの出土は少なく、いずれも破片である。橙褐色系統と赤褐色系統は全体が復元できる資料が一定数出土しており、その比率は概ね1：1である。

二子山古墳出土の円筒埴輪の外面には、全面にわたってタテ方向のハケ目調整が見られる。ハケ目とは埴輪の器面調整に使用された工具の木材端部が残した凹凸であり、工具の木材の年輪のパ

ターンが痕跡として器面に残される。埼玉古墳群出土の埴輪についてはハケ目による同工品分析が進んでおり、既報告資料から二子山古墳に搬入された円筒埴輪のハケ目のパターンもいくつか明らかにされている（城倉2011）。これによると、二子山古墳の赤褐色系円筒埴輪の一部は、生出塚埴輪窯跡北支台のDE・M地点の埴輪窯で焼成された埴輪と同工品であるとされる。

E063からE109は埴輪の表面に工具等で線が刻まれた資料である。小破片も含まれるが、埴輪に通常施されるハケ、ナデ調整以外の図画を持つ資料は漏れなく掲載した。本報告では、これらの図画を線刻と呼称する。線刻は埴輪の外面に描かれ、工具で切り込まれるものが多い。線刻と言っても、その内容は多岐にわたっている。四肢をもつ生物のような写実的な題材もあれば、斜格子や葉脈状の綾杉文をはじめとする幾何学的な文様も多く存在している。このようなまとまった点数の線刻をもつ円筒埴輪の出土は、埼玉古墳群でも例が無い。線刻をもつ円筒埴輪はI区以外からは出土していないため、墳丘造出し周辺に並べ立てられていたと考えられる。

E110からE131は内面に記号をもつ埴輪である。記号は、線刻よりやや幅広のへう状の工具、あるいは指頭が用いられる。斜線が最も多く見られ、6点は「×」が認められる。出土位置は29-3Tが多く、27-4Tでも1点のへう記号をもつ埴輪片が出土した。E132以降はI区以外の調査区から出土した円筒埴輪である。

② I 区出土円筒埴輪

E001（図59）は底部から4条5段が残存する資料である。本調査で見つかった埴輪の中で最も残存高が高い。29-3Tから出土した。内面の一部に輪積み痕が残る。底部には砂が付着した痕跡がある。底部がややつぶれ厚くなるが、器壁は薄く整形されている。色調はにぶい橙で、橙褐色系統の個体である。胎土には径1cm大のチャートが含まれる。突帯は断面M字形で高く、丁寧にナデ付けられている。一部に布目痕があり、ナデ付けに布が使用されていることがわかる。突帯の色調は地の色と異なっており、地の胎土と異なる粘土が使用されている。1条目・2条目は胴部よりやや濃い色調であり、3条目・4条目は薄い色を呈する。2条目と3条目の間に製作工程上の節目があったと想定できる。

E001は既報告資料である第5集第22図-1の円筒埴輪に近い特徴をもつ（P.24、図6、5-22-1）。両者を5条6段であると仮定すると、2段目と5段目に、また90°位置をずらして4段目に方形透かし孔を有する。どちらの資料も、透かし孔は突帯間の中央ではなく、極端に上に偏った位置に存在する。突帯の上から穿孔されており、これにより突帯に歪みが生じている。両者ともに胴部の反りが弱く寸胴気味であり、突帯間隔が均一である点も共通している。両者のハケ目パターンは酷似しており、同一工人による所産であると考えられる。稲荷山古墳や鉄砲山古墳出土の多条の突帯をもつ円筒埴輪が、底部側2段に透かし孔を有さず3段目に穿孔されることが一般的であることから、かつてこの資料（第5集第22図-1）は6条7段構成をもつと言及されていた（埼玉県教育委員会1987）。しかしE001の発見により、2段目に透かし孔をもつ多条の円筒埴輪の存在が明らかになり、現状、二子山古墳に並べられた円筒埴輪は最大でも5条6段であることがわかった。

E002・E003（図59）は、いずれも底部から2段目までが残存する。29-2Tから、原位置を保ち並んだ状態で出土した。墳丘造出し上段の縁辺部に立てられており、壺掘りで据えられたと考えら

れる。両円筒埴輪間の距離は芯から芯まで約95cmである。本調査で原位置を保つことが確実な資料はこの2点のみである。両者とも胎土は赤褐色を呈する。突帯は扁平で、やや雑にナデ付けられている。内面底部付近は手のひらを押し当て成形され、圧痕として残っている（以下、手のひら圧痕）。底部には篠状圧痕が残る。E002は底部の成形が特徴的であり、2つの粘土が使用され、継目が2か所で確認できる。底部を一周させるためには短い一本の粘土紐が「C」字状を呈し、これを補うように、一回り短い粘土が内側から充填されている。E003は底部に粘土の付着が観察できる。幅広の特徴的なハケ目を持ち、残存部の上部に異なるハケ目による調整が見られる。器面調整に複数種の工具が使用されていることがわかるが、上部のハケが確認できる範囲は限定的であり、上部は欠損するため両者の使い分けまでは不明である。両者ともに赤褐色系統の埴輪である。

E004（図60）は底部から2段目までが残る資料である。29-2T出土。焼ムラがあり焼成は良好でなく、器面の観察が困難である。突帯は断面「M」字状で高く作られ、丁寧にナデられる。外面の一部に竹管による圧痕が3か所確認できる。内面には一部輪積み痕が見られる。橙褐色系統の埴輪と考えられる。

E005（図60）は口縁部から5段目が残る資料である。29-2Tから出土した。5段目に円形透かし孔を有する。透かし孔は大きく穿孔され、一部突帯を切っている。突帯は高く断面「M」字状を呈する。胎土に砂粒を多く含み、粒の大きいチャートも見られることから、橙褐色系統の埴輪である。

E006（図60）は口縁部から3段目までが残存する個体で、29-2Tからの出土である。5段目と4段目に、90°ずれた位置に円形透かし孔が穿たれる。6段目（口縁部の段）は長く成形され、4段目9.9cm、5段目12.3cmに対して18.5cmを測る。口縁端部の断面は凹状を呈する。胎土に含有物が多く、角閃石、酸化鉄を特に多く含む。赤く発色しており、赤褐色系統である。

E007（図60）は胴部の破片であり円形透かし孔をもつ資料である。29-2T出土。突帯は透かし孔に切られており、一部に布目圧痕がある。酸化鉄を多く含み、赤褐色を呈する。赤褐色系統である。

E008（図60）は口縁部から5段目が残る破片である29-2Tからの出土。5段目に円形透かし孔を有する。口縁端部は平たく、丁寧にナデられている。突帯の断面は高く、「M」字状を呈する。内面の口縁直下のみヨコハケ調整される。口縁部は内外面ともヨコナデされる。内面には輪積み痕が明瞭に確認できる。断面「M」字の突帯は高く作出される。胎土は砂粒が多く橙色である。橙褐色系統の個体である。

E009（図60）は突帯2条分が残る胴部の破片である。29-2T出土。円形透かし孔が突帯間とその上の段に1か所ずつ穿孔される。突帯断面は高く作られ断面「M」字状、丁寧にナデられている。突帯の作りがE005と良く似ており、内面の輪積み痕も共通する特徴である。含有物が多く、色調は橙色を示す。橙褐色系統の埴輪である。

E010（図61）は口縁部から5段目までが残存する破片である。29-2T出土。5段目に円形透かし孔が1か所穿孔される。突帯は高く作られ、断面形状は「M」。内面に一部タテ方向の指ナデの痕跡がある。口縁端部は平坦で、口縁直下はヨコナデされる。内面には輪積み痕が明瞭に残る。橙褐色系統と考えられる。

E011（図61）は口縁部から4段目までが残る個体である。29-2T出土。5段目に円形透かし孔が1か所存在する。6段目（口縁部の段）が17.2cmと長大である。口縁端部は平たく、口縁直下

はナデられる。突帯は断面「M」字状で高く作出される。内面の一部に指ナデが残る。橙褐色系統である。

E012 (図61) は底部から3段目までが残存する個体である。29-2T出土。突帯断面は扁平で「M」字状、雑にナデ付けられている。外面の2段目と最も下の突帯の一部は横方向に強くナデられている。これは器壁の補修痕であり、ハケ目調整、突帯を貼付した後にひび割れ等が起こった可能性がある。内面はナデ、底部付近には手のひら圧痕が見られる。底部は一部の残存であるが、篠状圧痕が確認できる。角閃石、チャート、酸化鉄を胎土に含み、鮮やかな赤褐色である。1段目9.5cm、2段目7.0cmと突帯間の間隔が狭い。

E013 (図61) は底部から3段目までが残る資料である。29-2T出土。突帯断面は低く作出される。底部付近内面には手のひら圧痕が残る。底部には篠状圧痕や板状の圧痕が確認できる。基部の粘土紐が重複する箇所も明瞭に観察できる。器壁はやや内傾する。E097と同様、外面に補修痕を有し、1段目から1条目の突帯にかけて、部分的に強く指ナデされている。赤褐色系統である。

E014 (図61) は底部から2段目までが残る資料である。29-2T出土である。残存する1条目の突帯は低位置であり、底部から7.1cmに位置する。突帯断面は高く台形を呈し、丁寧にナデ付けられる。底部は繊維状の圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含む。色調は橙色である。橙褐色系統の埴輪と考えられる。

E015 (図61) は胴部破片である。29-2T出土。突帯は高く作出され、胴部へのナデ付けは丁寧である。突帯断面は台形を呈し、上部寄りに1条の沈線が巡っている。内面には輪積み痕が残る。胎土に砂粒、酸化鉄を多く含む。色調は明るく、橙色を呈する。橙褐色系統に属する。

E016 (図62) は突帯3条、4段分が残存する個体である。29-2T出土。突帯断面はやや低く、形状は緩い「M」字状である。突帯の一部に布目圧痕が残る。丁寧にナデ付けられている。砂粒、チャートを多く含み、色調は橙色である。橙褐色系統の破片である。

E017 (図62) は口縁部を含む3段目までが残存する個体である。29-2T出土である。口縁部から最上段の突帯までは17.8cmと長い。透かし孔は5段目と4段目に、位置を90°ずらした位置に円形に穿孔される。突帯断面は低く、台形でやや歪んでいる。突帯裏には指オサエ痕が残される。口縁端部断面にはわずかに凹みが認められ、口縁部はヨコナデ調整される。赤褐色系統の個体である。

E018 (図62) は突帯3条が残る破片である。29-2T出土。突帯間隔はいずれも11.1cmと均等である。円形透かし孔が1か所穿孔される。突帯は断面「M」字でやや低い。胎土に酸化鉄を多く含み、全体的に明るい赤褐色を呈する。赤褐色系統である。

E019 (図62) は口縁部から5段目までが残存する個体である。29-2T出土。5段目に円形透かし孔が穿孔される。口縁端部は凹状を呈する。突帯断面は低く「M」字形。内面はハケ調整の後タテ方向に指ナデされる。胎土に砂粒が多く含有される。赤褐色系統の個体である。

E020 (図62) は3段が残存する胴部の破片である。29-3T出土。円形透かし孔を有する。突帯は扁平で断面「M」字形、突帯の裏には指オサエ痕が観察できる。焼成は良好で色調は橙色、胎土に砂粒、チャートを多く含む。橙褐色系統である。

E021 (図63) は底部から3段目までが残る資料である。29-2T出土。突帯断面は低く、「M」字形、ナデ付けは雑である。外面に一部雑なナデが認められ、補修痕と考えられる。内面底部付近に手の

ひら圧痕が残る。内面に一か所、指頭または小石によると考えられる径1cm程度の楕円形の圧痕がある。底部には篠状圧痕が見られる。焼成は良好で赤褐色を呈し、典型的な赤褐色系統である。

E022 (図63) は口縁部から5条目の突帯までが残る個体である。29-3Tから出土した。口縁部は緩く外反し、口唇部は台形状に面が取られる。突帯は断面「M」字で低い。口縁端部は凹状を呈し、口唇部付近はヨコナデされる。胎土にチャートが多く含まれ、色調は橙色である。橙褐色系統の破片である。

E023 (図63) は29-2T出土の胴部の破片である。突帯とそれを切る円形透かし孔が認められる。突帯は扁平で雑に貼り付けられる。赤褐色の色調を示し、赤褐色系統である。

E024 (図63) は、29-3T出土の胴部破片である。突帯が1条めぐり、方形透かし孔をもつ。突帯は扁平で断面「M」字状。大粒のチャートを胎土に含み、色調は橙色を呈する。橙褐色系統である。

E025とE026 (図63) はいずれも胴部の破片である。E025は29-3T、E026は29-2Tと出土位置は異なるが、よく似た特徴を示す。この特徴はE001にも共通するものである。突帯は扁平で断面「M」字状、丁寧にナデ付けられる。E025の突帯の一部には布目圧痕が見られ、内面には突帯と対応する位置に指頭痕がある。外面はタテハケ、内面はヨコハケとナデ調整される。どちらも胎土に径1cm大のチャートや、粒状の酸化鉄を多く含むが、色調は橙色である。突帯は器壁と異なる色調であり、E001 (図59) とよく似ている。接合箇所はなかったが同一個体の可能性もある。いずれも橙褐色系統である。

E027 (図63) は底部から2段目が残存する個体である。29-3T出土。突帯は扁平で断面「M」字状。底部からの高さは5.1cmと低い。突帯の一部に布目圧痕が残る。底部は丁寧に整形され器壁は薄い。チャートが多く含まれ、色調は橙色を呈する。橙褐色系統である。

E028、E029 (図64) は口縁部から4段目までが残存する。29-2T出土。どちらも口縁端部は凹状に整形される。器壁は直線的に立ち上がり、口縁部直下で外側に弱く屈曲する。突帯は断面「M」字状で扁平である。5段目に円形透かし孔が大きく穿孔される。E028が明赤褐色、E029が橙色と色調は異なるが、両個体ともにハケ目は共通しており、赤褐色系統の円筒埴輪である。

E030 (図64) は底部から5段目までが残存する個体である。5段目に円形透かし孔を有する。突帯断面は高く、台形状である。突帯間隔は約9～10cmと狭く、概ね均等である。底部に篠状圧痕が残る。胎土にはチャート、砂粒を多く含む。橙褐色系統の個体である。

E031 (図64) は口縁部から2条目の突帯までが残存する個体である。29-2Tから出土した。口縁端部は凹状を呈する。4、5段目に90°ずらす形で円形透かし孔が大きく穿孔される。一部突帯を切って穿孔される。突帯断面は「M」字状で扁平、やや雑にナデ付けられる。突帯裏には指オサエ痕が残る。口縁部直下は強くヨコナデ調整される。器壁は寸胴で、口縁部に至って弱く外反する。胎土には酸化鉄を多く含む。赤褐色系統である。

E032 (図65) は底部から2段目までが残る個体である。29-2T出土。突帯は断面台形状で高く作出される。内面に一部輪積み痕が残る。底部には篠状圧痕が観察できる。胎土には径1cm大のチャートが含まれ、色調は橙色を示す。橙褐色系統である。

E033 (図65) は口縁部から2段目までが残存する。29-2T出土。口縁端部は丸く、丁寧にナデられている。器壁はやや寸胴で、口縁部直下で弱く外反する。5段目と4段目に各2か所、90°向

きを変える位置に円形透かし孔が穿孔される。突帯は台形段面で高く、丁寧にナデ付けられる。一部布目圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含み、色調は橙色である。橙褐色系統の円筒埴輪である。外面最上段（6段目）に線刻が施される。線刻は1本線の胴体から4本の縦線が垂下し、四肢を表現している。線刻は、胴体の右端に2本の長い角をもつ頭部が描かれており、右方向を向いた牡鹿を描いたとみられる。鹿の線刻の上からは指ナデによりバツ印（「×」）が付けられる。タテハケにより器面を調整した後に、線状の鹿の線刻が描かれ、最後にバツ印が施される。製作段階を考えると、器壁の粘土が完全に乾く前にも関わらず、完全に消すのではなく上からバツ印を付ける行為には、鹿線刻を敢えて残す製作者の意図を感じられる。鹿の線刻は、関東地方では栃木県塚山古墳・塚山西古墳、群馬県剣崎長瀬西3号墳、埼玉県内では東宮下出土の人物埴輪に施される例が知られている。埼玉古墳群において、線刻で動物が描かれる埴輪は初の出土となった。

E034（図65）は口縁部から最下段（1段目）までが残る個体である。29-2T出土。口縁部は外側にわずかに屈曲し、端部の断面形状はわずかに凹む。4、5段目の、90°角度を変えた位置に楕円形の透かし孔が大きく穿孔される。突帯断面は「M」字状で扁平、やや雑にナデ付けられる。突帯の間隔は不均一で、最上段が15.1cmと最も長い。内面の一部には縦方向、斜め方向の指ナデが認められる。突帯の位置には、内面に指オサエ痕が残る、一部輪積み痕も観察できる。内面口縁部付近より縦方向に2本の工具痕が残る。内面のへう記号であり、生出塚埴輪窯跡でも似た工具痕が確認されている。色調は明赤褐色を呈し、典型的な赤褐色系統である。

E035（図65）は3段分が残る胴部の破片である。29-2T出土。器壁はやや内傾して立ち上がる。円形透かし孔が異なる段、異なる位置に2か所大きく穿孔される。突帯は断面「M」字状で扁平、内面には指オサエ痕が残る。赤褐色系統である。

E036（図66）は口縁部から4段目までが残存する個体である。29-6T出土。直線的に立ち上がり、口縁部直下で外側に弱く屈曲する。口縁部端部は丸く、丁寧にヨコナデ調整される。円形透かし孔が4、5段目に角度を90°ずらして穿孔される。突帯は扁平で細く、器壁は薄い。突帯の裏に当たる部分には指オサエ痕が残る。内面には一部輪積み痕が観察できる。外面には一部黒斑が残る。胎土には径1cm程度のチャートが含まれ、色調は橙色。橙褐色系統の個体である。

E037（図66）は口縁部から5段目までが残る個体である。29-3T出土である。器壁は弱く外反し、口縁部直下で外側に屈曲する。口縁端部は丸く、口唇部内面は凹状を呈する。5段目に円形透かし孔をもつ。突帯は高く「M」字状で丁寧にナデ付けられる。内面の一部に輪積み痕、タテ方向の指ナデが見られる。胎土にはチャート、酸化鉄を多く含む。橙褐色系統である。

E038（図66）は口縁部から4段目までが残存する個体である。29-6T出土。胴部は弱く外反しながら立ち上がり、口縁部付近で小さく外側に開く。口縁端部は丸く、口唇部内側は凹状に調整される。5段目に1か所円形透かし孔を有する。突帯断面は高く「M」字形を呈する。内面に一部輪積み痕が残る。色調は橙色で、外面の一部に焼成時の焼きムラがある。橙褐色系統である。

E039（図66）は口縁部から5段目までが残存する破片である。29-6T出土。円形透かし孔が5段目に1か所ある。突帯断面は高く「M」字形、丁寧にナデ付けられる。内面には一部輪積み痕が残る。胎土に酸化鉄、砂粒を多く含む。橙褐色系統の破片である。

E040（図67）は突帯2条が残る胴部の破片である。29-2T出土。方形透かし孔が1か所存在する。

突帯は高く、断面は台形を呈する。含有物は少なく、径約1cmのチャートが含まれる。色調は浅黄橙色を示す。黄白色系統である。

E041 (図67) は口縁部の破片である。29-3T出土。口縁端部は凹状を呈する。焼成は良好で、色調は橙色である。赤褐色系統の破片である可能性が高い。

E042 (図67) は底部の破片である。29-3T出土。底部はつぶれており篠状圧痕が残る。粒の大きいチャートを含む。橙褐色系統の破片である。

E043 (図67) は突帯が1条残る破片である。29-2T出土。突帯は断面「M」字形で一部布目圧痕が残る。胎土に砂粒を多く含む。橙褐色系統の破片である。

E044 (図67) は突帯が1条残る個体である。29-3T出土である。突帯は断面「M」字状で扁平、突帯の直下の段に円形透かし孔が穿孔される。胎土にチャートを多く含む。突帯直上の段は長く伸びるため、口縁部を含む6段目であると考えられる。橙褐色系統の破片である。

E045 (図68) は口縁部を含む破片である。29-2T出土。口縁端部は凹状に整形され、口唇部内面も凹状を呈する。口縁部付近はヨコナデ調整される。赤褐色系統の破片である。

E046 (図68) は口縁部の破片である。29-2T出土。口縁端部が平たく作出され、断面形状は特徴的である。黄白色系統であると考えられる。

E047 (図68) は突帯を含む破片である。29-3T出土である。円形透かし孔が1か所穿孔される。突帯は扁平で断面「M」字形、内面には突帯ナデ付けの際の指オサエ痕が残るほか、輪積み痕が明瞭に認められる。橙褐色系統の破片である。

E048 (図68) は突帯2条が残る胴部の破片である。29-3T出土。突帯間に方形透かし孔が1か所ある。突帯は扁平で断面「M」字形、内面には指オサエ痕がある。胎土にチャート、酸化鉄を多く含む。橙褐色系統の破片である。

E049 (図68) は口縁部の破片である。29-6T出土。口縁端部は丸く、横ナデ調整される。突帯断面は高く、「M」字形を呈する。内面には指オサエ痕、輪積み痕が見られる。約1cm大のチャート、酸化鉄を多く含む。橙褐色系統である。

E050 (図69) は突帯2条が残る破片である。29-3T出土。突帯間に円形透かし孔が1か所穿孔される。突帯断面は高く台形状を呈する。内面に輪積み痕が残る。橙褐色系統である。

E051 (図69) は突帯4条分が残存する個体である。29-3T出土。突帯断面は高く、丁寧にナデ付けられる。内面には一部縦方向の指ナデ、輪積み痕が残る。胎土に粒の大きいチャートが含まれる。橙褐色系統である。

E052 (図69) は突帯2条分が残る破片である。29-3T出土である。円形透かし孔が1か所残る。突帯は断面「M」字形で扁平である。外面タテハケ、内面ナナメハケ調整される。胎土に大粒のチャートや小石を多く含む。橙褐色系統である。

E053 (図69) は底部の破片である。29-6T出土。外面に調整は見られず、内面はナデ調整される。底部には粘土の付着が見られる。底部の粘土接続部の内側部分の破片であると考えられる。橙褐色系統の可能性が高い。

E054 (図70) は突帯が残る破片である。29-2T出土である。突帯は断面扁平で「M」字形を呈する。突帯には一部布目圧痕が残る。粒の大きいチャートが胎土に含まれる。橙褐色系統である。

E055 (図70) は口縁部直下に特徴的な条線をもつ破片資料である。29-2T出土。口縁端部は丸く、外面口縁直下に2条の横線が巡っている。色調は橙色、橙褐色系統の破片である。

E056 (図70) は突帯2条が残る胴部の破片である。29-6T出土。焼成が悪く、ムラがあり器面はザラザラしている。突帯間に円形透かし孔が1か所穿孔される。突帯断面は高く台形状を呈する。内面の一部に輪積み痕が残る。赤褐色系統である。

E057 (図70) は口縁部の破片である。29-2T出土。径は復元できないが口縁部は外側に大きく開くと考えられる。口縁端部は丸く、丁寧にナデられる。外面の口縁直下に2本の沈線が横方向に巡る。橙褐色系統の破片である。

E058 (図70) は、突帯が残る破片資料である。29-3T出土。突帯断面は扁平で幅広く、中央に沈線が1本巡る。色調はにぶい橙色で、径約1cmのチャートを含む。橙褐色系統の破片である。

E059 (図70) は口縁が特徴的な形状をした破片資料である。29-2T出土。口縁端部は断面凹状を呈し、口唇部のみが外側に屈曲する。屈曲する口唇部は丁寧にヨコナデ調整される。色調は明赤褐色を呈する。赤褐色系統の破片である。

E060・E061・E062 (図70) は、朝顔形円筒埴輪の破片である。いずれも突帯を1条含み、角度の変わる頸部の破片である。E060は29-3T出土、外面はナデ、内面はヨコハケ、ナデ調整される。突帯は扁平で断面「M」字形を呈する。E061は29-3T出土、外面はタテハケ、内面はナデ調整される。突帯は断面三角形を呈する。E062は29-6Tから出土した。外面はタテハケ後ナデ、内面はナデ調整される。突帯断面は扁平で全容は不明である。3個体とも橙褐色系統に属する。朝顔形埴輪の特徴的な形態を示す破片は3個体のみであるが、底部や胴部から朝顔形埴輪との推定は困難であるため、朝顔形埴輪の比率を把握することはできなかった。

I 区出土

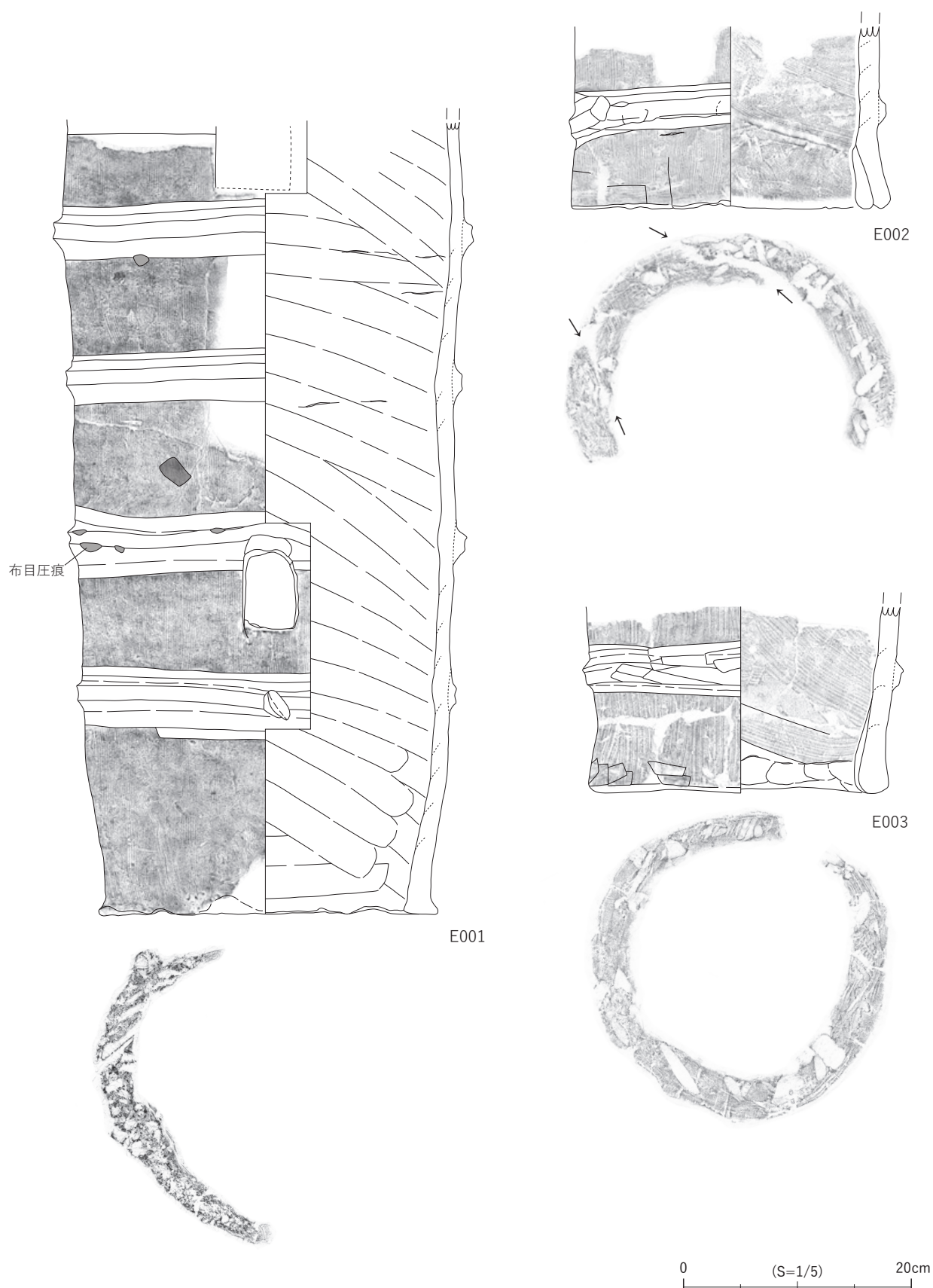


图 59 円筒埴輪①

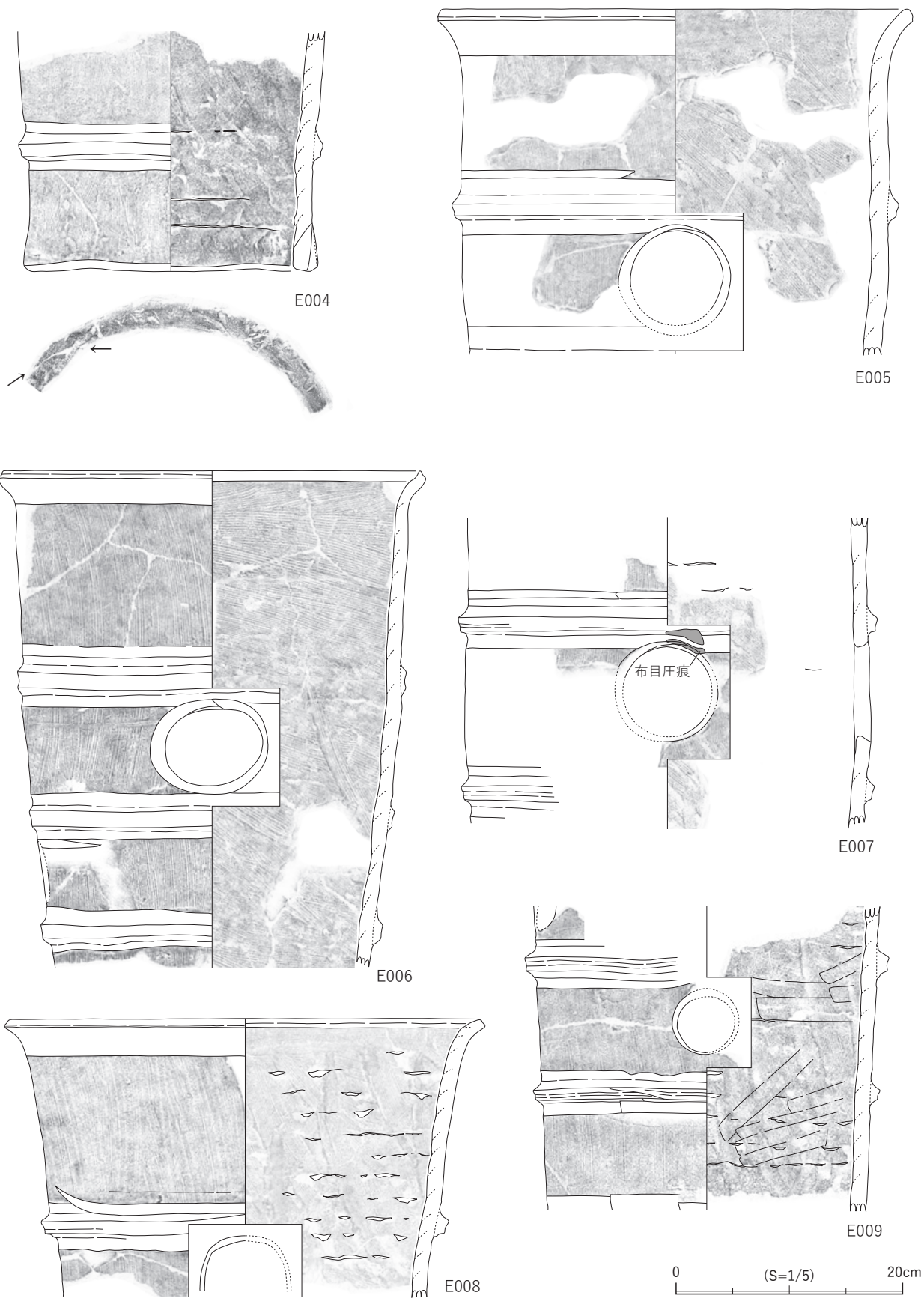


图 60 円筒埴輪②

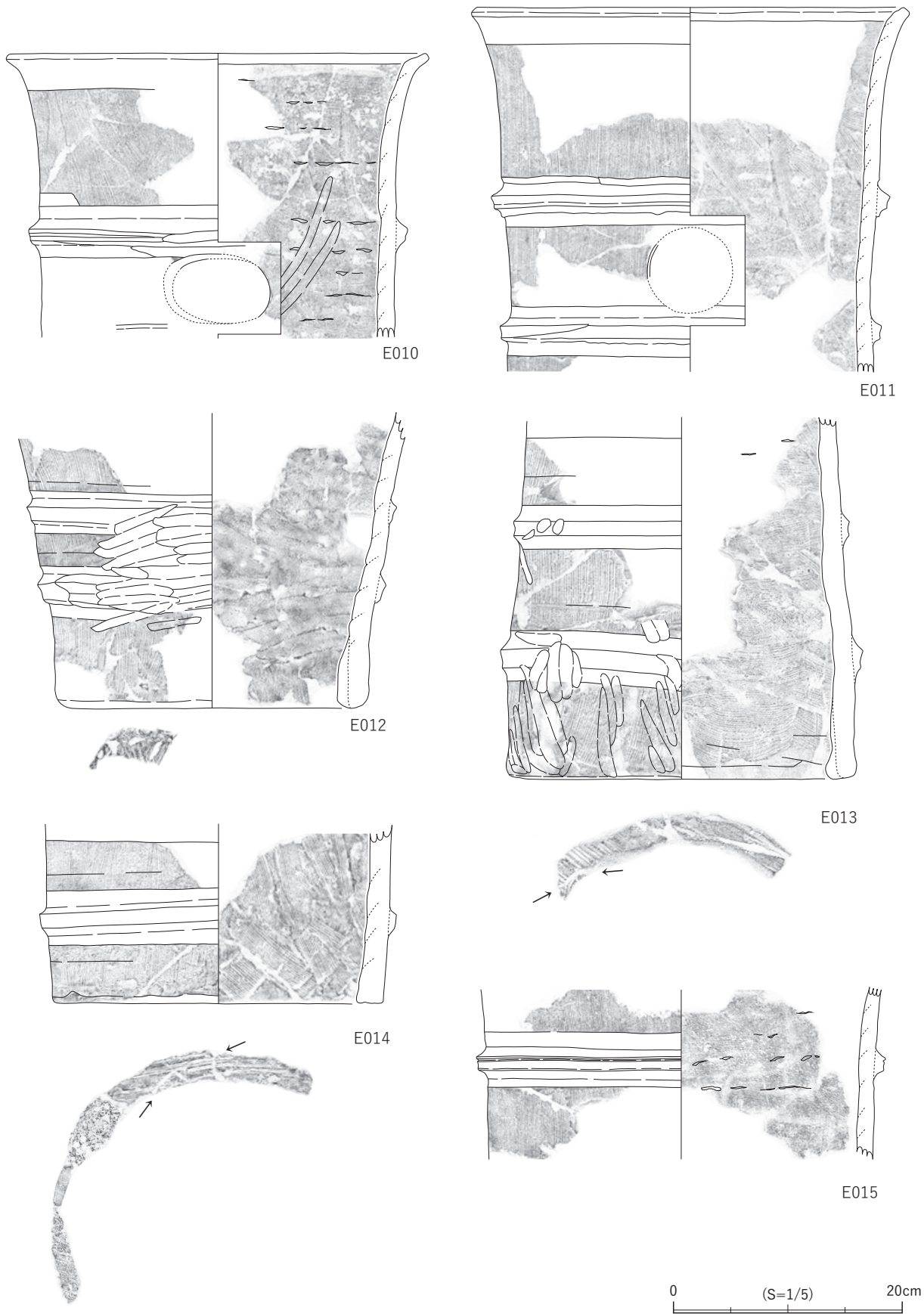
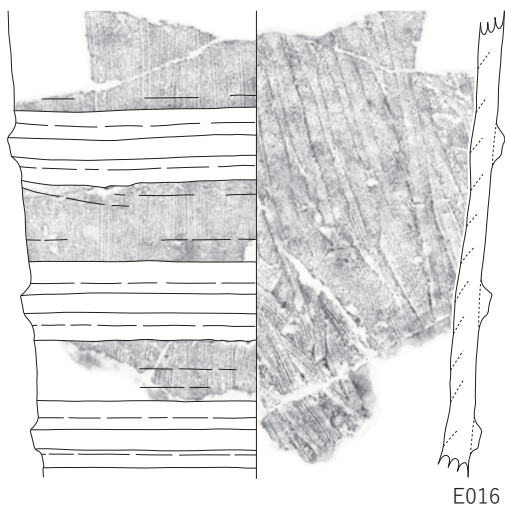
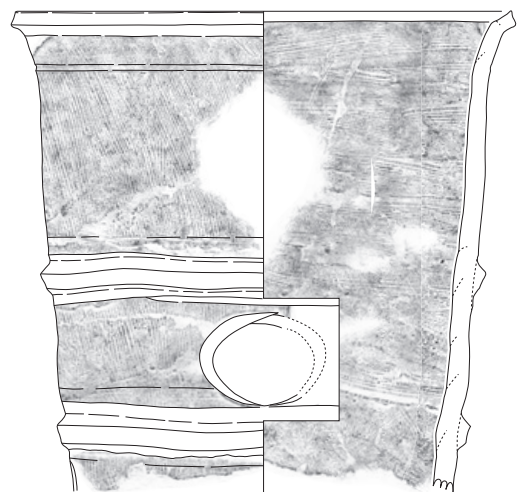


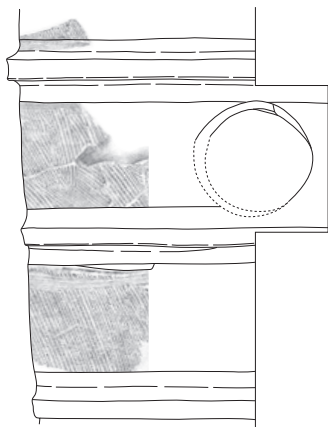
図 61 円筒埴輪③



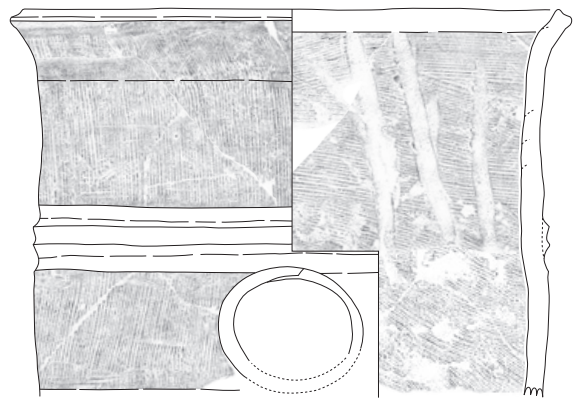
E016



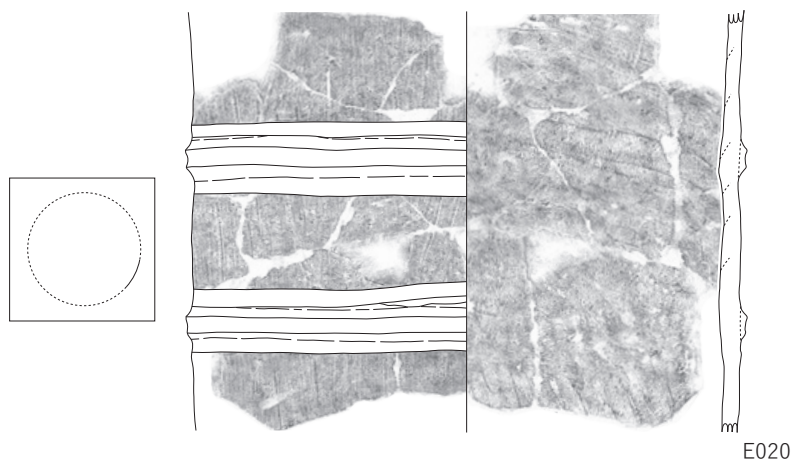
E017



E018



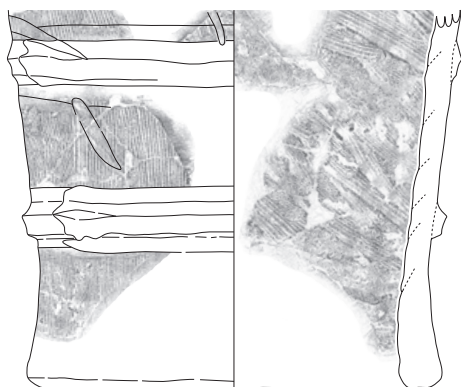
E019



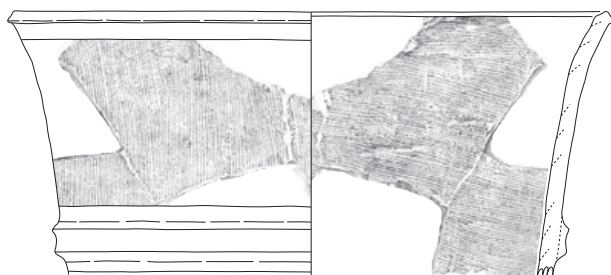
E020

0 (S=1/5) 20cm

図 62 円筒埴輪④



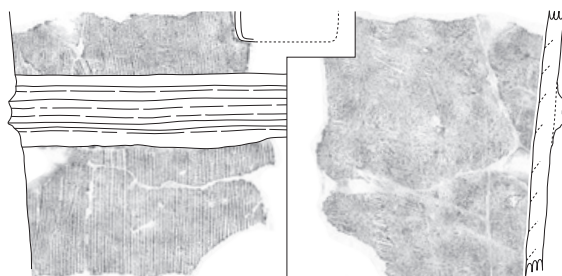
E021



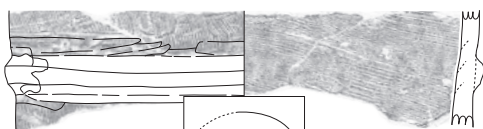
E022



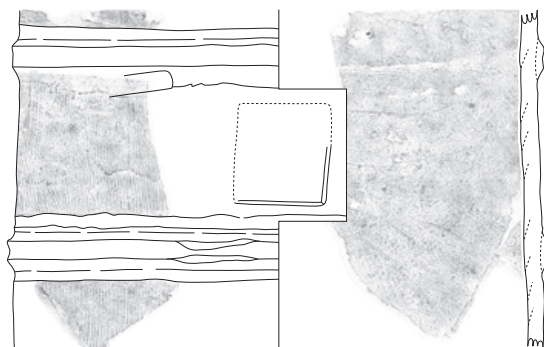
E023



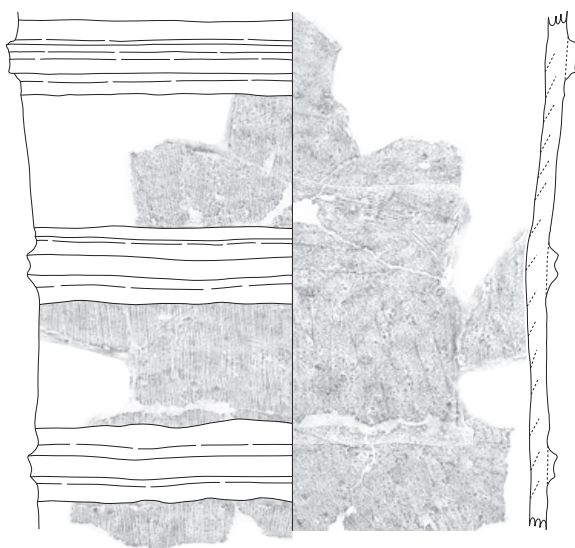
E024



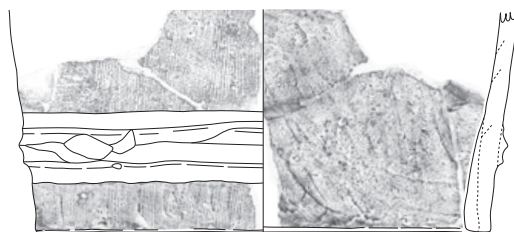
E025



E026

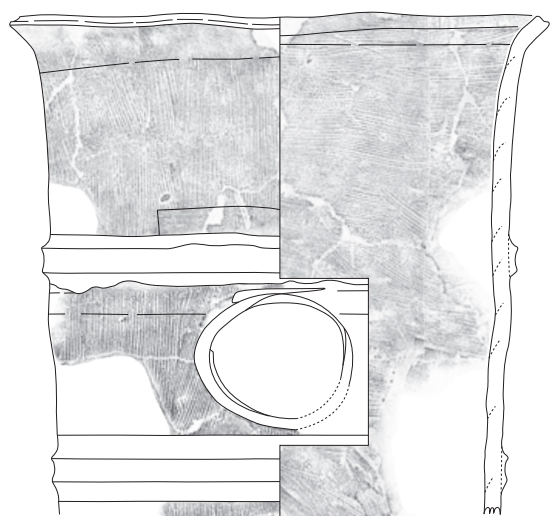


E027

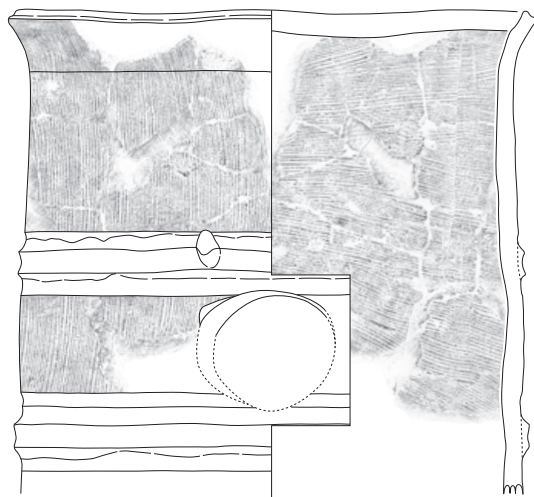


0 (S=1/5) 20cm

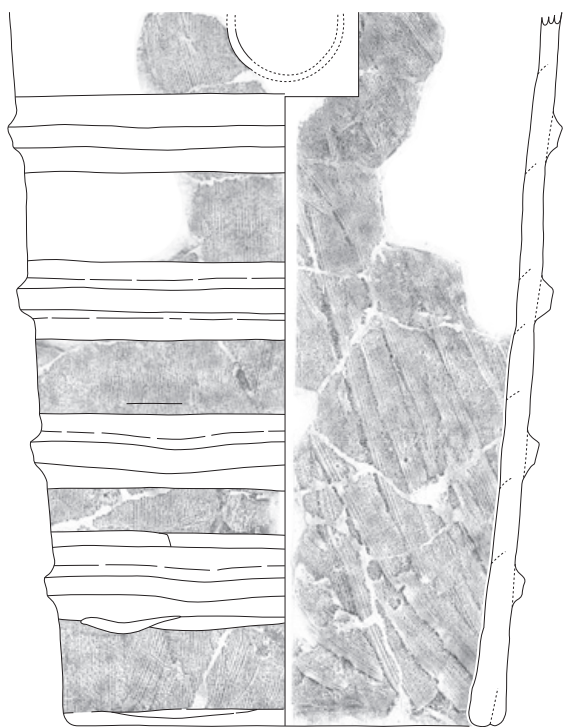
図 63 円筒埴輪⑤



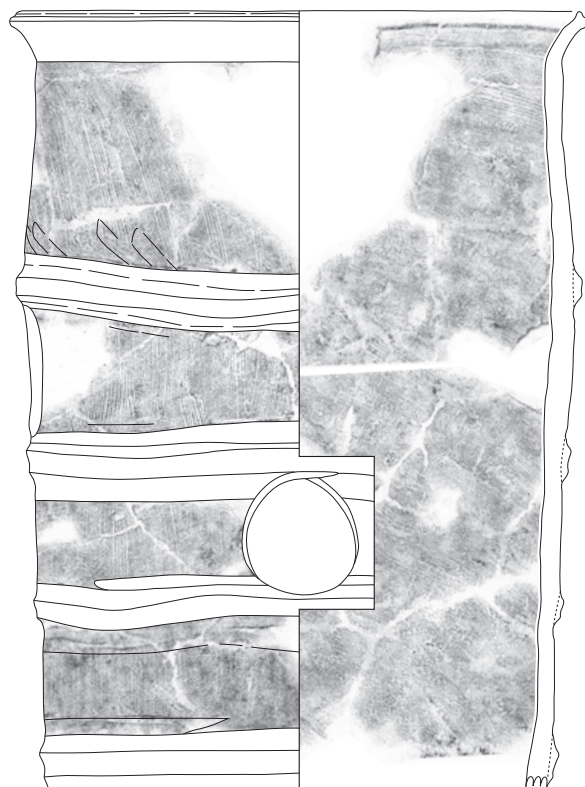
E028



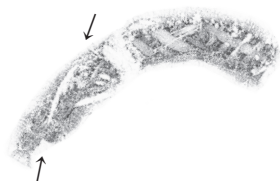
E029



E030



E031



0 (S=1/5) 20cm

図 64 円筒埴輪⑥

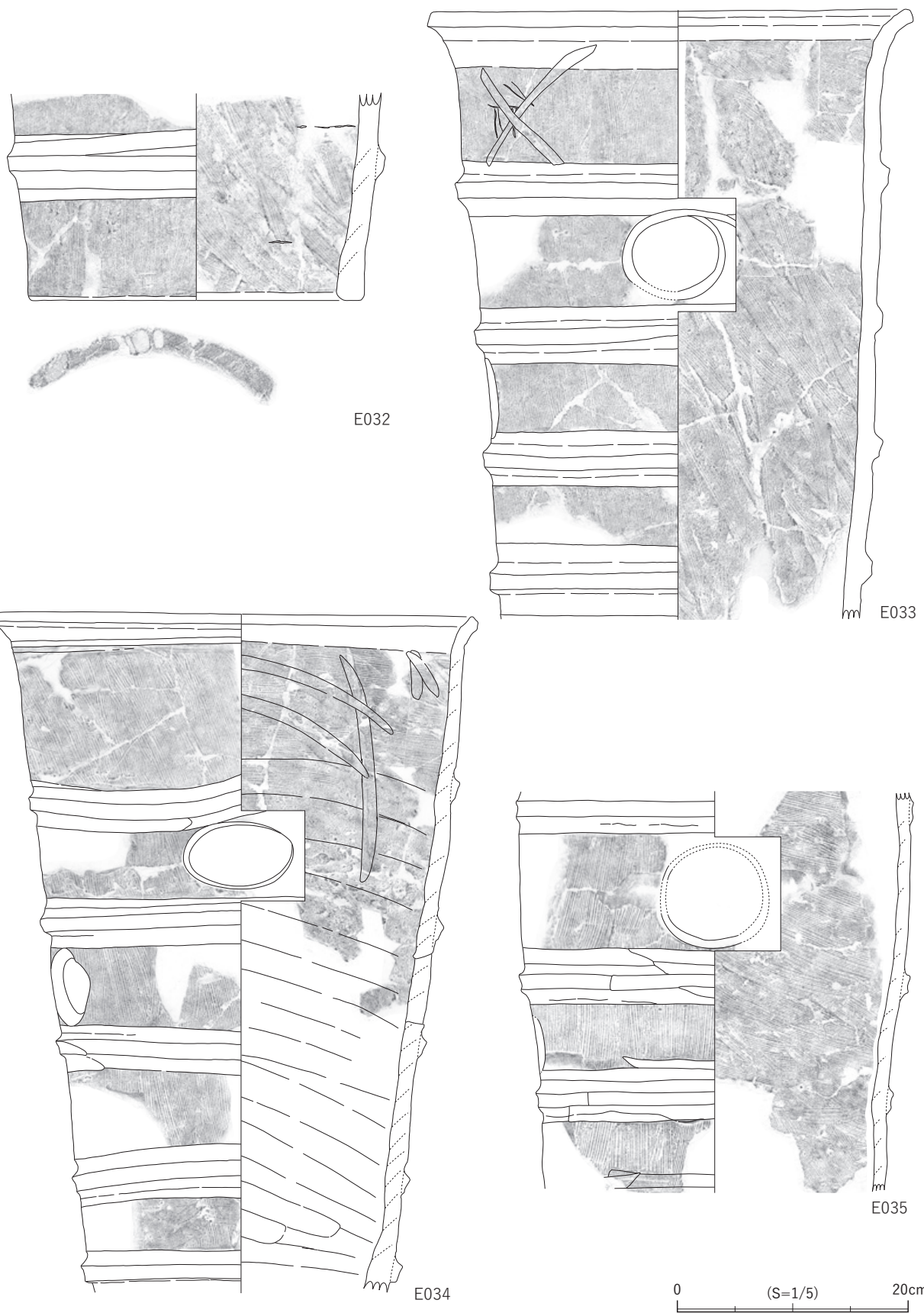
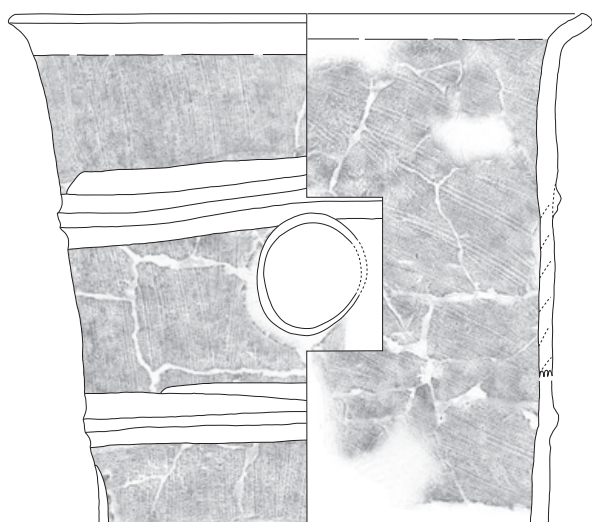
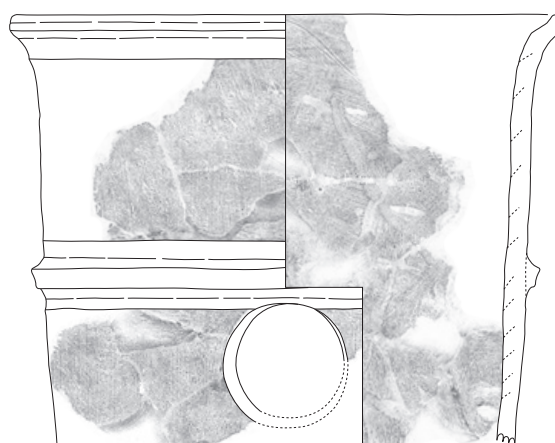


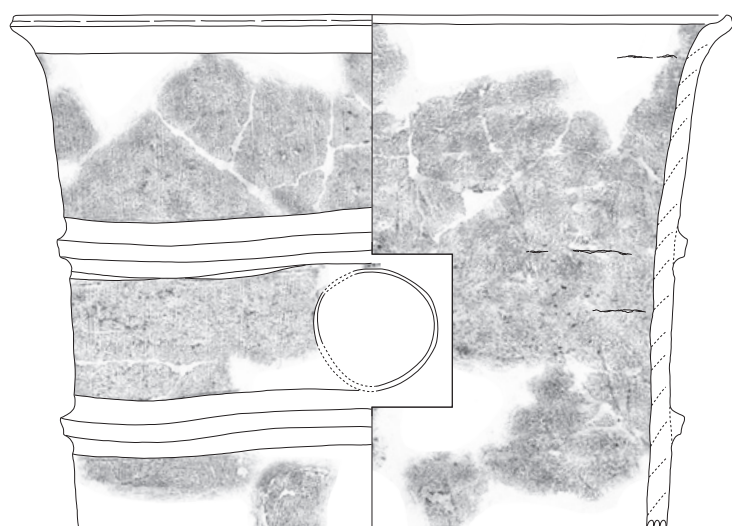
図 65 円筒埴輪⑦



E036

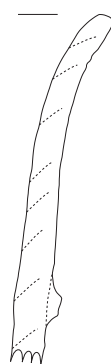


E037



E038

0 (S=1/5) 20cm



E039



0 (S=1/4) 20cm

図 66 円筒埴輪⑧

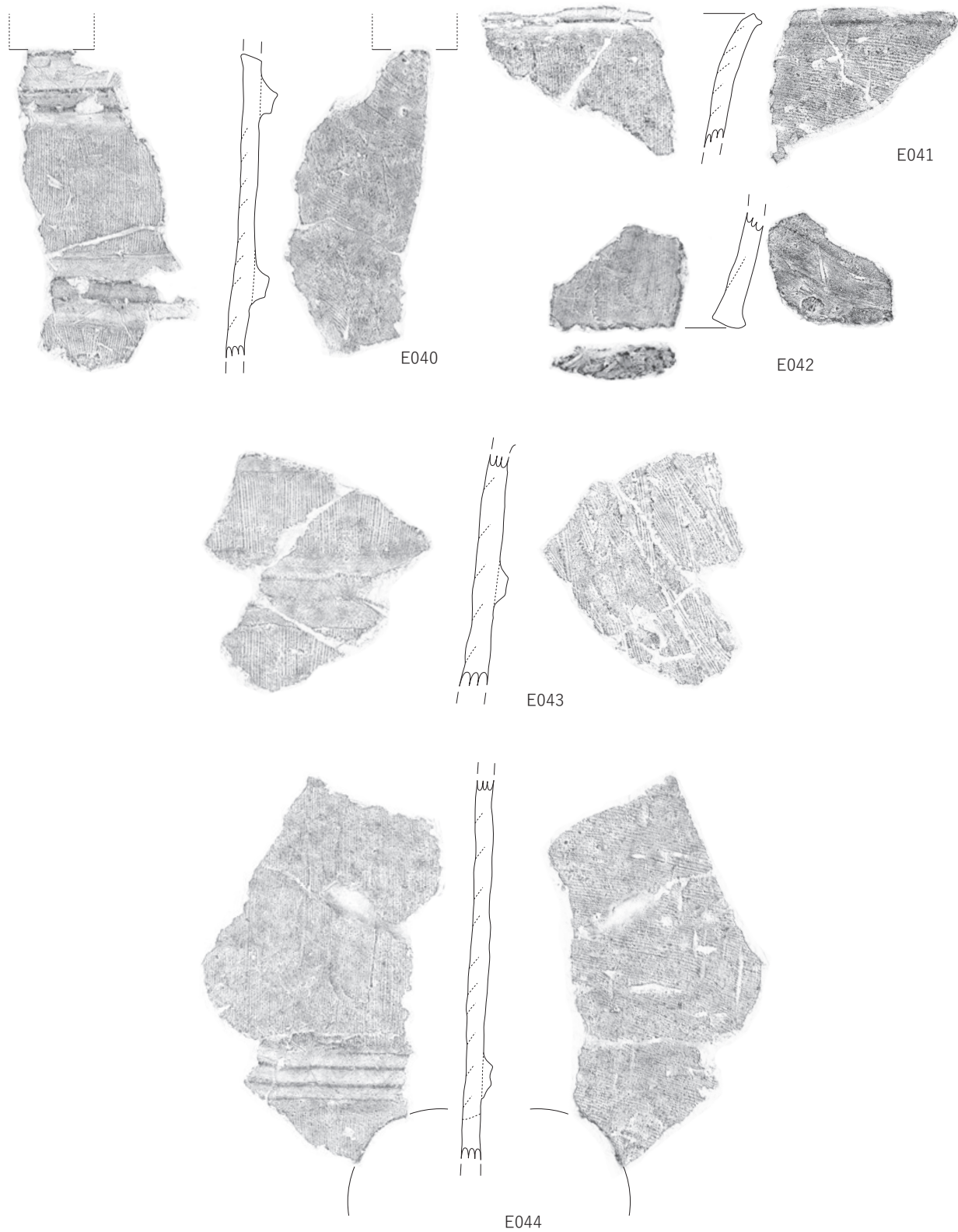


図 67 円筒埴輪⑨

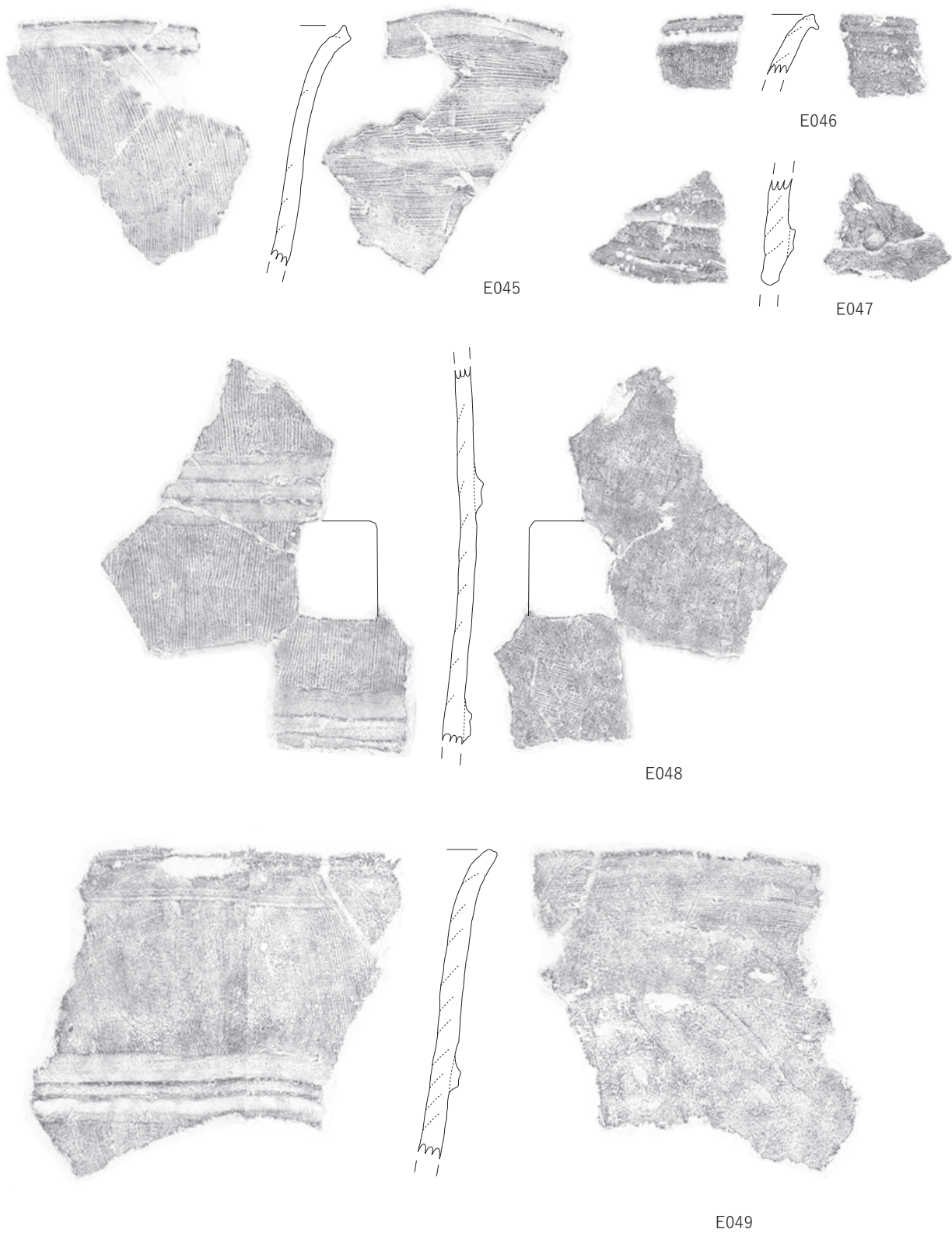
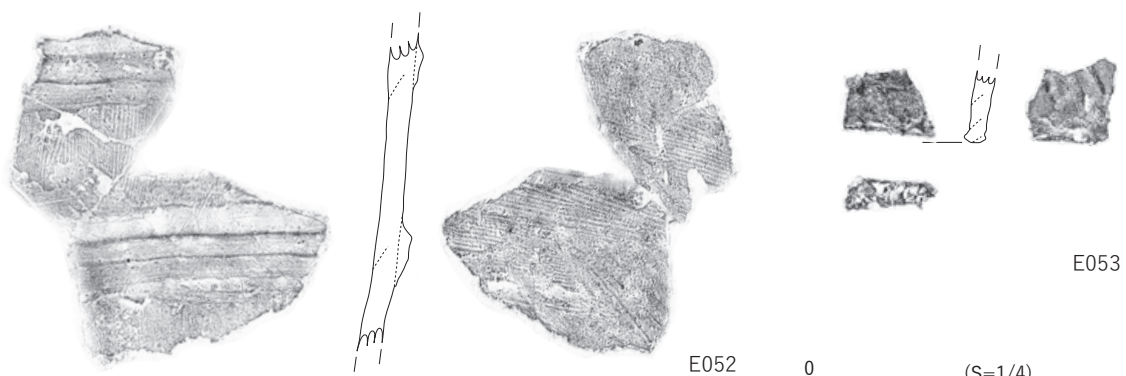
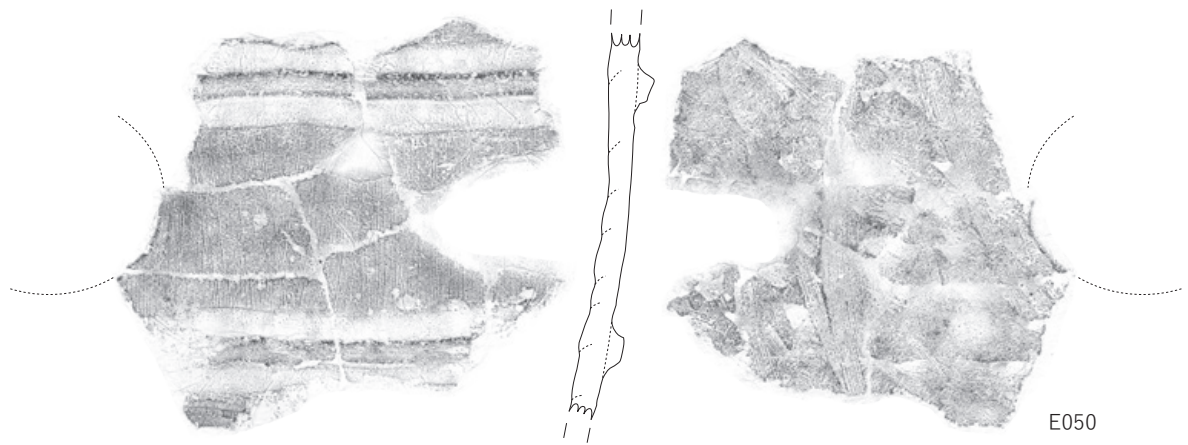


図 68 円筒埴輪⑩



0 (S=1/4) 20cm

図 69 円筒埴輪⑪

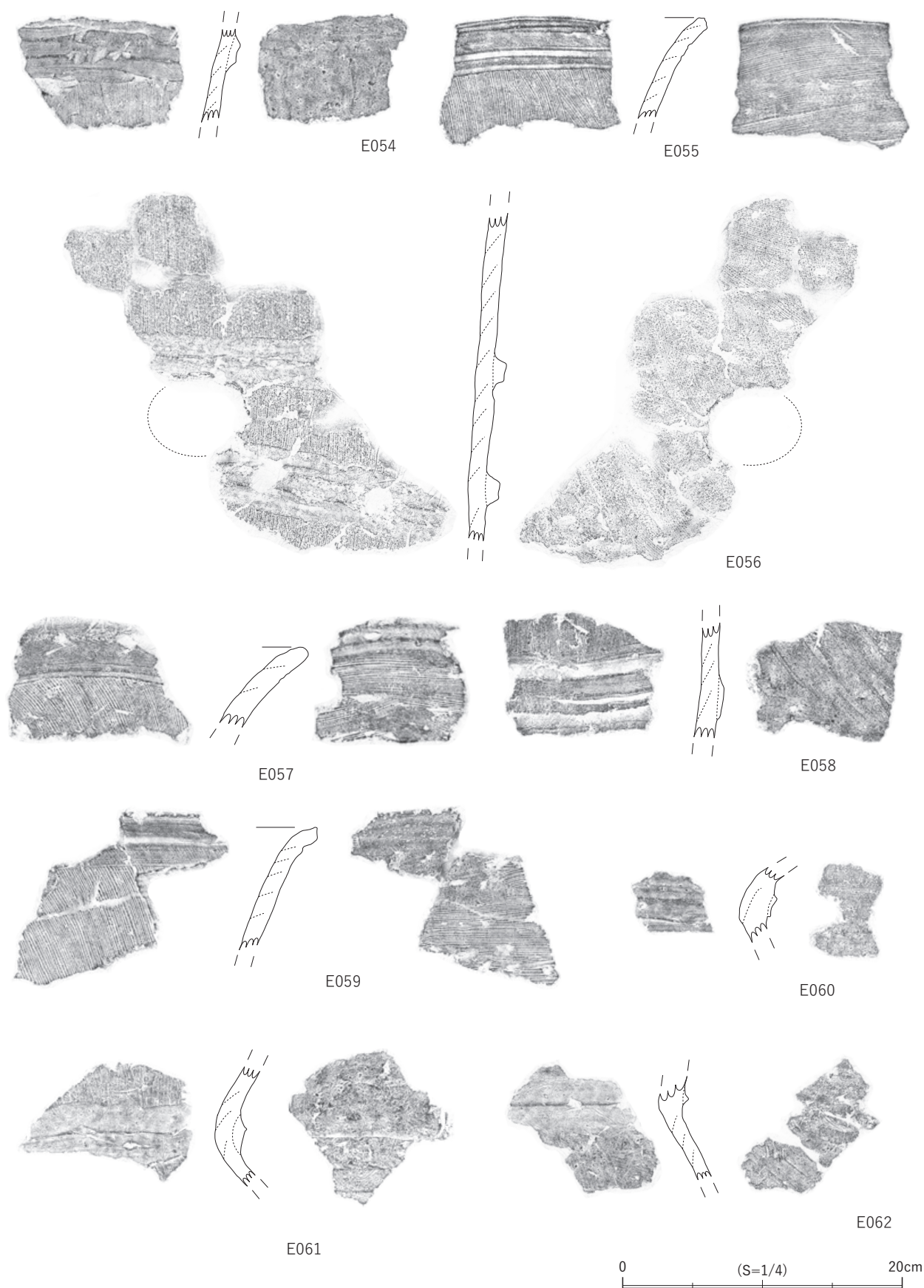


図 70 円筒埴輪⑫

③ I 区出土円筒埴輪（線刻・ヘラ記号）

E063 から E131 は円筒埴輪のうち、線刻やヘラ記号などの痕跡が残された個体である。整理作業の過程で確認された線刻またはヘラ記号をもつ埴輪はどれほど小片であっても図化、情報化し、本書に掲載した。なお、E033（最上段に右方向を向いた角をもつ鹿が刻まれた資料。線刻の上から指ナデにより「×」印が付けられている。）も線刻をもつ円筒埴輪であるが、紙面の都合により②で合わせて提示した。

埴輪の破片に線刻が見られた場合、それが形象埴輪の一部であるか、線刻された円筒埴輪の一部であるかの判断は困難である。しかし、本報告に掲載する線刻をもつ破片は、透かし孔や突帯、器壁の曲率などが円筒埴輪の特徴と共通する。さらに、二子山古墳の埴丘造出し周辺からは明確に形象埴輪であると同定される破片はごくわずかである。これらのことから、以下に記述する埴輪片は形象埴輪ではなく、線刻をもつ円筒埴輪であると判断した。

また、これらの線刻をもつ円筒埴輪は埴丘造出し周辺以外からは出土しておらず、特定の場所に並べられたものと考えられる。

線刻のある埴輪には、斜格子文や葉脈状の綾杉文など幾何学的な文様の他、四肢をもつ生物のような表現など、絵画を想起させる具体的なモチーフが描かれたものも含まれる。線刻はいずれも外面に施されるため、外からの視認性への強い意識があったと考えられる。このような特殊な円筒埴輪を配することにより、埴丘造出しという場所の特異性を際立たせていた可能性が考えられる。

斜格子

多様な線刻が確認されたが、複数の斜線が交差する斜格子を施す破片が、点数として最も多かった。斜格子は先の細い工具によるものであるが、刻みの深度に差異が認められる。小破片が多く断定は難しいが、胎土に砂粒を含む個体が多く、橙褐色系統に属すると考えられる。

E063（図 71）は口縁部の破片である。29-2T 出土。口縁端部は丸く、口唇部内面はわずかに凹んだ形状である。突帯断面の形状は台形で高く作出される。6 段目（口縁部）の外面に斜格子状の線刻が描かれる。先に右傾斜の刻線が 9 本、下から右へ描かれ、後から左傾斜の刻線が 8 本、上から下へ向かって施される。線刻は一部口縁部まで達している。

E074（図 72）は外面に斜格子状の線刻をもつ。29-3T から出土した胴部の破片である。右傾斜直線 2 本と左傾斜直線 3 本が存在し、右傾斜→左傾斜の順で描かれる。格子目は正方形を呈し、E063 の斜格子文と似る。E077（図 72）は突帯をもつ胴部片である。突帯の上の段に斜行する線刻をもつ。2 方向から線刻されており全体は斜格子状であった可能性が高い。斜行する直線の右側には 3 本の刻みがあり、異なる工具が使用されている。突帯の下段には円形透かし孔が穿孔される。E082（図 73）は突帯を含む胴部片である。29-6T 出土。突帯を挟んで上下段ともに線刻が施される。突帯は高く断面は台形である。突帯上段に斜格子文、下段に直線が短く残る。E083、E084、E085（図 73）は 29-6T 出土の小破片であり、斜格子文の一部である。斜格子文は器壁に深く刻み込まれている。E088（図 73）は 29-3T 出土の小破片である。外面に斜格子状の線刻をもつ。左傾斜の直線が 3 本、右傾斜の直線が 4 本認められ、左傾斜→右傾斜の順で施されている。E090（図 73）は外面に斜格子状の線刻をもつ破片である。29-3T 出土。E091（図 73）は外面に斜格子状の線刻をも

つ破片である。29-6T 出土。左傾斜の直線が 6 本、その上から右傾斜の直線が 3 本残る。線刻は器面に深く刻まれている。

E095 ～ E102 (図 73) は外面に斜格子文をもつ小破片である。29-3T 出土の E099 を除いて、29-6T から出土した。E099 の斜格子は 2 方向の直線が直角に交わらず、格子目は縦長の菱形である。一口に斜格子文と言っても刻みの深度や使用された工具、施文の順番も異なっていた。E104 ～ E107 (図 73) も外面に数本の平行線を持ち、斜格子の線刻をもつと考えられる資料である。いずれも 29-6T から出土している。

線刻画

本調査で出土した線刻をもつ埴輪の多くは、直線を組み合わせた幾何学的なモチーフが多い。その中であって、最上段に鹿が描かれた E033 (図 65) のように、特定のモチーフが描かれた個体も見つかっている。先の細い工具が使用されており、いずれも橙褐色系統である。

E065 (図 71) は胴部の破片である。破片は 29-2T、3T から出土した。突帯の上下段にそれぞれ刻線をもつ。下段には円形透かし孔があり、その横に刻線による区画が描かれ、内部に円弧が重なり合った青海波文状の文様が描かれている。線刻の区画は透かし孔を意識して線刻されており、穿孔後に線刻が施されたと推定可能である。上段は直線がタテ方向、ナナメ方向に線刻され、格子状にも見える。先の細い工具が使用される。

E068、E069 (図 71) は線刻をもつ小片である。29-2T 出土。E068 には「L」字に屈曲する線刻が認められる。破片の下部は横方向のナデが認められ、突帯の直上に描かれていると考えられる。E069 は外面に一部突帯ナデの上から絵画のような線刻が施される。「V」字状の刻線の内部に垂下する直線が描かれる。直線は「V」字状の線に達していない。「V」の右側には逆「L」字状に屈曲する線がある。いずれの資料も先の細い工具が使用されている。

E073 (図 72) は 29-3T 出土。突帯が 2 条残存し、突帯間には先の細い工具で描かれた線刻がある。2 本の蛇行する線が平行し、下方の線から 2 本の直線が 2 組垂下する。四肢をもつ動物を表現した線刻である。この動物は右を向いている可能性が高く、左側の尾は長く表現されている。動物の背に当たる部分には短い直線が刻まれる。動物の下部には「S」字状に蛇行する線と、右傾斜する直線が 1 本ずつ描かれる。突帯を挟んで下の段にも線刻が認められ、突帯のナデ部分に線刻の一部がかかっている。

E080 (図 72) は突帯をもつ破片である。29-3T 出土。突帯の上の段に直線・曲線から成る線刻が描かれる。上部が欠損しており全容は不明であるが、幾何学的模様ではなくモチーフをもった絵画のようである。E093 (図 73) は 29-3T から出土した破片である。外面に弧状の線刻をもつ破片である。

綾杉文

綾杉文の線刻をもつ埴輪も一定数が見つかっている。重なった「V」字と直線を組みあわせた文様で、葉脈状と表現されることもある。盾形などの形象埴輪にも施されるが、本調査で見つかった個体はいずれも円筒埴輪に施されたようである。先端の細い工具が使用される。いずれも橙褐色系

続であると考えられる。

E070 (図 71) は外面に線刻が施された小破片である。29-3T 出土。外面に、直線と「V」字を組み合わせた、綾杉文状の線刻が施される。E075、E076 (図 72) は 29-3T から出土した胴部の破片である。E075 は外面に線刻の綾杉文のような線刻をもつ。縦方向の 1 本の直線から、右側に少なくとも 7 本の反転「N」字状の線刻が描かれる。E076 は突帯を挟んで上下 2 段にわたり線刻が認められる。上段には円形透かし孔が 1 か所あり、その右側に「V」字が複数重なったようなジグザグの線刻が、ハケ目に対しやや右下がりで描かれる。突帯を挟んで下段には、平行する 2 本の線刻がある。E078 (図 72) は突帯をもつ胴部片である。突帯の上下に線刻が施される。突帯の上段には斜行する直線が 1 本、下段には綾杉文が表される。縦方向の直線が 2 本あり、うち 1 本から葉脈状に斜線が描かれる。突帯の下段の線刻は上段のものと比較すると細く、異なる工具の使用が考えられる。他の線刻をもつ埴輪と比較しても下段の線刻は細い。いずれも胎土に砂粒を多く含んでいる。E079、E081 (図 72) は胴部片である。29-3T 出土である。E079 の外面には連続する「V」字状の線が縦に 4 つ描かれ、最後に縦方向の直線が描かれる。1 か所透かし孔をもつ。E081 は突帯をもつ破片で、突帯の上段に線刻をもつ。斜行する直線が左右に描かれ、斜線に挟まれた中央部に「ハ」の字状に短く直線が刻まれる。

幾何学文

斜格子や綾杉文の他にも、直線が組み合わさった線刻資料は多数見つかった。全容は明らかでないが、これらの線刻を幾何学文としてまとめ、報告する。なお、いずれの個体も斜格子や綾杉文と同様の先端の細い工具により刻まれている。橙褐色系統が主体であると考えられる。

E064 (図 71) は口縁部を含む破片である。29-2T からの出土である。外面に線刻が 2 か所施されている。うち 1 本は右傾斜の直線である。口縁端部は平たく面が取られ、横方向にナデられる。E067 (図 71) は線刻をもつ小片である。29-2T 出土。外面にタテ方向、ナナメ方向の線刻が複数認められる。E072 (図 71) は外面に線刻をもつ資料である。29-3T 出土。突帯が 1 条巡り、突帯のナデ部分にかかるように線刻が施される。先の細い工具で描かれた右傾斜の直線 3 本と、それとは異なる工具で描かれた左傾斜の直線 1 本が認められる。E086、E087 (図 73) は 29-3T 出土の小破片である。E086 は突帯を含む破片で、突帯下部に 2 本の直線が「ハ」の字状に刻まれている。E087 は口縁部の破片であり、外面に斜行する複数の斜線が刻まれる。口縁部は外側に開くものの端部の調整が丁寧ではなく、円筒埴輪ではなく形象埴輪の一部である可能性もある。E089 (図 73) は突帯のナデ部分を含む破片である。29-3T 出土。外面に平行する斜線と突帯に平行な直線が表される。E094、E108、E109 (図 73) は 29-3T 出土の小破片で、外面に直線による線刻が施される。

その他

E066 (図 71) は外面に線刻を施される胴部の破片である。29-2T 出土。複数の直線が複数方向に錯綜しており、線刻というより擦過したような痕である。錯綜した線の下には先の細い工具で施された線刻が 1 本認められる。E071 (図 71) は外面に線刻を施される胴部の破片である。29-2T

出土。E066 と似た工具による擦過のような痕跡が縦横に施される。擦過のような線の下には、先の細い工具で施された直線も存在する。E066 と同一個体である可能性がある。突帯は高く作られ、1 か所円形透かし孔が認められる。橙褐色系統である。E092 (図 73) は 29-3T から出土した破片である。突帯を含む破片である。外面に斜め方向の指ナデが見られる。E103 (図 73) は外面に直線が線刻される破片である。29-2T 出土。赤褐色系統であると考えられる。

ヘラ記号

本調査で出土した円筒埴輪の内面には、ヘラ記号が付けられる例がある (図 74)。いずれも円筒埴輪の内面口縁部付近に施される。確認されたヘラ記号は斜線か「×」印である。斜線も「×」印の一部を成していると考えれば、すべて「×」印と判断できる。ヘラ記号は線刻とは明らかに異なる工具が使われており、刻みは浅く幅広である。ヘラ記号をもつ埴輪は小破片であり橙褐色系統・赤褐色系統の判別は困難であった。出土は平成 29 年度の造出し周辺 (I 区) に集中的に分布する。ただしこの傾向は I 区の埴輪出土量が他を凌駕しているためと考えられ、線刻をもつ埴輪のように、場所の指向性とは結びつかないと考えられる。現に、E151 は 27-4T から出土しており、これは後円部隅角部出土であり墳丘造出しからは距離がある (⑤で紹介する)。

E110 ~ E112、E114 ~ E122、E124・E125 は 29-3T 出土である。E113 は表採資料である。E123 は 29-4T 出土である。E126 ~ E131 は 29-2T 出土の破片資料である。

これらの資料のうち、両方向の斜線が認められる個体は E113、E114、E120、E122、E123、E126 であり、「×」印の交点を確認できるのは E113、E120、E123、E126 の 4 個体のみである。E113 は左傾斜→右傾斜の順で斜線が描かれるが、E120、E123、E126 はその逆で右傾斜→左傾斜の順で斜線が引かれる。

ヘラ記号について、施される位置や形状から、埴輪の作者や受注者を区別するための印 (いわゆる窯印) とみることがあるが、本報告では窯との供給関係まで言及していないため、ヘラ記号と呼称した。

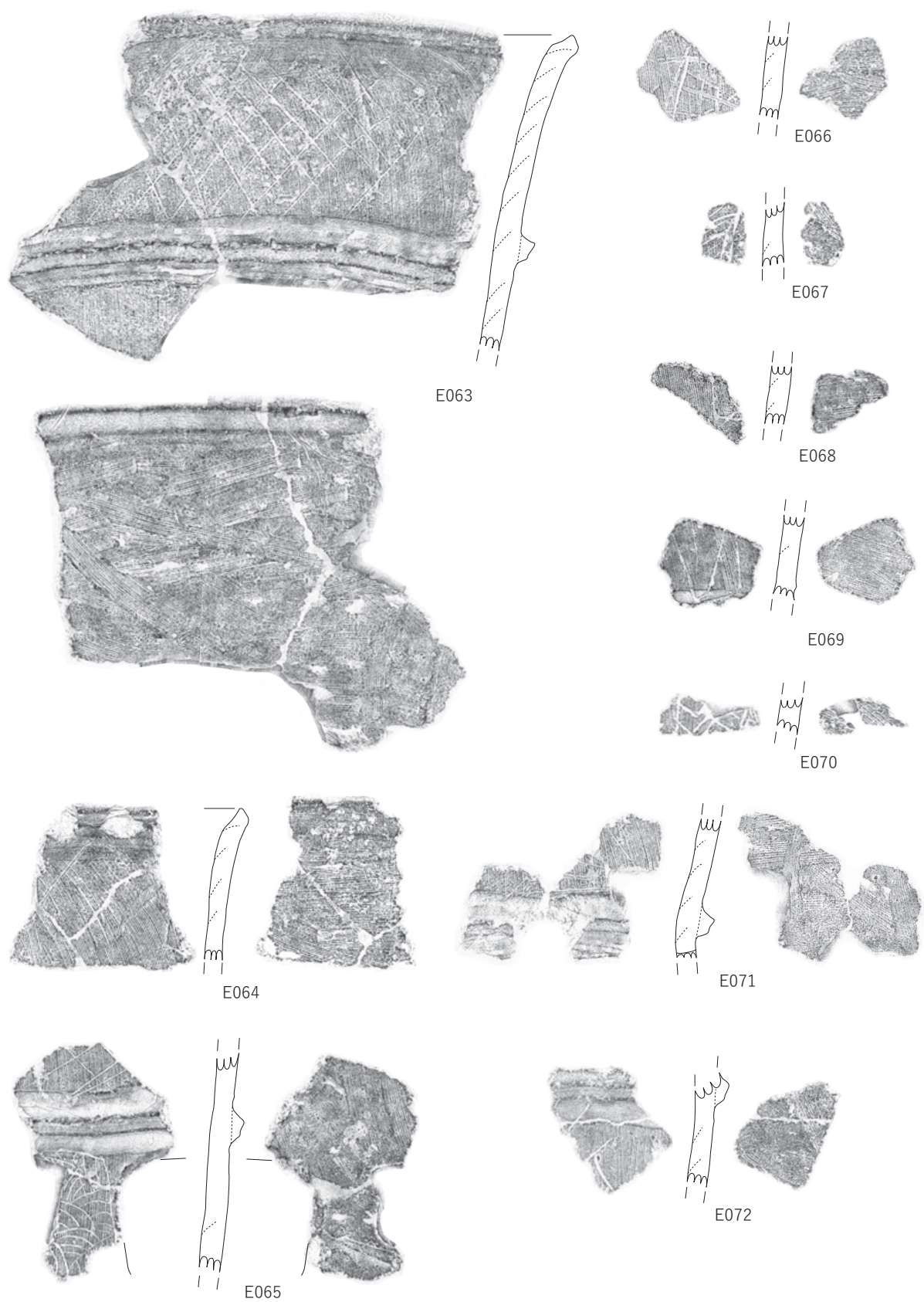


図 71 円筒埴輪⑬

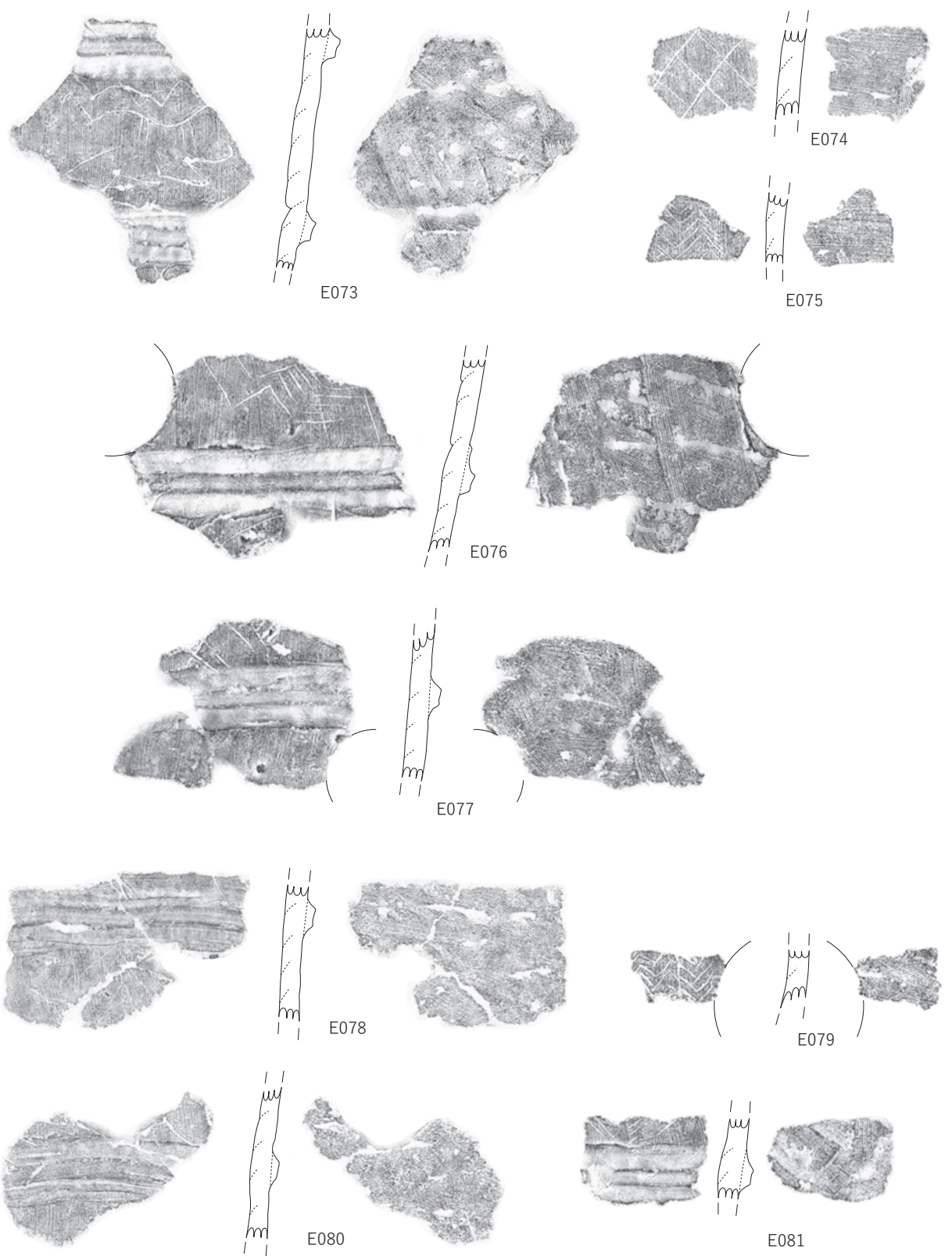


図 72 円筒埴輪⑭



図 73 円筒埴輪⑮

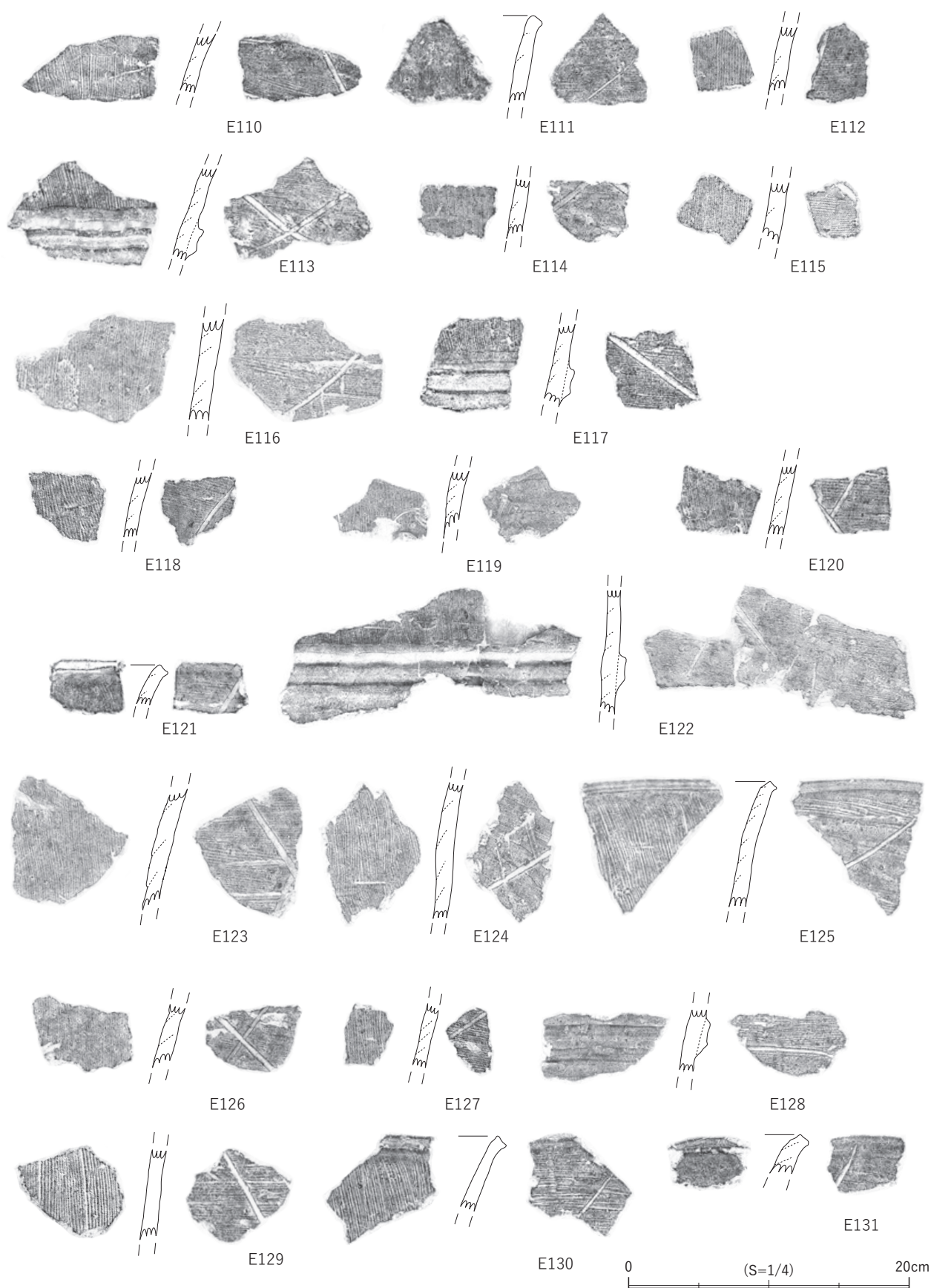


図 74 円筒埴輪①⑥

④ II 区出土円筒埴輪

E132～E135（図 75）は 29-1T 出土。E132 は突帯を含む破片である。突帯は断面「M」字状で稜線が明瞭である。突帯のちょうど裏側の内面には指オサエ痕がある。突帯のエッジ部分には赤彩が認められる。径の大きいチャートを多く含む。黄白色系統である。E133 は口縁部の破片である。口縁部の端面は平たく作られ外面に弱く折り返されている。口縁直下は丁寧にヨコナデされる。橙褐色系統の破片である。E134 は突帯を含む胴部の破片である。方形透かし孔が 1 か所穿孔される。突帯は断面が台形状で高く作られる。橙褐色系統である。E135 は口縁部の小破片である。口縁部端面は平たく、丁寧にヨコナデ調整される。橙褐色系統の破片と考えられる。

E137（図 76）は胴部の破片である。25-1T 出土。突帯は低く断面形状は「M」字形。内面には輪積み痕が認められる。橙褐色系統の破片と考えられる。

E136（図 75）、E138、E139（図 76）は 29-2T 出土。E136 は胴部の破片である。突帯は扁平で断面「M」字形、雑にナデ付けられている。円形透かし孔が 1 か所穿孔されている。内面に輪積み痕が認められる。色調は明赤褐色であり、赤褐色系統の破片である。E138 は突帯を含む胴部の破片である。突帯は直線的でなく蛇行し、断面は扁平である。突帯の裏には指オサエ痕が認められる。赤褐色系統の破片である。E139 は、突帯が高く断面「M」字形である。橙褐色系統の破片である。

E140～E143（図 76）は 25-3T 出土。E140 は底部破片である。内面に手のひら圧痕が見られる他、底部に篠状圧痕、縄のような圧痕がある。赤褐色系統の破片である。E141 は突帯をもつ破片である。断面形状は扁平で「M」字形、雑にナデ付けられる。円形透かし孔が 1 か所存在する。赤褐色系統に属する破片である。E142 は胴部片である。外面に 2 方向のハケ調整が見られる。赤褐色系統である。E143 は突帯を含む破片である。突帯は断面「M」字形で丁寧にナデられる。ハケ目の間隔が広く特徴的である。赤褐色系統の破片である。

E146（図 77）は 27-2T から出土した胴部の破片である。扁平で断面「M」字形の突帯 1 条と、円形の透かし孔が 1 か所穿孔される。胎土に大粒のチャートを多く含む。橙褐色系統の破片である。E144～E148（図 76・77）は 27-3T 出土。E144 は突帯をもつ破片である。突帯の上部に縦方向の 4 本の刻線が認められるが、全容は不明である。突帯の断面は「M」字形を呈する。胎土にチャートを多く含む。橙褐色系統の破片である。E145 は小破片であり、突帯を 1 条もつ。突帯断面は扁平で「M」字形である。黄白色系統に属すると考えられる。E147 は底部を含む破片である。突帯が 1 条あり、丁寧にナデられている。底部に篠状圧痕が認められる。胎土に砂粒を多く含んでおり、橙褐色系統である可能性が高い。E148 は胴部破片である。突帯が 1 条巡っており、断面は高く「M」字形を呈する。突帯や破断面が一部赤くなっているが、胎土の摩耗によるものである。黄白色系統である。

⑤ III 区出土円筒埴輪

E149、E150、E151（図 77）は 27-4T 出土の破片資料である。E149 は底部の破片であり、器壁は厚い。内面底部付近には手のひら圧痕が、底部には篠状圧痕が認められる。底部及び外面には板目の圧痕が残っており、板を押し付けて器壁を成形したと考えられる。赤褐色系統である。E150 は口縁部の破片である。口縁部は丸く、端部はやや平たく整形される。外面口縁部直下にはタテハ

ケ調整を消すようにヨコナデされる。橙褐色系統である。E151 は胴部の小破片である。内面にヘラ記号をもち、上半分が欠損するが「×」が付けられていたと考えられる。内面には輪積み痕も認められる。赤褐色系統の破片である。

⑥ IV 区出土円筒埴輪

E152 (図 77) は 30-1T 出土の破片である。朝顔形円筒埴輪の肩部の破片である可能性が高い。外面には斜めのハケがあり、複数方向から調整されている。赤褐色系統である。E153 (図 77) は 30-1T 出土の円筒埴輪である。I 区以外で径を復元できた唯一の個体である。底部から 3 段が残存し、破片の上部には突帯のナデが認められる。突帯は高く断面「M」字状。内面にはナナメ方向に巻き上がる輪積み痕が見られる。底部には植物の繊維状の圧痕が残る。胎土にはチャートが多く含まれる。橙褐色系統の円筒埴輪である。

II 区出土

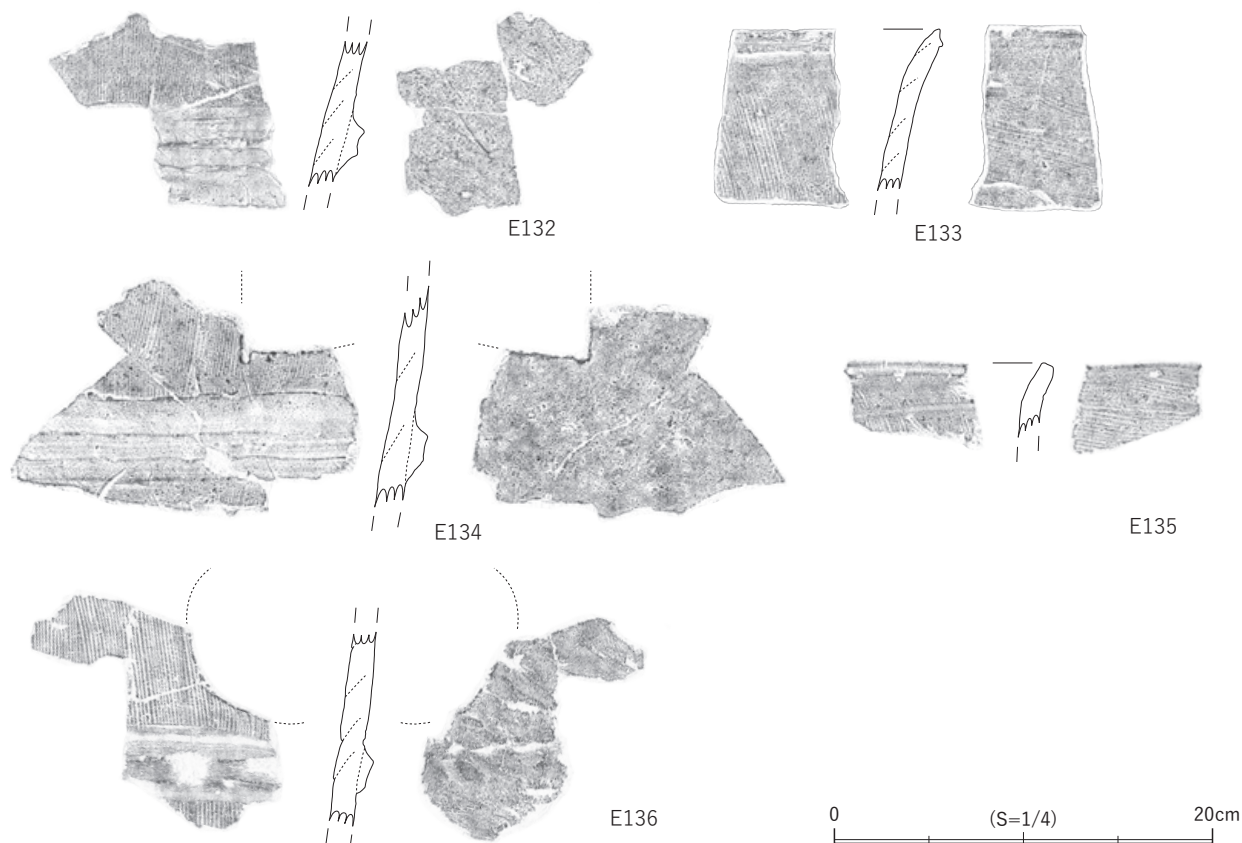


図 75 円筒埴輪⑰

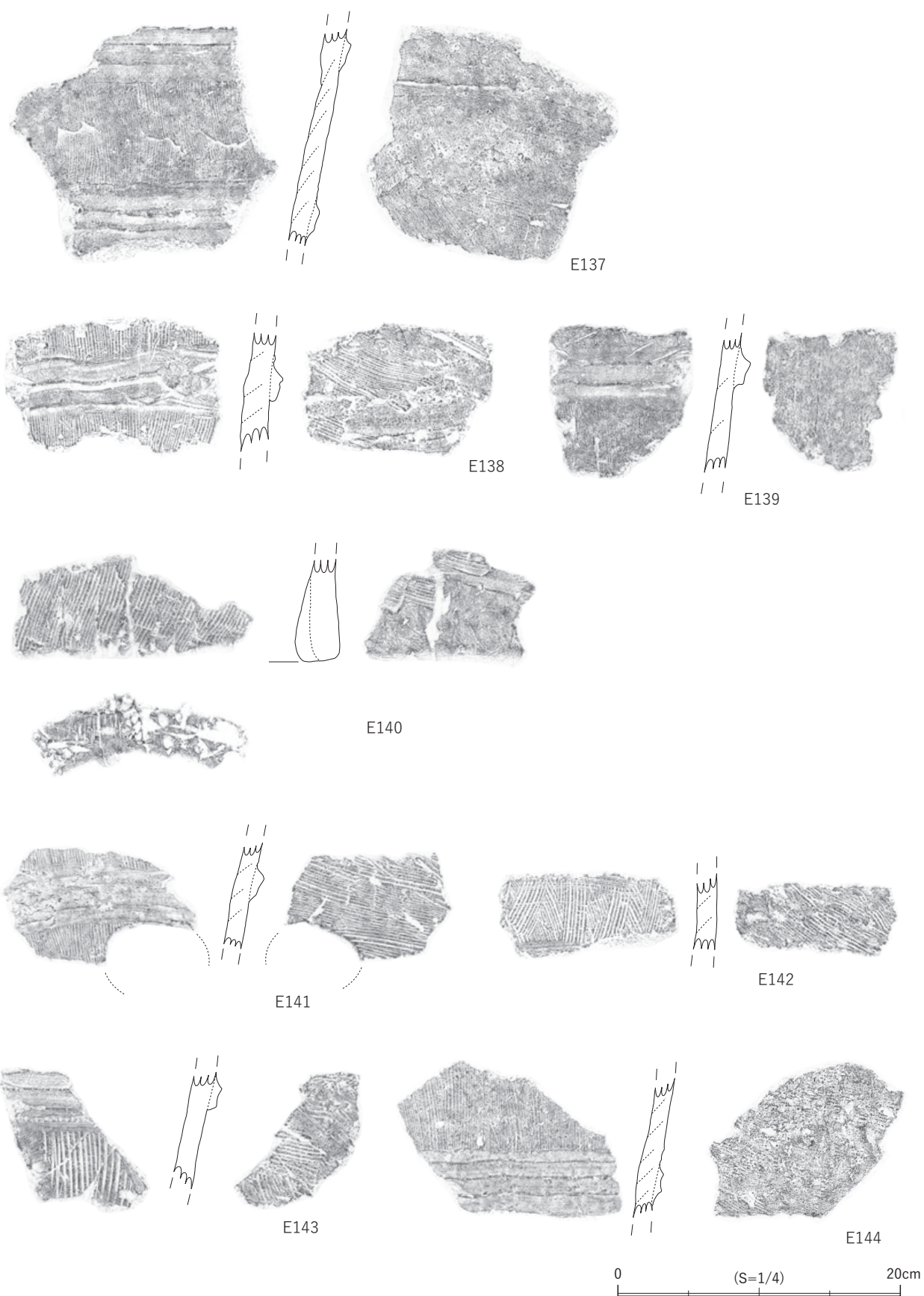
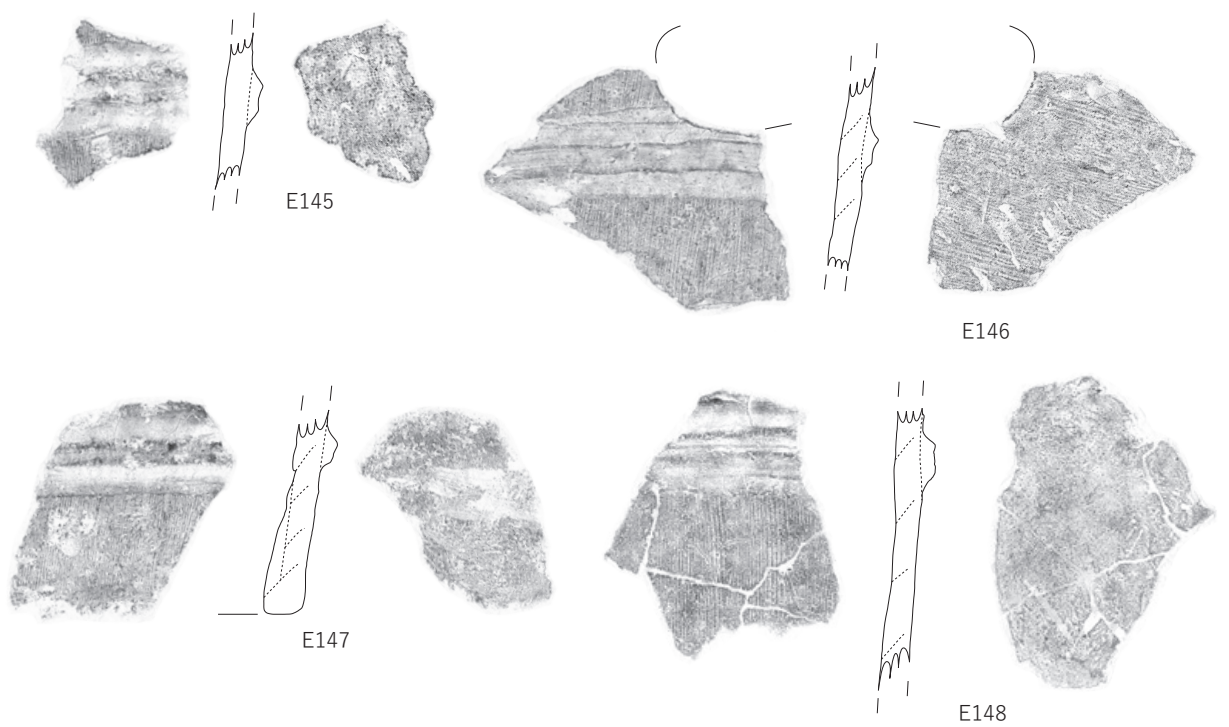
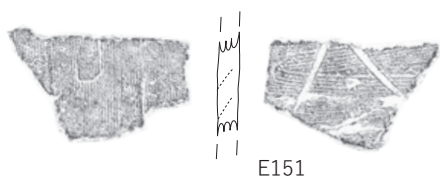


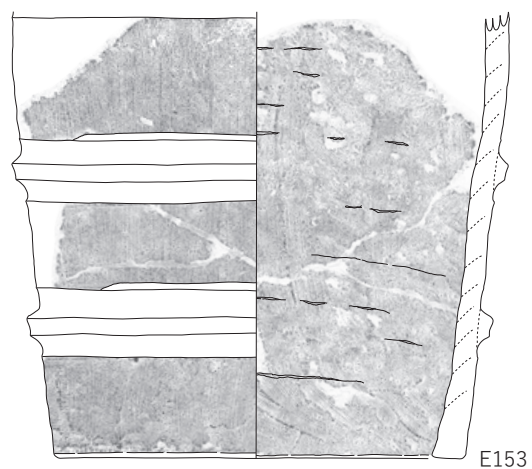
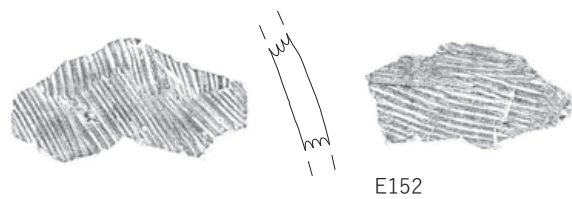
図 76 円筒埴輪⑱



III 区出土



IV 区出土



0 (S=1/4) 20cm

0 (S=1/5) 20cm

図 77 円筒埴輪⑨

観察表の凡例（再掲）

- 1 口径や器高等の数値の欄で、[]は推定値、()は遺存値を示す。単位は cm。
- 2 色調は『新版 標準土色帖』に準拠した。
- 3 突帯、段の呼称は、便宜的に全て 5 条 6 段と仮定して数値を示した。
- 4 含有物は胎土中で観察可能であった混入物を記載した。記号は下記参照。
A 石英 B 長石 C 角閃石 D 酸化鉄 E チャート F 白色針状物質 G 雲母 H 片岩 I パミス J 砂粒

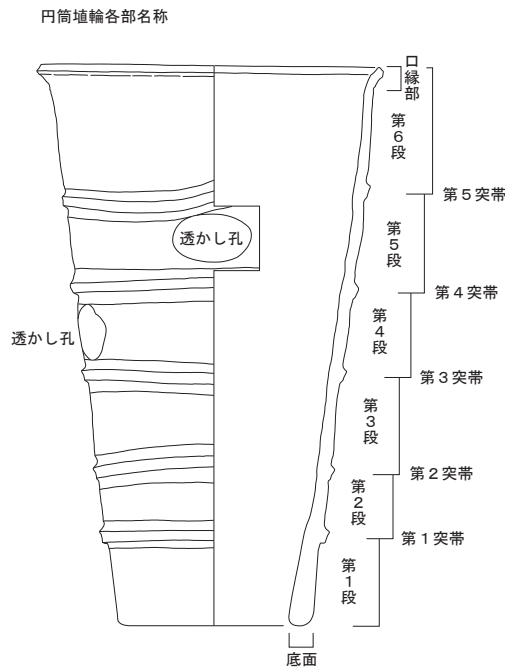


表 1 円筒埴輪観察表

No.	出土区	調査年度	トレンチ	分類1	分類2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E001	I 区	H29	3T	円筒	橙	外面にぶい橙 5YR6/6 第3・4突帯淡橙 5YR8/4 内面橙 7.5YR6/6	A B D E (10mm 含む) J	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコナ デ	— (74.7) [29.8]	— 13.1 14.2 13.3 19.2	方形透かし孔 第2・4段、穿孔方法に 差あり 外面布目圧痕 底部に砂付着
E002	I 区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/8	ABDEI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ 手のひら圧痕 (内)	— (16.0) [27.9]	— — — — 8.7	底部の継ぎ目2箇所 底部篠状圧痕
E003	I 区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/6	ABDEI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ 手のひら圧痕 (内)	— (16.4) [26.2]	— — — — 10.1	途中で工具を変えている 底部篠状圧痕・粘土付着
E004	I 区	H29	2T	円筒	橙	外面にぶい橙 7.5YR7/4 内面褐灰 7.5YR4/1	ABCD	不良	外面タテハケ 内面ナナメハケ 手のひら圧痕 (内)	— (21.2) [25.9]	— — — — 10.5	竹管圧痕3か所

No.	出土区	調査年度	トレンチ	分類1	分類2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E005	I区	H29	2T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABCDE (大) J (多)	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	[41.9] (30.4) —	17.8 — — —	円形透かし孔
E006	I区	H29	2T	円筒	赤	橙 2.5YR6/8	含有物多い ABC(多) D(多) EI	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコハ ケ	[37.6] (43.9) —	18.5 12.3 9.9 — —	円形透かし孔
E007	I区	H29	2T	円筒	赤	外面 にぶい赤褐 5YR5/4 内面 明赤褐 5YR5/6	含有物多い ABCDEJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ 手のひら圧痕 (内)	— (25.5) [14.9]	— 14.9 — —	円形透かし孔 布目圧痕
E008	I区	H29	2T	円筒	橙	外面 橙 5YR6/8 内面 橙 7.5YR7/6	ABCDE	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ	[42.4] (24.5) —	18.4 — — — —	円形透かし孔 輪積痕明瞭
E009	I区	H29	2T	円筒	橙	橙 7.5YR6/6	ABCDEIJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメナデ・ナナメ ハケ	— (27.0) —	— 11.5 — —	円形透かし孔 輪積痕
E010	I区	H29	2T・ 4T	円筒	橙	橙 2.5YR6/8	ABCDEG	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・指ナデ	[37.0] (24.9) —	16.0 — — — —	円形透かし孔 輪積痕明瞭
E011	I区	H29	2T	円筒	橙	外面 橙 7.5YR7/6 内面 にぶい橙 7.5YR6/4	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・指ナデ	[38.2] (31.9) —	17.2 11.3 — — —	円形透かし孔 輪積痕
E012	I区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/6	ABCDEI	良好	外面タテハケ・指ナデ 内面ナデ・手のひら圧痕	— (25.8) [27.0]	— — 7.0 9.5	底部棒状圧痕
E013	I区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/8	ABCDEI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ 手のひら圧痕 (内)	31.6 (30.6) —	— — 11.2 10.5	底部圧痕
E014	I区	H29	2T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABDEIJ (多)	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (15.7) [28.9]	— — — 7.1	底位置突帯 底部繊維状圧痕
E015	I区	H29	2T	円筒	橙	外面 橙 7.5YR7/6 内面 橙 5YR6/8	ABCDEIJ (多)	普通	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ナナメハ ケ	— (15.2) —		
E016	I区	H29	2T	円筒	橙	橙 2.5YR6/6	ABDE (多) IJ (多)	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・指ナデ	— (31.0) —	— 10.5 9.0 —	突帯布目圧痕
E017	I区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/6	ABCDE	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ヨコナデ	33.3 (31.8) —	17.8 10.3 — — —	円形透かし孔 突帯裏指オサエ痕
E018	I区	H29	2T	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/6	ABCD (多) EI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコハ ケ・ナデ	— (27.8) —	— 11.1 11.1 —	円形透かし孔

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E019	I 区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/6	含有物多い ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ナナメハ ケ・タテ指ナデ	37.1 (25.6) —	15.0 — — —	円形透かし孔
E020	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABCDE (多) I	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ・ ナナメ指ナデ 突帯指オサエ	— (27.8) —	— 11.0 — —	円形透かし孔
E021	I 区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/6	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ 手のひら圧痕 (内)	— (25.0) [27.3]	— — — 10.5 10.7	底部篠状圧痕
E022	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 7.5YR7/6	ABDEFJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	[40.1] (17.7) —	15.3 — — — —	
E023	I 区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/6	ABCDEI	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (7.9) —		円形透かし孔
E024	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR7/6	ABCDE (大) FJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ後、指ナ デ	— (17.7) —		方形透かし孔
E025	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 7.5YR7/6	ABD (多) E (大・ 多) J	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ナデ	— (22.4) —	— — 12.8 —	突帯付近布目圧痕 突帯裏指頭痕
E026	I 区	H29	2T	円筒	橙	橙 7.5YR6/6 突帯 橙 5YR6/8	ABDE (大) J	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ後、ナデ、 タテ指ナデ	— (34.4) —	— 13.7 13.3 —	
E027	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR7/6	ABDE (多) FJ	良好	外面タテハケ 内面ナデ底部丁寧な調 整、一部指圧痕	— (14.8) [30.0]	— — — 5.1	低位置突帯 突帯布目圧痕
E028	I 区	H29	2T (5T)	円筒	赤	明赤褐 5YR5/8	ABCDE	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコハ ケ	[35.6] (33.1) —	16.1 13.8 — —	円形透かし孔
E029	I 区	H29	2T	円筒	赤	橙 2.5YR6/6	ABCDEJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコハ ケ	34.4 (32.7) —	16.6 11.5 — —	円形透かし孔
E030	I 区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 5YR5/6	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (47.1) [29.2]	— 10.7 10.1 9.0 9.2	低位置突帯 円形透かし孔 底部篠状圧痕
E031	I 区	H29	2T	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/8	ACDEI	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ・ 指オサエ	[38.3] (51.3) —	18.3 11.5 9.8 10.3 —	円形透かし孔
E032	I 区	H29	2T	円筒	橙	橙 5YR7/6	ABDE (大) IJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (17.9) 29.0	— — — 11.8	底部篠状圧痕

No.	出土 区	調査 年度	トレン チ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E033	I 区	H29	2T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ・ 一部タテ指ナデ・強い擦 過痕、口縁直下ナナメハ ケ・ヨコハケ・端部ヨコ ナデ	42.0 (52.5) —	14.4 12.5 11.1 10.3 — —	円形透かし孔4箇所 布目圧痕 線刻・鹿。その上から指 ナデ「×」印
E034	I 区	H29	2T (5T)	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEI	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ナデ・指 オサエ・タテヨコ方向指 ナデ	42.0 (58.7) —	15.1 12.3 9.9 11.9 7.7 —	円形透かし孔 輪積痕明瞭 ヘラ記号タテ2本
E035	I 区	H29	2T	円筒	赤	橙 2.5YR6/8	ABCDEI	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・指オサ エ痕	— (34.8) —	— 15.0 10.2 — —	円形透かし孔
E036	I 区	H29	6T	円筒	橙	橙 7.5YR6/6	ABDE (大) J 大 きい石	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・一部ナ デ	38.6 (33.7) —	14.1 12.6 — — — —	円形透かし孔 突帯細い ヘラ記号 (内) 薄手 突帯指オサエ痕 黒斑あり
E037	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/8	ABCD (多) E (多) J	普通	外面タテハケ (細かい) 内面ナナメハケ・タテ指 ナデ	[36.4] (28.4) —	17.4 — — — — —	E051 と同一個体か 円形透かし孔 輪積痕
E038	I 区	H29	6T	円筒	橙	外面橙 5YR6/6 内面にぶい褐 7.5YR5/4	ABDEFIJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ ・ヨコハケ・ナデ	[47.8] (34.0) —	15.4 11.7 — — — —	円形透かし孔 焼きムラあり
E039	I 区	H29	6T	円筒	橙	橙 7.5YR7/6	ABCDEIJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコナ デ	— (18.7) —	15.4 — — — — —	円形透かし孔 輪積痕
E040	I 区	H29	2T	円筒 (黄)		浅黄橙 7.5YR8/4	含有物少ない ABCDE (大)	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (20.6) —	— 12.5 — — —	方形透かし孔
E041	I 区	H29	3T	円筒 (赤)		橙 5YR6/6	ABDEF	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (9.1) —		
E042	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 5YR5/6	ABDE (大) FI	良好	外面タテハケ 内面ナナメナデ	— (7.9) —		底部篠状圧痕
E043	I 区	H29	2T	円筒	橙	橙 2.5YR6/6	ABCDEIJ (多)	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・指ナデ	— (15.9) —		突帯付近に布目圧痕
E044	I 区	H29	3T	円筒	橙	にぶい橙 5YR6/4	ABE (多) F	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (25.8) —		円形透かし孔
E045	I 区	H29	2T	円筒	赤	赤褐 2.5YR4/6	ABCD (多) EI	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ヨコナデ	[30.8] (16.5) —		
E046	I 区	H29	2T (5T)	円筒 (黄)		にぶい黄橙 10YR7/4	ABCDE	普通	外面タテハケ・ナデ 内面ナデ	— (4.1) —		口縁の断面形状特徴的

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E047	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/8	ABCDEJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・指オサ エ痕	— (7.3) —		透かし孔 輪積痕
E048	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 7.5YR7/6	含有物多い ABD (多) E (多) FJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメナデ・指オサ エ	— (25.7) —	— — 15.7 — —	方形透かし孔
E049	I 区	H29	6T	円筒	橙	外面橙 5YR6/6 内面にぶい橙 5YR6/3	ABCD (多) E (大) HIJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコハ ケ・指オサエ	— (21.0) —	15.7 — — — —	輪積痕
E050	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR7/8	ABCDEJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ、一部ヨ コナデ	— (20.5) —	— — 13.6 — —	輪積痕明瞭 円形透かし孔
E051	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/8	ABCDE (大) J	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ・ 一部タテ指ナデ	— (40.6) —	— — 12.9 9.6 10.2 — —	E037 と同一個体か 輪積痕
E052	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/6	小石含 A (大) BDE (大) J	良好	外面タテハケ 2 種 内面ナナメハケ・ナデ	— (16.9) —	— — 9.6 — —	円形透かし孔
E053	I 区	H29	6T	円筒	(橙)	橙 7.5YR7/6	ABDEJ	良好	内面ナデ	— (3.8) —		底部粘土付着痕 貼り付け剥落
E054	I 区	H29	2T	円筒	橙	外面橙 5YR6/6 内面明赤褐 5YR5/6	ABDE (多・大)	良好	外面タテハケ 内面タテナデ・ヨコナデ	— (6.6) —		突帯布目圧痕
E055	I 区	H29	2T	円筒	橙	橙 7.5YR7/6	ABCDI	良好	外面タテハケ・口縁直下 2 本の横線 内面ヨコハケ	— (7.6) —		
E056	I 区	H29	6T	円筒	赤	外面にぶい赤褐色 5YR5/3 内面褐灰色 5YR4/ 1	ABD	不良	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (23.5) —	— — 8.4 — —	焼きムラ 器面ザラザラ 円形透かし孔 輪積痕
E057	I 区	H29	2T (5T)	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABD (多) E (大) GJ	良好	外面タテハケ・口縁直下 2 本の沈線を伴うヨコナ デ 内面ヨコハケ	— (5.8) —		
E058	I 区	H29	3T	円筒	橙	にぶい橙 5YR6/4	ABCDE (大)	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (8.2) —		突帯扁平・真ん中に沈線
E059	I 区	H29	2T	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/6	BDEI	良好	外面タテハケ・口縁直下 ナデ 内面ヨコハケ・ナデ	— (8.8) —		
E060	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR7/8	ABCDE (大・多) F	普通	外面ヨコナデ 内面ヨコハケ・ナデ	— (5.4) —		

No.	出土区	調査年度	トレンチ	分類1	分類2	色調	胎土	焼成	調整	口径器高底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E061	I区	H29	3T	朝顔	橙	橙 7.5YR7/6	ACD (多) E (大)	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (8.6) —		
E062	I区	H29	6T	朝顔	橙	橙 7.5YR7/6	AD (多) E (大)	良好	外面タテハケ後ナデ 内面ナデ	— (7.4) —		
E063	I区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABC (多) DE (大) FHJ (多)	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ 口縁付近指オサエ	— (21.6) —	14.8 — — — —	線刻・格子状 (外) 輪積痕
E064	I区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDE (大) IJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコハ ケ	— (10.4) —		線刻 (外)
E065	I区	H29	2T・ 3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/8	ABCDEHIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (15.1) —		突帯挟んで線刻 2 段あり 盾か (外) 円形透かし孔
E066	I区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEIJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (5.6) —		線刻 (外)
E067	I区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (4.5) —		線刻 (外)
E068	I区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (4.0) —		線刻「L」 (外)
E069	I区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCE (大) HIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (5.8) —		突帯上から線刻 (外)
E070	I区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (2.6) —		線刻・綾杉文 (外)
E071	I区	H29	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEFHJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・タテ方 向ナデ	— (9.5) —		線刻 (外) 円形透かし孔
E072	I区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABC (多) DEJ (多)	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (7.8) —		線刻 (外)
E073	I区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (16.5) —	12.4 — — —	線刻 (外) 突帯下にも線刻あり 輪積痕明瞭
E074	I区	H29	3T	円筒	橙	橙 2.5YR6/6	ABCDEHJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・一部タテ ハケ	— (6.3) —		線刻・格子状 (外) 輪積痕

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E075	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEFHJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (4.8) —		線刻・綾杉文（外）
E076	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (13.1) —		線刻（外） 円形透かし孔 輪横痕明瞭
E077	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (10.7) —		線刻（外） 円形透かし孔 粘土付着（外） 輪横痕
E078	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEIJ（多）	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (9.2) —		線刻・綾杉文（外） 輪横痕
E079	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/8	ABCDEHJ（多）	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (4.0) —		線刻・綾杉文（外） 円形透かし孔
E080	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (10.3) —		線刻（外） 輪横痕
E081	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 2.5YR6/6	ABCDEHJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (5.6) —		線刻（外）
E082	I 区	H29	6T	円筒	（橙）	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEGHIJ	良好	内面ナデ	— (3.7) —		線刻・格子状（外）
E083	I 区	H29	6T	円筒	（橙）	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEJ	良好	内面ナデ	— (1.8) —		線刻・格子状（外）
E084	I 区	H29	6T	円筒	（橙）	明赤褐 2.5YR5/6	ABDEHJ	良好	内面ナデ	— (2.4) —		線刻・格子状（外）
E085	I 区	H29	6T	円筒	（橙）	明赤褐 2.5YR5/6	ABDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (2.5) —		線刻（外）
E086	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/8	ABCDEJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (4.9) —		線刻（外） 輪横痕
E087	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABCDEJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (4.9) —		線刻（外） 口縁部
E088	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (5.3) —		線刻・格子状（外）

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E089	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 2.5YR6/6	ABCDEHJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (4.2) —		線刻（外）
E090	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 2.5YR6/6	ABCDEJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (4.2) —		線刻・格子状（外）
E091	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (5.2) —		線刻・格子状（外）
E092	I 区	H29	3T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABCD（大）J	良好	外面タテハケ・強いナ メナデ 内面ナナメハケ・ナデ	— (6.3) —		
E093	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHJ	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (2.5) —		線刻（外）
E094	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (1.7) —		線刻（外）
E095	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (2.5) —		線刻・格子状（外）
E096	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABDHIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (1.5) —		線刻・格子状？（外）
E097	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABDEJ	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (2.8) —		線刻・格子状（外）
E098	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABDEJI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (2.5) —		線刻・格子状（外）
E099	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEI	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (4.0) —		線刻・格子状（外）
E100	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEHJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (3.9) —		線刻・格子状（外）
E101	I 区	H29	6T	円筒		橙 2.5YR6/6	ABDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (2.8) —		線刻・格子状（外）
E102	I 区	H29	6T	円筒		橙 2.5YR6/6	ABCDEHIJ	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (4.1) —		線刻（外）

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E103	I 区	H29	2T (5T)	円筒		外面灰黄褐 10YR5/2 内面にぶい橙 7.5YR6/4	BDEJ	不良	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (4.9) —		ヘラ記号 (外) 輪横痕
E104	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面タテナデ	— (5.4) —		線刻 (外)
E105	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/8	ABCDEIJ	良好	内面ナナメハケ	— (4.1) —		線刻 (外)
E106	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABDEHJ	良好	外面タテハケ・一部指痕 あり 内面ナナメナデ	— (3.5) —		線刻・平行斜線 5 本 (外)
E107	I 区	H29	6T	円筒		明赤褐 2.5YR5/6	ABDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ヨコナ デ	— (5.0) —		線刻 (外)
E108	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (3.4) —		線刻 (外)
E109	I 区	H29	3T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABDEJ	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (1.7) —		線刻・平行線 (外)
E110	I 区	H29	3T	円筒		橙 5YR6/6	ABCDE	良好	外面タテハケ・一部ナデ 内面ヨコハケ・ヨコナデ	— (4.0) —		ヘラ記号 (内)
E111	I 区	H29	3T	円筒		外面橙 7.5YR7/6 内面浅黄橙 7.5YR8/4	ABD (多) E	良好	外面タテハケ後、ナデ 内面ヨコハケ後、ナデ	— (6.2) —		ヘラ記号 (内)
E112	I 区	H29	3T	円筒		橙 5YR7/6	ABCDE (多) FJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (4.9) —		ヘラ記号「/」 (内)
E113	表採	H29	表採	円筒		にぶい赤褐 5YR5/4	ABDE (多・大) F	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (6.6) —		ヘラ記号「×」 (内) 突帯歪む
E114	I 区	H29	3T	円筒		橙 5YR6/6	ABCDEI	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (4.3) —		ヘラ記号「×」か (内)
E115	I 区	H29	3T	円筒		外面赤褐 5YR4/8 内面明赤褐 5YR5/8	ABCDEIJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (4.5) —		ヘラ記号 (内)
E116	I 区	H29	3T	円筒		橙 7.5YR6/6	A (多) BCDE (多・大) FJ	普通	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (7.3) —		ヘラ記号 (内) 輪横痕 黒斑あり (外)

No.	出土 区	調査 年度	トレン チ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E117	I区	H29	3T	円筒		橙 5YR7/8	ABDE (大) IJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (6.0) —		ヘラ記号 (内)
E118	I区	H29	3T	円筒		橙 5YR6/6	ABDE (大)	良好	外面タテハケ・ナデ 内面ヨコハケ後ナデ	— (4.8) —		ヘラ記号 (内)
E119	I区	H29	3T	円筒		にぶい赤褐 5YR5/4	ABCDE	良好	外面タテハケ・ナデ 内面ヨコナデ	— (4.8) —		
E120	I区	H29	3T	円筒		にぶい橙 7.5YR7/4	ABDEF	良好	外面タテハケ・ナデ 内面ヨコハケ・ナデ	— (5.1) —		ヘラ記号「×」(内)
E121	I区	H29	3T	円筒		橙 5YR6/6	ABDE (大) F	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (2.9) —		ヘラ記号 (内) 口唇部凹む
E122	I区	H29	3T	円筒		橙 5YR6/6	ABCDEFJ	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ナデ・ 指オサエあり	— (8.9) —		ヘラ記号「×」(内)
E123	I区	H29	4T	円筒		橙 5YR6/6	A (多) BD (多) E	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (9.1) —		ヘラ記号「×」(内) 布目圧痕
E124	I区	H29	3T	円筒		橙 5YR6/6	ABDE (大) F	良好	外面タテハケ 内面丁寧なナデ	— (9.8) —		ヘラ記号 (内)
E125	I区	H29	3T	円筒		橙 7.5YR7/6	ABCDE (多) I	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ナデ	— (8.9) —		ヘラ記号「×」(内)
E126	I区	H29	2T	円筒		橙 7.5YR7/6	ABCDE	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ後ナデ	— (4.7) —		ヘラ記号「×」(内)
E127	I区	H29	2T	円筒		橙 7.5YR6/6	ABCDE (大)	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (4.1) —		ヘラ記号 (内)
E128	I区	H29	2T	円筒		外面橙 7.5YR7/6 内面浅黄橙 7.5YR8/4	ABCD (多) E (大) IJ	良好	外面ヨコナデ 内面ヨコハケ	— (4.4) —		ヘラ記号 (内)
E129	I区	H29	2T	円筒		橙 7.5YR7/6	ABDE	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (6.5) —		ヘラ記号「×」(内)
E130	I区	H29	2T	円筒		橙 7.5YR7/6	ABD (多) E (大)	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (5.3) —		ヘラ記号 (内) 口縁形状特徴的

No.	出土 区	調査 年度	トレン チ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E131	I 区	H29	2T	円筒		にぶい橙 5YR6/4	ABDEF	良好	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ	— (2.8) —		ヘラ記号 (内)
E132	II 区	H29	1T	円筒	黄	外面灰白 10YR8/2 内面淡黄橙 10YR8/4	ADE (大)	良好	外面タテハケ 内面強いナデ・指オサエ	— (7.7) —		
E133	II 区	H29	1T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABDEF	良好	外面タテハケ、口縁直下 のみナデ 内面ヨコハケ	— (8.6) —		輪積痕 口縁形状特徴的
E134	II 区	H29	1T	円筒	橙	赤褐色 5YR5/6	ABDE (大) F	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (11.7) —		方形透かし孔
E135	II 区	H29	1T	円筒	橙	橙 5YR6/6	ABDEF	良好	外面タテハケ後ヨコナ デ、口縁直下横線巡る 内面ヨコハケ	— (4.0) —		
E136	II 区	H25	2T	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/8	ABCDEI	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (10.3) —		輪積痕 円形透かし孔
E137	II 区	H25	1T	円筒	橙	にぶい橙 7.5YR7/4	A (大) BCDE (大・多)	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ後強いナ デ	— (15.3) —	— 11.9 — —	輪積痕 突帯低い
E138	II 区	H25	2T	円筒	赤	赤褐色 2.5YR4/6	ABCDE	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (8.5) —		突帯蛇行する 横線あり 輪積痕 指オサエ
E139	II 区	H25	2T	円筒	橙	橙 7.5YR7/6	ABCDE (大)	良好	外面タテハケ 内面タテナデ	— (9.9) —		
E140	II 区	H25	3T	円筒	赤	外面にぶい橙 5YR6/4 内面橙 5YR6/8	ABCDE	普通	外面タテハケ 内面手のひら圧痕後、ナ デ・ナナメハケ	— (7.3) —		やや傾斜したハケ 底部篠状圧痕
E141	II 区	H25	3T	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/6	ABCD (多) E	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (7.5) —		円形透かし孔
E142	II 区	H25	3T	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDE (大) H	良好	外面タテハケ 内面ナデ・ナナメハケ	— (5.4) —		外側タテハケ方向2種類 輪積痕
E143	II 区	H25	3T	円筒	赤	赤褐色 2.5YR4/6	ABCDEI	良好	外面タテハケ・工具痕あ り 内面ナナメハケ・ナデ	— (8.3) —		
E144	II 区	H27	3T	円筒	橙	橙 2.5YR6/6	ABCDE (大) I	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (9.9) —		突帯低い 線刻

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	分類 1	分類 2	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	第6段高 第5段高 第4段高 第3段高 第2段高 第1段高	備考
E145	Ⅱ区	H27	3T	円筒	黄	外面灰白 10YR8/2 内面にぶい黄橙 10YR7/3	ABDE (多)	良好	外面タテハケ 内面強いナデ	— (8.3) —		突帯低い
E146	Ⅱ区	H27	2T	円筒	橙	明赤褐 2.5YR5/6	ABCE (大) I	良好	外面タテハケ 内面ナナメハケ	— (10.8) —		円形透かし孔 突帯低い
E147	Ⅱ区	H27	3T	円筒	(橙)	橙 5YR6/6	ABCDEHJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (10.8) —		輪積痕 底部篠状圧痕
E148	Ⅱ区	H27	3T	円筒	黄	灰白 10YR8/2	ABDE (大)	良好	外面タテハケ 内面ナデ	— (14.9) —		
E149	Ⅲ区	H27	4T	円筒	赤	明赤褐 2.5YR5/6	ABD	良好	外面タテハケ 内面手のひら圧痕・ナデ	— (4.4) —		底部篠状圧痕
E150	Ⅲ区	H27	4T	円筒	橙	にぶい黄橙 10YR7/3	ABCD	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ・ナナメハ ケ	— (6.3) —		
E151	Ⅲ区	H27	4T	円筒	赤	橙 5YR6/6	ABDE	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ	— (5.5) —		へら記号「×」(内)
E152	Ⅳ区	H30	1T	朝顔	赤	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDI	良好	外面タテハケ 内面ヨコハケ後ナデ	— (6.2) —		ハケ目粗い
E153	Ⅳ区	H28・ H30	30- 1T	円筒	橙	外面橙 5YR6/6 内面にぶい橙 5YR6/4	ABCDEGJ	普通	外面タテハケ 内面ナナメハケ・ナデ	— (29.5) [27.2]	— — — 10.3 8.6	輪積痕、斜めに上がる 底部繊維状圧痕

第6節 形象埴輪

①概要

図化可能で形象埴輪であると判断できる個体のうち、全体を復元できるものは皆無である。その出土位置は、墳丘造出し周辺（Ⅰ区）で6点、後円部側内堀から4点（Ⅱ区・Ⅲ区）、中堤造出し周辺（Ⅳ区）から30点、表採4点の計44点であった（図78、表2）。いずれも破片資料であり、調査範囲も限られてはいるが、中堤造出し周辺からの出土が68%と極めて多い。

過去の調査成果を振り返れば、数は少ないながら形象埴輪の破片が出土している（図6）。昭和42年度～59年度の調査では、鏡板や鈴などの馬形埴輪や、蓋、盾、靱などの器財埴輪、顔面や腕、佩刀の柄頭などの人物埴輪の破片が報告されている。平成2年度の調査でも、人物の顎、鏡板、馬の顔面、動物の脚部と考えられる破片等が報告されている。いずれの調査においても、出土位置は中堤造出しを取り囲む外堀に集中しており、本調査でも同様の傾向であった。

②人物埴輪

K001（図79）はⅣ区30-1Tより出土した人物埴輪の顔面である。中堤造出しの北側、SK2と名付けた近世以降と推定される土坑より出土した。右目の一部と右眉が残存しており、目は直線的に切り込まれる。切り込みの内面は粘土がバリ状に残る。眉は細い粘土紐を丁寧にナデ付け表現する。赤彩表現は見られない。胎土に石英や砂粒を多く含む。

K002（図79）は男性の人物埴輪の下げ美豆良の一部である。中堤造出し周辺（29-2T）から出土した。棒状の粘土の端部をT字状に成形し、一方が強く張り出している。側面、下端面ともに丁寧に調整される。貼付痕は見られないがT字の突出した側が正面を向いていた可能性が高い。

K003（図79）は人物埴輪の肩から上腕部あるいは胸部から上腕部の破片であると考えられる。表採資料である。外面にハケ調整、内面はナデられているが一部輪積み痕が残る。

K004（図79）は人物埴輪の肩部の破片である。中堤造出し北側（28-1T）の外堀からの出土である。腕は中実で木芯の痕跡等は見られない。肩部への接続箇所は、先端に向かうにつれ細くなっており、絞られている。絞られた部分には一部に指頭痕が残る。肩部はハケ調整後ナデられている。

K005（図79）は人物埴輪の裾部分の破片である。Ⅳ区30-1Tから出土した。円筒状の体部に笠状に粘土が貼られ、下部は丁寧にナデられている。一見すると突帯のナデ付けと同様である。笠状に広がる部分は縦方向にハケ調整され、内面は丁寧にナデられる。蓋形埴輪の笠部の可能性もあるが、笠部が突出しないため人物埴輪の衣服表現の裾部であると考えられる。

K006（図79）は鉾留の表現を持つ形象埴輪片である。中堤造出しの北側、30-1T内の近世以降と推定されるSK1から出土した。武装した人物埴輪の破片の可能性もある。破片は台形状をしている。縦方向に5列もしくは6列、横方向に3段の鉾留表現があり、12点の貼付粘土が残存する。多少の歪みはあるものの、鉾の径は6～7mm程度である。最下段の鉾は、一本の横位の沈線の上から貼り付けられており、ある程度整然とした配置である。破片の下端部は面取りされ、ナデられる。内外面ともに縦方向にハケ調整される。側面端部に貼り付け痕が残るため、頭部に貼り付いていた冑などの武装の一部と推定できる。やや開き気味であり鉾留表現は簡略されるが、稲荷山古墳出土

の人物埴輪が装着する冑にも似る。

K007 (図79) は人物埴輪の腰部分の破片である。28-1Tから出土した。人物の腰部からスカート状に開く部分の破片と考えられる。内面の調整は不明瞭であるが、外面はナデられている。「く」の字状に屈曲するが、屈曲部が厚く膨れており、粘土充填により補強されている。

K008 (図79) は鋌状の粘土貼付を持つ破片である。30-1Tより出土した小破片である。外面は縦方向のハケ調整である。粘土の貼付は1か所あり、体部の粘土と異なる発色をしている。武装した人物や馬の鋌留表現、器財埴輪の一部、あるいは女子の乳首を表現した可能性もある。なお、過去の調査で中堤造出し付近より、髻状の髪型の埴輪片や佩刀の柄頭が確認されており、男女の埴輪の存在は間違いないとみてよい。

K009 (図79) は人物埴輪の肩部の破片である可能性が高い。IV区30-1T内の土坑SK1から出土した。内面の一部にハケ調整がされ、粘土充填の痕跡がある。外面は丁寧にナデられる。破片の屈曲から右肩部であるとみられるが、人物埴輪や動物埴輪の股部である可能性もある。

K010 (図79) は人物埴輪の胴部である。30-1Tからの出土である。外面はハケ調整後ナデ消されている。内面にはハケ調整が残る。径が小さいため動物埴輪の脚等の可能性もあるが、器壁が薄く調整が丁寧であるため人物埴輪の胴部と考えられる。

K011 (図79) の径も小さく、楕円形を呈する可能性が高いことから、同様に人物埴輪の胴部であると考えられる。出土地点は中堤造出しの南側、30-2T内である。外面・内面にハケ調整が施され、外面は更にナデ調整される。

③動物埴輪

K012 (図79) は馬形埴輪の鞍の破片である。30-1Tの土坑 (SK1とSK2の境界) 内より出土した。鞍の前輪右側面あるいは後輪左側面と考えられる。前輪または後輪には貼付粘土帯が接続し、粘土帯には刺突が施される。鞍橋に対し垂直に、直線的に貼られているため、胸繫ではなく鞍の一部であると考えられる。居木には粘土帯に平行するようにハケ調整される。鐙の表現は見られない。胎土はやや白っぽい。

K013 (図79) は障泥の破片である。中堤造出し北側 (28-1T、30-1T) の出土資料である。薄い直方体の破片であり、下端面および外面はナデ調整される。裏面に貼付痕があり、剥落痕の下に横方向のハケ調整が見られる。胎土はK012と異なり、鮮やかな橙色を呈する。

K014 (図80) も障泥の破片である。30-2Tから出土した。薄い板状で外面の一部に縦方向のハケ調整をもつ。下端部および内外面ともに丁寧にナデられている。下端部は円筒埴輪の突帯のように成形され、中央部分はやや凹む。器壁は分厚く、盾などの器財埴輪の一部の可能性もある。

K015 (図80) は鈴である。30-1Tから見つかった。球形で一部に突起をもつ。孔は見られない。人物埴輪に付けられたものである可能性もあるが、径が約3.5cmと大きいため、飾り馬に帰する個体であると考えられる。

K016 (図80) は馬形埴輪の円形杏葉部分の破片である。中堤造出しの北側、30-1Tから出土した。厚い体部に円形の粘土が貼り付けられる。内外面ともにナデ調整される。やや小さいが、人物埴輪の腰に付く鏡の可能性もある。

K017（図80）は馬形埴輪の破片である。墳丘造出し付近の29-3T出土である。器壁が分厚く、馬形か家形が想定されるが、緩やかなカーブをもっているため馬の尻付近ではないかと考えられる。

K018（図80）も馬形埴輪の尻付近の破片と考えられる。30-1Tからの出土である。焼成は良好ではなく、器壁が厚い。内面はナデられ、外面は一部にハケ調整が確認できる。破断面に尾の差し込みと考えられる孔がある。周りの粘土も差し込み孔に向かって緩やかに反る。表面の損耗が激しく、馬装は確認されない。

K019（図80）は馬形埴輪の可能性が高い。30-2T出土である。器壁はやや分厚く、円筒状に湾曲している。外面は全面にハケ調整される。破断面の一か所に、径の小さい穿孔が確認できる。器財埴輪等の器台部の可能性もある。

K020（図80）は円筒状の破片である。中堤造出しの北側、30-1T出土である。馬などの動物の脚部、器財埴輪等の器台部の可能性がある。外面に縦方向のハケ目、内面に輪積み痕が残っており、円筒埴輪と同様の作り方である。内面は橙色であるが、外面は白っぽい。

K021（図80）は馬形埴輪の破片であり、後円部北方の外堀、27-5Tから出土した。外面にタテハケ後突帯状に粘土帯が貼り付けられる。突帯は低く断面「M」字状を呈する。内面はナナメハケ調整である。器壁が厚いため馬形埴輪片であると推定できる。胸繫や尻繫部分である可能性がある。明赤褐色を呈する。

K022（図80）は四肢をもつ動物の股部分の破片の可能性が高い。30-1Tからの出土である。内外面ともにナデられているようであるが、表面の摩耗が激しい。

K023（図80）は馬形埴輪の破片である。30-1T出土である。円筒状の破片に円形の粘土が貼り付けられ、円形粘土の縁辺に5か所粘土の粒を貼り付けている。円形の粘土は胸繫に付けられた飾りと考えられ、この破片は飾り馬の左脚部分であると推定できる。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。

K024、K025（図80）は動物埴輪の脚部と考えられる破片である。両資料とも30-1Tからの出土である。径の小さい円筒状の破片とみられ、外面はタテハケ調整、内面はナデ調整される。器財埴輪の器台部の破片である可能性もある。

K026（図80）は馬のたてがみ部分の破片の可能性が高い。30-1Tから見つかった。薄い板状で全面がナデられている。鋭角な角をもつ。器財埴輪の盾や翳の可能性もある。

K027（図80）は馬のたてがみ部分の破片である。30-1Tからの出土である。板状の粘土が体部に接続しており、やや反っている。両面ともにハケ調整が確認できる。板状粘土の先端下部には円形の貼付粘土も見られる。鞍などの器財埴輪の鰭部である可能性もある。

④家形埴輪

K028（図81）は家形埴輪の破片である。墳丘造出し付近の29-6Tから出土した。器壁は分厚く、底部には篠状圧痕が残る。外面タテハケ、内面はナナメハケ、ヨコハケ調整で、円筒埴輪底部に見られる掌圧痕が見られる。破片の右側面は調整されていないが、火を受けている。

K029（図81）は家形埴輪、または器財埴輪の破片である。中堤造出し南側の30-2Tからの出土である。突帯状の粘土紐が縦方向に貼られた痕があり、剥落痕の下からタテハケ調整が確認できる。

内面はナナメハケ調整される。

K030 (図81) は家形埴輪の破片である。表採資料である。胎土は白色で、左側面が直線的に切り込まれている。扉または窓を表現したものと考えられる。切り込み面、内外面ともナデ調整される。

K031 (図81) は家形埴輪と考えられる破片である。墳丘造出し周辺の29-6Tから出土した。形状は円筒埴輪の口縁部に似るが、外面口唇部に粘土帯が貼り付けられている。外面はタテハケ、ナデ調整された後に粘土が貼られる。粘土帯部は指頭痕が残るなど調整はやや雑である。内面はナナメハケ調整が見られる。

K032 (図81) は家形埴輪の堅魚木である。中堤造出しの北側、28-1T出土である。棒状の粘土に面取りをしており、端部が残存している。胎土に砂粒を多く含み摩耗が激しく不明瞭であるが、棒状粘土の側面が平たく成形されている点と剥離の痕跡から屋根に接する面が推定できる。

K033 (図81) は家形埴輪の堅魚木の先端部である。30-1Tから見つかった。棒状の粘土の端部を平面に押し当て、つぶしている。端面は平たく、中央部に穴が開いている。人物埴輪の下げ美豆良や馬形埴輪のたてがみの可能性もある。

⑤器財埴輪

K034、K035 (図81) は形象埴輪の器台部である。出土トレンチは両者とも30-1Tである。突帯がそれぞれ1・2本確認されるが、径が小さいため円筒埴輪とは考え難く器財埴輪の器台部である可能性が高い。外面にタテハケ、内面はナデ調整される。K034は底部が残り、篠状圧痕が確認できる。1段目の突帯は底部から約6cmと低い位置に付けられている。K035は突帯が2本巡り、突帯の真裏には指オサエ痕が残る。突帯間に円形透かし孔が1つある。

⑥不明

K036～K044 (図81) は形象埴輪と考えられるが種類や部位が不明瞭な個体である。K036は27-4T出土である。円筒埴輪の口縁部付近のような形状をしているが、口唇部が内面に向かって折り返され、外面に粘土帯が貼られているため器壁が分厚い。折り返した部分には指頭痕が多く残っている。胎土に粒の大きいチャートを多く含む。

K037 (図81) は30-2T出土の破片である。上部に向かうにつれ緩やかに内傾する。粘土紐の輪積み痕も明瞭であり、大きく角度が変わる位置の破片である。外面に2方向のハケ、内面にもハケ調整が見られる。焼成は良好で胎土は明赤褐色を示す。丸みをもった形状であるため、人物埴輪や馬形埴輪である可能性がある。

K038 (図81) は30-1T内の土坑SK2から出土した。焼成は不良で器面の調整は観察できないが、断面から粘土板を重ねて製作されていることが観察可能であり分厚い。円筒状に弱く湾曲しており、家形埴輪や動物埴輪の破片であると考えられる。

K039 (図81) は29-3T出土の形象埴輪片である。板状の粘土の端部の破片であり、丁寧にナデられている。上端部は指で押しつぶし、面を作出している。馬形埴輪のたてがみ、または器財埴輪の鰭部の端部という可能性があるが、付近から形象埴輪の破片は確認されておらず、推定の域を出ない。

K040（図81）も板状の形象埴輪の一部である。墳丘造出し付近の29-6Tより出土した。破片の両面および上端面、下端面はナデ調整されている。器壁に湾曲はなく、直方体状の破片である。家形埴輪、馬形埴輪の障泥などの可能性がある。焼成は良好で、胎土に酸化鉄や粒の大きいチャートが含まれる。

K041（図81）は27-2T出土の小破片である。外面に貼付粘土がみられ横方向にナデられている。内面はハケ調整が施される。器壁は厚く、貼付粘土の厚みが一定でなく下の方が厚くなり開くことから、人物埴輪の裾部などが想定可能である。

K042（図81）は27-3T出土である。器壁の損耗により不明瞭であるが、輪積み痕がみられ内外面にハケ調整がある。胎土に酸化鉄、角閃石を多く含む。

K043、K044（図81）はいずれも表採資料である。K043は径の小さい円筒の破片とみられ、外面に突帯が付く。破片下部の断面は中央が凹んでおり、粘土紐の接続部であったことがわかる。内外面ともに調整は不明瞭である。K044は深い条線が2条刻まれている。裏面は粘土が貼られ突帯状にもみえるが、器面の状態が悪く不明瞭である。

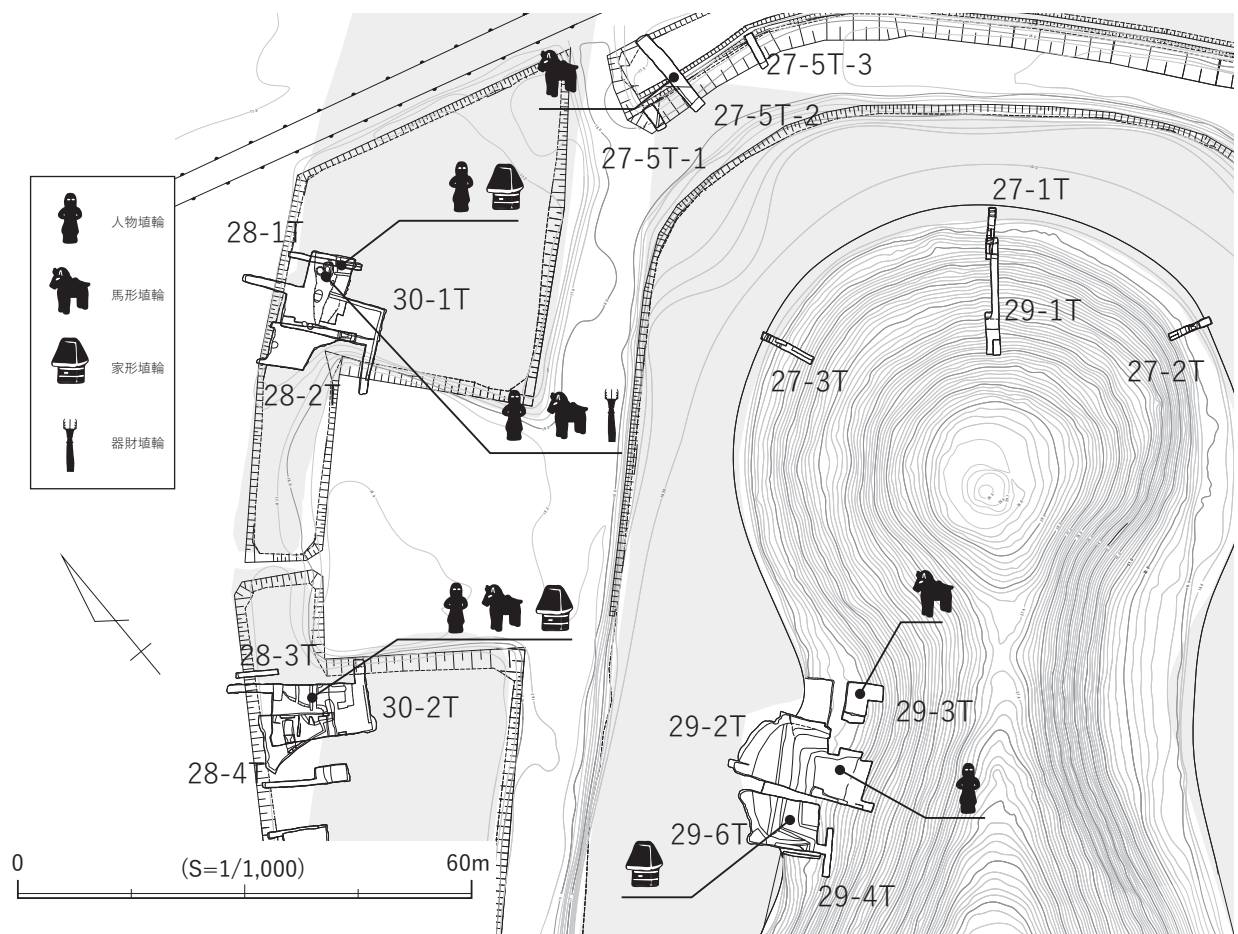
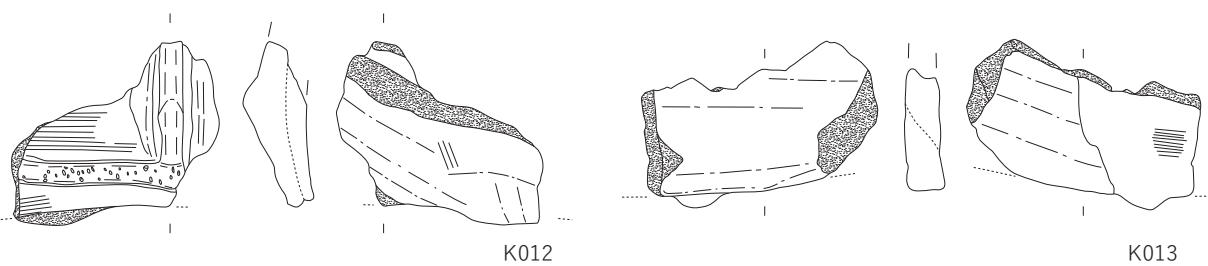
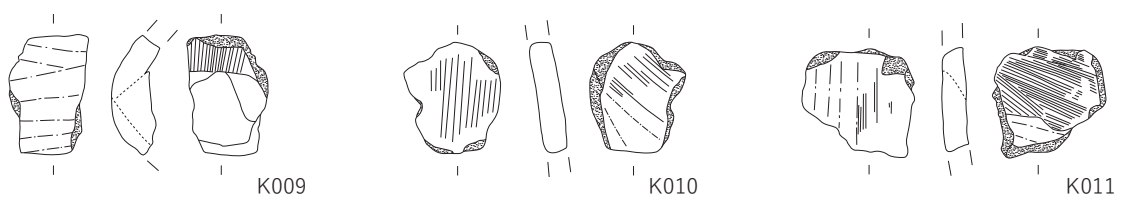
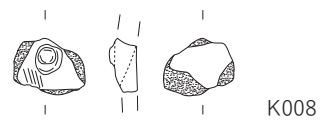
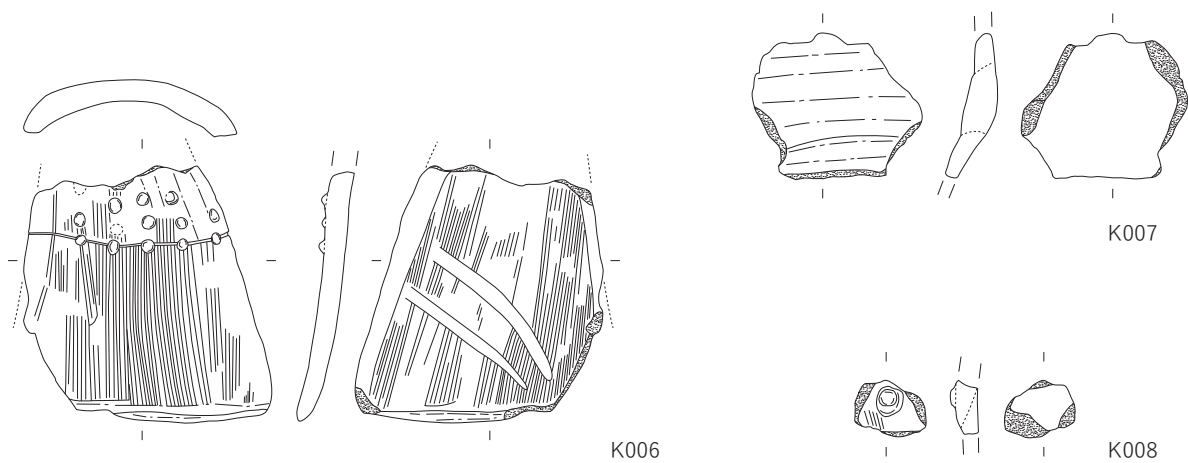
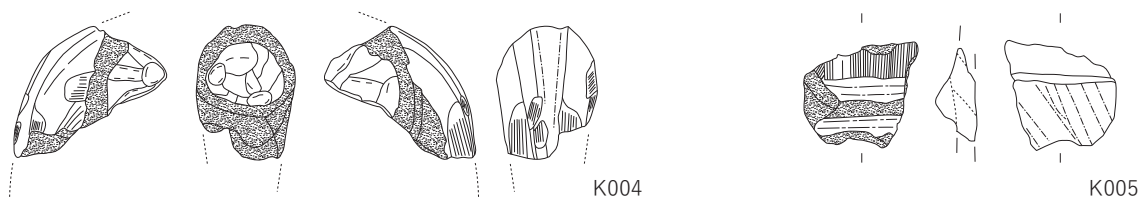
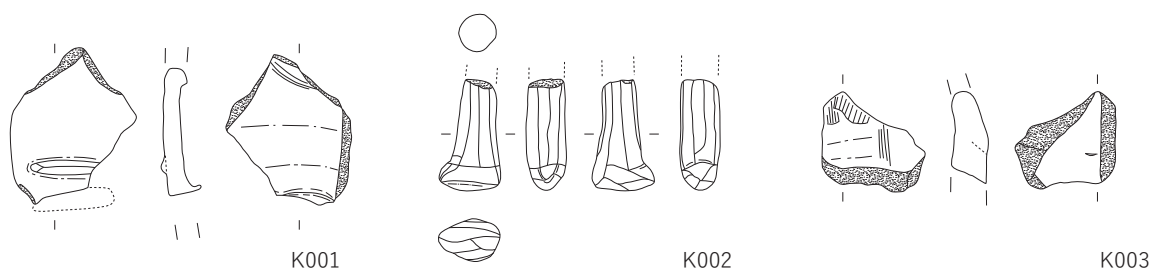


図 78 形象埴輪 出土位置



0 (S=1/4) 20cm

図 79 形象埴輪①

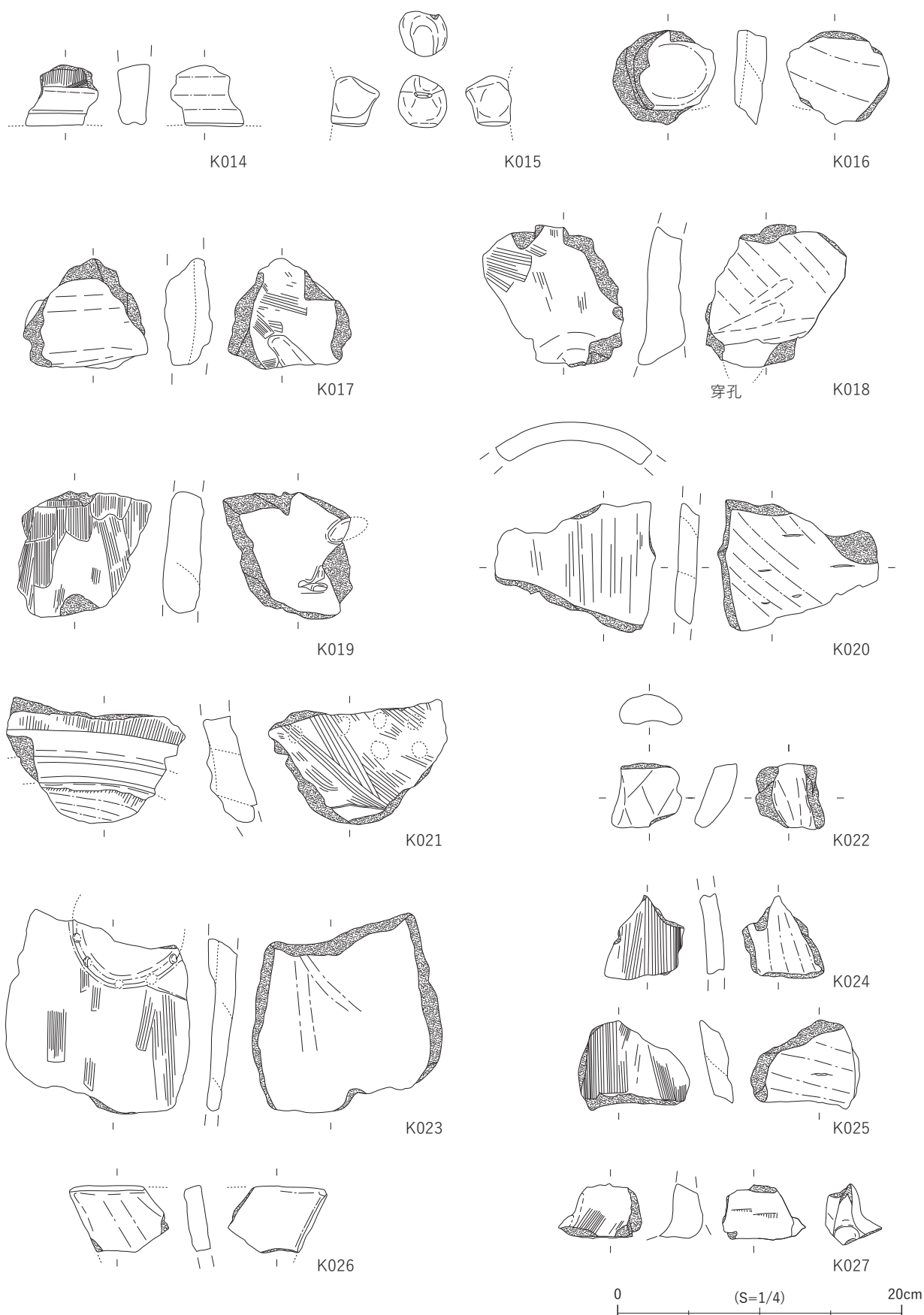
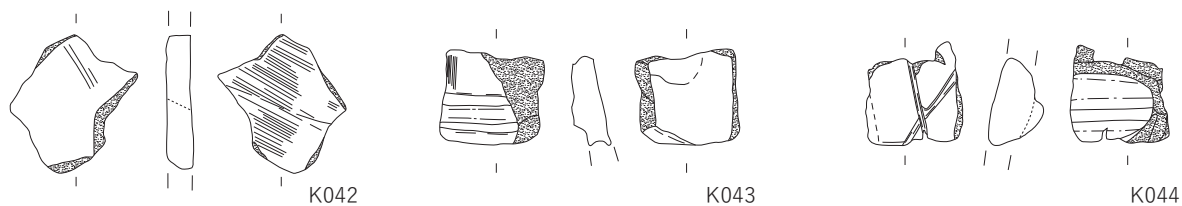
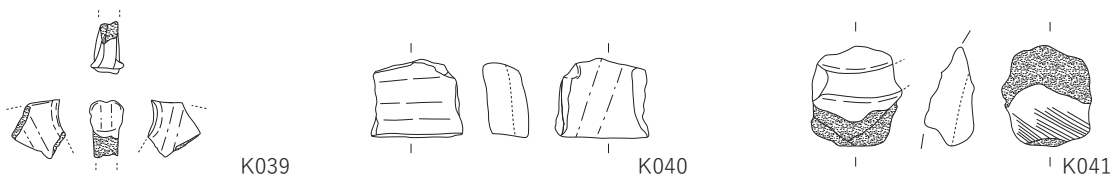
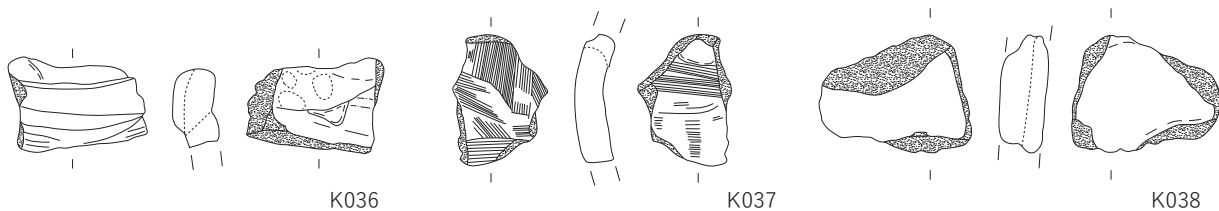
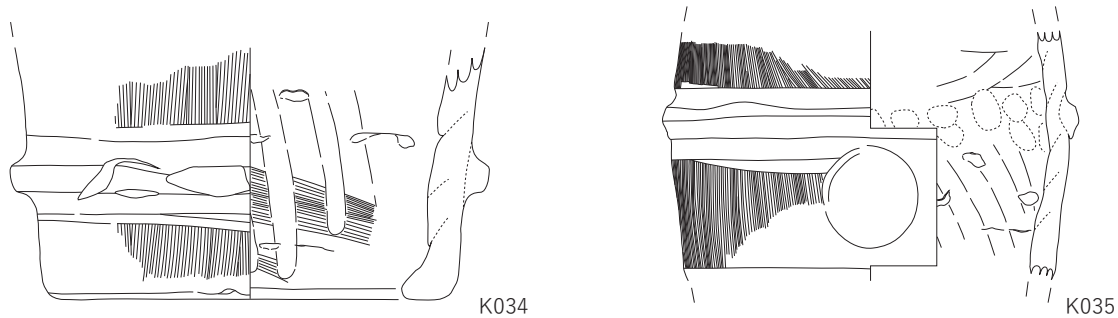
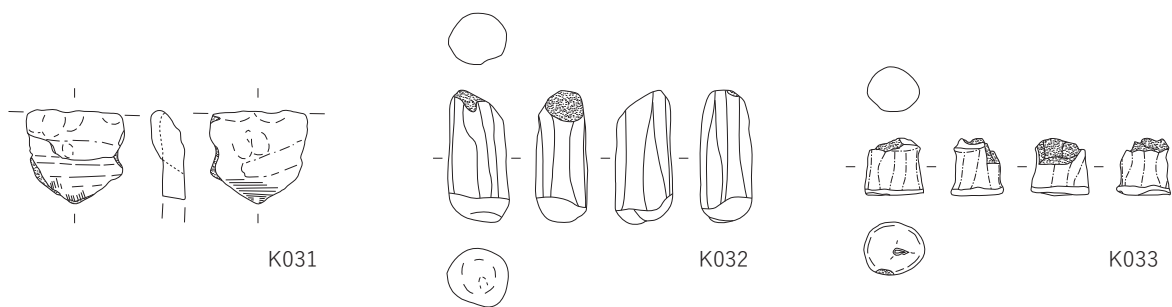
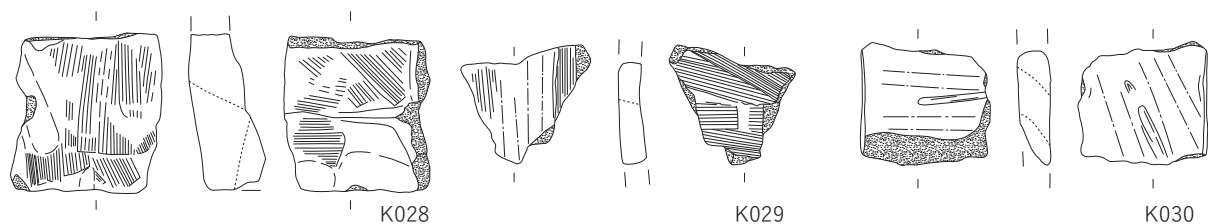


图 80 形象埴輪②



0 (S=1/4) 20cm

図 81 形象埴輪③

表 2 形象埴輪観察表

No.	出土 区	調査 年度	トレンチ	種類	部位	色調	胎土	焼成	調整	器高 (cm)	備考
K001	IV 区	H30	1T (SK2)	人物	右目	明赤褐 2.5YR5/6	ABDEJ (多)	良好	外面ナデ 内面ナデ	(6.8)	直線的に切り込み目を表現。粘土貼付で眉毛の表現
K002	I 区	H29	2T	人物	美豆良	橙 5YR6/6	ABDE	良好	ナデ	(5.9)	下げ美豆良・端部 T 字状
K003	表採	H29	表採	人物	肩から上 腕部	橙 5YR6/6	ABCHJ	普通	外面ハケ 内面ナデ	(5.0)	
K004	IV 区	H28	1T	人物	肩	橙 2.5YR6/6	ABD (多)	良好	ハケ・ナデ	(6.9)	中実の腕
K005	IV 区	H30	1T (SK1)	人物	裾	橙 5YR6/6	ABCDEHIJ	良好	外面タテハケ 内面ナデ	(4.9)	人物の腰?
K006	IV 区	H30	1T (SK1)	人物	胄?	橙 5YR6/6	ABCDEHJ	良好	外面ハケ・沈線 1 本あり 内面ハケ	(13.2)	鋳留表現 12 個あり
K007	IV 区	H28	1T	人物	腰	外面橙 5YR6/6 内面にぶい黄橙 10YR7/4	ABDH	普通	外面ナデ 内面不明	(7.6)	
K008	IV 区	H30	1T	人物	鋳または 乳首か	明赤褐 5YR5/6	ABDHI	良好	外面ハケ・貼り付け鋳表現 胎土異なる 内面ナデ	(2.9)	
K009	IV 区	H30	1T (SK1)	人物	右肩	橙 5YR6/6	ABDIJ	良好	外面ナデ 内面ハケ	(6.3)	股部の可能性あり
K010	IV 区	H30	1T	人物	胴	橙 2.5YR6/8	ABDE	良好	外面ハケ後ナデ 内面ハケ・ナデ	(5.8)	
K011	IV 区	H30	2T	人物	胴	橙 5YR6/6	ABCDE (大)	良好	外面ハケ・ナデ 内面ハケ・ナデ	(5.5)	
K012	IV 区	H30	1T (SK1)	馬	鞍	外面にぶい橙 7.5YR7/4 内面橙 5YR7/6	ABDEJ	良好	外面ハケ・ナデ 貼り付け粘土帯に刺突 内面ナデ	(8.8)	刺突あり
K013	IV 区	H28・ H30	28-1T/30- 1T (SK1)	馬	障泥	橙 5YR6/8	ABDE (大・多) J	普通	外面ナデ 内面ナデ・貼り付け部 剥落面にハケあり	(6.4)	板状

No.	出土 区	調査 年度	トレンチ	種類	部位	色調	胎土	焼成	調整	器高 (cm)	備考
K014	IV 区	H30	2T	馬	障泥	橙 2.5YR6/6	ABD	良好	ハケ・ナデ	(4.3)	
K015	IV 区	H30	1T	馬	鈴	橙 7.5YR7/6	ABD (大) E	良好	ナデ	(3.7)	人物の可能性あり
K016	IV 区	H30	1T	馬	円形杏葉	外面橙 5YR6/6 内面橙 5YR7/6	ABDEFIJ	普通	外面ナデ 内面ナデ	(6.7)	円形粘土の貼付
K017	I 区	H29	3T	馬		橙 2.5YR6/6	ABCD	良好	外面ナデ 内面ハケ	(7.5)	尻付近
K018	IV 区	H30	1T	馬	尻	明赤褐 5YR5/8	ABCD	普通	外面ハケ 内面ナデ	(9.8)	尾の差し込み孔あり
K019	IV 区	H30	2T	馬		外面橙 5YR6/6 内面明赤褐 2.5YR5/6	ABDF	良好	外面ハケ 内面ナデ	(8.5)	穿孔あり
K020	IV 区	H30	1T	馬	脚部	外面灰白 10YR8/2 内面橙 5YR6/6	ABCDE (大)	良好	外面ハケ 内面ナデ	(8.5)	輪積み痕
K021	III 区	H27	5T	馬		明赤褐 2.5YR5/8	ABCD (多) EI	良好	外面ハケ・ナデ 内面ハケ・ナデ 指オサエ	(7.5)	胸繫または尻繫
K022	IV 区	H30	1T	馬	股	橙 7.5YR7/6	A (大) BDHJ	普通	外面ナデ 内面ナデ	(4.5)	動物の股
K023	IV 区	H30	1T	馬	左脚	橙 2.5YR6/6	ABCD (多) EI	普通	外面ハケ 内面ナデ	(12.1)	鉾留の痕 5箇所
K024	IV 区	H30	1T	馬	脚部	橙 2.5YR6/8	ABCD (多) I	良好	外面タテハケ 内面ナデ	(5.6)	器財の器台の可能性あり
K025	IV 区	H30	1T	馬	脚部	明赤褐 5YR5/6	ABCDE (大) G	良好	外面ハケ 内面ナデ	(5.8)	器財の器台の可能性あり
K026	IV 区	H30	1T	馬	たてがみ	橙 5YR6/8	ABDEIJ	普通	ナデ	(4.6)	盾や翳の可能性あり

No.	出土区	調査年度	トレンチ	種類	部位	色調	胎土	焼成	調整	器高 (cm)	備考
K027	IV 区	H30	1T	馬	たてがみ	橙 2.5YR6/8	ABCD	良好	ハケ・ナデ	(3.8)	やや反る 器財の可能性あり
K028	I 区	H29	6T	家	底部	明赤褐 2.5YR5/6	ABCDE (大) I	良好	外面タテハケ・指頭痕 内面ナメハケ・手のひら 圧痕	(8.3)	底部篠状圧痕あり
K029	IV 区	H30	2T	家		橙 7.5YR7/6	ABF	良好	外面ナデ・剝離面にハケ 内面ハケ	(5.4)	
K030	表採	H30	表採	家		灰白 10YR8/2	ABC (多) DE (大)	良好	外面ナデ 内面ナデ	(6.1)	
K031	I 区	H29	6T	家		橙 2.5YR6/6	ABDEI	良好	外面タテハケ・ナデ 内面ヨコハケ・ナデ指頭 痕あり	(4.7)	
K032	IV 区	H28	1T	家	堅魚木	橙 7.5YR7/6	ABIJ	普通	ナデ	(7.1)	美豆良の可能性
K033	IV 区	H30	1T	家	堅魚木	橙 2.5YR6/8	ABCE	良好	ナデ	(3.0)	美豆良・たてがみの可能性
K034	IV 区	H30	1T (SK1)	器財	器台部	橙 5YR6/6	ABDEHI	普通	外面タテハケ 内面ナデ	(13.3)	輪積み痕あり 底部篠状圧痕
K035	IV 区	H30	1T (SK1)	器財	器台部	橙 5YR6/6	ABDEI	普通	外面タテハケ 内面ナデ・指オサエ	(13.2)	突帯2段 突帯はがれた後 ハケ目あり
K036	III 区	H27	4T	不明		橙 7.5YR7/6	ABE (大)	良好	外面ナデ 内面ナデ・指オサエ	(4.2)	
K037	IV 区	H30	2T	不明		明赤褐 2.5YR5/6	ABCDEI	良好	外面2方向のハケ 内面ハケ	(6.7)	
K038	IV 区	H30	1T (SK2)	不明		にぶい橙 7.5YR7/4	ABCDHJ	不良	調整不明	(6.2)	
K039	I 区	H29	3T	不明		にぶい橙 7.5YR7/4	ABE	良好	ナデ	(3.0)	板状

No.	出土 区	調査 年度	トレンチ	種類	部位	色調	胎土	焼成	調整	器高 (cm)	備考
K040	I 区	H29	6T	不明		橙 5YR6/6	ABDE (大) I	良好	外面ナデ 内面ナデ	(4.0)	家形・馬形か
K041	II 区	H27	2T	不明		橙 2.5YR6/6	ABCDEI	良好	外面ナデ 内面ハケ	(5.2)	外面貼付粘土
K042	II 区	H27	3T	不明		橙 5YR6/6	ABCDI	普通	外面ハケ 内面ハケ	(7.1)	輪積み痕
K043	表採	H25	表採	不明		にぶい褐 7.5YR5/4	ABDE	普通	外面ハケ・ナデ 内面不明	(4.7)	
K044	表採	H29	表採	不明		橙 5YR7/6	ABCD	良好	外面ナデ 内面ナデ	(4.7)	深い条線2条・粘土貼付

第7節 須恵器

①概要

須恵器の出土は、I区（墳丘造出し周辺）に集中する。器種は坏（身・蓋）、甕、壺蓋、器台、高坏、提瓶、横瓶、甕が確認されている（表3）。I区以外から出土する須恵器の器種は、甕の破片に限定される。墳丘造出しの平面形態は削平を受けており不明であるが、本調査により上下2段から成る点、上段は方形の平面形をもつことが明らかになった。須恵器坏は、上段の中央からやや北東よりの地点から、土師器の高坏とともに集中して出土した。天地が逆の状態や横倒しの状態で出土した個体が多く、底部が造出しに接する状態で出土したものは少数である。須恵器の坏には複数個体が重なった状態での出土も確認された。須恵器と土師器で明確な分布の差異は認められず、混在した状態で出土しており、全体として雑然としている。ただし造出しのトレンチの土層断面の観察からは、墳丘造出しの上面は大きな攪乱は受けていないことがわかる。その一方で、墳丘の盛土と比較して造出しの盛土は脆く、崩れやすい。造出し上面の遺物出土範囲は上段から下段に及び、まとまりをもっている。当初は造出し上段に積み上げられていた須恵器が、墳丘崩落土とともに下段に流れた結果、このような分布となったと考えられる。

これまで、二子山古墳出土の須恵器はわずかな破片が確認されるのみであった。その年代はMT15型式まで遡ると考えられてきた。今回の調査で墳丘造出しより出土した須恵器の坏身・坏蓋はTK10型式の古相を示す。従来考えられてきた二子山古墳の年代よりも、新しい傾向を示している。

②坏類

墳丘造出しからは坏が大量に出土した。坏身・坏蓋はいずれも29-2Tまたは29-6Tからの出土である。時間をかけ接合作業を行った結果、蓋は23個体、身は17個体が復元可能であった。復元可能であった個体の他に多くの破片も出土しているが、接点がないものについては識別が困難であった。現時点では蓋が23個体以上、身が19個体以上存在することが確認された。坏身と坏蓋のセット関係は、閉じたままの出土が確認されずバラバラの状態での出土しているため確実ではない。ただし、S004の蓋とS024の身など、大きさと胎土からセット関係の推定は可能である。また、坏身・坏蓋の点数に大きな偏りがあるとはいえず、基本的にはセット関係が保持されていたとみられる。

S001～S023は須恵器の坏の蓋である。S001（図82）は口径15.3cm、器高5.1cmの蓋である。口縁部はほぼ垂直に長く下がり、口縁端部付近で弱く外に開く。口縁端部は内傾している。天井部との境界の稜の突出は弱く、明瞭でない。天井外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。胎土は非常に精良で陶邑産である可能性が高い。天井部に弱い歪みが認められる。

S002（図82）は口径15.0cm、器高5.1cmの蓋である。口縁部は垂直に下がり、口縁端部で弱く外側に開く。口縁端部は内傾し、ごく緩い沈線状となる。天井部との境の稜は甘く、明瞭ではない。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。歪みは少なく、天井部外面の一部に自然釉の付着がみら

れる。

S003 (図82) は口径15.6cm、器高5.1cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がり、口縁端部付近で更に弱く外側に開く。口縁端部は内傾し、ごく緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出する。天井外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。天井部の器壁が部分的に厚くなる。

S004 (図82) は推定口径15.0cm、残存高5.1cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がり、口縁端部付近で更に弱く外側に開く。口縁端部は内傾し、緩い沈線状となる。天井部との境の稜は明瞭でない。天井外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。天井部の器壁が厚く、外面の一部に自然釉の付着がみられる。

S005 (図82) は口径14.7cm、器高4.8cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がり、口縁端部付近で更に弱く外側に開く。口縁端部は内傾し、ごく緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出する。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面は一方向からナデられる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。天井部の器壁が部分的に厚くなる。

S006 (図82) は口径14.0cm、器高4.7cmのほぼ完形の蓋である。口縁部は垂直、やや開き気味に下がる。口縁端部は丸く作出され、内側が段状に凹んでいる。天井部との境の稜はやや突出する。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面は一方向にナデられる。胎土は精良で白色粒子を含む。全体的に器壁が厚く、重厚感がある。

S007 (図82) は口径14.5cm、器高4.8cmの蓋である。口縁部は開き気味に下がり、口縁端部付近で更に外側に開く。口縁端部は内傾し、緩い沈線状となる。天井部との境の稜は明瞭に突出する。天井外面は広範囲に右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面は一方向にナデられる。胎土は精良で白色粒子を含む。全体的に器壁が厚い。

S008 (図82) は口径14.0cm、器高4.7cmの蓋である。口縁部は垂直、やや開き気味に下がる。口縁端部は内傾し、緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出する。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。焼成は良好であるが、胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラした印象を受ける。器壁は厚い。口縁部に一部焼け歪みがみられる。

S009 (図82) は推定口径14.4cm、器高4.8cmの蓋である。口縁部は垂直に下がり、口縁端部は内傾し、ごく緩い沈線状となる。天井部との境の稜の突出は非常に弱い。天井外面は右回転ヘラケズリが広範囲にみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕があり、布目のような圧痕が明瞭に認められる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラした印象を受ける。天井部の器壁は厚いが、口縁部は薄手である。

S010 (図82) は口径14.9cm、残存高4.9cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がり、口縁端部付近で更に弱く外側に開く。口縁端部は内傾し、緩い沈線状となる。天井部との境の稜は明瞭でない。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。天井部中央付近に円形の穿孔がみられ、外面から打撃を加え打ち欠かれた可能性がある。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S011 (図82) は口径14.7cm、器高4.5cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。口縁端

部は内傾し、緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出する。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を多く含み、ザラザラしている。

S012（図82）は推定口径15.0cm、器高4.6cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。口縁端部は内傾し、断面は凹状となる。天井部との境の稜は弱く突出する。天井外面は広範囲に右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S013（図82）は推定口径14.9cm、残存高4.9cmの蓋である。口縁部は垂直に下がり、口縁端部は内傾し緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出するが稜の下の沈線が明瞭であり肩がはっきりしている。天井外面は広範囲に右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S014（図82）は推定口径15.0cm、残存高4.5cmの蓋である。天井部を欠損する。口縁部はやや開き気味に下がり、口縁端部付近で更に弱く外側に開く。口縁端部は内傾し、緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出する。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S015（図82）は推定口径13.6cm、残存高4.4cmの蓋である。天井部を欠損する。口縁部は垂直に下がり、口縁端部は内傾し緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出する。天井外面は広範囲に右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S016（図82）は推定口径15.0cm、器高4.6cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。天井部との境の稜は弱く突出し、屈曲する程度である。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には白色粒子を含み、ザラザラしている。

S017（図82）は口径15.0cm、器高4.8cmの完形に近い蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。天井部との境の稜は弱く突出し、屈曲する程度である。天井外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。器壁は厚く、重厚感がある。胎土には黒色粒子、白色粒子を多く含み、ザラザラしている。

S018（図82）は口径14.6cm、器高5.2cmの蓋である。口縁部は垂直に下がり、口縁端部は内傾し緩い沈線状となる。天井部との境の稜は非常に弱く突出し、屈曲する程度である。天井外面は広範囲に右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S019（図82）は推定口径14.7cm、残存高4.2cmの蓋である。焼け歪みにより天井部が大きく凹み、つぶれている。口縁部は垂直に下がり、口縁端部は内傾し緩い沈線状となる。天井部との境の稜は低いものの明瞭に突出する。天井外面は広範囲に左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。胎土には白色粒子を含み、ザラザラしている。

S020（図82）は口径14.6cm、器高4.2cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。口縁端部は内傾し緩い沈線状となる。天井部との境の稜は弱く突出し、屈曲する程度である。天井外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。天井部内面に当具痕がある。器壁は厚く、重厚感がある。胎土に白色粒子を含み、灰色より黒色の強い黒褐色を呈する。

S021 (図82) は口径14.8cm、器高4.4cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。口縁端部は内傾し緩い沈線状となる。天井部との境の稜は非常に弱く突出し、屈曲する程度である。天井外面は広範囲に左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には白色粒子がみられ、他の個体と比較して黒色系の胎土を示す。

S022 (図82) は口径14.9cm、器高4.4cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。口縁端部は内傾し緩い沈線状となる。天井部との境の稜は非常に弱く突出し、屈曲する程度である。天井外面は広範囲に左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には白色粒子がみられ、他の個体と比較して黒色系の胎土を示す。

S023 (図82) は口径不明、推定器高4.8cmの蓋である。口縁部はやや開き気味に下がる。天井部との境の稜は弱く突出し、屈曲する程度である。天井外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には白色粒子を含み、ザラザラしている。

S024 ～ S040は、須恵器の坏身である。S024 (図83) は口径13.5cm、残存高5.1cmの坏身である。口縁部の立ち上がりはやや高く、内傾する。口縁端部は丸く、受部は断面凹状を呈する。底部外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面中央に当具痕がみられる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。

S025 (図83) は口径13.4cm、器高5.5cmの坏身である。口縁部の立ち上がりはやや高く、内傾する。口縁端部は丸く、受部は断面凹状を呈する。底部外面は広範囲に左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面中央に当具痕がみられる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。底部は円形に穿孔され、外側から数回にわたり打突を加えられたとみられる。

S026 (図83) は推定口径14.7cm、残存高5.0cmの坏身である。口縁部の立ち上がりはやや高く、内傾する。口縁端部は丸く、受部は水平で弱く沈線状に凹む。底部外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面中央に当具痕がみられる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。底部は円形に割れており、打突により穿孔されたと考えられる。

S027 (図83) は推定口径13.2cm、器高5.7cmの坏身である。口縁部の立ち上がりはやや高く、弱く内傾する。口縁端部は丸く、受部は断面凹状を呈する。底部外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土は精良で白色粒子が含まれ、陶邑産である可能性が高い。底部は円形に割れており、打突により穿孔されたと考えられる。

S028 (図83) は推定口径13.0cm、器高6.0cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、内傾する。立ち上がり部の器壁は薄い。体部の器壁の厚さも一定でなく、部分的に厚くなる。口縁端部は丸く、受部は断面凹状を呈する。底部外面は広範囲に左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面底部付近は一方向にナデられる。胎土は精良で白色粒子が含まれ、陶邑産である可能性が高い。

S029 (図83) は口径13.2cm、残存高4.6cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、弱く内傾する。口縁端部は丸く、受部は水平に突出し、弱く沈線状に凹む。底部外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。底部は欠損し、打突により打ち欠かれている可能性もある。

S030 (図83) は口径13.0cm、残存高4.7cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、内傾する。

口縁端部は丸く、受部は水平に突出し、弱く沈線状に凹む。底部外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。底部ほぼ中央は円形に欠損し、外面から複数回打突が加えられているとみられる。

S031 (図83) は口径12.8cm、器高4.8cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、弱く内傾する。口縁端部は丸く、受部は水平に突出し、弱く沈線状に凹む。底部外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。底部外面はケズリにより面が取られる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S032 (図83) は口径13.3cm、器高4.4cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、内傾する。口縁端部は丸く、受部は水平に突出し、弱く沈線状に凹む。底部外面は左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面中央に当具痕がみられる。器壁は厚く、坏底面の丸みは少なく、重厚感がある。胎土には黒色粒子を多く含み、ザラザラしている。

S033 (図83) は口径12.6cm、器高4.8cmの坏身である。口縁部の立ち上がりはやや高く、内傾する。口縁端部は丸く、受部は断面凹状を呈する。底部外面は広範囲に左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面中央に当具痕がみられる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。底部は円形に穿孔され、外側から数回にわたり打突を加えられたとみられる。

S034 (図83) は口径13.1cm、器高5.0cmの坏身である。口縁部の立ち上がりはやや高く、内傾する。口縁端部は丸く、受部は断面凹状を呈する。底部外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S035 (図83) は口径13.8cm、器高5.0cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、弱く内傾する。口縁端部は丸く、受部は水平に突出し、弱く沈線状に凹む。底部外面は広範囲に右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。器壁はやや厚い。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S036 (図83) は口径13.1cm、器高4.5cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、内傾する。口縁端部は丸く、受部は凹み沈線状を呈する。器壁は厚い。底部外面は右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面中央に当具痕がみられる。胎土に白色粒子を含み、灰色より黒色の強い黒褐色を呈する。

S037 (図83) は口径12.7cm、器高5.1cmの坏身である。口縁部の立ち上がりはやや高く、強く内傾する。口縁端部は丸く、受部は水平に突出し、弱く沈線状に凹む。底部外面は左回転とみられるヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。内面中央に当具痕がみられる。胎土に白色粒子を含み、灰色より黒色の強い黒褐色を呈する。

S038 (図83) は推定口径13.8cm、器高5.2cmの坏身である。口縁部の立ち上がりは高く、強く内傾する。口縁端部は丸く、受部は水平に突出する。底部外面は広範囲に左回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S039 (図83) は推定口径13.1cm、残存高4.4cmの坏身である。底部を欠損する。口縁部の立ち上がりは高く、やや内傾する。口縁端部は丸く、受部は凹み沈線状を呈する。底部外面は広範囲に右回転ヘラケズリがみられ、他の部分はヨコナデされる。外面に一部釉の付着がみられる。胎土には黒色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

S040（図83）は推定口径12.8cm、残存高2.9cmの坏身である。底部を欠損する。口縁部の立ち上がりは高く、やや内傾する。口縁端部は丸く、受部は凹み沈線状を呈する。胎土には黑色粒子、白色粒子を含み、ザラザラしている。

③ 罎

S041～S043（図83）は罎の破片であり、いずれも小さな個体である。器壁は薄く調整は丁寧である。昭和42年度の調査時にも、墳丘造出し付近の42-10Tより櫛描波状文の施された罎の頸部の破片が発見されているが接点はない。小破片であるため個体数は不明であるが、最少でも2個体は存在していた可能性が高い。いずれも小破片であるため口径等法量の復元はできなかった。

S041は罎の口縁部の破片である。29-2T出土。口縁端部は平たく面取りされている。口縁部直下の外面には浅い2条の沈線が巡る。口縁端部から内面にかけて自然釉の付着がみられる。S042は罎の頸部から胴部にかけての破片である。平成29年度の造出し調査時に周辺で表採された資料である。内外面ともに丁寧にヨコナデ調整される。S043は罎の頸部の破片である。29-2T出土。外面は1条の沈線が横方向に巡り、沈線の上に櫛描波状文、下に連続する櫛歯刺突文が施される。胎土は精良で黑色粒子を含む。S041、S042と異なる個体とみられ、陶邑産である可能性が高い。

④ 壺蓋

S044（図84）は壺の蓋である可能性が高い。29-6T出土であり、壺の蓋部と考えられる唯一の個体である。推定口径は10.7cm、推定器高は4.1cmである。口縁部はやや開き気味に下がる。口縁端部は内傾し、ごく浅い沈線状となる。天井部との境に明瞭な稜はない。天井外面に2列の連続する櫛歯の刺突がみられる。天井部に小さなつまみがつく可能性もある。他の部分はヨコナデされる。天井部内面には指紋がみられ、指紋の範囲は器壁が薄くなっている。胎土は精良で黒色の粒子を含み、陶邑産である可能性が高い。外面の一部に自然釉の付着がみられる。

⑤ 高坏

S045（図84）は高坏の脚部である。残存高は6.7cmを測る。既報告で中堤造出し付近より大型の高坏の脚部が発見されたと記載があるが、今回の調査で確認できた高坏は本資料のみである。ただし墳丘造出し周辺の表採であるため、留意が必要である。長脚化はしておらず、脚部は短いとみられる。脚部下位には円形の透かし孔がある。焼成は良好で胎土は精良であるため、陶邑産である可能性が高い。

⑥ 器台

S046～S050（図84）は器台の脚部の破片である。S048・S049・S050は、接点はないものの同一個体の可能性が高い。今回の調査で最少でも3個体分の器台脚部が確認されたことになる。ただし、過去の調査や造出し周辺の表採で器台と考えられる個体が複数発見されているため、今後の検討が必要である。

S046は脚端部が残る個体である。傾きは直立気味に立ち上がる。還元炎焼成が不十分であった

ためか、灰白色系を呈する。凹線が横位に一条巡っており、その下段から脚端部にかけて横位のカキ目調整が施される。内面はヨコナデされる。S047は、脚端部が残る個体である。傾きは他の個体と比較すると緩やかである。脚端部は中央が弱く凹み、緩い沈線状に巡る。外面は1条の横位の凹線の下位にカキ目調整、櫛描波状文の順に施される。内面はヨコナデされる。S048、S049、S050は特徴や胎土から同一個体とみられる。角度は直立気味に立ち上がる。脚端部上位に3条の凹線が巡り、その上部に櫛描波状文が施される。いずれの破片も三角形の透かし孔をもっている。S050はS048、S049の上位の破片とみられ、1条の凹線とその上下に櫛描波状文が施される。三角形の透かし孔も上下2段にわたってみられる。外面に指紋の痕が残る。

⑦提瓶

S051～S058（図84）は提瓶とみられる資料である。いずれも平成29年度の墳丘造出し周辺からの出土である。破片であり同一個体が含まれる可能性があり、S055は提瓶ではなく横瓶である可能性もあるため、個体数は最少で4個体とみてよい。過去の調査でも提瓶の破片が出土している。S051は提瓶の体部の破片である。口頸部は残存していない。片面が扁平な形状を呈する。外面にカキ目調整、内面はナデ調整される。外面の一部に釉の付着がみられる。S052は提瓶の体部の破片である。内外面ともにナデ調整される。外面全面に釉の付着がみられる。内面に指頭痕がみられ円孔の閉塞の痕跡と考えられる。S053は体部の破片である。外面は平行叩き、ナデ調整、内面は当具痕、ナデ調整がみられ、円形の閉塞痕も認められる。内面に列状の指頭痕が残る。頸部は残存しておらず、横瓶の可能性もある。外面の一部に釉の付着がみられる。黒色粒子が多く胎土に含まれる。S054は提瓶の体部の破片である。外面にカキ目調整、ヘラケズリ、内面は強くナデ調整される。口頸部は残存していない。黒色粒子、白色粒子が多く胎土に含まれる。S055は提瓶の体部の破片である。口頸部は残存していない。片面が扁平な形状を呈する。外面にカキ目調整、内面はナデ調整される。黒色粒子が多く胎土に含まれる。外面カキ目調整部分に粘土の付着がみられる他、釉の付着が認められる。

S056、S057は提瓶の輪状の把手部分である。いずれも本体との接合面で剥落している。断面形状は円形であるが、細かく面取りされる。片側面に釉の付着がみられる。S058は提瓶の体部片である。外面にカキ目調整がみられる。胎土に白色粒子、石英を含む他、白色針状物質を含んでいる。

⑧横瓶

S059～S063（図85）は横瓶の破片であるとみられ、特徴や胎土から同一個体と考えられる。外面が灰色であるのに対し、内面は黒色を呈する。外面に胴部は格子状叩き、頸部から口縁部にかけてはナデ調整、内面に当具痕がみられる。S059は口頸部であり、胴部から口縁部に向かって大きく外側に開く。全体に薄手であり、頸部の接合状況が明瞭に観察可能である。S060は胴部の破片であり、外面の一部に釉、破片の付着がみられる。S061は頸部の破片である。外面全体に釉の付着がみられ、調整は観察できない。内面は当具痕がみられる。S062は胴部の破片である。外面に焼台、または重ね焼きの痕跡がみられ、曲線を境に焼成が明瞭に異なっている。S063は胴部の破片である。内面に円形の閉塞痕がみられる。

⑨甕

S064～S100は甕である。このうち、S064～S091は墳丘造出し周辺（I区）から、S092～S100はI区以外から出土した個体である。I区からは大量に甕の破片が出土しており、紙幅の都合上口縁部を含む破片や大きな破片に限って図化を行った。I区以外から出土した須恵器については、小片であっても掲載した。

S064とS065（図85）は口縁部の破片であり、同一個体であるとみられる。口唇部はやや厚く内傾する。口縁端部は丸く、やや直立する。外面に櫛描波状文、その下位に凹線が2条みられる。内面はナデ調整される。外面には釉が付着し、含有物は少ない。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。

S066（図85）は口縁部の破片である。口唇部はやや厚く、口縁端部は丸く直立する。外面に2段の櫛描波状文がみられ、突帯2条が段間を区画する。内面はナデ調整される。外面には釉が付着し、含有物は少ない。S067（図85）は口縁部の破片である。口唇部は厚い。口縁端部は丸くやや直立気味である。外面はカキ目の上から櫛描波状文、その上下に凸線1条がみられる。口唇部直下に凹線1条が巡る。他の部分はヨコナデされる。一部釉の付着がみられる。S068（図85）は口縁部の破片である。口唇部は厚く、口縁端部は丸くやや直立する。外面は口縁直下に櫛描波状文がみられ、下位に突線が1条巡る。その他の部分はヨコナデされる。S069（図85）は口縁部の破片である。口唇部は厚く、やや内傾する。外面カキ目後、櫛描波状文が施される。口唇部に凹線が1条みられる。その他の部分はヨコナデされる。外面に釉の付着がみられる。胎土は精良で、陶邑産とみられる。S074と似た特徴を示し、同一個体である可能性がある。

S070とS071（図85）は同一個体であるとみられる口縁部の破片である。口縁端部は内側に折り返される。外面に連続する櫛歯刺突文が3段みられ、段間は2条の凹線で区画される。その他の部分はヨコナデされる。胎土に白色粒子を含む。内外面ともに釉の付着がみられる。口縁部が3段にわたる破片は他になく、大型品である可能性がある。

S072（図85）は口縁部の破片である。口唇部は厚く、内面が屈曲し稜をもつ。口縁端部は平たく作出される。外面はカキ目の上から連続刺突文があり、その上部に2本の凹線がみられる。その他の部分はヨコナデされる。口縁端部のみ釉の付着がみられる。S073（図85）は口縁部の破片である。口唇部の器壁は薄く、やや直立気味に立ち上がる。口唇部外面に突線が2条巡り、下位に凹線が2条みられる。その他の部分はヨコナデされる。外面に釉の付着がみられる。

S074、S075、S076（図85）は同一個体であるとみられる。甕の口縁部の破片である。口唇部は厚い。口縁端部は丸く内傾する。外面カキ目の上に櫛描波状文、その下位に凹線が2条みられる。その他の部分はヨコナデされる。外面には釉の付着がみられる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。S077（図85）は口縁部の破片である。口唇部はやや直立する。外面は突線2条の下に凹線2条が巡る。その他の部分はヨコナデされる。外面の一部に釉の付着がみられる。含有物は少なく胎土は精良であり、陶邑産である可能性が高い。S078（図85）は口縁部の破片である。平成29年度調査の表採資料である。口唇部は厚く、内傾する。外面は、明瞭ではないが櫛描波状文が施される。その他の部分はヨコナデされる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。

S079（図85）は甕の頸部の破片である。昭和42年度の調査で出土した破片（第5集第33図-112）

と接合した。外面は凹線2条の下に櫛描波状文が施され、その直下に凹線が1条、更にその下にもう1列櫛描波状文がみられる。その他の部分はヨコナデされる。S080(図85)は甕の頸部の破片であり、口縁部直下の破片であるとみられる。外面はカキ目の上に櫛描波状文が2段にわたって施される。両者は1条の凹線で区画される。その他の部分はヨコナデされる。胎土に黒色粒子を含む。外面の一部に釉の付着がみられる。S081(図85)は頸部の破片である。外面には櫛描波状文がみられ、上下を凹線で区画される。その他の部分はヨコナデされる。外面の一部に釉の付着がみられる。S082(図85)は頸部の破片である。外面に突線2条が巡り、その上下に櫛描波状文が2段みられる。その他の部分はヨコナデされる。胎土に白色粒子を含む。S083(図85)は頸部の破片である。平成29年度調査時の表採資料である。外面に櫛描波状文、内面にヨコナデ調整がみられる。胎土に白色粒子を含む。S084(図85)は頸部の破片である。頸部から胴部の屈曲部である。外面はカキ目の上から叩き、内面は当具痕、指オサエ痕がみられる。外面の一部に釉の付着がみられる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。S085(図85)は頸部の破片である。頸部から胴部の屈曲部である。内外面ともにヨコナデ調整される。白色粒子を胎土に含む。大型の甕の破片であると考えられる。

S086(図86)は口縁部である。口唇部が厚く直立気味に立ち上がる。外面の頸部はヨコナデ、口唇部直下に2条の突線が巡る。内面はヨコナデ調整である。S087(図86)は胴部である。外面は平行叩き後カキ目、内面は同心円状の当具痕がみられる。胴部に凹みが認められ、焼成の際の支柱の痕跡と考えられる。S088(図86)は胴部片である。外面はカキ目後平行叩き、内面には当具痕がみられる。S086、S087、S088は、接点はないものの同一個体である可能性が高い。外面胴肩部、内面口縁部に釉がみられる。胎土は精良で陶邑産である可能性が高い。

S089(図87)は胴部片である。外面は平行叩き、内面は同心円状の当具痕がみられる。胎土に白色粒子、黒色粒子を含む。S090(図87)は胴部片である。外面は格子叩き、内面は同心円状の当具痕がみられる。胎土に白色粒子を含む。S091(図87)は胴部片である。外面は格子叩き、内面は同心円状の当具痕がみられる。内面には工具による多方向の擦過痕が認められる。胎土に黒色粒子を含む。

S092～S100(図87)はI区以外から出土した個体である。S092は胴部の破片である。平成24年度の埋立工事の際に表採された個体である。外面は格子叩き、内面は同心円状の当具痕がみられる。S093は胴部の破片である。S094、S095は平成25年度調査時の表採資料である。S094は胴部の破片である。外面は格子叩き、内面は同心円状の当具痕がみられる。胎土に白色粒子を含む。S095は胴部の肩部分である。外面は格子叩き、内面は同心円状の当具痕がみられる。胎土に黒色粒子を含む。S096は胴部の破片である。28-1T出土。内面は当具痕がみられ、その他はナデ調整される。胎土に白色粒子を含む。S097は胴部の破片である。28-1T出土。全面ナデ調整される。胎土に白色粒子を含む。S098は胴部の破片である。28-4T出土。外面はナデ調整される。内面表面は剥離しており調整は不明である。S099は胴部の破片である。30-1T内のSK1出土。内外面ともナデ調整される。S100は口縁部である。25-1T出土。口唇部が厚くやや内傾する。外面はカキ目の上から櫛描波状文、その下位に凹線が1条みられる。その他の部分はヨコナデされる。外面に釉が付着する。

坏盖

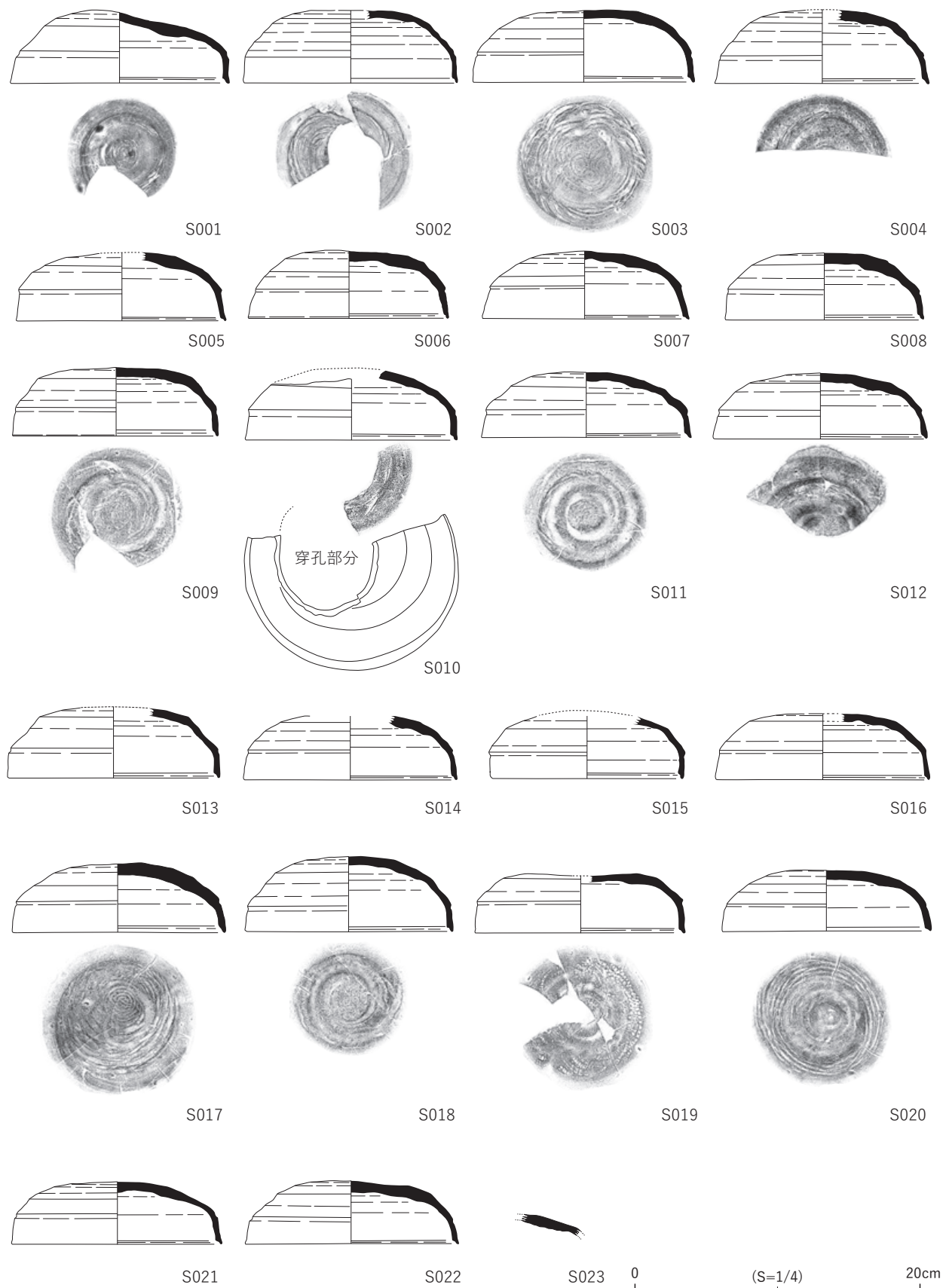


图 82 須恵器①

坏身

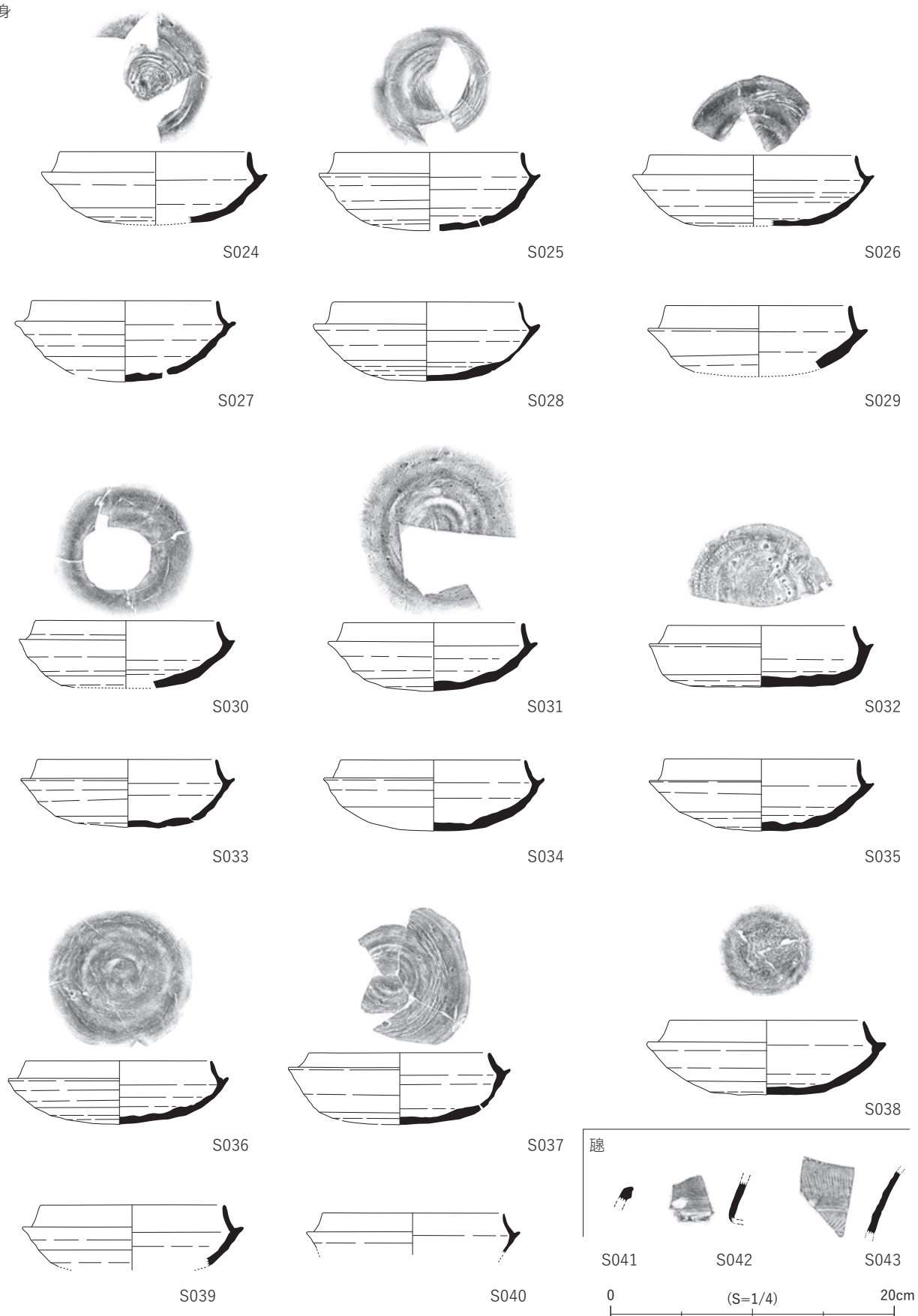
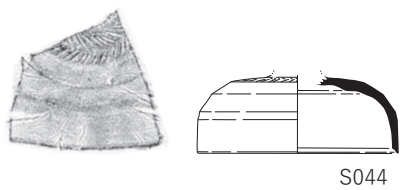


图 83 須恵器②

壺蓋

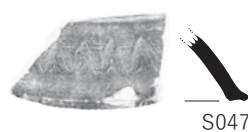


S044

器台

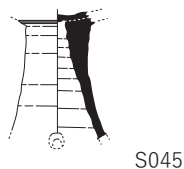


S046

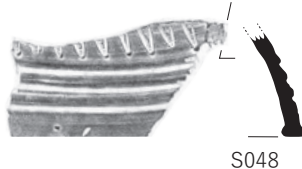


S047

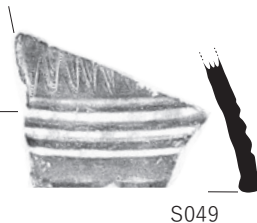
高坏



S045



S048

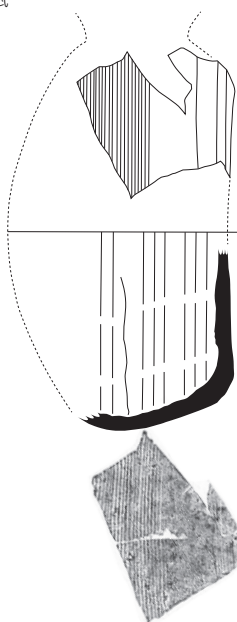


S049

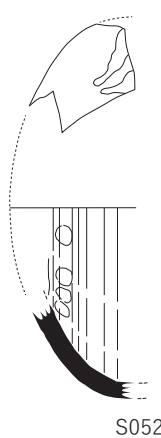


S050

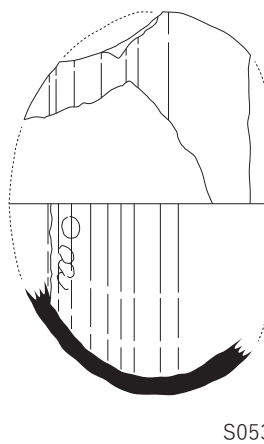
提瓶



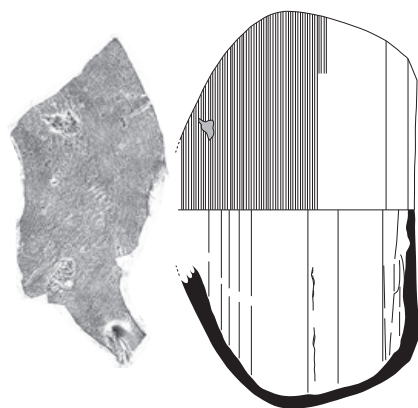
S051



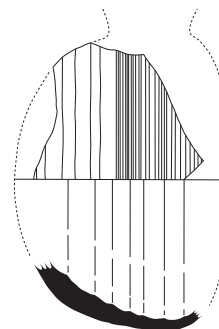
S052



S053



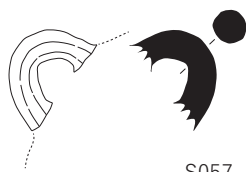
S055



S054



S056



S057

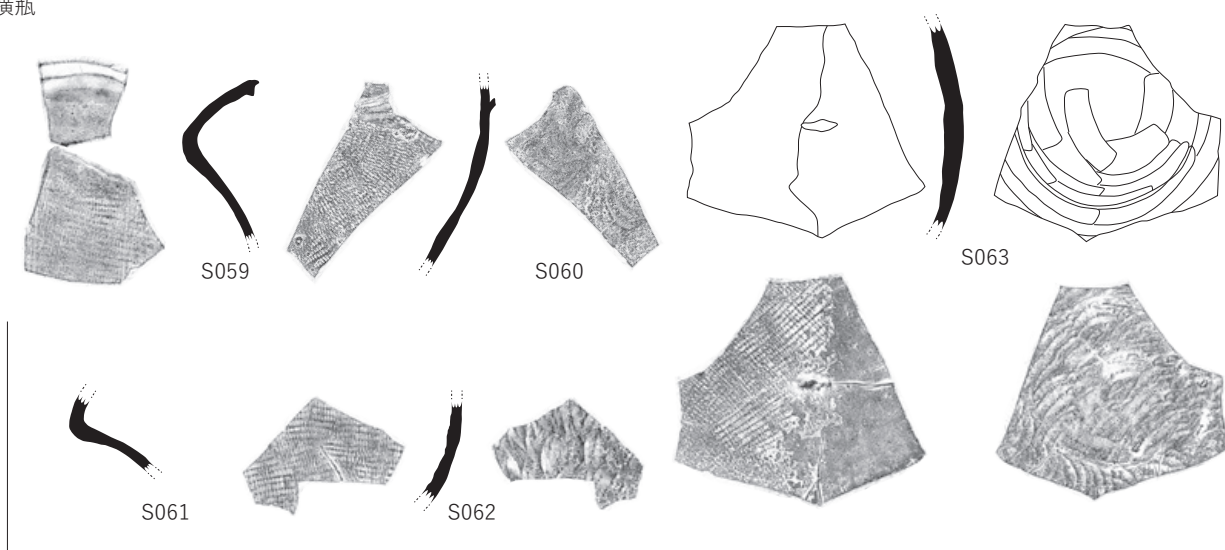


S058

0 (S=1/4) 20cm

图 84 須恵器③

横瓶



甕

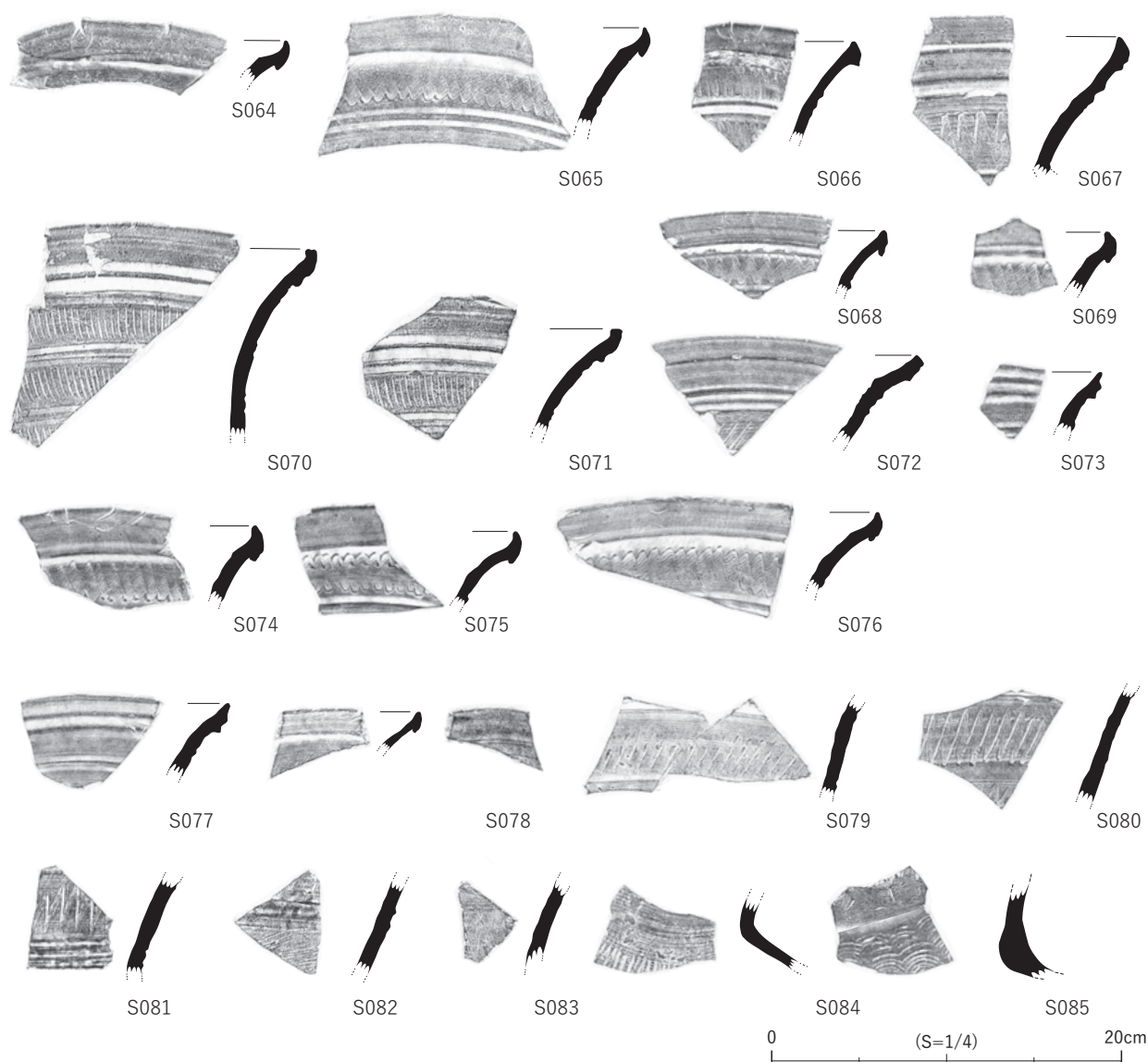


図 85 須恵器④

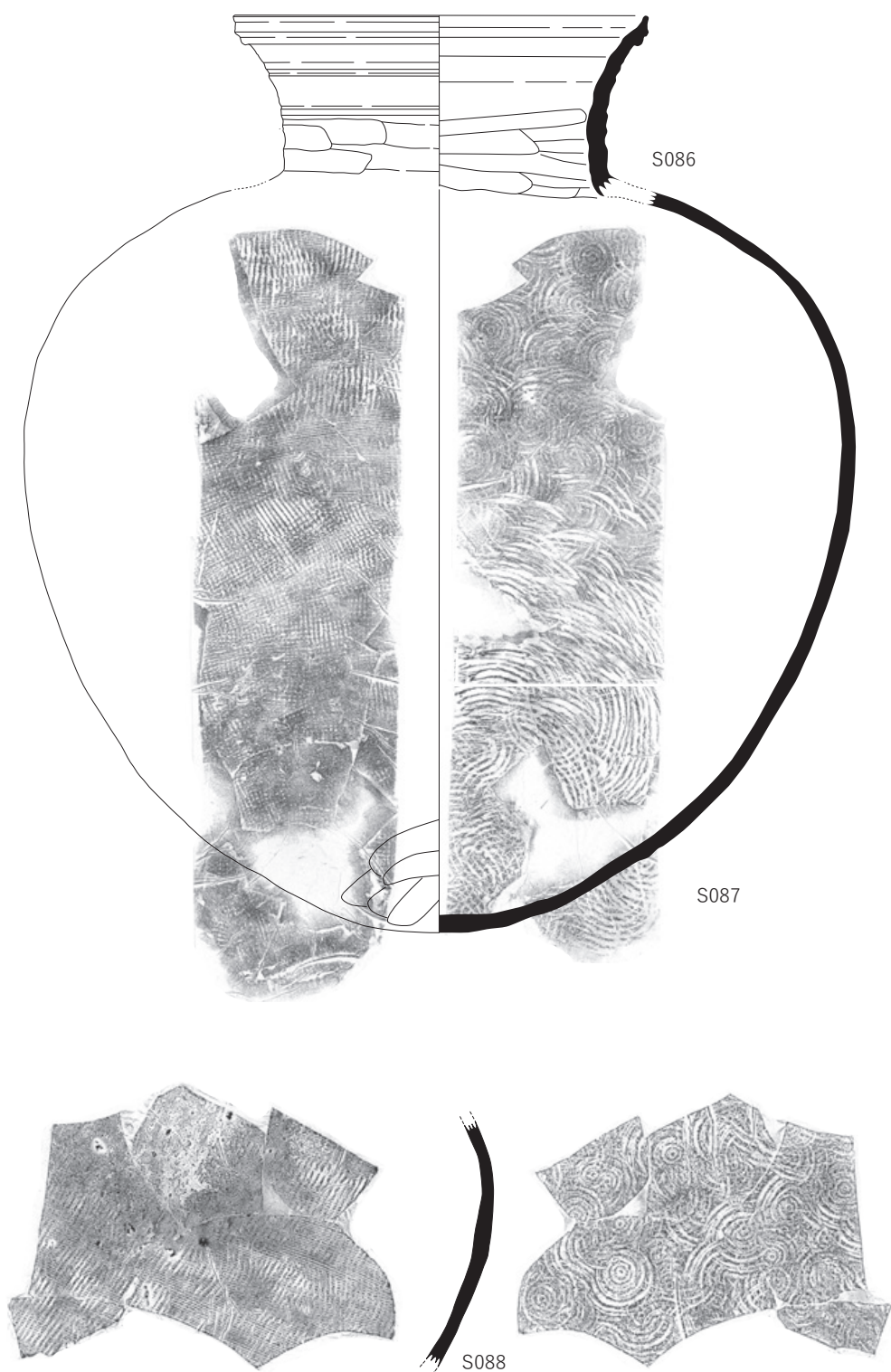


図 86 須恵器⑤

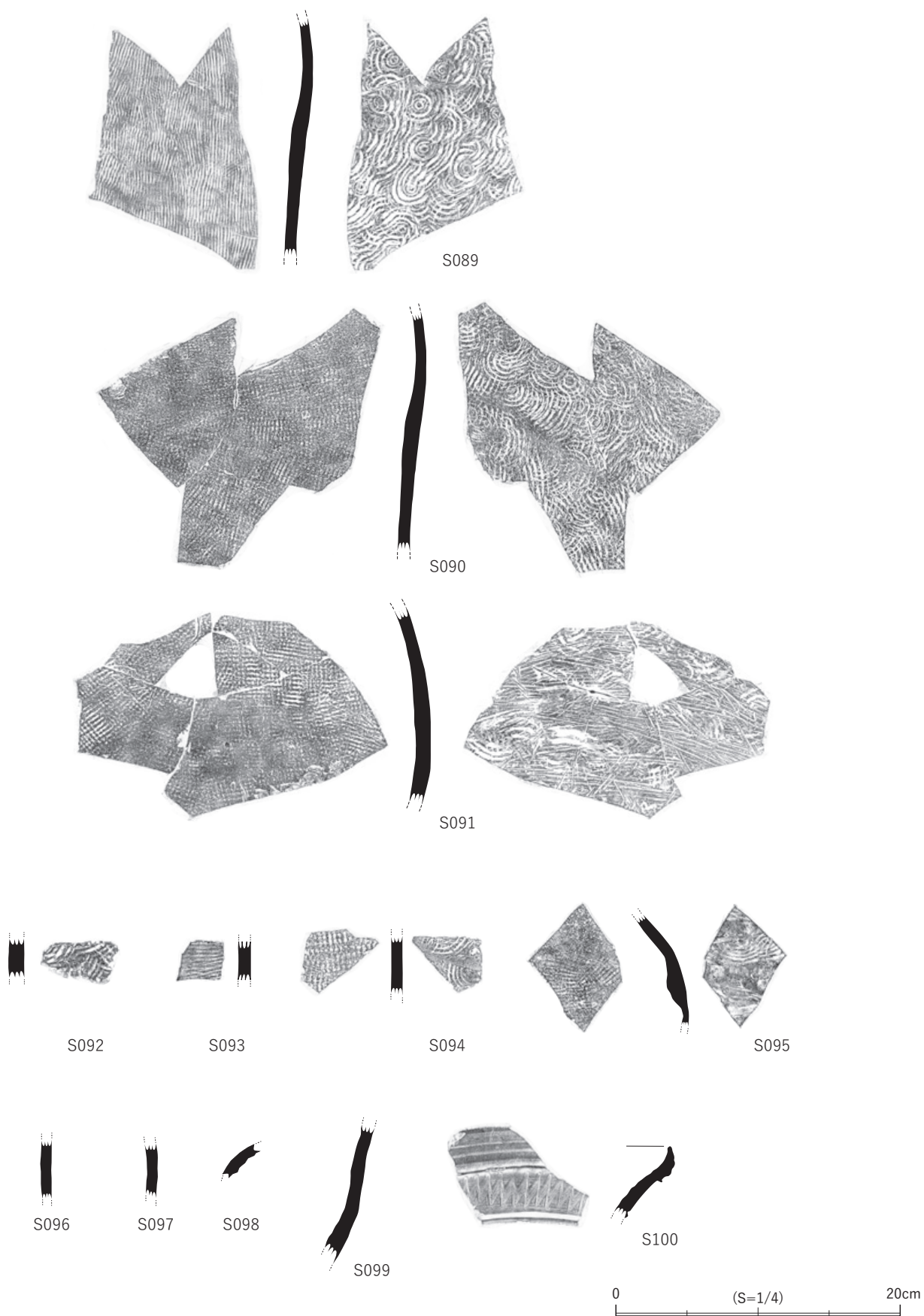


図 87 須恵器⑥

表3 須恵器観察表

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	器種	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	備考
S001	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 5Y5/1		良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	15.3 5.1 —	天井弱い歪み
S002	I 区	H29	2T・ 6T (5T)	坏蓋	外面灰 5Y5/1 内面灰 5Y6/1		良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	15.0 5.1 —	
S003	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 5Y6/1		良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	15.6 5.1 —	
S004	I 区	H29	2T	坏蓋	外面灰 5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1		良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	[15.0] (5.1) —	
S005	I 区	H29	2T	坏蓋	外面灰 7.5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1		良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	14.7 4.8 —	
S006	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 5Y6/1	白色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	14.0 4.7 —	
S007	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 5Y6/1	白色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	14.5 4.8 —	
S008	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	14.0 4.7 —	焼け歪み
S009	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	[14.4] 4.8 —	
S010	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	黒色粒子 白色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	14.9 (4.9) —	穿孔
S011	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	14.7 4.5 —	
S012	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	[15.0] 4.6 —	
S013	I 区	H29	2T	坏蓋	外面灰 5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	[14.9] (4.9) —	
S014	I 区	H29	2T	坏蓋	外面灰 5Y6/1 内面灰 5Y5/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	[15.0] (4.5) —	
S015	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	[13.6] (4.4) —	

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	器種	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	備考
S016	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	白色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	[15.0] 4.6 —	
S017	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子 小石	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	15.0 4.8 —	器壁厚い
S018	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 10Y5/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	14.6 5.2 —	
S019	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	黒色粒子 白色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	[14.7] (4.2) —	焼け歪み
S020	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y5/1	白色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	14.6 4.2 —	器壁厚い
S021	I 区	H29	2T	坏蓋	外面灰 N5/0 内面灰 N4/0	白色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ	14.8 4.4 —	
S022	I 区	H29	2T	坏蓋	外面灰 N5/0 内面灰 N4/0	白色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ	14.9 4.4 —	
S023	I 区	H29	2T	坏蓋	灰 7.5Y6/1	白色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	— (4.8) —	
S024	I 区	H29	2T	坏身	灰 7.5Y6/1		良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	13.5 (5.1) —	
S025	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 5Y5/1 内面灰 5Y6/1		良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	13.4 5.5 —	底部穿孔
S026	I 区	H29	2T	坏身	灰 5Y6/1		良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	[14.7] (5.0) —	
S027	I 区	H29	2T	坏身	灰オリーブ 7.5Y6/2	白色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ	[13.2] 5.7 —	底部穿孔か
S028	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 7.5Y6/1 内面灰オリーブ 7.5Y6/2	白色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ	[13.0] 6.0 —	
S029	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 5Y6/1 内面灰 5Y5/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	13.2 (4.6) —	底部穿孔か
S030	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 7.5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ	13.0 (4.7) —	底部穿孔

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	器種	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	備考
S031	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 10Y5/1 内面灰 10Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	12.8 4.8 —	
S032	I 区	H29	2T	坏身	灰 5Y6/1	黒色粒子多 白色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	13.3 4.4 —	器壁厚い
S033	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 5Y6/1 内面灰 5Y5/1	白色粒子 黒色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	12.6 4.8 —	
S034	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 5Y6/2 内面灰 5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	13.1 5.0 —	
S035	I 区	H29	2T	坏身	灰 5Y5/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	13.8 5.0 —	器壁やや厚い
S036	I 区	H29	2T	坏身	灰 7.5Y5/1	白色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ 当具痕	13.1 4.5 —	
S037	I 区	H29	2T	坏身	外面灰 7.5Y6/1 内面灰 7.5Y5/1	白色粒子	良好	ヘラケズリ（おそらく左回転） ヨコナデ 当具痕	12.7 5.1 —	
S038	I 区	H29	2T	坏身	外面暗オリーブ 灰 2.5GY4/1 内面オリーブ灰 2.5GY5/1	白色粒子 黒色粒子	良好	左回転ヘラケズリ ヨコナデ	[13.8] 5.2 —	
S039	I 区	H29	2T	坏身	灰 5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	右回転ヘラケズリ ヨコナデ	[13.1] (4.4) —	
S040	I 区	H29	2T	坏身	灰 7.5Y6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	ヨコナデ	[12.8] (2.9) —	
S041	I 区	H29	2T	甕	灰 5Y5/1		良好	外面ナデ	— (1.0) —	
S042	表採	H29	表採	甕	灰 5Y4/1		良好	外面ナデ 内面ナデ	— (3.0) —	
S043	I 区	H29	2T	甕	外面灰 7.5Y5/1 内面灰 5Y6/1	黒色粒子	良好	外面櫛描波状文・櫛歯による断 続した刺突・文様帯を区画する 沈線巡る 内面ナデ	— (4.7) —	
S044	I 区	H29	6T	壺	外面灰 5Y5/1 内面灰 5Y6/1			外面ナデ・櫛歯状刺突 内面ナデ	— (4.1) —	
S045	表採	H29	表採	高坏	灰 N6/0		良好	外面脚部ヨコナデ 内面脚部ナデ	— (6.7) —	円形透かし孔

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	器種	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	備考
S046	I 区	H29	2T (5T)	器台	灰白 7.5Y8/1 内面灰白 7.5Y7/2		良好	外面カキ目、凹線 1 条 内面ナデ	— (4.5) —	
S047	I 区	H29	6T	器台	灰 10Y5/1		良好	外面カキ目、櫛描波状文、凹線 1 条、ナデ 内面ナデ 底部ナデ	— (3.6) —	
S048	表採	H24	表採	器台	灰 7.5Y6/1		良好	外面 3 本の凹線の上に櫛描波状 文、ナデ 内面ナデ	— (5.6) —	S049・S050 と同一個体、 三角形透かし孔 1 か所
S049	I 区	H29	6T	器台	灰白 7.5Y7/2		良好	外面 3 本の凹線、その上に櫛描 波状文、ナデ 内面ナデ	— (7.2) —	S048・S050 と同一個体、 三角形透かし孔 1 か所
S050	I 区	H29	6T	器台	灰 10Y6/1		良好	外面横方向のカキ目、櫛描波状 文 2 段、凹線部ナデ 内面ナデ	— (7.4) —	S048・S049 と同一個体、逆 三角形透かし孔 2 段
S051	I 区	H29	2T (5T)	提瓶	外面灰 7.5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面カキ目 内面ナデ	— (8.3) —	
S052	I 区	H29	6T	提瓶	外面灰 5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1	黒色粒子	良好	外面ナデ 内面ナデ	— (5.3) —	
S053	I 区	H29	2T	提瓶	灰 5Y6/1	黒色粒子	良好	外面平行叩き、ナデ 内面当具痕、ナデ	— (12.0) —	内面に閉塞痕あり
S054	I 区	H29	2T	提瓶	外面暗灰 N3/0 内面灰白 N7/0	黒色粒子 白色粒子	良好	外面カキ目、ヘラケズリ 内面ナデ	— (8.9) —	
S055	I 区	H29	2T・ 6T	提瓶	外面灰 N4/0 内面灰 10Y6/1	黒色粒子	良好	外面カキ目、ヘラケズリ 内面ナデ	— (12.3) —	
S056	I 区	H29	2T	提瓶	灰 7.5Y5/1		良好		— (5.8) —	S057 と同一 本体との接合面で剥落
S057	I 区	H29	2T	提瓶	灰 7.5Y5/1		良好		— (5.8) —	S056 と同一 本体との接合面で剥落
S058	I 区	H29	3T	提瓶	外面灰白 5Y7/2 内面灰 5Y6/1	白色粒子 白色針状物質・ 石英	良好	外面カキ目 内面ナデ	— (2.7) —	在地産か
S059	I 区	H29	2T	横瓶	外面灰 5Y6/1 内面黒 5 Y2/1		良好	外面格子目状叩き 内面当具痕・頸～口縁部ヨコナ デ	— (8.6) —	S060・S061・S062・S063 と 同一 頸部 接合痕明瞭
S060	I 区	H29	2T	横瓶	外面灰 5Y6/1 内面灰 5Y4/1	黒色粒子	良好	外面格子目状叩き 内面当具痕	— (9.7) —	S059・S061・S062・S063 と 同一 破片付着

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	器種	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	備考
S061	I 区	H29	2T	横瓶	外面灰 5Y6/1 内面黒 5Y2/1		良好	内面当具痕、頸部ナデ	— (4.1) —	S059・S060・S062・S063 と 同一
S062	I 区	H29	2T	横瓶	外面灰 5Y6/1 内面灰 5Y4/1	黒色粒子	良好	外面格子目状叩き内面当具痕	— (5.4) —	S059・S060・S061・S063 と 同一 重ね焼きの痕跡
S063	I 区	H29	2T	横瓶	外面灰 5Y6/1 内面黒 5Y2/1		良好	外面格子目状叩き内面当具痕	— (11.0) —	S059・S060・S061・S062 と 同一 閉塞痕あり
S064	I 区	H29	2T	甕	灰 7.5Y6/1		良好	外面櫛描波状文 内面ナデ	— (2.3) —	S065 と同一 口唇部やや厚く、内傾する 外面釉
S065	I 区	H29	2T	甕	灰 7.5Y6/1		良好	外面櫛描波状文、下に凹線 2 条 内面ナデ	— (5.6) —	S064 と同一 口唇部やや厚く、内傾する 外面釉
S066	I 区	H29	6T	甕	外面灰 7.5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面 2 段の櫛描波状文、突帯 2 条が段間を区画する 内面ナデ	— (5.1) —	口唇部やや厚く、口端部直立 気味 外面釉
S067	I 区	H29	2T	甕	外面灰 7.5Y5/1 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面カキ目の上から櫛描波状 文、その上下に凸線 1 条。口唇 部直下に凹線 1 条 内面ナデ	— (8.0) —	口唇部厚く、直立気味 外面釉
S068	I 区	H29	2T	甕	灰 10Y6/1		良好	外面櫛描波状文、直下に凸線 内面ナデ	— (3.6) —	口唇部厚い 口端部やや直立する
S069	I 区	H29	2T	甕	外面灰 7.5Y4/1 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面カキ目後、櫛描波状文、口 唇部に凹線 1 条 内面ナデ	— (3.4) —	S074 と同一か 口唇部厚く、やや内傾する 外面釉
S070	I 区	H29	2T・ 6T (5T)	甕	灰 7.5Y6/1	白色粒子	良好	外面連続する櫛歯刺突文 3 段、 段間は凹線で区画される 内面ナデ	— (10.3) —	S071 と同一、大型品の可能性 口端部は内側に折り返される 釉の付着
S071	I 区	H29	6T	甕	灰 7.5Y6/1	白色粒子	良好	外面連続する櫛歯刺突文、上下 に凹線 2 条 内面ナデ	— (6.0) —	S070 と同一 口端部が内側に折り返される 釉の付着
S072	I 区	H29	6T	甕	外面灰 N5/0 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面カキ目の上から連続刺突 文、上部に 2 本の凹線 内面ナデ	— (5.0) —	口唇部厚い 内面口唇部直下に稜をもつ 口縁端部のみ釉
S073	I 区	H29	6T	甕	外面灰 7.5Y6/1 内面灰 7.5Y4/1		良好	外面凸線 2 条の下に凹線 2 条 内面ナデ	— (3.6) —	口唇部直立気味、外面釉
S074	I 区	H29	2T	甕	外面灰 N5/0 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面カキ目後、櫛描波状文 内面ナデ	— (4.4) —	S075・S076 と同一 口唇部厚く、内傾する 外面釉
S075	I 区	H29	2T	甕	外面灰 N5/0 内面灰 7.5Y5/1		良好	外面カキ目の上に櫛描波状文、 凹線 2 条 内面ナデ	— (4.3) —	S074・S076 と同一 口唇部厚く、口端部内傾する 外面釉

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	器種	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	備考
S076	I 区	H29	2T	甕	外面灰 N5/0 内面灰 7.5Y5/1		良好	外面カキ目後、櫛描波状文、凹 線 2 条 内面ナデ	— (4.6) —	S074・S075 と同一 口唇部厚く、内傾する 外面釉
S077	I 区	H29	6T	甕	外面暗灰 N3/0 内面灰 10Y5/1		良好	外面凸線 2 条の下に凹線 2 条、 ナデ 内面ナデ	— (4.1) —	口唇部やや直立する 外面釉
S078	表採	H29	表採	甕	外面灰 N5/1 内面灰 5Y6/1		良好	外面櫛描波状文か、ナデ 内面ナデ	— (2.2) —	口唇部厚く、内傾する
S079	I 区	H29	2T	甕	外面灰 N5/0 内面灰 10Y6/1		良好	外面凹線 2 条の下に櫛描波状 文、直下に凹線 1 条、下に櫛描 波状文	— (5.4) —	S42 年調査時出土個体と接合。 (第 5 集第 33 図 -112)
S080	I 区	H29	2T	甕	外面灰 7.5Y4/1 内面灰 7.5Y6/1	黒色粒子	良好	外面カキ目、櫛描波状文 2 段、 凹線 1 条 内面ナデ	— (6.6) —	外面釉
S081	I 区	H29	2T	甕	外面灰 7.5Y4/1 内面灰白 7.5Y7/1		良好	外面櫛描波状文、上下を凹線で 区画 内面ナデ	— (5.1) —	外面釉
S082	I 区	H29	2T	甕	外面灰 N5/0 内面灰 7.5Y6/1	白色粒子	良好	外面凸線 2 条、上下に櫛描波状 文 内面ナデ	— (5.4) —	
S083	表採	H29	表採	甕	外面灰 7.5Y5/1 内面灰 5Y6/1	白色粒子	良好	外面櫛描波状文 内面ナデ	— (5.1) —	
S084	I 区	H29	6T	甕	外面灰白 7.5Y7/1 内面灰 7.5Y4/1		良好	外面カキ目の上から叩き 内面当具痕、指オサエ	— (4.2) —	外面釉
S085	I 区	H29	6T	甕	外面灰 10Y6/1 内面灰 N4/0	白色粒子	良好	内外面ナデ	— (5.5) —	大型品
S086	I 区	H29	6T	甕	外面灰 N5/0 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面頸部ナデ、口唇部直下に 2 条の凸線 内面口縁部ナデ	24.4 (27.6) —	S087・S088 と同一 口唇部厚く、直立気味 外面胴肩部・内面口縁部に釉
S087	I 区	H29	2T・ 6T	甕	外面暗灰 N3/0 内面灰 N6/0		良好	外面胴部平行叩き後、カキ目 内面胴部同心円状当具痕	— (43.4) —	S086・S088 と同一 外面胴肩部・内面口縁部に釉 焼成の際の支柱痕あり
S088	I 区	H29	6T	甕	外面暗灰 N3/0 内面灰 N6/0		良好	外面カキ目後、平行叩き 内面当具痕	— (14.4) —	S086・S087 と同一 外面釉
S089	I 区	H29	2T (5T)	甕	外面灰白 7.5YR7/2 内面灰 7.5YR6/1	白色粒子 黒色粒子	良好	外面平行叩き 内面同心円状の当具痕	— (21.9) —	
S090	I 区	H29	6T	甕	灰 7.5YR6/1	白色粒子	良好	外面格子叩き 内面同心円状の当具痕	— (16.8) —	

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	器種	色調	胎土	焼成	調整	口径 器高 底径 (cm)	備考
S091	I 区	H29	2T	甕	外面灰白 5Y7/2 内面灰 5Y6/1	黒色粒子	良好	外面格子叩き 内面同心円状の当具痕 工具擦過痕	— (13.9) —	
S092	表採	H24	表採	甕	灰 10Y6/1		良好	外面格子目状叩き 内面同心円状当具痕	— (2.9) —	
S093	表採	H25	表採	甕	灰 7.5Y6/1		良好	外面平行叩き 内面同心円状の当具痕	— (2.8) —	
S094	表採	H25	表採	甕	灰 10Y6/1	白色粒子	良好	外面格子目状叩き 内面当具痕	— (4.3) —	
S095	表採	H26	表採	甕	外面灰 7.5Y4/1 内面灰白 7.5Y7/1	黒色粒子	良好	外面格子目状叩き 内面当具痕	— (8.0) —	外面釉
S096	IV 区	H28	1T	甕	外面灰 N4/0 内面灰 N6/0	白色粒子	良好	外面ナデ 内面当具痕	— (4.2) —	
S097	IV 区	H28	1T	甕	外面灰 N4/0 内面灰 N6/0	白色粒子	良好	外面ナデ 内面ナデ	— (3.9) —	
S098	IV 区	H28	4T	甕	外面灰 7.5Y5/1		良好	外面ナデ	— (2.1) —	内面剥離
S099	IV 区	H30	1T (SK1)	甕	外面 N4/0 内面灰 N6/0		良好	外面ナデ 内面ナデ	— (9.9) —	
S100	II 区	H25	1T	甕	外面灰 N4/0 内面灰 7.5Y6/1		良好	外面カキ目の上から櫛描波状 文、凹線 1 条 内面ナデ、口唇部に凹線 2 条	— (5.1) —	口唇部厚く、やや内傾する 外面釉

第8節 土師器

①概要

土師器の出土は須恵器と同様I区（墳丘造出し部）に集中する。須恵器は坏（身・蓋）を主体に、器台、提瓶、甕など多種にわたる一方、土師器の器種の大半は高坏が占める。高坏の他には坏、壺の破片が少量出土している。出土状況は須恵器と同様であり、造出しの上段から重なり合って出土した。本報告で掲載した資料は全て、平成29年度調査の29-2Tである（表4）。

高坏は胎土や形状の違いから大きく2つのグループに分けられる。本報告では、胎土が白色系で製作技術が洗練された個体のグループを白色系グループ、胎土が赤色系で製作技術にバラつきがみられる個体のグループを赤色系グループと呼称する。白色系グループは最少で22個体、赤色系グループは最少で17個体確認された。個数のカウントは坏部と脚部の接続部を基本としており、本報告に非掲載の破片を含めると、両グループの個数は同数に近かったとみられる。両グループともに置かれた状態のまま出土した個体はなく、出土位置で明確な分布傾向の差異は認められなかった。

白色系グループの特徴は下記が挙げられる。

- ・口縁部と体部を画する稜が突出する。
- ・脚部は中空となる。器壁は薄く、重量は軽い。
- ・脚部はエンタシス状にふくらみをもつ。
- ・脚部外面はケズリ後ナデ調整、裾部に強いナデ調整を施す。
- ・脚部内面は裾部に向けて明瞭に屈曲し、稜をもつ。

赤色系グループの特徴は下記が挙げられる。

- ・口縁部と体部の境目に稜をもたないか、あっても明瞭ではない。
- ・脚部は中実となる。重い。
- ・脚部が柱状で直線的な形状を呈する。
- ・脚部外面にケズリ、裾部にナデ調整を施す。
- ・脚部内面は裾部に向けて稜をもたない。
- ・坏部内外面から脚部外面に赤彩される。（赤彩がみられない個体もある。）

上記の特徴はあくまで傾向であり、赤色系としたものの中には、脚部の天井が高く白色系の製作方法で作られたとみられる高坏が2個体存在するなど、個々に特徴がある。両者の最も大きな特徴的な差異は脚部が中空となるか、中実となるかの違いで、これは坏部と脚部の接合方法の違いに起因するとみられる。白色系グループは坏部と脚部を円盤充填により接続しており、赤色系グループは脚部側から粘土を充填し接続している。

製作方法や赤彩の有無などの違いはあるものの、両グループの個体の法量は概ね一致する。赤色系グループの方が個体間に技術的なブレがあるようで、法量のバラつきが大きい。

②高坏

H001～028は白色系グループに属し、基本的には前頁の特徴が当てはまる。

H001（図88）は器高13.0cm、口径19.3cm、底径11.9cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭に突出する。坏部内外面ともに強くナデられる。坏部と脚部の接続部は丁寧にナデられ、強くくびれる。脚部はややふくらむ。タテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は強くナデられる。

H002（図88）は器高12.1cm、口径18.1cm、底径11.2cm。口縁部はやや外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部は内外面ともに強くナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられており、くびれは弱い。脚部はやや短く、外側にふくらむ。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられている。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲し稜をもつ。内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H003（図88）は器高12.4cm、口径18.1cm、底径11.2cm。口縁部はやや外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに強くナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられており、くびれる。脚部は外側に強くふくらむ。脚部外面はタテ方向にケズリ後丁寧にナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H004（図88）は器高13.2cm、口径19.0cm、底径12.0cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられており、くびれは強い。脚部はややふくらむ。タテ方向にケズリ後ナデられ、裾部はナデられる。脚部内面は裾部で強く屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部は丁寧にナデられる。器壁に黒斑がみられる。

H005（図88）は器高13.4cm、口径19.2cm、底径11.9cm。口縁部はやや外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部は内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられており、強くくびれる。脚部は外側に強くふくらむ。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられる。脚部内面は裾部で強く屈曲し稜をもつ。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁に黒斑がみられる。

H006（図88）は器高13.1cm、口径19.1cm、底径12.3cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭に突出する。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、強くくびれる。脚部は外側に弱くふくらむ。タテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H007（図89）は器高12.1cm、口径18.1cm、底径11.3cm。口縁部はやや外反する。口縁端部は丁寧にナデ調整される。坏部の器壁はやや厚い。口縁部と体部を画する稜は明瞭に突出する。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、弱くくびれる。脚部は外側にややふくらむ。脚部外面はタテ方向にケズリ後丁寧にナデられている。脚部内面は裾部で屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H008 (図89) は器高13.5cm、口径18.6cm、底径11.4cm。口縁部は弱く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭に突出する。稜と口唇部の中間には角度が変わる箇所が存在し、坏部を製作する際の粘土を積み上げる単位の境界とみられる。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、強くくびれる。脚部のふくらみは弱い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H009 (図89) は器高12.2cm、口径18.1cm、底径11.2cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、強くくびれる。脚部のふくらみは弱い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁には黒斑がみられる。

H010 (図89) は器高12.9cm、口径18.8cm、底径11.6cm。口縁部は強く外反し、口唇部の器壁はやや薄い。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、強くくびれる。脚部のふくらみは弱い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。坏部の底部と口縁部で色調が異なっており、坏部を製作する際に乾燥等の工程があったとみられる。

H011 (図89) は器高11.2cm、口径18.4cm、底径11.2cm。口縁部は外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭に突出する。坏部は内外面ともに丁寧にナデられる。坏部外面の一部にナデによる浅い凹線がみられる。坏部は底部が浅い。坏部と脚部の接続部はナデられており、くびれは弱い。脚部はやや短く、外側にふくらむ。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられている。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲し稜をもつ。内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H012 (図89) は器高12.2cm、口径17.7cm、底径11.0cm。口縁部は外反し、口唇部の器壁はやや厚い。口縁部と体部を画する稜は明瞭で強く突出する。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、くびれは弱い。脚部のふくらみは弱い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H013 (図90) は器高12.6cm、口径17.7cm、底径11.0cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、強くくびれる。脚部のふくらみは弱い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整の単位は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H014 (図90) は器高12.3cm、口径17.8cm、底径10.9cm。口縁部は弱く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭で強く突出する。坏部はやや深い。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、くびれは強い。脚部のふくらみは強い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H015 (図90) は器高13.0cm、口径17.7cm、底径12.0cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭に突出する。坏部はやや深い。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、くびれは強い。脚部のふくらみは強い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられている。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁に黒斑がみられる。

H016 (図90) は器高12.0cm、口径17.5cm、底径11.4cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は弱い。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部内面の一部に底部と口縁部の接合痕がみられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、くびれは強い。脚部のふくらみは強い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられている。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H017 (図90) は器高12.7cm、口径19.2cm、底径12.3cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は弱い。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、くびれる。脚部のふくらみは強い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁に黒斑がみられる。

H018 (図90) は残存高10.9cm、口径18.1cm。脚部の裾部以下を欠損する。口縁部は外反する。口縁部と体部を画する稜は弱い。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部と脚部の接続部はナデられ、くびれる。脚部のふくらみは強い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられている。脚部内面はケズリ後にナデられる。

H019 (図91) は残存高5.1cm、口径17.3cm。脚部を欠損する。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部内面の一部に底部と口縁部の接合痕がみられる。

H020 (図91) は残存高5.7cm、口径19.2cm。脚部を欠損する。口縁部は強く外反し、口唇部直下の内面に稜をもつ。器壁はやや薄い。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部内面の一部に底部と口縁部の接合痕がみられる。

H021 (図91) は残存高5.9cm、口径18.7cm。脚部を欠損する。口縁部は外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部内面の一部に底部と口縁部の接合痕がみられる。胎土の色調も底部と口縁部とで異なっている。

H022 (図91) は残存高5.3cm、口径18.0cm。脚部を欠損する。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに丁寧にナデられる。坏部内面の一部に底部と口縁部の接合痕がみられる。

H023 (図91) は残存高6.0cm、口径19.5cm。脚部を欠損する。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する稜は明瞭である。坏部内外面ともに強く、丁寧にナデられる。外面に黒斑がみられる。

H024 (図91) は残存高5.0cm。坏部、脚部の接続部の破片である。接続部外面はナデられ、強くくびれる。脚部はややふくらむ。脚部外面の調整は不明瞭、内面はケズリ後ナデられる。接合部断面の観察が可能であり、円盤粘土がほぞ状に充填されている (写真図版75参照)。

H025 (図91) は残存高4.7cm。坏部、脚部の接続部の破片である。接続部外面はナデられ、強

くくびれる。接合部断面の観察が可能であり、脚部天井部と坏部底部に径約3cmの円盤状の粘土がみられる（写真図版75参照）。

H026（図91）は残存高7.3cm、底径11.2cm。坏部を欠損する。脚部はふくらむ。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁に黒斑がみられる。

H027（図91）は残存高8.9cm、底径11.5cm。坏部を欠損する。脚部のふくらみは強い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。

H028（図91）は残存高7.3cm、推定底径12.5cm。坏部を欠損する。脚部のふくらみは強い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられており、ケズリ調整は不明瞭である。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁に黒斑がみられる。

これ以降の高坏（H029～H048）は171頁のとおり赤色系グループに分類したものである。

H029（図92）は残存高13.0cm、口径18.7cm。裾部の先端を欠損する。口縁部は強く外反する。坏部外面に稜はみられない。口唇部のみヨコナデがみられるが、坏部の器壁の損耗により調整は不明瞭である。脚部は接合部から直線的に垂下し、裾部へ向けてやや広がる。脚部内外面はケズリ調整。脚部の天井部は比較的高い。

H030（図92）は器高13.7cm、口径20.5cm、底径11.9cm。口縁部は外反する。坏部はやや深い。坏部外面に稜はみられない。坏部内外面ともにナデ調整がみられる。脚部は接合部から直線的に垂下し、裾部に至り外側に広がる。脚部外面はタテ方向のケズリ調整されている。脚部内面は裾部で明瞭に屈曲する。脚部内面はケズリ調整され、強い擦過痕がみられる。裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁に黒斑がみられる。

H031（図92）は器高11.7cm、口径18.5cm、底径11.3cm。口縁部は強く外反する。坏部外面に稜はみられない。坏部内外面ともにナデ調整がみられる。脚部は短い。脚部外面はタテ方向にケズリ後ナデられている。脚部内面は裾部でやや屈曲し弱い稜をもつ。脚部内面天井部は絞られている。脚部内面はケズリ後にナデ、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁の一部に黒斑がみられる。

H032（図92）は器高12.3cm、口径19.4cm、底径11.2cm。口縁部はやや外反する。坏部外面に稜はみられない。坏部外面にケズリ調整、口縁部付近および内面はナデ調整される。脚部は直線的に垂下し、裾部で屈曲し外に開く。脚部内外面はケズリ調整され、裾部内外面は丁寧にナデられる。器壁の一部に黒斑がみられる。

H033（図92）は器高13.4cm、口径20.1cm、底径12.8cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する弱い稜がある。坏部内外面ともにナデ調整がみられ、外面の一部に不明瞭なケズリ調整がみられる。脚部は直線的に垂下し裾部に向けて緩やかに外側に広がる。脚部内外面はケズリ調整され、裾部内外面はナデられる。脚部内面天井部は絞られている。器壁の一部に黒斑がみられる。

H034（図92）は器高12.9cm、口径17.2cm、底径12.1cm。口縁部の反りはなく直線的に立ち上がる。坏部外面に稜はない。口縁部と裾部を除いて外面にタテ方向のケズリ調整が施される。坏部の口縁部外面および内面はナデ調整される。坏部と脚部の間に稜はもたず、境は明瞭ではない。脚内面はケズリ調整される。脚部内面天井部は絞られている。器壁の一部に黒斑がみられる。

H035 (図93) は器高12.9cm、口径15.5cm、底径10.4cm。口縁部は外反せず直線的に立ち上がる。口径は完形に復元できた高坏の中で最も小さい。坏部内面はナデ調整され、外面は口縁部を除いてケズリ調整される。坏部と脚部の接続部は明瞭で、強くくびれる。裾部に向かって緩やかに外反する。脚部外面は粗くケズリ調整される。裾部は内外面ともにナデられる。脚部内面はケズリ後絞られる。

H036 (図93) は器高12.9cm、口径19.2cm、底径11.5cm。口縁部は外反する。口縁部と体部を画する弱い稜がある。坏部内面および外面口縁部はナデ調整がみられる。坏部外面および脚部はタテ方向のケズリ調整がみられる。坏部と脚部の接合部は弱くくびれる。脚部は直線的に垂下し、裾部に向かって明瞭に屈曲する。裾部は内外面ともにナデ調整される。脚部内面はケズリ調整される。

H037 (図93) は器高11.9cm、口径17.8cm、底径10.5cm。口縁部は弱く外反する。坏部外面に稜をもたない。口縁部外面、坏部内面、裾部内外面を除いて全面ケズリ調整がみられる。坏部と脚部の境は明瞭である。脚部は寸胴でほぼ直線的に垂下し、裾部で外側に開く。脚部内面は強くケズリ調整され稜をもつ。

H038 (図93) は器高12.9cm、口径19.1cm、底径12.1cm。口縁部は弱く外反する。坏部外面に稜をもたない。坏部はやや浅い。器壁の損耗が激しく調整は不明瞭である。坏部と脚部のくびれ部は明瞭で弱くくびれる。脚部は直線的に垂下し、裾部に至って外側に広がる。脚部の内外面はケズリ調整され、裾部は内外面ともにナデ調整される。

H039 (図93) は器高12.8cm、口径18.8cm、底径12.0cm。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する弱い稜がある。坏部内外面はナデ調整される。坏部と脚部の接合部は明瞭で、弱くくびれる。脚部は寸胴で、直線的に垂下し裾部に至って外側に開く。脚部内外面はケズリ調整、裾部内外面はナデ調整される。脚部内面は裾部で屈曲し、稜をもつ。

H040 (図93) は残存高11.0cm、口径19.6cm。裾部以下を欠損する。口縁部は強く外反する。口縁部と体部を画する弱い稜がある。稜の下部はケズリ調整される。その他の坏部内外面はナデ調整される。坏部と脚部の接合部は明瞭で、強くくびれる。脚部は直線的に垂下する。脚部の内外面はケズリ調整される。

H041 (図94) は器高13.0cm、口径19.5cm、底径10.8cm。口縁部は非常に強く外反する。口縁部は強く外反し、坏部全体が皿状に開いている。口縁部と体部を画する弱い稜がある。坏部内面はナデ調整、外面はケズリ後ナデ調整される。脚部は垂直に立ち上がり弱いくびれをもつ。脚部外面はタテ方向のケズリ、裾部は内外面ともにナデ調整される。脚部の内面は天井が高く、裾部内面に稜をもつ。

H042 (図94) は残存高9.7cm、底径10.7cm。坏部を欠損する。口縁部と体部を画する弱い稜がある。坏部はケズリ調整およびナデ調整される。脚部は寸胴で、裾部に向かって徐々に外側に開く。脚部外面はタテ方向のケズリ、裾部は内外面ともにナデ調整される。脚部内面は天井が高く、裾部内面に稜をもつ。内面はケズリ調整される。

H043 (図94) は残存高5.2cm、推定口径18.4cm。脚部を欠損する。口縁部はやや外反する。口縁部と体部を画する弱い稜がある。器面は損耗が激しく調整は不明である。

H044 (図94) は残存高3.9cm、口径18.0cm。脚部を欠損する。口縁部は弱く外反する。口縁部と体部を画する弱い稜がある。口縁部付近はナデ調整され、体部はケズリ調整されるが、器面の損

耗があり不明瞭である。内面はナデられる。器壁の一部に黒斑がみられる。

H045(図94)は残存高10.1cm、底径13.5cm。坏部を欠損する。脚部は直線的に垂下し、弱いくびれをもつ。裾部に向かって外側に開く。裾部の内外面は丁寧にナデられ、一部強く反る。内面はケズリ調整され、絞られる。脚部天井が比較的高い。

H046(図94)は残存高4.3cm、推定底径11.0cm。裾部のみが残存する。裾部は緩やかに開いている。器面は損耗しており調整は観察できない。

H047(図94)は残存高8.1cm、推定底径10.5cm。坏部を欠損する。脚部は直線的に垂下し、裾部で屈曲し外側に開く。脚部内外面はタテ方向のケズリ、裾部は内外面ともにナデ調整される。裾部内面に稜をもつ。

H048(図94)は残存高8.2cm、底径11.5cm。坏部を欠損する。脚部は外側に向かって緩やかに開く。脚部外面はタテ方向のケズリ、裾部は内外面ともにナデ調整される。脚部内面は丁寧にケズリ調整される。

③坏・壺

土師器の破片の中で、高坏ではないと明らかに判別可能な破片は4点のみであった。H049、H050(図94)は、坏の破片である。両破片ともに口縁部を含み、口縁部の円弧が高坏に比して小さいことから坏と判断できる。H049は体部と口縁部を画する明瞭な稜をもつ。口唇部は凹状を呈し、体部はケズリ、その他の部分には丁寧なナデがみられる。H050は体部と口縁部を画する明瞭な稜をもつ。口唇部は凹状を呈し、口端部は外反する。体部はケズリ、その他の部分には丁寧なナデがみられる。

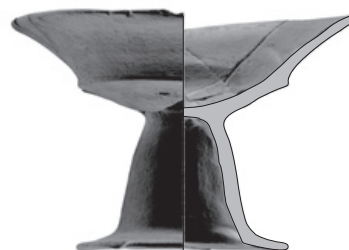
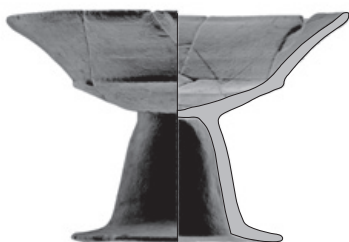
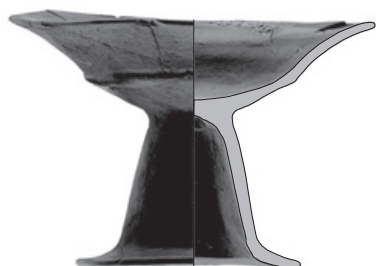
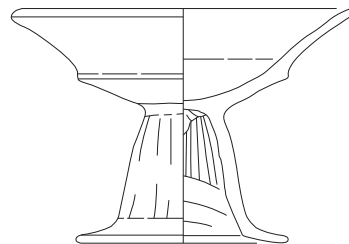
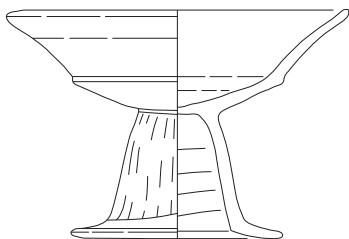
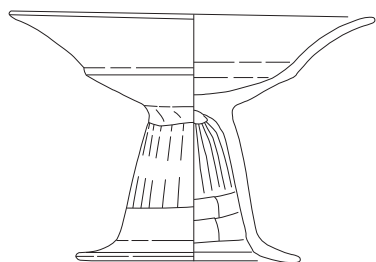
H051、H052(図94)は、壺の破片である。H051は壺の口縁部の破片である。器面全体は強くヨコナデされるが、頸部付近はヨコナデ後ナナメ方向のナデがみられる。H052は壺の胴部である。器壁は薄く、外面はヘラケズリ調整される。内面はナナメ方向のナデと、ヘラ工具が当たった痕跡とみられる凹凸がある。

④図化の方法について

土師器の高坏の図化にあたっては、写真による三次元計測を行った。土師器の高坏は、器壁の薄さや破断面の損耗により、接合後も壊れてしまうことが多々あり、取り扱いには注意が必要であった。そのため、可能な限り非接触で記録を行う方法を検討した結果、外形、断面を写真により三次元的に記録する方法を採用した。この方法はSfM-MVSと呼ばれる技術を用いたもので、別アングルから撮影した複数枚の写真からカメラ位置を特定し、点群を生成するというものである。外形や断面は、生成した三次元モデルをオルソ画像に出力した画像を基にトレースし、観察に基づく器壁表面の調整を書き込み図化した。

計測の際に破損した資料はなく、既存の方法では計測が困難であった坏部と脚部の接合部をデータ化できるなど、三次元計測の有効性を確認できた。

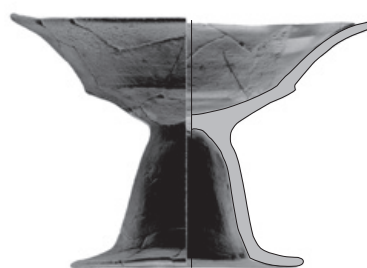
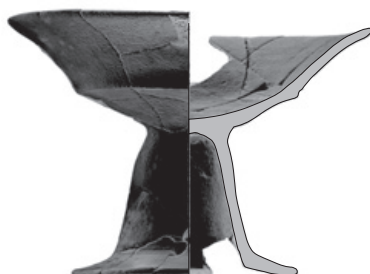
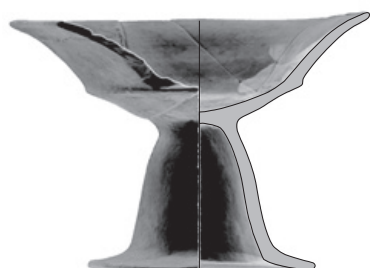
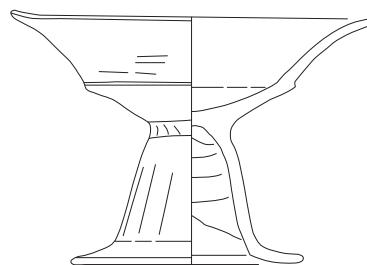
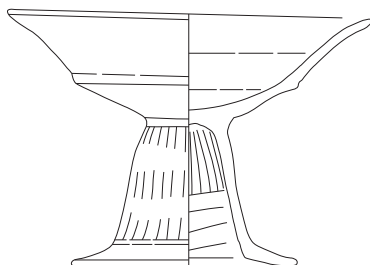
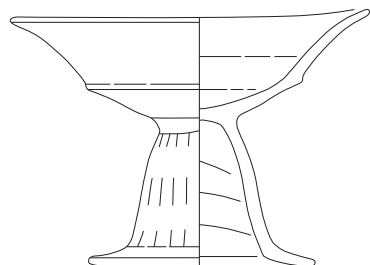
なお撮影にはリングライトを装着したカメラ(OlympusTG-4)を使用し、処理ソフトにはAgisoft Metashape(Version1.7)、DEMの編集、画像の出力にはQGIS(Version3.16)を使用した。



H001

H002

H003



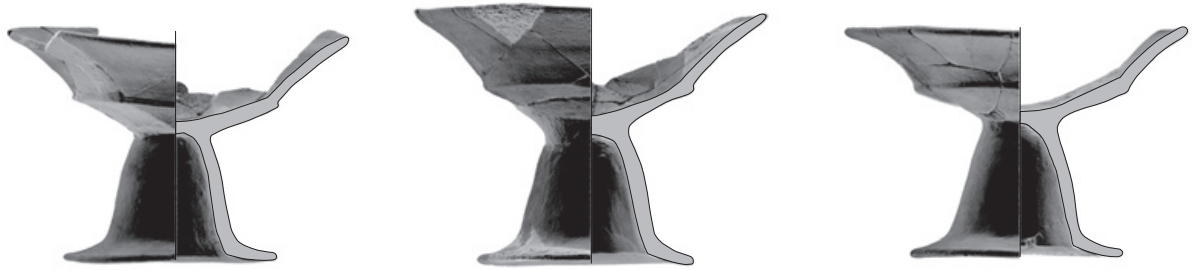
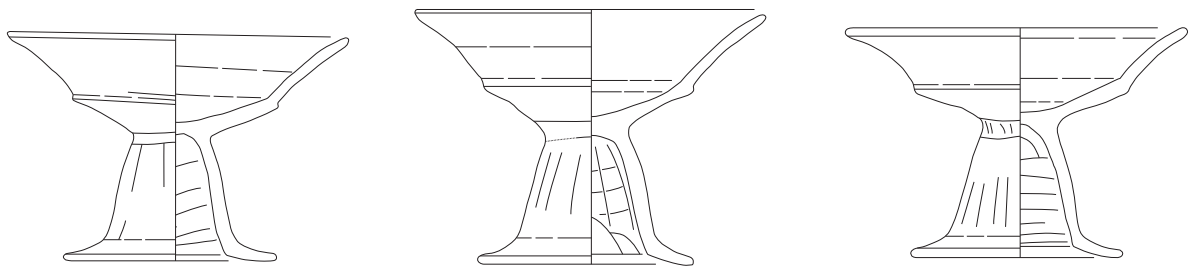
H004

H005

H006

0 (S=1/4) 20cm

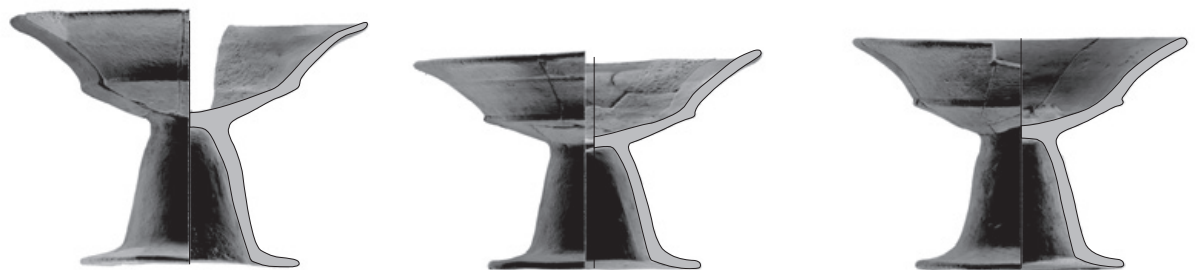
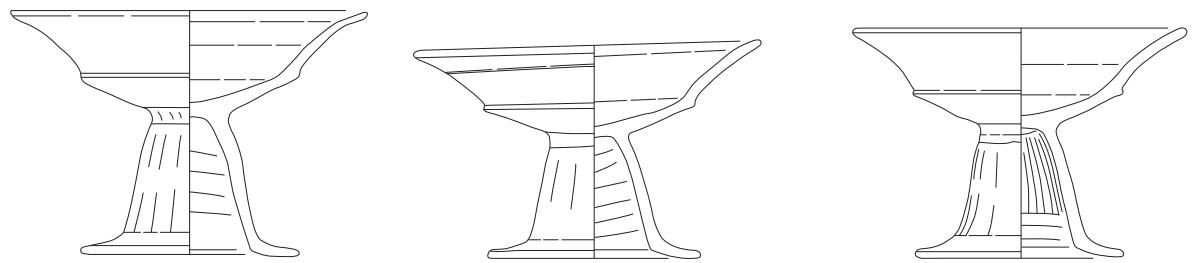
図 88 土師器①



H007

H008

H009



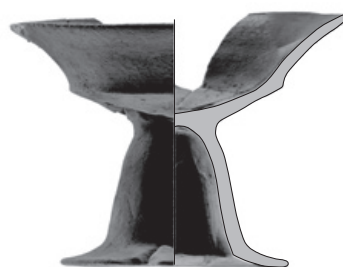
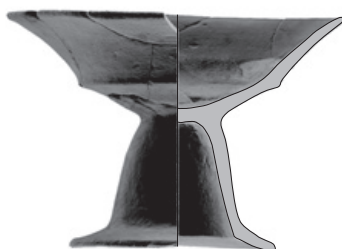
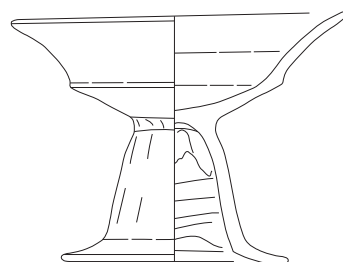
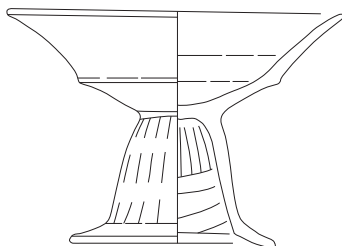
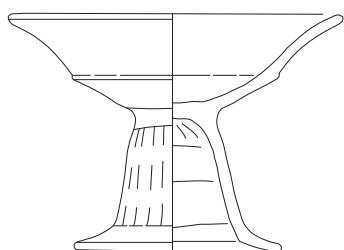
H010

H011

H012

0 (S=1/4) 20cm

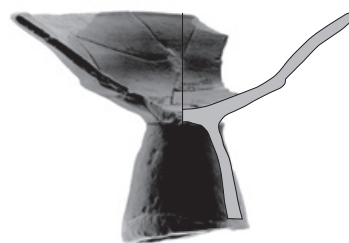
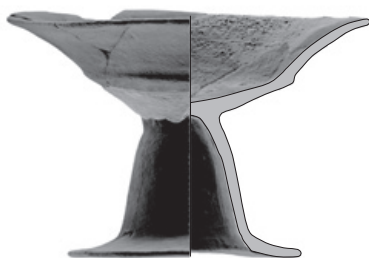
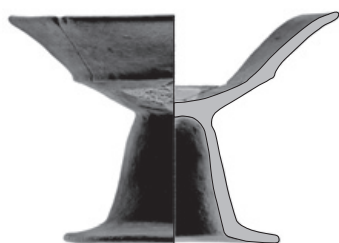
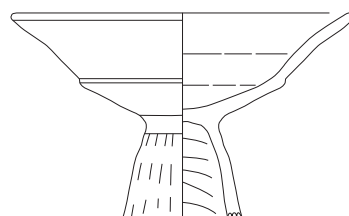
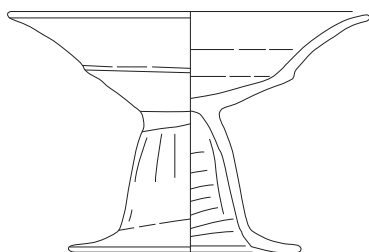
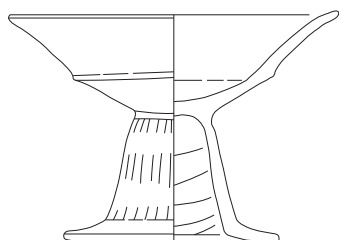
図 89 土師器②



H013

H014

H015



H016

H017

H018

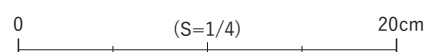


図 90 土師器③

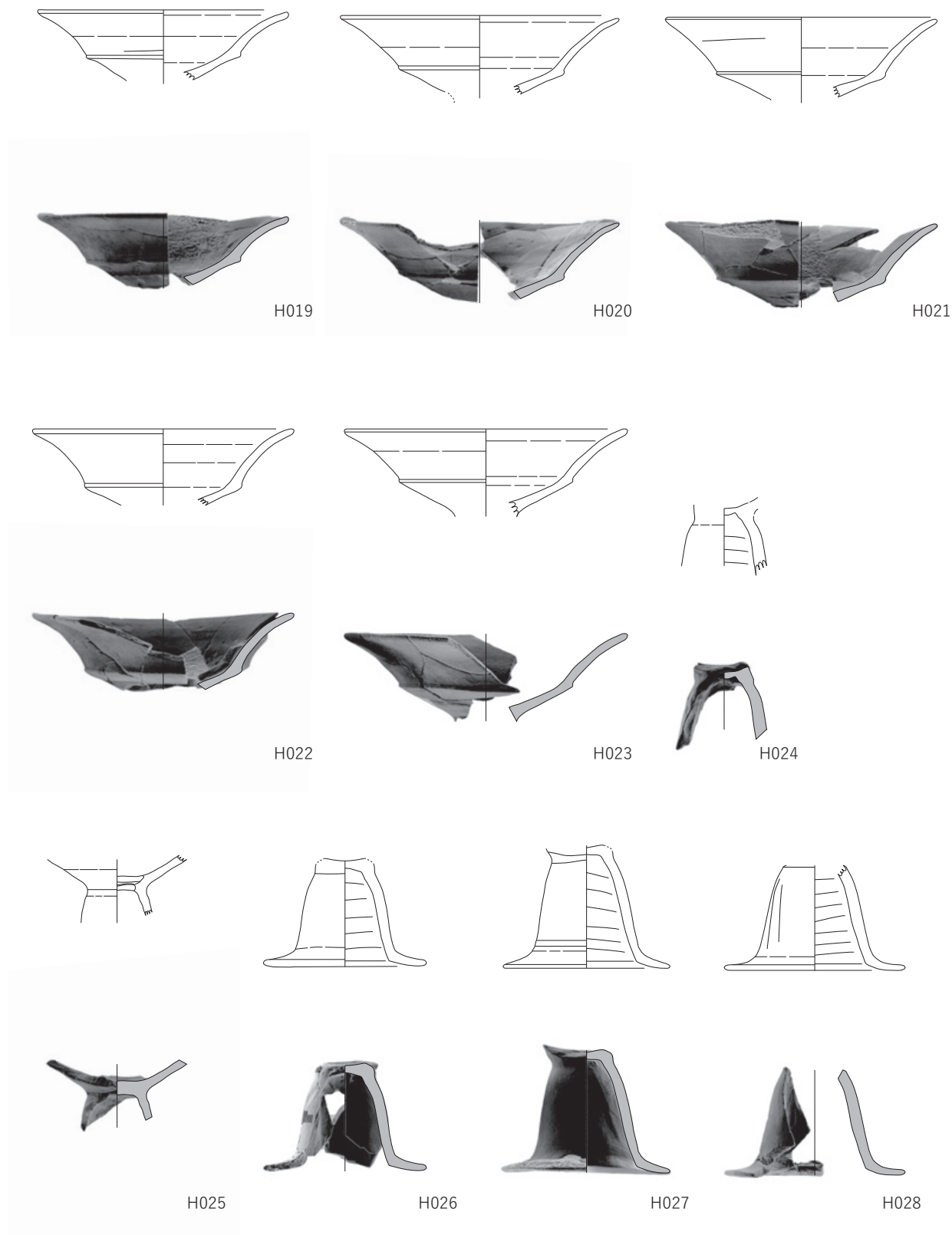
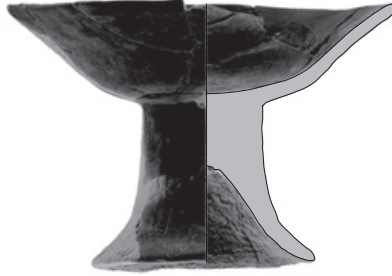
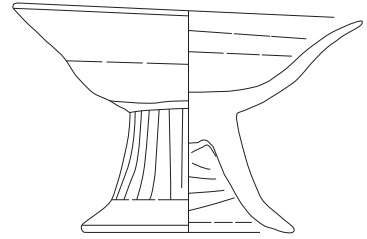
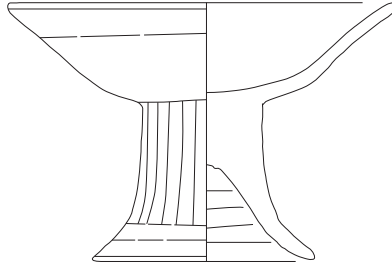
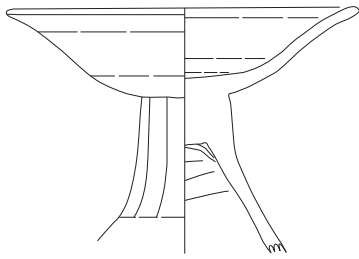


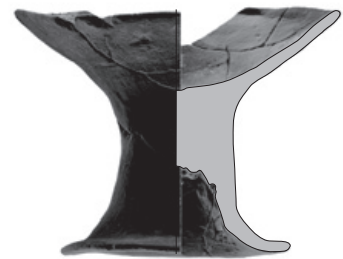
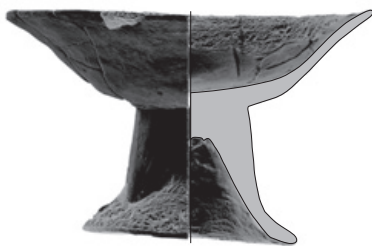
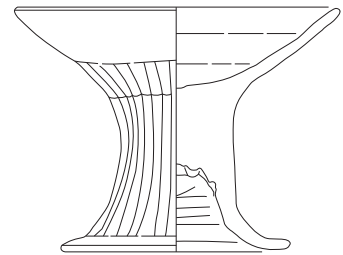
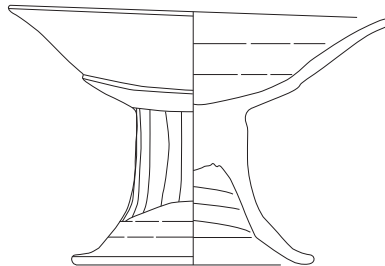
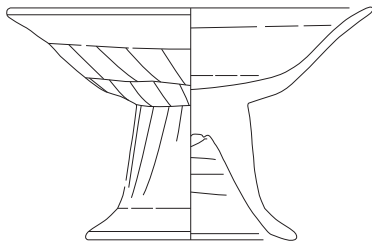
図 91 土師器④



H029

H030

H031



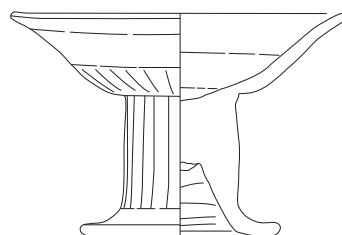
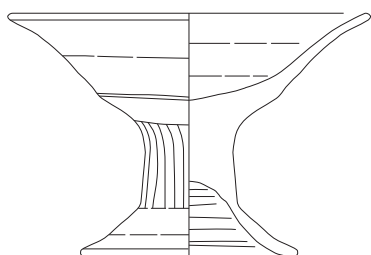
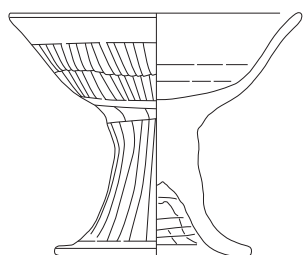
H032

H033

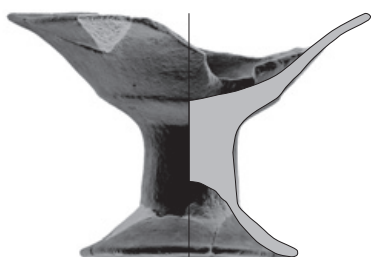
H034

0 (S=1/4) 20cm

図 92 土師器⑤



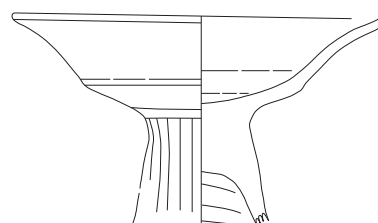
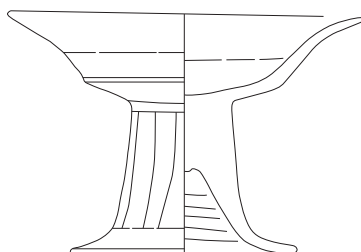
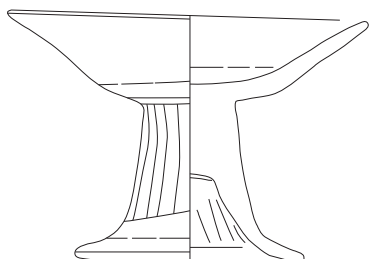
H035



H036



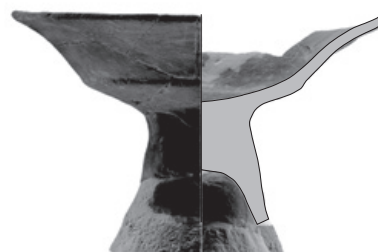
H037



H038



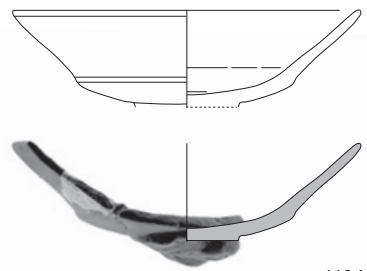
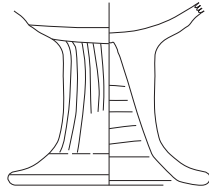
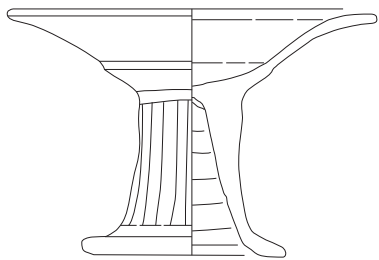
H039



H040

0 (S=1/4) 20cm

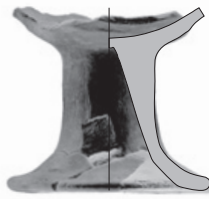
図 93 土師器⑥



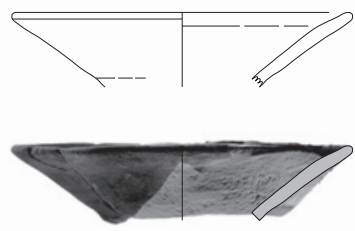
H043



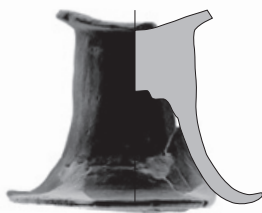
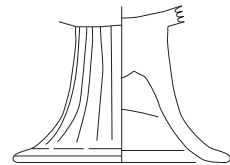
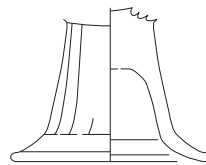
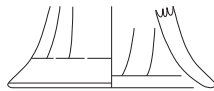
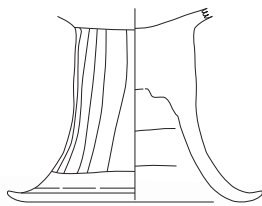
H041



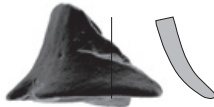
H042



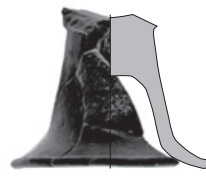
H044



H045



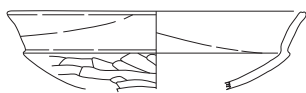
H046



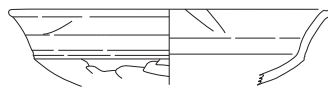
H047



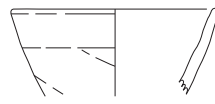
H048



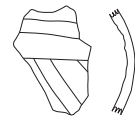
H049



H050



H051



H052

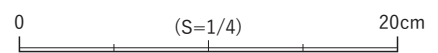


図 94 土師器⑦

表4 土師器観察表

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	種類	分類	色調	胎土	焼成	口径 器高 底径 (cm)	備考
H001	I 区	H29	2T	高坏	白	橙 7.5YR7/6	ACD	良好	19.3 13.0 11.9	口縁部強く外反する 坏部と脚部の接続部稜あり
H002	I 区	H29	2T	高坏	白	浅黄橙 7.5YR8/3	ABD 黒色粒子	良好	18.1 12.1 11.2	坏部と脚部のくびれ弱い 脚部やや短い
H003	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	ACD 黒色粒子	良好	18.1 12.4 11.2	
H004	I 区	H29	2T	高坏	白	橙 7.5YR7/6	AD 黒色粒子	良好	19.0 13.2 12.0	坏部と脚部の境のくびれ強い 黒斑
H005	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	AC	良好	19.2 13.4 11.9	黒斑
H006	I 区	H29	2T	高坏	白	橙 7.5YR7/6	ACD 黒色粒子	良好	19.1 13.1 12.3	坏部と脚部の境目のくびれ強い
H007	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	ACDE 黒色粒子	良好	18.1 12.1 11.3	
H008	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/3	AD 黒色粒子	良好	18.6 13.5 11.4	脚部内面坏部との接合部に亀裂あり
H009	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい黄橙 10YR7/4	A 黒色粒子	良好	18.1 12.2 11.2	黒斑
H010	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい黄橙 10YR7/4	ACD 黒色粒子	良好	18.8 12.9 11.6	坏底部と口縁部で胎土の色が異なる
H011	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい黄橙 10YR7/3	ACD 黒色粒子	良好	18.4 11.2 11.2	黒斑 脚部短い 坏底部浅い
H012	I 区	H29	2T	高坏	白	浅黄橙 10YR8/4	AC 黒色粒子	良好	17.7 12.2 11.0	坏部外面、口縁部と体部を画する稜が明瞭 坏部底面円盤状に割れ
H013	I 区	H29	2T	高坏	白	浅黄橙 10YR8/4	AC 黒色粒子	良好	17.7 12.6 11.0	

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	種類	分類	色調	胎土	焼成	口径 器高 底径 (cm)	備考
H014	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい黄橙 10YR7/4	AC 黒色粒子	良好	17.8 12.3 10.9	坏部外面の稜は弱い
H015	I 区	H29	2T	高坏	白	口縁部にぶい黄橙 10YR7/4 底部浅黄橙 10YR8/4	ACD 黒色粒子	良好	17.7 13.0 12.0	坏底部と口縁部で大きく色が異なる 稜が弱い 坏部深い 黒斑
H016	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	ACD 黒色粒子	良好	17.5 12.0 11.4	坏部内面、底部と口縁部の境目に接合痕あり 坏部の稜弱い
H017	I 区	H29	2T (5T)	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	AC 黒色粒子	良好	19.2 12.7 12.3	坏部の底部と口縁部で異なる色の粘土使用 黒斑 坏部の稜弱い
H018	I 区	H29	2T	高坏	白	浅黄橙 10YR8/3	AC 黒色粒子	良好	18.1 (10.9) —	坏部外面の稜は弱い
H019	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	ACD 黒色粒子	良好	17.3 (5.1) —	坏部内面の口縁部と底部の境目に接合痕
H020	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/3	ACD 黒色粒子	良好	19.2 (5.7) —	坏部の底部と口縁部の境目に接合痕
H021	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	ACDE 黒色粒子	良好	18.7 (5.9) —	坏部の底部と口縁部の境目に接合痕、色異なる
H022	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	AC 黒色粒子	良好	18.0 (5.3) —	坏部の底部と口縁部の境目に接合痕
H023	I 区	H29	2T	高坏	白	浅黄橙 10YR8/3	AD 黒色粒子	良好	19.5 (6.0) —	黒斑
H024	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	AD 黒色粒子	良好	— (5.0) —	脚部と坏部の接合部にホゾ状の円盤系粘土
H025	I 区	H29	2T (5T)	高坏	白	にぶい黄橙 10YR7/4	ACD 黒色粒子	良好	— (4.7) —	脚部天井部と坏部基底部に径 3cm程の円盤状の粘土の充填
H026	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい橙 7.5YR7/4	ACD 黒色粒子	良好	— (7.3) 11.2	

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	種類	分類	色調	胎土	焼成	口径 器高 底径 (cm)	備考
H027	I 区	H29	2T	高坏	白	浅黄橙 10YR8/3	ACD 黒色粒子	良好	— (8.9) 11.5	黒斑
H028	I 区	H29	2T	高坏	白	にぶい黄橙 10YR7/4	ACD 黒色粒子	良好	— (7.3) [12.5]	黒斑
H029	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	AD 黒色粒子	良好	18.7 (13.0) —	坏部に稜なし 脚部天井部高い
H030	I 区	H29	2T	高坏	赤	にぶい橙 5YR7/4	AD	良好	20.5 13.7 11.9	黒斑 脚部内面に擦過痕
H031	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	AD (大)	普通	18.5 11.7 11.3	黒斑 脚部内面天井部絞り、稜なし
H032	I 区	H29	2T	高坏	赤	にぶい橙 5YR6/4	AD 黒色粒子	良好	19.4 12.3 11.2	黒斑 稜なし
H033	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	AD 黒色粒子	良好	20.1 13.4 12.8	黒斑 坏部外面弱い稜あり 脚部内面絞り
H034	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	AD 黒色粒子	良好	17.2 12.9 12.1	黒斑・脚部内面絞り 坏部外反弱く直線的に立ち上がる
H035	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	AD 黒色粒子	良好	15.5 12.9 10.4	口径が小さい
H036	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 7.5YR6/6	ACD 黒色粒子	良好	19.2 12.9 11.5	坏部外面弱い稜 口縁部半円形に割れる
H037	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	AD 黒色粒子	良好	17.8 11.9 10.5	脚部寸胴、ほぼ直線的に立ち上がる 全面ケズリ、口端部・裾部・坏部と脚部の接合部ナデ、脚部内面 に稜をもつ・強いケズリ 坏部外面稜をもたない
H038	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5 YR6/8	AD 黒色粒子	普通	19.1 12.9 12.1	坏部浅い、調整不明瞭 内面口縁付近ナデ 坏部外面稜なし 脚部内面丁寧なケズリ
H039	I 区	H29	2T	高坏	赤	にぶい橙 5YR6/4	AD 黒色粒子	良好	18.8 12.8 12.0	寸胴気味、外面坏部ナデ・稜あり・脚部ケズリ・裾部ナデ、内面 丁寧なケズリ

No.	出土 区	調査 年度	トレ ンチ	種類	分類	色調	胎土	焼成	口径 器高 底径 (cm)	備考
H040	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 7.5YR6/6	AD 黒色粒子	良好	19.6 (11.0) —	坏部外面口縁部ナデ・底部ヨコ方向ケズリ・内面口端部強いナデ 脚部内面丁寧なケズリ
H041	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 2.5YR6/6	ACD 黒色粒子	良好	19.5 13.0 10.8	弱い稜あり 脚部内面天井高い・脚部垂直に立ち上がり弱いくびれをもつ・裾 部内面に稜をもつ
H042	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR7/6	ACD 黒色粒子	良好	— (9.7) 10.7	外面坏部稜低く弱い・口縁部ケズリ 坏部ヨコ方向ケズリ・脚部タテ方向ケズリ、裾部ナデ 脚部内面天井高い、螺旋状にケズリ、稜あり
H043	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	A	普通	[18.4] (5.2) —	調整不明 坏部弱い稜あり
H044	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR7/6	ACD 黒色粒子	良好	18.0 (3.9) —	黒斑 外面坏部稜あり・タテケズリ、端部強いナデ 内面ナデ
H045	I 区	H29	2T	高坏	赤	にぶい橙 7.5YR7/4	A 黒色粒子	良好	— (10.1) 13.5	外面脚部ケズリ・裾部強いナデ 一部強く反る 内面ケズリ、絞り・稜なし 天井高い
H046	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/8	A 黒色粒子	普通	— (4.3) [11.0]	調整不明 裾部ゆるやかに開く
H047	I 区	H29	2T	高坏	赤	橙 5YR6/6	AD 黒色粒子	良好	— (8.1) [10.5]	外面脚部ケズリ・端部強いナデ 内面脚部強いケズリ
H048	I 区	H29	2T	高坏	赤	にぶい橙 5YR6/4	AD 黒色粒子	普通	— (8.2) 11.5	外面脚部タテ方向ケズリ 端部強いナデ 内面脚部丁寧なケズリ
H049	I 区	H29	2T	坏		にぶい橙 7.5YR7/4	BD	良好	— (4.1) —	外面口縁部ナデ・口唇部凹む、体部ケズリ 内面ナデ 体部と口縁部を画する稜をもつ
H050	I 区	H29	2T	坏		橙 7.5YR7/6	ABD	良好	— (4.0) —	外面口縁部ナデ・体部ケズリ 内面ナデ、口端部外反する 口唇部凹む
H051	I 区	H29	2T	壺		橙 5YR7/6	ACDI	良好	— (4.6) —	外面ナデ 内面ナデ
H052	I 区	H29	2T	壺		にぶい橙 5YR7/4	ABCD	良好	— (5.7) —	外面ケズリ 内面ナデ、工具痕あり

第9節 その他の時代の遺構・遺物

①縄文時代の遺物

今回の二子山古墳の調査では、古墳時代以前の遺構は検出されていないが、6点の縄文土器片が検出された（表5）。集中して出土する地点はないが、いずれも墳丘に堆積した土層から発見されている。Z001（図95）はⅡ区25-3Tの8号土壌付近の墳丘堆積土より出土した。8号土壌付近の遺物集中からは下方にやや離れた位置である（図34中の14）。口縁部はヨコナデ、ヨコミガキされる。内面はヨコミガキが施される。器面の摩耗が激しいが、口縁部と平行する沈線と単節LRが施文されており、加曽利EⅣ式の深鉢と考えられる。口縁部付近の器壁が厚く、最大厚は1.2cmを測る。Z002（図95）はⅡ区25-2Tから出土した。トレンチ下方（旧表土より低い位置）の底面に近い位置で、墳丘崩落の堆積土中から検出された（図31中の23）。深鉢胴部の破片で、縄文時代中期に属すると考えられる。横位に細い隆帯が2条巡り、隆帯間に刻目列文が配される。隆帯の下には沈線がある。隆帯上部には単節RLが施文される。内面は摩耗しており調整不明である。Z003（図95）はⅠ区29-3Tから出土した深鉢の口縁部の破片である。粗製であり、全体的に風化が激しい。外面は縄文施文がみられ、一部器壁が剥離している。土器片として記録したが、土器片を加工した土製円盤の可能性もある。全体的な損耗により、人為的な加工か破損の結果かの判断は困難である。Z004（図95）はⅠ区29-2Tからの出土である。胴部の破片であり、胎土は堅緻で焼成は良好である。地文は縄文であり、縦方向に沈線が2条施され、沈線間はタテミガキされる。内面は丁寧なヨコミガキが施される。Z005（図95）はⅠ区29-4Tから出土した破片である。深鉢の胴部であり、器壁は1.2cmと厚く、隆帯部分は1.9cmを測る。横位に隆帯が3本貼り付けられ、文様を構成する。隆帯の一部は剥離している。隆帯の間には沈線が施される。地文は撚糸押圧による施文と考えられる。内面はヨコミガキで平滑に仕上げられる。勝坂式土器の一部であり、縄文時代中期に属すると考えられる。Z006（図95）はⅠ区29-6Tから出土した深鉢の胴部の破片である。地文は縄文単節LRで、縦方向に2条の幅広の沈線が施される。内面はナデ調整される。遺存する器壁は1.0cmの厚さである。被熱痕が認められるため、煮沸に使用された可能性がある。加曽利E式と考えられる。

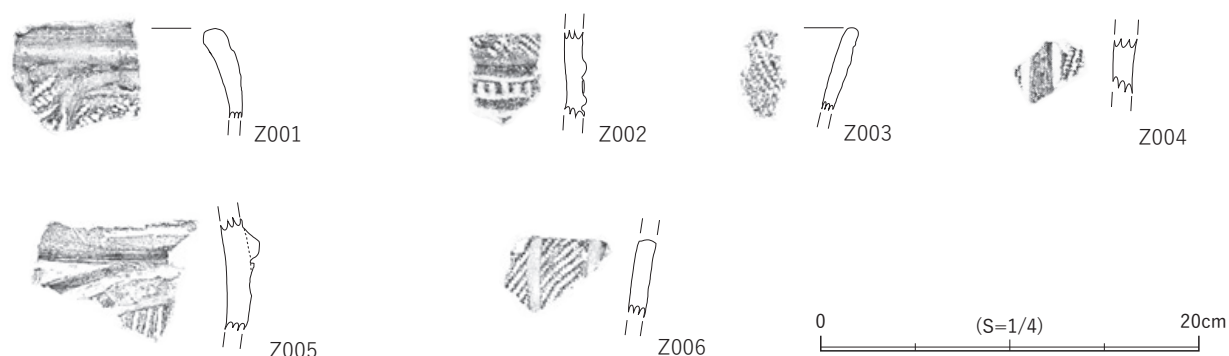


図95 縄文土器

②中世の遺構・遺物

今回の二子山古墳の発掘調査では前方部と後円部に設定したトレンチから中世に所属する遺物が出土している。その中で、中世と考えられる遺構は前方部前面に設定した平成25年度のトレンチ調査で検出された。このトレンチの斜面上方向で検出された平坦面では土壌とともに、板碑片などの中世に所属する遺物や火葬骨がまとまって出土した。

この平坦面は発掘調査前から確認でき、墳丘の段築に由来する可能性が考えられていたが、今回のトレンチ調査によって、墳丘本来の段築ではなく、中世墓による改変とわかった（第2章第2節）。

今回の報告分で中世に所属すると考えられる遺物は小破片も含め、計57点ある（表6）。そのうち、平成25年度の調査で出土した遺物は38点あり、全体の約7割を占める。残りの3割は、後円部の平成27年度の調査で6点、同じく後円部の平成29年度の調査で1点、平成30年度の調査で12点となっている。

【平成25年度調査】

平成25年度の調査で出土した38点のうち、中世墓と考えられる25-2Tからは2点、25-3Tからは32点出土している。

25-2Tから出土した2点の内訳は常滑窯産の壺の小破片1点、板碑のやや大きな破片1点である。

Z012（図97）は1号土壌から出土した常滑窯産壺の肩部破片である。器表面は赤褐色をしており、破片の上半部分には淡緑色の自然釉がかかっている。沈線が巡っているので三筋壺か三耳壺・玉縁壺の肩部の破片と考えられる。これらは12世紀後半から13世紀代に生産された器種であるが、沈線が複線（2条～3条）で、丁寧につけられていることから13世紀中頃より古い時期のものと推定される。この壺片は中世墓の一角から出土しているので、蔵骨器として使用された可能性が高い。また、25-3Tから出土している常滑窯産の壺の底部破片（図97-Z013）と胎土が近似しているので同一個体の可能性が考えられる。

Z007（図96）は板碑の基部で、中世墓が検出された平坦面から約5m下で出土した。元は中世墓に立てられていたが、落下したものと推定される。石材は緑泥石片岩で、大きさは幅約25.2cm、現存軸長約37cm、厚さ2cm前後ある。板碑の幅と全長の比率は概ね一対三から一対四であることから、元は全長90cm前後あったと推定される。表面は平滑に仕上げられており、銘文・枠線はしっかり彫られている。裏面は基部のためか、押し削り痕は残っていない。銘文は中央に紀年銘の一部「□三日」、両側に梵字が配置されている。梵字は真言で、阿弥陀心呪（しんじゅ）と判断できる。「オン・ア・ミリ・タ・テイ・セイ・カ・ラ・ウーン」のうち、右側に「タ」の一部と「テイ」、左側に「ウーン」の一部が残っている。やや古い調査成果であるが、埼玉県教育委員会が1976年から5か年をかけて実施した板碑の悉皆調査では約2万基の板碑のうちの約10%にあたる2030基に真言が刻まれていた（埼玉県教育委員会1981）。その中で一番多い真言は「光明真言」で約85%、次に多かったのが「大日報身真言」で約21%、その次がこの「阿弥陀心呪」で約15%であった。「光明真言」以外の真言は分布域が偏る傾向が指摘された。近年、熊谷と周辺の石塔に残された真言について考察が加えられている（諸岡2021）。そこでも「阿弥陀心呪」は大里、北埼玉、北足立北部の元荒川流域を中心に分布していることが示されている。埼玉古墳群の周辺地域で多く確認されている真言が二子山古墳の中世墓の板碑にも刻まれていた。さらに、この考察では、「阿弥陀心呪」が刻まれた板

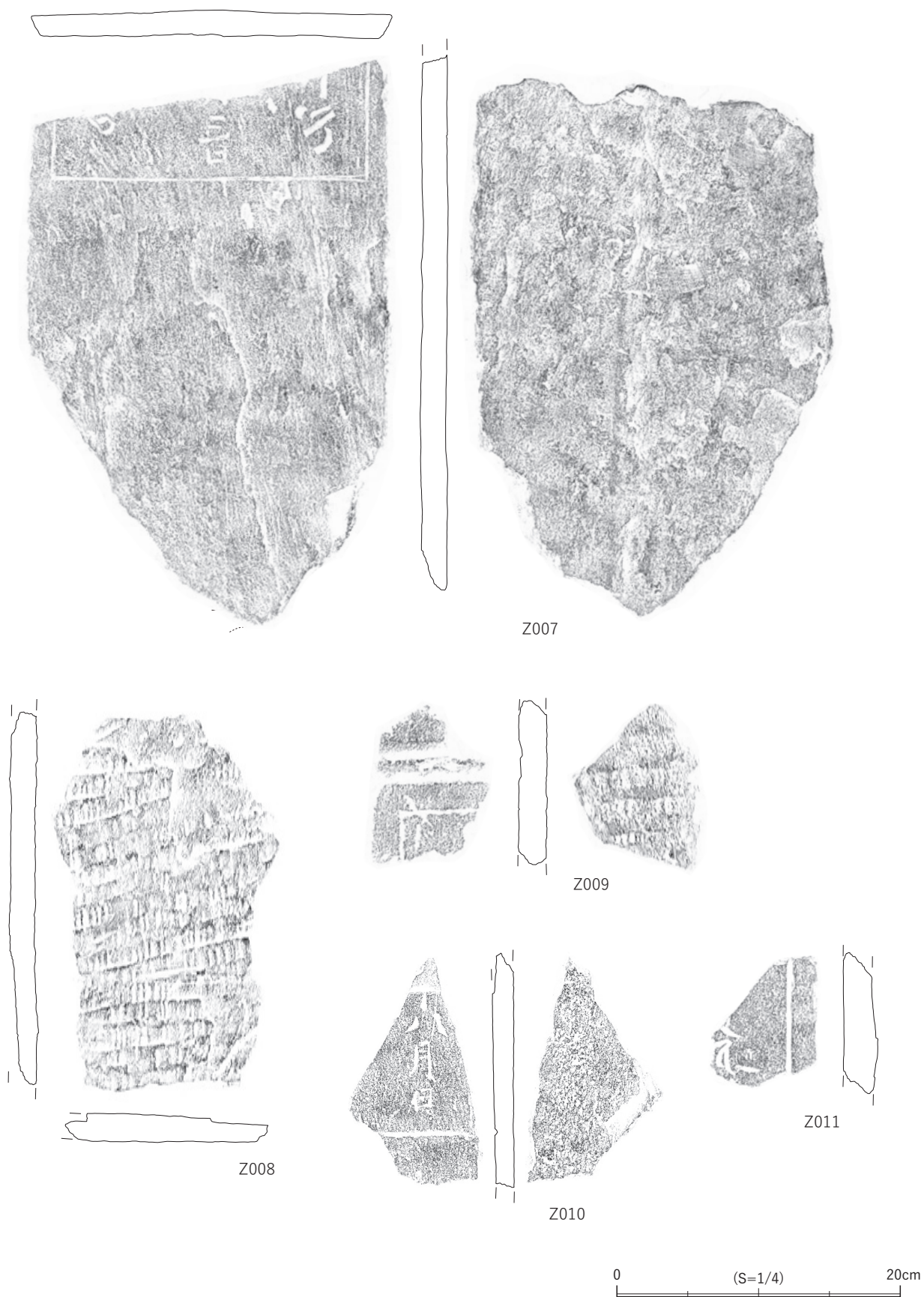


図 96 中世の遺物①

碑は1280年代から1340年代の約60年間にほぼ限られていることも指摘している。よって、この板碑の造立年もこの期間のどこかと考えられる。

25-3Tから出土した32点の内訳は板碑片25点、常滑窯製品4点、かわらけ片1点、在地産鉢1点、在地産鍋か焙烙1点である。

Z008・Z009・Z010・Z011（図96）は板碑片で、Z009以外の3点は近接して出土した。石材はすべて緑泥石片岩である。Z008の銘文は確認できないが、裏面には全体に押し削り痕がはっきり残っている。ノミの幅は1.5cm前後である。Z009はトレンチ内の出土地点は不明である。山形部から二条線にかけての破片である。厚さは2cm前後ある。表面は平滑に仕上げられ、杵線が彫られており、左上角にあたる。裏面には全体に押し削り痕がはっきり残っている。ノミの幅は1.5cm前後である。Z010は体部の下半の破片で、表面は平滑に仕上げられている。紀年銘の部分で「年八月日」と彫られている。Z011は体部の破片で、表面は平滑に仕上げられ、梵字と杵線が彫られている。板碑の縁にあたるため、厚さは2.5～3cmと他の板碑片に比べるとやや厚い。

Z013（図97）は7号土壇の西隣から出土した常滑窯産壺の底部破片である。残存率は約20%で、推定底径約10.8cmである。底部外面は滑らかに擦れている。胴部は縦方向のへう削り調整、底部近くは横方向のへう削り調整がなされている。25-2Tから出土した常滑窯産の壺の肩部の破片（図97-Z012）と同一個体の可能性が考えられる。

Z014（図97）はトレンチ内の出土地点は不明である。常滑窯産片口鉢の口縁部破片である。小破片であるが、口唇部は丸味を帯びており、色調は灰色をしていることから、片口鉢Ⅰ類の第2段階（13世紀第2四半期～第3四半期）頃の製品と考えられる。

【平成27年度調査】

平成27年度の調査で出土した6点はいずれも小破片で、実測図を掲載できるものはなかった。27-1Tから27-5Tの各トレンチから1～2点ずつの出土で、遺構に伴ったものではない。

その内訳は渥美窯産甕の破片1点、かわらけ片1点、在地産香炉か火鉢の破片1点、在地産鍋の破片2点、板碑片1点である。

渥美窯産とした破片（表6-41）は小破片のため常滑窯産の可能性もある。かわらけ片（表6-43）は器表面が摩耗しているがろくろかわらけである。在地産香炉か火鉢片（表6-40）は口縁部の小破片で、1条の沈線の下に菱形の押印文が連続して付けられている。在地産鍋片（表6-44）は口縁部の小破片で、口唇部は角ばっている。口縁端部から2.5cm下の内側には蓋受けの段がある。

【平成29年度調査】

平成29年度の調査では29-6Tから常滑窯産の甕か壺の底部破片が1点出土した。底部内面は良く擦れている。底部外面はへう削り調整されている。

【平成30年度調査】

平成29年度の調査で出土した12点はいずれも小破片で、その内訳は常滑窯産甕の破片5点、渥美窯産甕の破片1点、古瀬戸製品1点、青磁1点、かわらけ片1点、在地産片口鉢の破片1点、在地産片口鉢か鍋の破片1点、在地産鍋か焙烙の破片1点である。30-2Tからは在地産片口鉢と在地産片口鉢か鍋の破片が1点ずつ出土し、残りの10点は30-1Tからの出土している。実測図を掲載できたのは3点である。

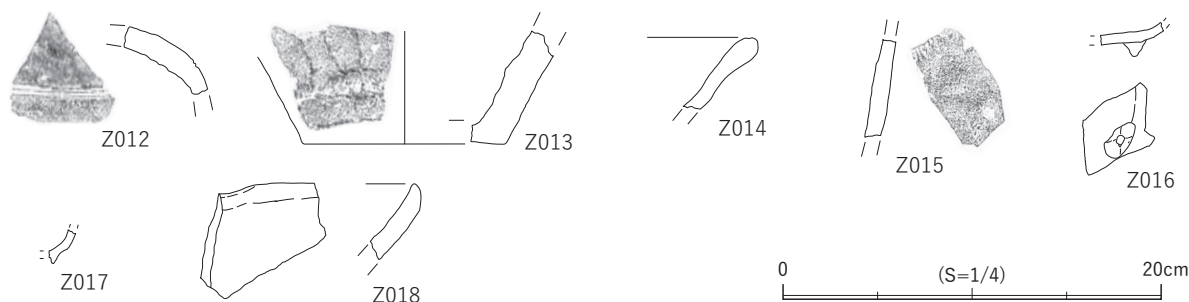


図 97 中世の遺物②

常滑窯産甕の破片は 5 点あり（表 6 -45 ～49）、すべて胴部破片である。押印文がわずかに残る Z015（図97）のみ図化した。渥美窯産とした甕の破片（表 6 -50）は小破片のため、常滑窯産の可能性もある。古瀬戸製品（表 6 -51）と思われる破片は足が付く底部破片で、底部外面は回転ヘラ削り調整されている（図97-Z016）。古瀬戸製品で三足が付く器種は香炉、折縁深皿、卸目付大皿、直縁大皿があるが、底径はさほど大きくないため、香炉としておきたい。見込みにわずかに灰釉が観察できるが厚く釉薬をかけたような状態ではない。古瀬戸中期様式の香炉は三足まで釉がかかり、足も縦長で大きいため、この資料は古瀬戸後期様式の段階（14世紀後半～15世紀代）と考えられる。青磁片（表 6 -52）は表では小碗？としたが、小破片のため器種は特定できない（図97-Z017）。釉薬の発色は緑色で良好である。かわらけ片（表 6 -53）は底部の破片で、全体に摩耗しているが、ろくろかわらけである。在地産片口鉢片（表 6 -55）は片口部の破片である（図97-Z018）。口縁部外面は面を作り、三角形を呈している。瓦質で、四角や丸身をもった口縁部ではないため、在地産片口鉢の中でも古い印象を受け、13世紀後半から14世紀頃と考えたい。

最後に25-2T、3Tで検出された中世墓の時期について可能性を指摘しておきたい。25-2Tの1号土壌から出土した常滑窯産壺片（図97-Z012）は12世紀後半から13世紀中頃と推測したが、25-2トレンチから出土した「阿弥陀心呪」の板碑（図96-Z007）の造立年はそれよりも新しく、1280年代から1340年代の約60年間に限られるとされる。よって、中世墓の造営された期間は二通り考えられる。一つは、壺は生産されてからあまり時間を置かずに蔵骨器として埋められたと考えた場合は中世墓の造営期間は12世紀後半から14世紀前半、古い蔵骨器を板碑の下に埋めたと考えるとその造営期間は13世紀末から14世紀前半となる。

引用文献（「第 9 節 その他の時代の遺構・遺物」に関わるもの）

諸岡勝2021「第3章 第3節-5 熊谷と周辺の石塔にみる真言とその分布」『熊谷市史 調査報告書 中世の石造物』熊谷市

埼玉県教育委員会1981『埼玉県板石塔婆調査報告書』

愛知県2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』

愛知県2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』

表 5 縄文土器観察表

No.	出土区	調査年度	トレンチ	遺物種類 2	部位	備考	色調	胎土	焼成	器高 (cm)
Z001	Ⅱ区	H25	3T	深鉢	口縁部	縄文中期、加曽利 EⅣ式 器面の風化激しい	にぶい黄褐色	密	普通	(4.8)
Z002	Ⅱ区	H25	2T	深鉢	胴部	縄文中期 全体風化激しい 被熱か	明赤褐色		普通	(4.5)
Z003	Ⅰ区	H29	3T	深鉢	口縁部	縄文後期か（後期であれば堀之内 2 式～加曽利 B 式） 粗製土器 全体風化激しい	明褐色		不良	(4.4)
Z004	Ⅰ区	H29	5T	深鉢	胴部	縄文中期、加曽利 E 式か	明黄褐色	密	普通	(2.9)
Z005	Ⅰ区	H29	4T	深鉢	胴部	縄文中期、勝坂式	暗赤褐色	密	普通	(5.9)
Z006	Ⅰ区	H29	6T	深鉢	胴部	縄文中期、加曽利 E 式か 被熱痕あり（煮沸に使用か）	黄橙褐色		普通	(4.2)

表 6 中世の遺物観察表

	調査区	調査年度	トレンチ	遺構図 遺物No.	No.	遺構	種類 1	種類 2	色調	焼成	胎土	その他
1	Ⅱ区	H25	2T	19	Z012	1号土壇	常滑窯産	三筋壺	褐 7.5YR 4/4	良好	均一で小石は少ない	肩部破片 / 2 ～ 3 条の沈線が丁寧 に付けられている
2	Ⅱ区	H25	2T	20	Z007		石製品	板碑				板碑基部 / 表面・裏面とも押し削り 痕が残らないほど平滑にされて いる
3	Ⅱ区	H25	3T	26		8号土壇	石製品	板碑				小破片
4	Ⅱ区	H25	3T	26		8号土壇	石製品	板碑				小破片
5	Ⅱ区	H25	3T	47		8号土壇	石製品	板碑				小破片
6	Ⅱ区	H25	3T	50		8号土壇	石製品	板碑				小破片
7	Ⅱ区	H25	3T	16	Z013		常滑窯産	壺	明赤褐 5YR 5/4	良好	均一で小石は少ない	底部破片 / 底径約 10.8cm / 底部外 面擦れている
8	Ⅱ区	H25	3T	20			石製品	板碑				15 × 7cm の破片 / 表面剥離 / 裏 面押し削り痕良く残るノミ幅約 1.5cm 前後
9	Ⅱ区	H25	3T	21			石製品	板碑				小破片
10	Ⅱ区	H25	3T	21			石製品	板碑				小破片
11	Ⅱ区	H25	3T	22	Z010		石製品	板碑				表面「八月日」の銘文あり / 裏面 は剥離のためか押し削り痕はない
12	Ⅱ区	H25	3T	22			石製品	板碑				剥離片
13	Ⅱ区	H25	3T	23			石製品	板碑				小破片
14	Ⅱ区	H25	3T	23			石製品	板碑				小破片
15	Ⅱ区	H25	3T	23			石製品	板碑				小破片
16	Ⅱ区	H25	3T	23			石製品	板碑				小破片
17	Ⅱ区	H25	3T		Z014		常滑窯産	片口鉢	灰褐 7.5YR 6/2	良好	1mm 大の石英を含む	外面やや赤みがかっており、Ⅱ類 の可能性もあり / 口径約 29cm
18	Ⅱ区	H25	3T				常滑窯産	甕	にぶい赤褐 5YR 4/4	良好	均一で小石は少ない	小破片 / 外面に格子目の押印文あ り
19	Ⅱ区	H25	3T				常滑窯産	甕	明赤灰 2.5YR 7/1	良好	均一で小石は少ない	胴部破片 / ヘラナデ調整

	調査区	調査年度	トレンチ	遺構図遺物No.	No.	遺構	種類 1	種類 2	色調	焼成	胎土	その他
20	Ⅱ区	H25	3T				在地産	片口鉢	灰黄 2.5Y 6/2	良好	砂粒を多く含む	底部小破片 / 内面擦れている
21	Ⅱ区	H25	3T				在地産	鍋か焙烙	にぶい黄橙 10YR 7/3	良好	均一で小石は少ない	口縁部破片 / 口縁部は角ばっている
22	Ⅱ区	H25	3T				在地産	かわらけ	浅黄橙 10YR 8/4	良好	きめ細かい	ろくろかわらけ / 底部小破片 / 摩耗している
23	Ⅱ区	H25	3T	24	Z008		石製品	板碑				表面は剥離している / 裏面の押し削り痕よく残る / ノミ幅 1.5cm 前後
24	Ⅱ区	H25	3T		Z009		石製品	板碑				裏面の押し削り痕よく残る / ノミ幅 1.5cm 前後
25	Ⅱ区	H25	3T		Z011		石製品	板碑				裏面ほとんど剥離 / 一番厚い部分で厚さ 2.5cm
26	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
27	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
28	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
29	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
30	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
31	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
32	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
33	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
34	Ⅱ区	H25	3T				石製品	板碑				小破片
35	表採	H24	束くびれ 墳裾				常滑産	甕	にぶい褐 7.5YR 5/4	良好	1mm 大の石英を含む	肩部破片 / 2 条のへら書きがわずかに見える
36	表採	H24	束くびれ 墳裾				常滑産	甕	暗赤褐 2.5YR 3/4	良好	均一で小石は少ない	胴部小破片
37	表採	H24	束くびれ 墳裾				在地産	片口鉢	浅黄 2.5Y 7/3 断面 黒 2.5Y 2/1	良好	1mm 大の石英を含む	口縁部小破片 / 口唇部平らであるが、角ばってはいない / 14 ～ 15 世紀か
38	表採	H24	束くびれ 墳裾				在地産	焙烙	黒褐 7.5YR 3/1	良好	砂粒と赤色粒子を多く含む	口縁部小破片 / 16 ～ 17 世紀か
39	Ⅱ区	H27	1T				在地産	鍋	暗オリーブ褐 2.5Y 3/3	良好	砂粒を多く含む	口縁部破片
40	Ⅱ区	H27	1T				在地産	香炉か 火鉢	橙 5YR 6/6	良好	均一で小石は少ない	口縁小破片 / 1 条の沈線の下に菱形の押印文が連続して付けられている
41	Ⅱ区	H27	2T				渥美窯産?	甕	灰 7.5Y 5/1	良好	均一で小石は少ない	胴部破片
42	Ⅲ区	H27	4T				石製品	板碑?				剥離片
43	Ⅲ区	H27	4T				在地産	かわらけ	橙 5YR 7/8	良好	均一で小石は少ない、赤色粒子を含む	小破片 / ろくろかわらけ
44	Ⅲ区	H27	5T				在地産	鍋	にぶい黄橙 10YR 6/4	良好	砂粒と 1 ～ 2mm 大の石英を多く含む	口縁部小破片 / 角ばった口縁部で、内側口縁端部から 2.5cm 下に蓋受けの段あり
45	Ⅰ区	H29	6T				常滑産	甕か壺	橙 5YR 6/8	良好	1mm 大の石英を含む	底部破片 / 底径約 15cm / 内面はよく擦れている
46	Ⅳ区	H30	1T		Z015		常滑産	甕	にぶい赤褐 2.5YR 4/4	良好	1mm 大の石英を含む	胴部破片 / 押印文あり
47	Ⅳ区	H30	1T				常滑産	甕	暗赤灰 7.5R 4/1	良好	1mm 大の石英を含む	胴部破片
48	Ⅳ区	H30	1T				常滑産	甕	にぶい赤褐 5YR 5/4	良好	均一で小石は少ない	胴部破片
49	Ⅳ区	H30	1T				常滑産	甕	にぶい赤褐 2.5YR 4/4	良好	1mm 大の石英を含む	胴部破片
50	Ⅳ区	H30	1T				常滑産	甕	にぶい赤褐 2.5YR 4/4	良好	1mm 大の石英を含む	胴部破片
51	Ⅳ区	H30	1T				渥美窯産?	甕	灰 5Y 5/1	良好	均一で小石は少ない	胴部破片
52	Ⅳ区	H30	1T		Z016		古瀬戸	香炉?	灰白 10Y 8/1	良好	均一で小石は少ない	底部小破片、足が付く、1/6 残存。見込みに灰釉がわずかにみられる
53	Ⅳ区	H30	1T		Z017		青磁	小碗?	オリーブ灰 10Y 5/2	良好	きめ細かい	小破片
54	Ⅳ区	H30	1T				在地産	かわらけ	にぶい橙 7.5YR 7/4	良好	きめ細かい	ろくろかわらけ / 底部破片 / 摩耗している
55	Ⅳ区	H30	1T				在地産	鍋か焙烙	橙 7.5YR 7/6	良好	砂粒を含む	口縁部破片 / 口縁部は丸味を帯びる / 外面濃茶色
56	Ⅳ区	H30	2T		Z018		在地産	片口鉢	灰黄 2.5Y 7/2	良好	砂粒を含む	口縁部片口部破片
57	Ⅳ区	H30	2T				在地産	鍋か鉢	橙 7.5YR 7/6	良好	砂粒を含む	小破片

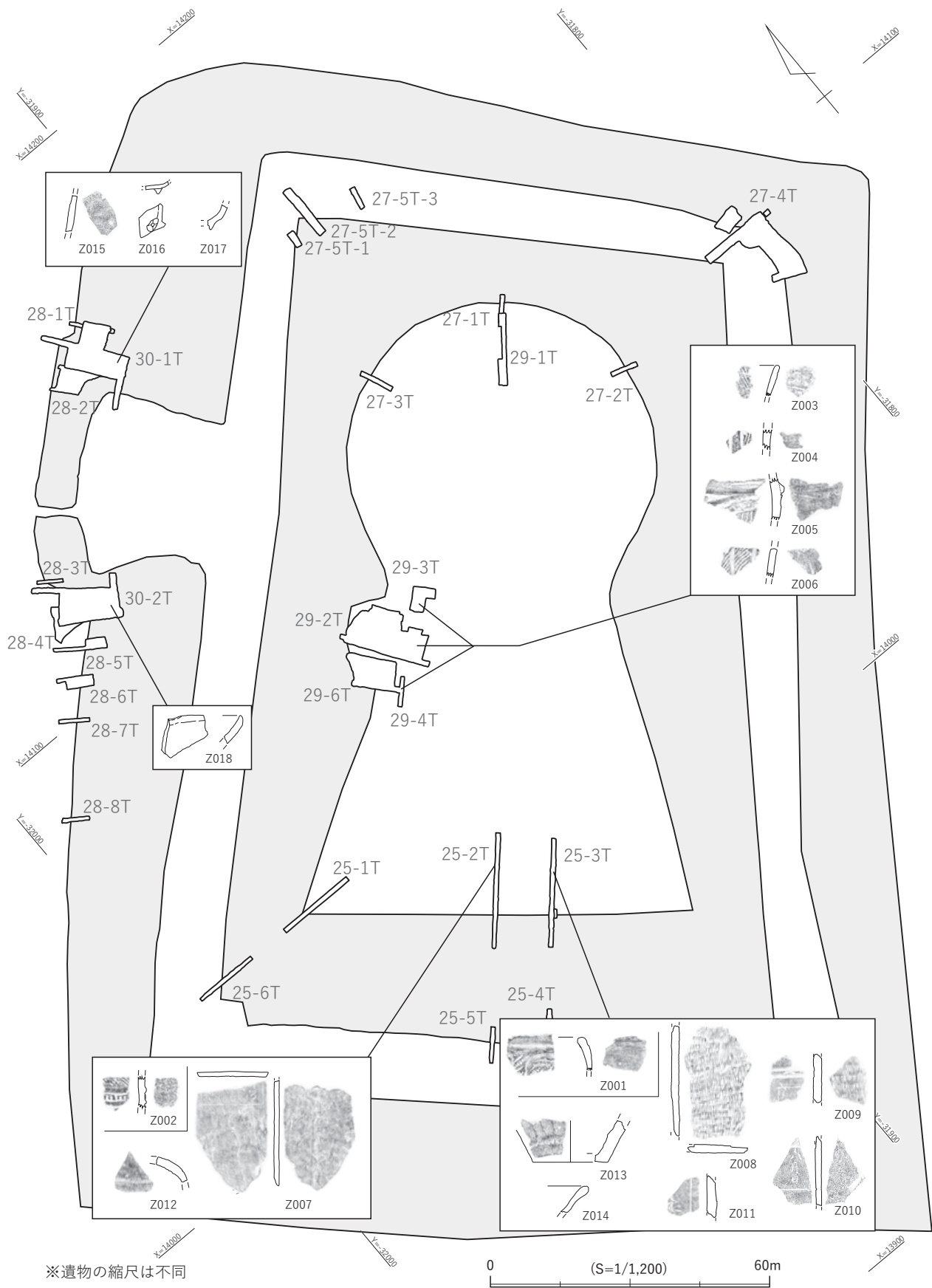


図 98 その他の時代の遺物 出土位置

第3章 科学分析等

第1節 土壌・テフラ分析

二子山古墳の土壌・テフラ分析は、平成25・27・28・29・30年度の計5か年実施した。いずれも株式会社火山灰考古学研究所に委託し実施したものである。本節は、その成果を基に再構成したものである。

(1) はじめに

関東地方中部に位置する埼玉県域とその周辺には、富士、浅間、榛名など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中国地方や九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的特徴などがテフラ・カタログ（町田・新井2011など）に収録されており、考古遺跡でも調査分析を行ってテフラを検出することで、考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

二子山古墳の発掘調査では、古墳墳丘部の下位の堆積物や、内堀、外堀を埋める堆積物などが良好な状態で検出されたことから、遺構などの層位を明らかにするために、地質調査を実施して土層の層序を確認した。同時に、高純度で分析用試料を採取し、実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスの屈折率測定）を行い、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を行うことになった。

調査分析の対象は、別表（表7）にまとめた。平成25年度は25-1T、25-2Tの2地点、平成27年度は27-2T内の2地点、平成28年度は28-1T、28-7T、28-8Tの3地点、平成29年度は29-2T墳丘下位土層地点、29-6T墳丘下位土層地点、29-6T内堀覆土断面の計3地点、平成30年度は30-1T、30-2T内の7地点である。次に各地点の土層層序を記す。

表7 分析対象

No.	対象	年度	土層層序	テフラ検出	テフラ組成	火山ガラス屈折率測定（試料 No.）
1	25-1T	H25	○	4 試料		
2	25-2T	H25	○	16 試料		2 試料 (9,17)
3	27-2T（墳丘部）	H27	○	9 試料		1 試料 (9)
4	27-2T（内堀部）	H27	○	8 試料		
5	28-1T	H28	○	5 試料		1 試料 (12)
6	28-7T	H28	○	8 試料		1 試料 (1)
7	28-8T	H28	○	6 試料		
8	29-2T	H29	○	7 試料		
9	29-6T（墳丘部）	H29	○	5 試料	3 試料	1 試料 (14)
10	29-6T（内堀部）	H29	○	7 試料		
11	30-1T（中央壁東）	H30	○	5 試料	3 試料	1 試料 (8)
12	30-1T（東壁中央）	H30	○	5 試料		
13	30-1T（中堤部東壁南部）	H30	○	2 試料		
14	30-1T（SK1）	H30	○	1 試料		
15	30-2T（東壁中央）	H30	○	4 試料		
16	30-2T（北壁外堀西）	H30	○			
17	30-2T（中堤部南面）	H30	○			

※表 8

※表 9

※表 10

(2) 土層の層序 (全17地点)

1) 25-1Tでは、墳丘盛土直下付近の土層を観察することができた(図100)。ここでは、下位より暗灰色土(層厚26cm)、灰褐色土(層厚8cm, 整地層)、やや黄色がかった灰褐色土(層厚26cm以上, 墳丘盛土)が認められる。

2) 25-2Tでは、下位よりマンガン粒子混じり灰色土(層厚10cm)、黄色土(層厚21cm)、黄灰色土(層厚12cm)、暗灰色砂質土(層厚13cm)、やや暗い灰色土(層厚27cm, 縄文時代中期勝坂式土器を含む)、暗灰色土(層厚22cm)、色調がとくに暗い暗灰色土(層厚13cm)、白色粗粒火山灰混じりで色調がとくに暗い暗灰色土(層厚15cm)、暗灰色土(層厚8cm, 整地層)、黄色土ブロック混じり暗灰色土(層厚23cm, 墳丘盛土)が認められる(図100)。

3) 27-2Tの墳丘部では、下位よりやや暗い灰褐色粘質土(層厚39cm)、やや灰色がかった褐色粘質土(層厚11cm)、黄色土や暗灰色土のブロックを多く含む褐色土(層厚18cm)、黄色土や暗灰色土のブロックに富む褐色土(層厚12cm)、黄色土や暗灰色土のブロックに富む褐色土(層厚28cm)、黄色土ブロック混じり灰褐色土(層厚18cm)、やや暗い灰褐色土(層厚47cm, 表土)が認められる(図100)。これらのうち、黄色土や暗灰色土のブロックに富む褐色土(層厚12cm)と、黄色土や暗灰色土のブロックに富む褐色土(層厚28cm)の層境が、いわゆる旧地表面と考えられていることから、それより下位の土層は古墳構築に伴う整地の際に形成された土層、上位の土層は墳丘の盛土と推定される。

4) 27-2Tの内堀の覆土は、下位より黄色土粒子混じり暗灰褐色土(層厚23cm)、暗灰褐色土(層厚7cm)、やや暗い灰褐色土(層厚16cm)、灰褐色土(層厚24cm)、やや灰色がかった褐色土(層厚8cm)、灰色粘土や黄色土のブロック層(層厚30cm以上)からなる(図100)。

5) 28-1Tにおける外堀の埋積堆積物は、下位よりやや暗い灰褐色泥層(層厚10cm, ⑤・⑥層相当層)、やや青みがかった灰色粘土層(層厚2cm, ④層)、黒泥層(層厚6cm)、やや灰色がかった褐色泥層(層厚24cm, 以上③層)、灰白色粗粒火山灰混じり灰色土(層厚13cm, ②層)、鉄分を含むやや褐色がかった灰色土(層厚18cm)、灰褐色土(層厚17cm, 表土, 以上①層)からなる(図100)。

6) 28-7Tにおける外堀の埋積堆積物は、下位より灰褐色泥層(層厚9cm, ⑤・⑥層相当層)、暗灰色泥層(層厚2cm)、やや青みがかった灰色粘土層(層厚4cm)、暗灰色泥層(層厚0.8cm)、やや青みがかった灰色粘土層(層厚1cm)、黒灰色泥層(層厚1cm)、黄灰色シルト層(層厚0.2cm, 以上④層)、やや暗い灰褐色泥層(層厚8cm)、灰色粗粒火山灰混じり暗灰色泥層(層厚5cm, 以上③層)、灰褐色土(層厚9cm, ②層)、灰色土(層厚3cm)、灰褐色土(層厚17cm)、灰褐色土(層厚15cm, 表土, 以上①層)からなる(図100)。

7) 28-8Tにおける外堀の埋積堆積物は、下位より灰褐色泥層(層厚11cm, ⑥層)、やや灰色がかった褐色泥層(層厚10cm, ⑤層)、やや明るい灰色粘土層(層厚3cm)、暗灰色泥層(層厚1cm)、黒泥層(層厚0.4cm)、灰白色粘土層(層厚2cm)、黒泥層(層厚2cm)、灰色シルト層(層厚0.4cm, 以上④層)、黒泥層(層厚1cm)、暗灰色泥層(層厚8cm)、黒灰色泥層(層厚6cm, 以上③層)、マンガン粒子を含む灰褐色土(層厚18cm, ②層)、褐灰色土(層厚11cm)、灰褐色土(層厚11cm, 表土, 以上①層)からなる(図100)。

8) 29-2Tにおける墳丘下位の堆積物は、下位より黄色土（層厚3cm以上）、黄色土ブロック混じりでやや暗い灰色土（層厚20cm）、暗灰色土（層厚14cm）、やや色調が明るい黒灰色土（層厚19cm）、やや褐色がかった暗灰色土（層厚10cm）、やや灰色がかった黄色土（層厚16cm）、灰色粘質土（層厚22cm）、暗灰色粘質土（層厚17cm）からなり、その上位に墳丘盛土（層厚5cm以上）がのる（図101）。

9) 29-6Tの墳丘盛土の下には、下位より灰褐色粘質土（層厚15cm以上）、暗灰色粘質土（層厚16cm）が認められる（図101）。

10) 29-6T内堀覆土断面では、下位より黄色土ブロックを多く含むやや青みをおびた灰色泥質土（層厚12cm）、やや青みをおびた灰色土（層厚12cm）、黄色土ブロック混じり黄灰色土（層厚8cm）、灰褐色土（層厚7cm）、暗灰色泥質土（層厚6cm）、黄色土粒子混じり灰色土（層厚7cm）、黄色土粒子混じり黄灰色土（層厚14cm）、黄色土粒子を少し含むやや灰色がかった褐色土（層厚52cm）、暗灰褐色土（層厚53cm）、やや灰色がかった褐色土（層厚33cm）、古墳公園整備時の盛土（層厚56cm）が認められる（図101）。

11) 30-1T・中央壁東部では、下位より暗褐色土（層厚5cm以上）、黄灰色土（層厚11cm）、灰白色粘土層（ブロック状、最大層厚2cm）、灰色粘土ブロック混じり暗灰色泥層（層厚11cm）、灰褐色土（層厚20cm）、灰白色粗粒火山灰を多く含む灰色土（層厚20cm以上）が認められる（図101）。今回の発掘調査では、灰白色粘土層の直下が外堀基底と考えている。

12) 30-1T・東壁中央では、下位より暗褐色土（層厚14cm以上）、青みがかった灰白色粘土層（層厚4cm）、黒灰色泥層（層厚5cm）、灰褐色粘質土（層厚11cm）、色調が明るい灰色粘土層（層厚3cm）、灰白色粗粒火山灰混じり灰色土（層厚12cm）、灰褐色表土（層厚26cm）が認められる（図101）。今回の発掘調査では、青みがかった灰白色粘土層の直下が外堀基底と考えられている。

13) 30-1T・中堤部東壁南部では、下位より灰色土で充填されたクラックが発達した暗褐色土（層厚27cm）、黄色土ブロックを多く含む灰褐色土（層厚8cm）、褐灰色土（層厚9cm）、黄色土ブロックに富む灰褐色土（層厚14cm）、灰褐色土（層厚8cm）、灰白色粗粒火山灰混じり灰色土（層厚7cm）、盛土（層厚20cm以上）が認められる（図101）。

14) 粗粒の石製品が検出された30-1T・SK1の覆土は、下位より黒灰褐色泥（層厚26cm）、暗灰褐色泥層（層厚9cm）、黒灰褐色泥層（層厚5cm）からなる（図101）。

15) 30-2T・東壁中央では、下位より暗褐色土（層厚8cm以上）、灰色粘土ブロックを含む暗灰褐色土（層厚9cm）、青灰白色粘土層（層厚7cm）、暗灰色泥層（層厚2cm）、青灰色粘土層（層厚1cm）、褐灰色粗粒火山灰ブロックを含むやや暗い灰色土（層厚23cm）、灰色土（層厚22cm）、褐灰色表土（層厚25cm）が認められる（図101）。今回の発掘調査では、青灰色粘土層の直下が外堀の基底と考えられている。

16) 30-2T・北壁外堀西方では、外堀の基盤に相当する灰褐色土（層厚25cm以上）が認められた（図101）。

17) 30-2T・中堤部南面では、下位より暗褐色土（層厚14cm以上）、やや暗い灰褐色土（層厚12cm）、灰褐色土（層厚26cm）、黄色粗粒火山灰混じり灰褐色土（層厚15cm）、灰色土（層厚2cm）、鉄分を多く含む黄色土（層厚0.4cm）、灰色土と褐色土のブロック層（層厚21cm）、灰白色粗

粒火山灰や炭化物を含む灰色土（層厚 9 cm）、黄灰色土ブロック混じり褐灰色土（層厚10cm以上）が認められた（図101）。

（３）テフラ検出分析（全15地点）

土層観察を行った17地点のうち15地点を対象に、層境にかからないように採取された試料について、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出同定を実施した。調査年度により分析試料の重量に差はあるものの、分析方法は概ね次のとおりである。

- 1）分析対象の試料について、含まれる砂分に応じてそれぞれ4～12gを秤量。
- 2）超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3）恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4）実体顕微鏡下で観察。

テフラ検出分析の結果は調査年度ごとに表8に示す。

1）25-1Tで検出された火山ガラスは少量で、わずかに試料12で無色透明のスポンジ状軽石型、分厚い中間型、バブル型、試料10で無色透明のスポンジ状軽石型とバブル型、そして試料6で無色透明のバブル型の火山ガラスが認められたのみである。

2）墳丘盛土の下位に古墳の基盤の土層が認められた25-2Tでは、試料15をのぞくいずれの試料からも火山ガラスが検出された。しかしその量は少なく、火山ガラスを含むテフラの顕著な濃集層準は認められなかった。検出された火山ガラスの多くは、無色透明の繊維束状軽石型、バブル型、中間型などの火山ガラスである。なお、含まれる重鉱物の組み合わせは、全体として斜方輝石や単斜輝石が多い傾向にあるが、試料17や試料15でやや角閃石が多い。

3）27-2Tの墳丘部では、試料15で発泡の良い灰白色スポンジ状軽石型、試料13、試料11、試料5で淡灰色や無色透明の分厚い中間型ガラス、試料9で白色スポンジ状軽石型、そして試料7で無色透明の繊維束状軽石が少量検出された。重鉱物としては、全体として斜方輝石や単斜輝石が多く、ほかに角閃石が少量認められる場合がある。とくに、試料9には、他と比較してやや多くの角閃石が含まれているようにみえる。

4）27-2Tの内堀における分析対象試料からは、淡灰色、褐色、褐色などの比較的良く発泡したスポンジ状軽石型ガラスが少量ずつ検出された。このほか、試料14には灰白色のスポンジ状軽石型ガラスが少し含まれている。さらに、試料2には、やや灰色がかった白色軽石（最大径2.0mm）や、その細粒物であるやや灰色がかった白色のスポンジ状あるいは繊維束状の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。

5）28-1Tでは、試料12にごくわずかながら無色透明のバブル型ガラスが含まれている。斜方輝石や単斜輝石のほかに、ごく少量の角閃石が認められる。試料8から試料4にかけては、淡灰色、淡褐色、褐色の軽石型ガラスが少量含まれている。斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料3には、スポンジ状あるいは繊維束状に発泡した、わずかに灰色をおびた白色や白色の軽石型ガラスが多く含まれている。この試料に含まれる重鉱物も、斜方輝石や単斜輝石である。

6）28-7Tの試料11から試料7にかけての多くの試料には、無色透明のバブル型、繊維束状軽石

型ガラス、分厚い中間型のガラスが少量含まれている。また、試料6から試料3にかけては、これらの火山ガラスがごく少量含まれている。最上位の試料1には、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。このほか、試料14には灰白色のスポンジ状軽石型ガラスが少し含まれている。これらの試料に含まれる重鉱物はおもに斜方輝石や単斜輝石で、ほとんどに角閃石が少量ずつ含まれている。試料2には、やや灰色がかった白色軽石（最大径2.0mm）や、その細粒物であるやや灰色がかった白色のスポンジ状あるいは繊維束状の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。

7) 28-8Tでは、外堀の基盤にあたる堆積物からは火山ガラスが検出されなかったものの、外堀覆土の多くの試料から火山ガラスを検出できた。そのうち、覆土基底部の試料10からは無色透明のバブル型ガラスを比較的多く検出した。それより上位では、同じような無色透明のバブル型ガラスのほか、淡灰色のスポンジ状軽石型、淡灰色や淡褐色の中間型ガラスをごくわずかに認めることができた。これらの多くの試料に含まれる重鉱物は、磁鉄鉱など不透明鉱物以外はおもに斜方輝石や単斜輝石で、ほとんどに角閃石が少量含まれている。

8) 29-2T墳丘下位土層地点では、比較的粗粒の軽石やスコリアは認められなかったものの、いずれの試料からも火山ガラスが少量ずつ検出された。多くの試料に含まれる火山ガラスは、分厚い中間型、繊維束状軽石型、無色透明のバブル型のガラスである。全体として斜長石が多く含まれるが、斜方輝石や単斜輝石も認められる。最上位の試料3には、無色透明や淡灰色の中間型ガラスや、無色透明のバブル型ガラスが少量含まれている。そして、斜方輝石や単斜輝石のほかに、わずかながら角閃石が認められる。

9) 29-6T墳丘下位土層地点の多くの試料では、29-2T墳丘下位土層地点と同様に、中間型ガラスが目立つ傾向にある。ただ、最上位の試料14には、白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。また、この試料には、斜方輝石のほかに角閃石が多く含まれている。この試料で認められる角閃石としては普通角閃石が多いものの、ほかに酸化した角閃石も少量認められる。

10) 29-6T内堀覆土断面の試料のうち、内堀覆土最下部の試料33には、無色透明のバブル型ガラスがごくわずかに含まれている。斜方輝石や単斜輝石のほかに、わずかに角閃石が認められる。

11) 30-1T・中央壁東部では、試料11と試料10に少量あるいはごく少量の無色透明のバブル型ガラスが含まれている。斜方輝石や単斜輝石が認められるが、試料11にはほかに角閃石も含まれている。火山ガラスが少量含まれている試料8では、無色透明のバブル型ガラスのほかに白色のスポンジ状軽石型ガラスが認められる。斜方輝石、単斜輝石のほか、少量の角閃石が含まれている。試料3には淡灰色のスポンジ状軽石型ガラスが少し含まれている。また、試料1には淡灰色のスポンジ状軽石型ガラスのほかに、やや灰色がかった白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。

12) 30-1T・東壁中央では、試料9と試料7で、少量の無色透明のバブル型ガラスが認められる。試料6には、ごく少量の無色透明のバブル型ガラスと灰白色スポンジ状軽石型ガラスが含まれている。試料5には淡灰色のスポンジ状軽石型ガラスが少し含まれている。試料2には、やや灰色がかった白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。

13) 30-1T・中堤部東壁南部の試料9と試料7には、少量あるいはごく少量の無色透明のバブル

型ガラスが含まれる。

14) 30-1T・SK1の覆土基底部の試料8には、やや灰色がかった白色のスポンジ状や繊維束状軽石型の火山ガラスが比較的多く含まれている。ほかに、淡灰色のスポンジ状軽石型ガラスも認められる。

15) 30-2T・東壁中央の試料5には、ごく少量の無色透明のバブル型や繊維束状軽石型の火山ガラスが含まれており、重鉱物として斜方輝石、単斜輝石、角閃石が認められる。試料1には、ごく少量の細粒の淡灰色軽石（最大径2.1mm）のほかに、淡灰色や淡褐色のスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。

（４）テフラ組成分析（全2地点、6試料）

①分析試料と分析方法

土層観察およびテフラ検出分析の対象となった地点のうち、特徴的な火山ガラスや鉱物が検出された29-6T墳丘下位土層地点の3試料（試料14、16、18）、30-1T・中央壁東部の3試料（試料11、10、8）を対象に、含まれるテフラ粒子の詳細な検討を行うために、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせた定量的なテフラ組成分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

1) テフラ検出分析済みの分析対象試料について、分析篩を用いて、 $<1/4\text{mm}$ 、 $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ 、 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ 、 $<1/16\text{mm}$ に篩別。

2) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察して、火山ガラスの形態別（一部色調）別含有率、軽鉱物および重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。

3) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

②分析結果

29-6T、30-1Tのテフラ組成分析の結果を、ダイアグラムにして図99に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を表9に示す。29-6T試料14では、下位の2試料と比較して、中間型ガラスや繊維束状軽石型ガラスが少ない一方で、スポンジ状軽石型ガラスの含有率が高い（4.8%）。また、軽鉱物や重鉱物の含有率が下位の試料と比較してやや低い傾向にある。さらに、下位の試料より斜方輝石や単斜輝石の含有率が低く、角閃石の含有率が高い特徴がある。

30-1T試料11には、火山ガラスが8.8%含まれている。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ28.0%と48.0%である。重鉱物には、含有率が高い順に、斜方輝石（69.2%）、単斜輝石（16.8%）、角閃石（5.2%）、カンラン石（0.4%）が認められる。30-1T試料10には、火山ガラスが4.4%含まれている。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ28.8%と56.8%である。重鉱物には、含有率が高い順に、斜方輝石（68.4%）、単斜輝石（22.8%）、角閃石（0.8%）、カンラン石（0.4%）が認められる。30-1T試料8には、火山ガラスが14.4%含まれている。軽鉱物と重鉱物の含有率は、それぞれ32.0%と44.0%である。重鉱物には、含有率が高い順に、斜方輝石（70.0%）、単斜輝石（22.0%）、角閃石（0.4%）が認められる。

（５）屈折率測定（火山ガラス）（全６地点、７試料）

①測定試料と測定方法

25-2Tの試料 9、17、27-2Tの墳丘部の試料 9、28-1Tの試料12と28-7Tの試料 1、29-6墳丘下位土層地点の試料14、30-1T・中央壁東部の試料 8 の計 7 試料について、含まれる火山ガラスの屈折率測定を行って、指標テフラとの同定精度を向上させることにした。屈折率測定は、温度変化型屈折率測定法（壇原1993）による。

②測定結果

屈折率測定の結果を表10に示す。この表には、埼玉古墳群周辺に降灰している後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。

（６）考察

①指標テフラとの同定

ここでは、テフラ検出分析により検出されたテフラ粒子の起源と指標テフラの降灰層準について、テフラの産状と火山ガラスの屈折率特性を含めたテフラ粒子の特徴から推定する。テフラ検出分析で検出された火山ガラスは、次のように分類される。各調査年度により特徴が異なるため、平成29年度の分類を下記に示す。

タイプ a：無色透明のバブル型ガラスおよび比較的薄手の繊維束状軽石型ガラス。

タイプ b：淡褐色のスポンジ状軽石型ガラス。

タイプ c：比較的厚い無色透明の繊維束状やスポンジ状の軽石型ガラスや、無色透明や淡灰色の中間型ガラス。

タイプ d：白色のスポンジ状軽石型ガラス。

タイプ e：淡灰色の細粒軽石や、淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラス。

タイプ f：わずかに灰色がかった白色のスポンジ状軽石型ガラス。

これらのうち、タイプ a とタイプ b のテフラは、その形態や色調から、順に始良Tn火山灰（AT，約2.8～3万年前，町田・新井1976，2011など）と、約2.4～2.9万年前に浅間火山から何度も噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井1962，早田2016など）に由来する可能性が高い。

また、タイプ c のテフラは、岩相から約 2 万年前の浅間大窪沢第 2 軽石（As-Ok2，中沢ほか1984，早田1996，2016）や、約1.5～1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井1962，町田・新井1992，2003）などの浅間火山のテフラに由来すると考えられる。

タイプ d のテフラは、その岩相や、火山ガラスの屈折率特性、さらにその検出層準で角閃石や斜方輝石が顕著なこと、さらにテフラの分布と本古墳の位置の関係などを合わせると、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，新井1979，坂口1986，早田1989，町田・新井1992，2003）に由来する可能性が非常に高い。

タイプ e の軽石や火山ガラスは、その岩相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ（As-B，荒牧1968，新井1979）に由来すると考えられる。さらに、その上位のタイプ f の火山ガラスは、層位や層相から、1783（天明 3）年に浅間火山から噴出した浅間 A 軽石（As-A，荒牧1968，新井1979）と推定される。

②二子山古墳の層位

29-6T墳丘下位土層地点におけるテフラ分析では、白色軽石型火山ガラスと、角閃石の多産層準が検出された。内堀覆土最下部の試料におけるHr-FAの含有率がさほど多くはないことを合わせると、やはり二子山古墳の層位はHr-FAより上位と推定される。29-6T墳丘下位土層地点において、墳丘盛土下位の試料3の重鉍物で、わずかながら角閃石が認められたことも、このことを支持する。一方、29-6T周堀覆土断面においては、5層からAs-B、その上位の2層からAs-BのほかにAs-Aに由来すると考えられる火山ガラスが検出された。以上のことから、二子山古墳の層位は、Hr-FAより上位で、As-Bより下位と推定される。

27-2Tの墳丘部の試料15でわずかに検出された火山ガラスは、確度は低いものの、その岩相からAs-Cに由来する可能性がある。また、角閃石の含有率が他と比較してやや高い試料9付近には、ごくわずかながら細粒で白色のスポンジ状軽石型ガラスが含まれており、その火山ガラスの屈折率特性も合わせると、Hr-FAの降灰層準のある可能性が考えられる。

27-2T内の、内堀のテフラ検出分析対象試料のいずれからでも、As-Bが検出されたことから、内堀で認められた土層はAs-B降灰後に形成されたものと考えられる。したがって、27-2T（内堀部）の土層に関しては、As-B降灰後に攪乱を受けている可能性がある。

外堀基底部と考えられている粘土層から採取された試料のうち、30-1T・中央壁東部の試料8からは、検出量はごくわずかで降灰層準を示すような産状ではないものの、ATなどのほかにHr-FAに由来する可能性が高い白色のスポンジ状軽石型ガラス（タイプd）が検出された。一方、その上位では、30-2T・東壁中央でAs-Bをブロック状に認めることができた。なお、外堀の調査では、Hr-FAとAs-Bの間に818（弘仁9）年地震に関係すると思われる明色細粒堆積物が挟在されており、二子山古墳あるいはその周辺で影響が生じた可能性が指摘された。今回の内堀覆土の観察・分析でも、Hr-FAの上位の内堀覆土中に明色の土層が挟在されており、818（弘仁9）年地震により墳丘部で地すべりが発生したことを示唆することから非常に興味深い。

30-1T・SK1から検出された大型の石については、包含層中にAs-Aに由来するテフラ粒子が検出されることから、As-Aより上位で、比較的最近の土層から出土した可能性が高いと考えられる。

（7）まとめ

二子山古墳の調査地点（墳丘部・内堀部・外堀部・中堤部）において、地質調査を実施するとともに、高純度で採取した試料を対象に実験室内でテフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスの屈折率測定）を行った。その結果、始良Tn火山灰（AT，約2.8～3万年前）、浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，約2.4～2.9万年前）、浅間大窪沢第2軽石（As-Ok2，約2万年前）や浅間板鼻黄色軽石（As-YP，約1.5～1.65万年前）などの浅間火山軽石流期のテフラなどを検出することができた。

古墳墳丘盛土直下付近で榛名ニッ岳渋川テフラ（Hr-FA，6世紀初頭）、内堀覆土断面で浅間Bテフラ（As-B，1108年）および浅間A軽石（As-A，1783年）の降灰層準が検出されたことから、二子山古墳の層位はHr-FAより上位でAs-Bより下位と考えられる。外堀の層位は、Hr-FAより上位でAs-Bより下位の可能性が高く、矛盾しない。

なお、平成29年度の調査においては、古墳盛土の下位に、後期旧石器時代のローム層とその上位の黒ボク土が認められる。したがって、墳丘部において古墳構築時に旧地表面の削剥があったとしても、少なくとも分析対象地点においては、さほど大規模に実施されていない可能性が高いと考えられる。

引用文献（「第3章第1節 土壌・テフラ分析」に関わるもの）

新井房夫1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10, pp.1-79.

新井房夫1972「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフクロノロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11, pp.254-269.

新井房夫1979「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』no.53, pp.41-52.

新井房夫1993「温度一定型屈折率測定法」『日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」』東京大学出版会, pp.138-149.

荒牧重雄1968「浅間火山の地質」『地団研専報』no.14, pp.1-45.

壇原徹1993「温度変化型屈折率測定法」『日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」』pp.149-158.

町田洋・新井房夫1976「広域に分布する火山灰－始良Tn火山灰の発見とその意義－」『科学』46, pp.339-347.

町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』. 東京大学出版会, 276p.

町田洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス』. 東京大学出版会, 336p.

町田洋・新井房夫2011『新編火山灰アトラス（第2刷）』. 東京大学出版会, 336p.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦1984「浅間火山, 黒斑～前掛期のテフラ層序」『日本第四紀学会講演要旨集』no.14, pp.69-70.

坂口一1986「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会, pp.103-119.

坂口一2010「高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向－中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落との関係－」『中居町一丁目遺跡3』群馬県埋蔵文化財調査事業団, pp.17-22.

早田勉1989「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27, pp.297-312.

早田勉1996「関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて－」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』no.7, pp.256-267.

早田勉2014「渋川市有馬寺畑遺跡におけるテフラ分析」『有馬寺畑遺跡』渋川市教育委員会, pp.197-211.

早田勉2016「浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group）の層序と前橋泥流堆積物の層位」『ナイフ形石器文化の発達期と変革期－浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群』岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会, pp.6-14.

表8 テフラ検出分析成果

No.	地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物 (不透明鉱物以外)
			量	色調	最大径	量	形態	色調	
1	25-1T	6				*	bw	無色透明	
		8							
		10				*	pm(sp)	灰白, 無色透明	
		12				*	pm(fb), md, bw	無色透明, 淡灰	
		27				*	bw, md	無色透明	
2	25-2T	1				*	pm(fb), md, bw	無色透明	
		3				*	pm(sp), md	無色透明	
		5				*	md	無色透明	
		6				*	pm(fb)	無色透明	
		7				*	pm(sp), md	無色透明	
		8				*	pm(sp), md	無色透明	
		9				*	md, bw	無色透明	
		10				*	pm(sp)>pm(fb)	白>透明	
		11				*	bw	無色透明	
		13				*	pm(fb)	無色透明	
		15				*	pm(fb)	無色透明	
		17				*	pm(fb)	無色透明	
		19				*	pm(fb)	無色透明	
		23				*	bw, pm(fb)	無色透明	
		29				*	pm(fb), bw	褐色, 無色透明	
3	27-2T (墳丘部)	0							opx, cpx, (am)
		1							opx, cpx, (am)
		3							opx, cpx
		5				(*)	md	淡灰	opx, cpx, (am)
		7				(*)	pm(fb)	無色透明	opx, cpx > am
		9				(*)	pm(sp)	白	opx, am, cpx
		11				*	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx, am
		13				*	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx
4	27-2T (内堀部)	15				(*)	pm(sp)	灰白	opx, cpx, (am)
		2	*	(灰)白	2.0mm	**	pm(sp, fb)	(灰)白	opx, cpx
		4				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
		6				(*)	pm(sp)	淡灰, 淡褐	opx, cpx
		8				(*)	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx
		10				(*)	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx, (am)
		12				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐	opx, cpx
		14				*	pm(sp)	灰白, 淡灰, 淡褐	opx, cpx
5	28-1T (外堀部)	16				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
		3				***	pm(sp, fb)	(灰)白, 白	opx, cpx
		4				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
		6				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
		8				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
6	28-7T (外堀部)	12				(*)	bw	無色透明	opx, cpx, (am)
		1				**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
		3				(*)	bw	無色透明	opx, cpx, (am)
		4				(*)	md, bw	無色透明	opx, cpx, (am)
		5				(*)	pm(fb)	無色透明	opx, cpx, (am)
		6				(*)	md	淡灰	opx, cpx, (am)
		7				*	bw, pm(fb)	無色透明	opx, cpx, (am)
		9				*	bw, pm(fb), md	無色透明	opx, cpx
7	28-8T (外堀部)	11				*	bw, pm(fb)	無色透明	opx, cpx, (am)
		2				(*)	md	淡灰, 淡褐	opx, cpx, (am)
		5							opx, cpx, (am)
		6				(*)	bw	無色透明	opx, cpx
		8				(*)	pm(sp), bw	淡灰, 無色透明	opx, cpx, (am)
8	29-2T・墳丘下位	10				**	bw	無色透明	opx, cpx, (am)
		12							opx, cpx, (am)
		3				*	md, bw	無色透明, 淡灰	opx, cpx, (am)
		6				(*)	md	無色透明	opx, cpx
		7				*	md	無色透明, 淡灰	opx, cpx
9	29-6T・墳丘下位	8				*	md, pm(fb)	淡灰, 無色透明	opx, cpx
		9				*	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx
		11				*	pm(fb), md	無色透明, 淡灰	opx, cpx
		13				*	bw, md	無色透明, 淡灰	opx, cpx
		14				**	pm(sp)	白	opx, am, cpx
		15				(*)	md	無色透明	opx, cpx, (am)
		16				(*)	md	無色透明	opx, cpx
		17				*	md, pm(fb)	無色透明, 淡灰	opx, cpx
10	29-6T・周堀覆土	18				(*)	md	無色透明	opx, cpx
		20				**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, (灰)白	opx, cpx, (am)
		23	(*)	淡灰	2.0mm	**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
		25				(*)	md	無色透明, 淡灰	opx, cpx, (am)
		27				*	md, bw	無色透明, 淡灰	opx, cpx, (am)
		30				(*)	md, bw	無色透明, 淡灰	opx, cpx, (am)
		31				*	bw, md	無色透明, 淡灰	opx, cpx, (am)
		33				(*)	bw	無色透明	opx, cpx, (am)
11	30-1T・中央壁東部	1				**	pm(sp)	(灰)白, 淡灰	opx, cpx
		3				*	pm(sp)	淡灰	opx, cpx
		8				*	bw > pm(sp)	無色透明, 白	opx, cpx, (am)
		10				(*)	bw	無色透明	opx, cpx
		11				*	bw	無色透明	opx, cpx, am
12	30-1T・東壁中央	2				**	pm(sp)	(灰)白	opx, cpx
		5				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐	opx, cpx
		6				(*)	bw, pm(sp)	無色透明, 灰白	opx, cpx
		7				(*)	bw	無色透明	(opx, cpx)
		9				*	bw	無色透明	opx, cpx, (am)
13	30-1T・中堤部東壁南部	7				(*)	bw	無色透明	opx, cpx
		9				*	bw	無色透明	opx, cpx
14	30-1T・SK1	8				**	pm(sp, fb)	(灰)白, 淡灰	opx, cpx
15	30-2T・東壁中央	1	(*)	淡灰	2.1mm	***	pm(sp)	淡灰, 淡褐	opx, cpx
		3							(opx, cpx)
		5				(*)	bw, pm(fb)	無色透明	opx, cpx, am
		6							opx, cpx, am

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, (*): 非常に少ない.

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状.

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, mc: 雲母. 重鉱物の () は, 少量を示す.

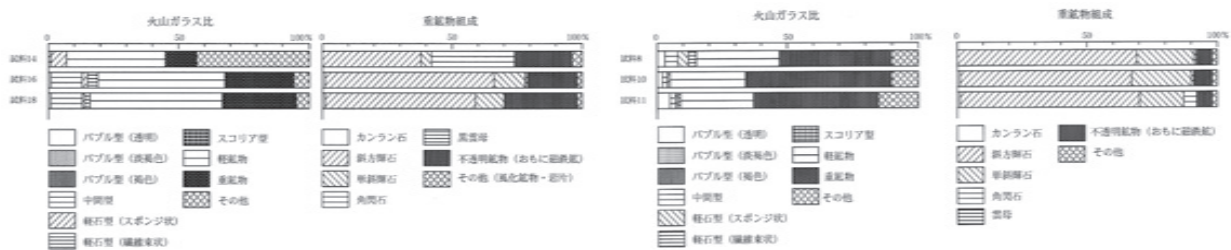


図 99 テフラ組成ダイヤグラム (左: 29-6T 墳丘下位土層地点、右: 30-1T・中央壁東部)

表 9 テフラ組成分析成果

火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm(sp)	pm (fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
29-6T・墳丘下位	14	0	0	0	3	12	0	96	29	110	250
	16	1	0	0	31	5	8	125	64	16	250
	18	1	0	0	31	1	5	130	73	9	250
30-1T・中央壁東部	8	7	0	0	12	10	7	80	110	24	250
	10	4	0	0	4	3	0	72	142	25	250
	11	12	0	0	6	1	3	70	120	38	250

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数。

重鉱物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
29-6T・墳丘下位	14	0	93	11	81	0	56	9	250
	16	1	165	30	2	0	48	4	250
	18	1	148	27	0	0	70	4	250
30-1T・中央壁東部	8	0	175	55	1	0	15	4	250
	10	1	171	57	2	0	15	4	250
	11	1	173	42	13	0	16	5	250

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, opq: 不透明鉱物, 数字は粒子数。

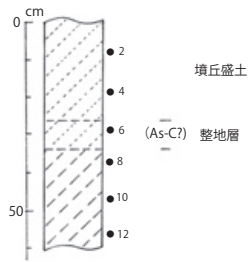
表 10 屈折率測定結果

地点・テフラ・試料	火山ガラス 屈折率 (n)	測定点数
25-2T・試料 9	1.501-1.507	31
25-2T・試料 17	1.498-1.504	31
27-2T・試料 9	1.500-1.503	30
28-1T・試料 12	1.499-1.510 (1.499-1.506, 1.508, 1.510)	31 (29, 1, 1)
28-7T・試料 1	1.526-1.530	32
29-6T 墳丘下位・試料 14	1.498-1.504	30
30-1T・中央壁東部・試料 8	1.498-1.503	30

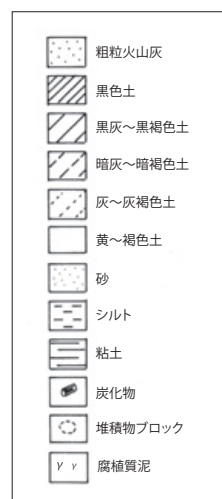
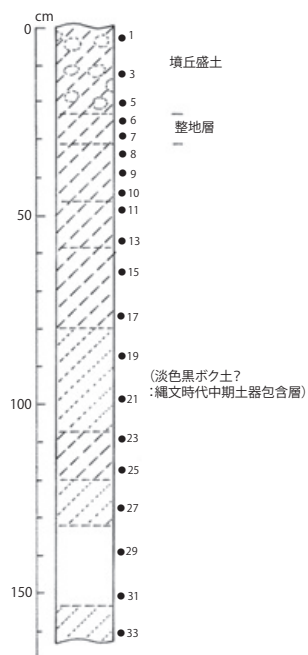
関東平野北西部の後期更新世後半以降の代表的指標テフラ	屈折率 (n)	文献
浅間 A (As-A, 1783 年)	1.507-1.512	1)
浅間 B (As-B, 1108 年)	1.524-1.532	1)
榛名ニツ岳伊香保 (Hr-FP, 6 世紀中葉)	1.501-1.504	1)
榛名ニツ岳渋川 (Hr-FA, 6 世紀初頭)	1.500-1.502	1)
	1.498-1.505	2)
浅間 C (As-C, 3 世紀後半)	1.514-1.520	1)
浅間 D 軽石 (As-D, 約 4,500 年前 *1)	1.513-1.516	1)
鬼界アカホヤ (K-Ah, 約 7,300 年前)	1.506-1.513	1)
浅間藤岡軽石 (As-Fo, 約 8,200 年前 *1)	1.508-1.516	3), 4)
浅間総社 (As-Sj, 約 1.0 ~ 1.1 万年前 *1)	1.501-1.518	4)
浅間板鼻黄色 (As-YP, 約 1.5 ~ 1.65 万年前)	1.501-1.505	1)
浅間大窪沢 2 (As-Ok2, 約 2 万年前)	1.502-1.504	1)
浅間大窪沢 1 (As-Ok1, 約 2 万年前)	1.500-1.502	1)
浅間板鼻褐色 (群) (As-BP Group, 約 2.4 ~ 2.9 万年前)	上部: 1.515-1.520 中部: 1.508-1.511 下部: 1.505-1.515	1) 1) 1)
始良 Tn (AT, 約 3 万年前)	1.499-1.500	1)
榛名箱田 (Hr-HA, 約 3 万年前 *1)	未詳	3)

*1: 放射性炭素 (14C) 年代, 1) 町田・新井 (2011), 2) 早田 (2014), 3) 早田 (1996), 4) 早田 (未公表), 本報告・2) 温度変化型屈折率法 (壇原, 1993), 1) 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993)。

25-1T (填丘部)

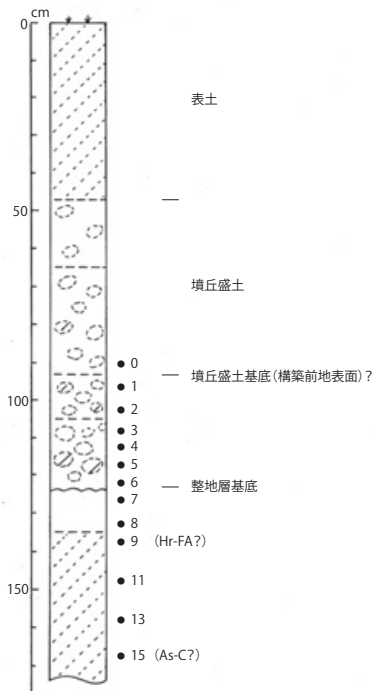


25-2T (填丘部)

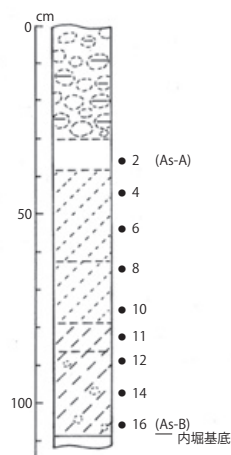


● : テフラ分析試料の層位
数字 : テフラ分析の試料番号

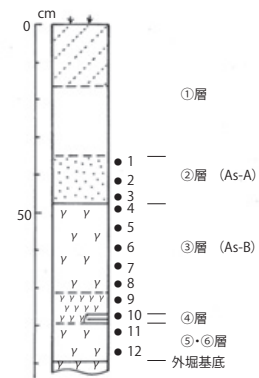
27-2T (填丘部)



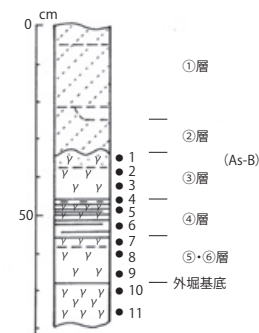
27-2T (内堀部)



28-1T (外堀部)



28-7T (外堀部)



28-8T (外堀部)

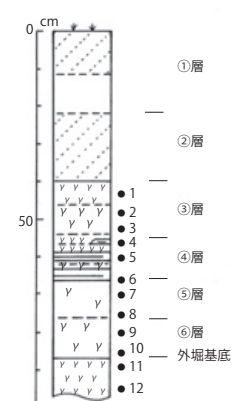


図 100 土層柱状図①

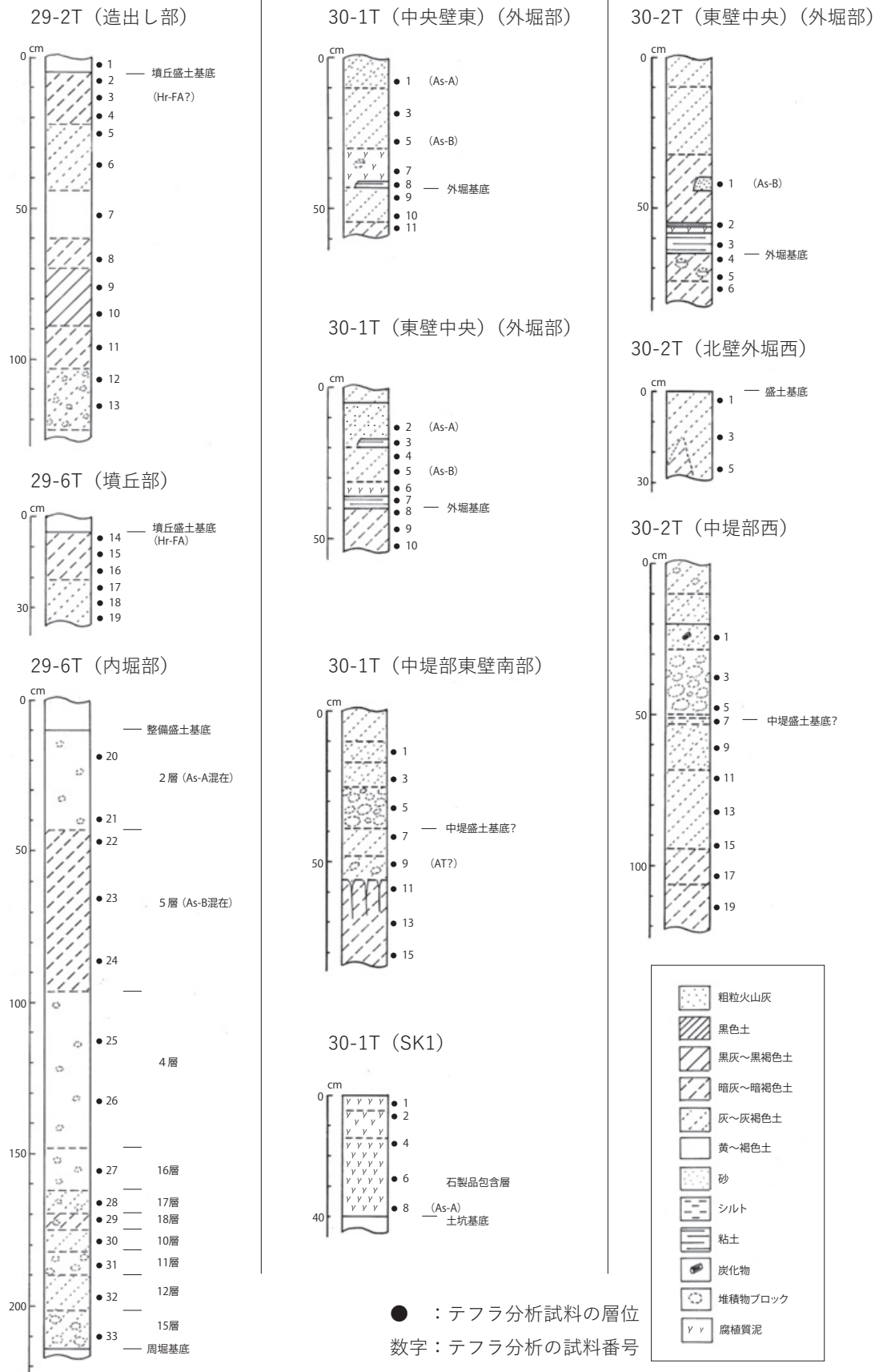
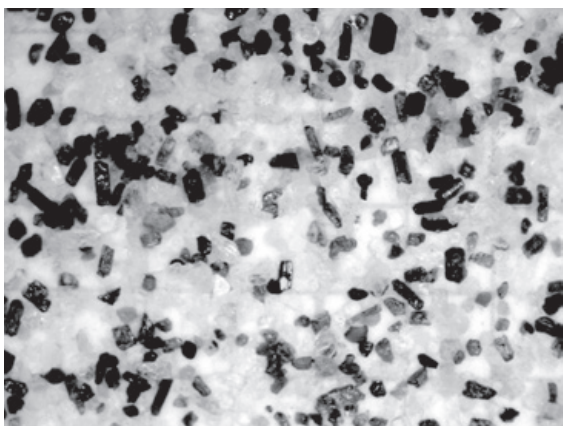
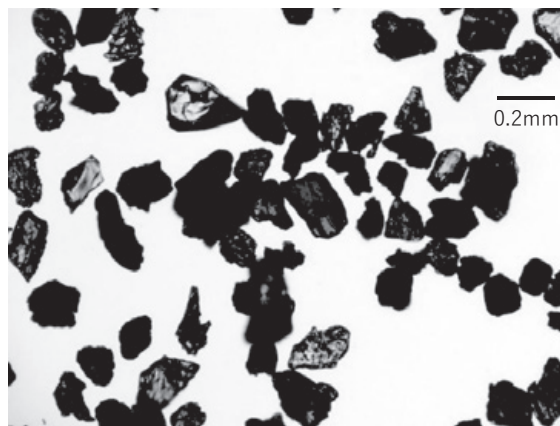


図 101 土層柱状図②



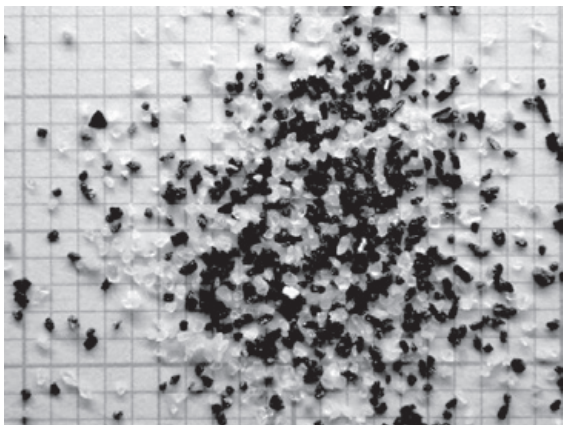
25-2T・試料 17 (1/4-1/8mm)

重鉱物として斜方輝石や単斜輝石のほか、角閃石を含む（上方右および中央下の長柱状黒色粒子）、背景 1mm メッシュ。



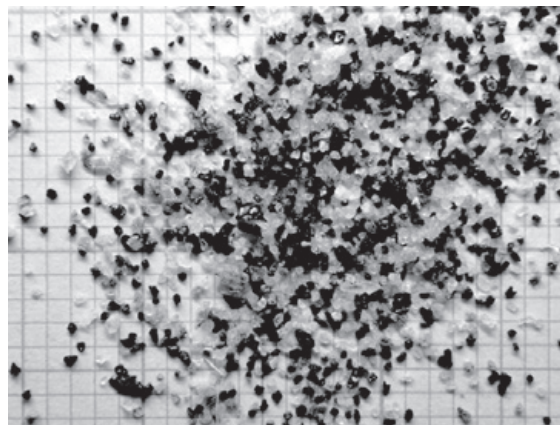
27-2T (填丘部)・試料 9

中央（褐色平板状鉱物）：角閃石。
中央周辺および右：スポンジ状軽石型ガラス。



28-1T・試料 12 (外堀覆土基底部)

無色透明バブル型ガラスや角閃石を特徴的に含む。
背景 1mm メッシュ。



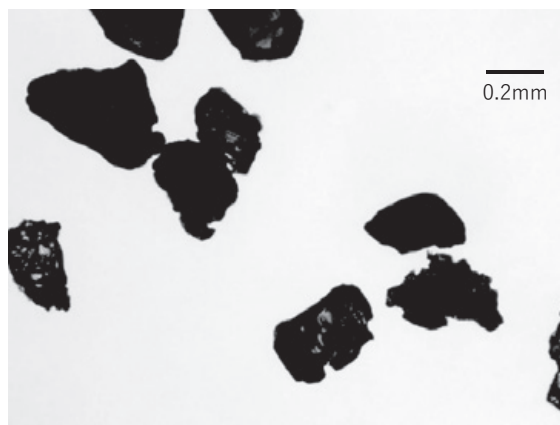
28-7T・試料 1 (As-B 混在)

淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型ガラス、斜方輝石、単斜輝石を含む。背景 1mm メッシュ。



29-6T 填丘下位土層・試料 14 (透過光下)

中央左など：スポンジ状軽石型ガラス。
中央右（褐色鉱物）：斜方輝石。
中央（緑色鉱物）：角閃石（普通角閃石）



30-1T 中央壁東部・試料 8 (透過光, Hr-FA 混在)

スポンジ状軽石型ガラスを含む
左上有色鉱物：単斜輝石、
その他の重鉱物：斜方輝石。

図 102 分析試料 写真

第2節 地中レーダー探査

(1) はじめに

二子山古墳の発掘調査期間中に、墳丘や堀、中堤の規模や形態、埋葬施設の状況の把握を目的に、地中レーダー探査を実施した（平成29、30年度）。地中レーダー探査（GPR探査：Ground Penetrating Radar）とは、土の掘削を伴わず地中の状況を把握可能な探査手法の一つであり、データ取得の迅速性や解像度に優れた手法である。石で構築された埋葬施設や大規模な堀をもつ古墳の調査に適した探査手法である。

平成29年度の二子山古墳のレーダー探査については既に報告（城倉ほか2018）されており、今後の整備に活かせる内容であるため概要をまとめた。図103は上記文献からの引用である。

(2) 探査の目的と成果

埼玉古墳群においては、過去に奥の山古墳や鉄砲山古墳で地中レーダー探査を実施しており、調査成果を報告している。今回は、二子山古墳の墳丘の形態や規模の把握、埋葬施設の位置や規模の把握を目的に、早稲田大学文学部考古学コースと埼玉県立さきたま史跡の博物館との協同で「二子山古墳の測量・レーダー探査」を実施した。下記に成果のまとめを引用する。

「①後円部墳頂には円形の大きな盗掘坑が認められるが、竪穴系の埋葬施設の痕跡は認められない。②後円部東南側の中段テラスに開口する横穴式石室が、本古墳の主体部である可能性が高い。③横穴式石室の上層には、墓壙の範囲を反映すると思われる陥没の痕跡が認められる。この点は現地形でも把握できる。④前方部墳頂に竪穴系の埋葬施設が存在する可能性は低い。レーダーでは盛土の単位が確認できた。⑤墳丘西側の造出しの範囲は、現地形よりも小さく、くびれも従来の復原よりもスリムになる。⑥中堤造出しの突出に対して、外溝も同様の突出形状を持つ可能性が高い。⑦北側外溝北西隅を検出した。しかし、その北側の下層に人工的な構造物が認められるように、史跡整備時の改変が地下深くに及んでいる可能性が高い。」

(3) 今後の課題

今回の地中レーダー探査によって、発掘調査前に多くの情報を取得できた。墳丘造出しや中堤造出しの発掘調査により、レーダー探査の反応を追認できた部分がある。今後は、レーダー探査と発掘調査の結果の詳細な比較を行い、探査の結果についての考察を行っていく予定である。

引用文献（「第2節 地中レーダー探査」に関わるもの）

城倉正祥・馬場匡浩・山田琴子・根本佑・川村悠太・谷川遼・横山未来・呉心怡2018「埼玉二子山古墳のGPR調査2017」『溯航』第36号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

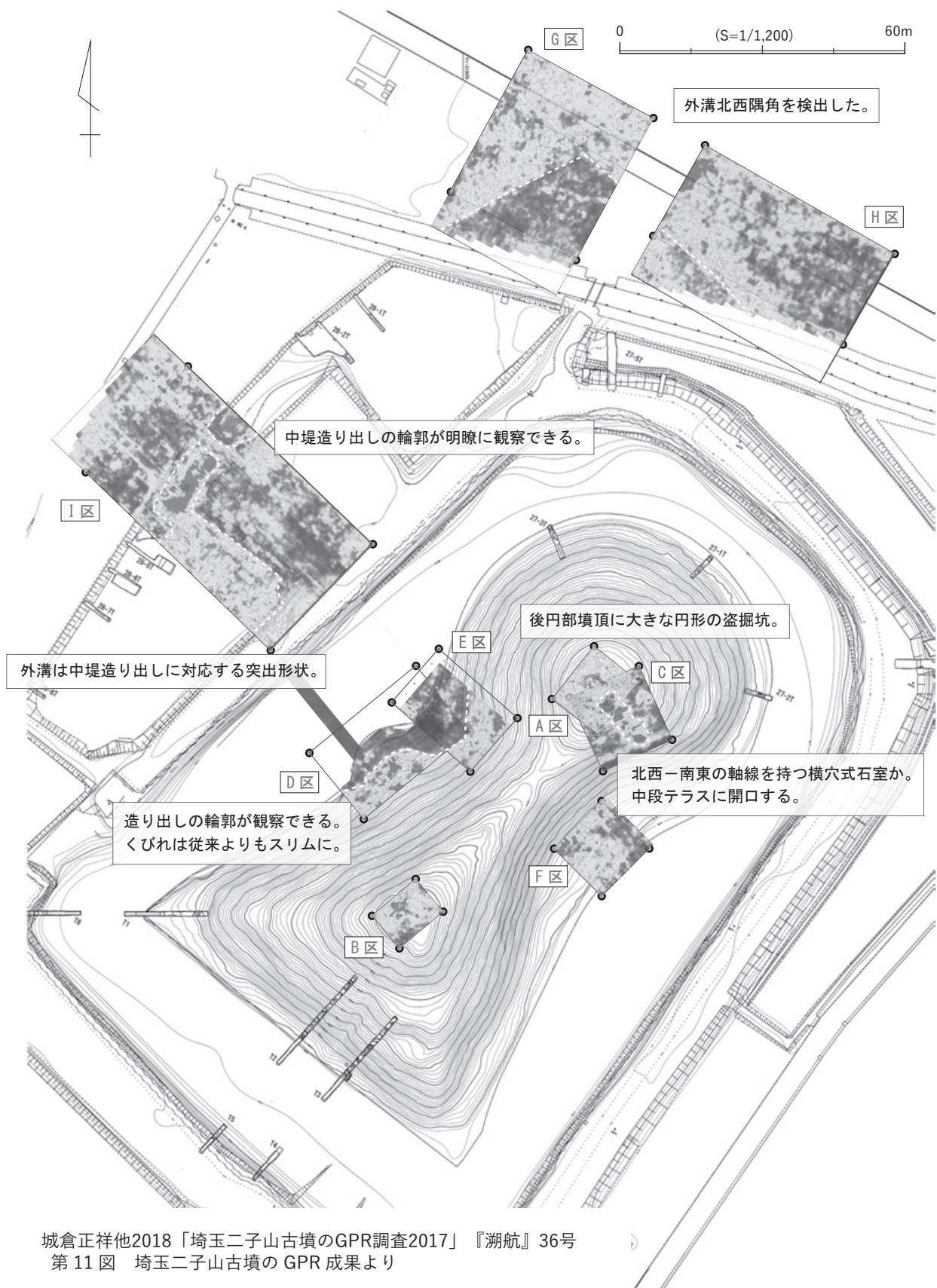


図 103 二子山古墳 地中レーダー探査の成果

第4章 活用事業

平成25年度から平成30年度まで5か年にわたり発掘調査を実施した二子山古墳の成果は、広く社会に還元するために積極的に公開・活用するよう努めてきた。主な活用事業は表11にまとめた。

(1) 発掘調査現地説明会

調査期間中に一般向けの現地説明会を開催し、より身近に調査成果を体感してもらう機会を創っている。5か年にわたる発掘調査の期間中、平成29年度と平成30年度の調査時に実施した(図104・105)。

平成29年度の調査時は平成30年2月3日(土)に午前・午後の2回に分けて開催し、計274名の参加があった。平成30年度の調査では平成31年2月2日(土)に午前・午後の2回に分けて開催し、計314名の参加があった。

二子山古墳は、史跡保護や安全上の理由から、関係者以外の内堀・墳丘への立ち入りを禁止しているが、平成29年度の現地説明会では墳丘造出し部の調査区を紹介するために、初めて内堀内へ一般見学者を案内した。説明会直前に積雪があり、また、周堀の内部を見学コースとしたため、転倒防止用のマットなどの対策を行った。当日は、調査成果をまとめたパンフレット(図106・107)を配布した他、出土遺物を洗浄したうえで展示した。この他、関係機関の視察や研修等の際、希望があれば現場の説明を行った。

表11 活用事業一覧

	事業内容	実施期間	参加人数	備考
1	最新出土品展でパネル展示	平成26年7月12日～8月31日	21,394人	45日間
2	第47回遺跡発掘調査報告会	平成26年7月27日	158人	
3	発掘調査現地説明会	平成30年2月3日	274人	午前・午後の計2回
4	最新出土品展に出品	平成30年7月7日～9月2日	13,569人	52日間
5	第51回遺跡発掘調査報告会	平成30年7月29日	127人	
6	発掘調査現地説明会	平成31年2月2日	314人	午前・午後の計2回
7	第52回遺跡発掘調査報告会	令和元年7月28日	120人	
8	発掘された日本列島2022展 地域展に出品	令和4年6月11日～7月18日	6,758人	会場：埼玉県立歴史と民俗の博物館
9	スポット展示「二子山古墳の調査成果」に出品	令和4年11月1日～令和5年3月12日		

※1,4は会期中のさきたま史跡の博物館の入館者数。

※2,5,7は県内の10遺跡ほどを対象に最新の成果を報告するもの。

※最新出土品展、遺跡発掘調査報告会は埼玉考古学会、(公益財団法人)埼玉県埋蔵文化財調査事業団と共催。

※発掘された日本列島2022展主催は下記のとおり。

文化庁、埼玉県立歴史と民俗の博物館、だて歴史文化ミュージアム、石巻市博物館、宮崎県総合博物館、なら歴史芸術文化村、全国新聞社事業協議会、埼玉新聞社、東京新聞、北海道新聞社、河北新報社、宮崎日日新聞社、奈良新聞社

（２）遺跡発掘調査報告会

遺跡発掘調査報告会は、埼玉県内で実施された発掘調査について一般向けに発表することを趣旨として、令和元年度までは年に一度最新出土品展に合わせて開かれていた。会場がさきたま史跡の博物館であることもあり、例年、前年度に実施された埼玉古墳群の発掘調査の成果についてまとめ、発表している。調査期間中に開催され、遺構を直に見学できる現地説明会とは異なり、室内でスライドを使用した報告会の形式をとっている。現地説明会後に新たに明らかになった事項や図面整理、遺物整理作業の過程で得られた知見を含めて発表するため、遺構の解釈を盛り込んだ学術的な内容となることが多い。二子山古墳については、平成25年度、平成29年度、平成30年度の調査成果について、調査の翌年度に報告している。

（３）展示

発掘調査の主体が博物館であることを活かし、調査で出土した資料を速報的に展示する機会があった。さきたま史跡の博物館では、例年夏季に最新出土品展「地中からのメッセージ」（主催：さきたま史跡の博物館・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉考古学会）を開催しており、平成26年度にはパネル展示、平成30年度には須恵器の坏や土師器の高坏、円筒埴輪など、墳丘造出しから出土した遺物を中心に展示した。令和４年には「発掘された日本列島2022」の地域展に、須恵器の坏や土師器の高坏、円筒埴輪を出品した。その他、本報告書の刊行に合わせ、令和４年度にスポット展示「二子山古墳の調査成果」（令和４年11月１日～令和５年３月12日）を開催し、接合・復元した円筒埴輪や須恵器、土師器を展示した。整理作業の過程で新たに見つかった鹿や斜格子の線刻をもつ埴輪も合わせて展示し、広く公開した。

（４）その他

最新の発掘調査成果を広く公表するため、博物館主催のさきたま講座や埼玉県の施策である「県政出前講座」において、発掘調査の写真や図面を使用して解説を行っている。年間３～４回行われる博物館主催の古墳群ガイドツアーにおいても、写真等を使用しながら発掘調査成果について紹介している。

平成29年度の発掘調査実施中は、館のＨＰ上で調査について定期的に写真付きで報告し、リアルタイムで発掘調査の進捗を体感できるコンテンツを用意した。



図 104 平成 29 年度 現地説明会



図 105 平成 30 年度 現地説明会



図 106 平成 29 年度 現地説明会資料（抜粋）



図 107 平成 30 年度 現地説明会資料

第5章 発掘調査のまとめ

第1節 調査成果について

(1) 調査で明らかになったこと

今回の発掘調査で判明したことをまとめると、下記のとおりである。

- ・ 墳丘全長は132.2mである。昭和43年度に整備により、内堀の掘削及び墳裾を造成したために見かけ上一回り大きくなり、これまでは135mまたは138mとされてきた。今回の調査において主軸付近で墳裾を検出したことにより、内堀法尻での墳丘全長が明らかになった。
- ・ 後円部で平坦面（標高23.5m）が確認され、段築構造は二段以上存在することが判明した。墳丘下位でも緩斜面を検出しており、三段となる可能性もあるが、トレンチか所（29-1T）での検出であるため、確実ではない。前方部で明瞭に観察できる平坦面は、中世に造成された墓地に由来することが判明した。
- ・ 前方部に西側に付く墳丘造出しは、先端と北側が削平されているものの、上下2段から成る点、上段は方形となることが判明した。墳丘造出しの南側では裾が検出された。
- ・ 墳丘造出しの上段外縁には円筒埴輪列が確認された。
- ・ 墳丘造出しの上段からは土師器の高坏、須恵器の坏（身・蓋）を主体とする土器が出土した。
- ・ 墳裾の一部には緩斜面が存在する。
- ・ 墳裾は昭和43年度の整備で客土を貼り付けており、築造当時の墳裾が造成の影響を受けずに残っていることが確認された。
- ・ 内堀の形状は、長方形に近い台形を呈する。内堀北側で隅角が検出されたため、整備された隅丸の形状とは異なる。
- ・ 内堀の堀底の標高は、約16.5～16.8mである。この標高は、過去の調査成果と整合する。
- ・ 墳丘西側に中堤の盛土が一部残存しているが、今回の発掘では新たに中堤盛土は確認されなかった。外堤も確認されなかった。
- ・ 中堤造出し付近から形象埴輪が多く出土する。
- ・ 外堀は中堤造出しに沿う形で屈曲することが判明し、昭和43年度の整備とは異なる形状であることが明らかになった。外堀の堀底の標高は、16.3～16.5mである。
- ・ 墳丘直下の旧表土は17.4～18.3mであり、旧地形は微妙な凹凸があったとみられる。旧地表面の削剥は大規模に実施されていない可能性が高い。
- ・ 土壌・テフラ分析により、墳丘盛土下からHr-FAに由来するとみられる層が検出され、Hr-FA降下後に墳丘が築造された可能性が高まった。昭和42年度調査の際に火山灰とされた白色の層は、堀に堆積した白色粘土の層を認識したものであることが判明した。内堀と外堀の埋没中にAs-B（浅間B）が降灰したことも明らかになった。
- ・ 地中レーダー探査の結果、後円部の東側にテラス面に開口する横穴式石室と考えられる反応が検出された。

（２）墳丘形態について

今回の発掘調査では、埋立工事に伴う墳裾の残存状況の確認が当初の目的であり、墳丘造出しを含む墳裾部と、堀の形態の確認を大きな目的としている。限られた調査範囲で検出した遺構から墳丘全体の形態について述べることは困難であるが、現在わかっている点を踏まえ、墳丘、堀の形態を推定復原した（図108）。墳丘造出しの形態については、半円状のプランまでは存在していたと推定可能であるが、先端および北側が削平されているため推定である。

古墳の主軸方位はN-40°-Eで、墳丘全長約132.2m、後円部径約67.0m、前方部最大幅約83.2mである。旧表土を検出した標高は17.4～18.3mとバラつきがあるが、17.9mを平均値として採用すると、旧表土からの高さは後円部11.9m、前方部13.9mと前方部が高い。テラス面は後円部北側、標高23.5mの位置で検出されている（図109）。このテラス面を検出した29-1Tでは、堀内の緩斜面とは別に墳丘下位でも平坦面が見つかっているが、これがテラス面かは他の箇所での検証が必要である。なお、テラス面での埴輪列の樹立は確認されていない。

前方部西側に一か所造出しがある。墳丘造出しについては、第２章第１節で触れたとおりであるが、後世の溝により削平を受けている。昭和42年度の調査で半円状の溝を検出しているが、この溝が平成29年度の調査で検出された半円状のプランと対応すると考えられる。本来の造出しの形は不明であるが、半円状のプランの範囲は当初の墳丘造出しの範囲内に収まるとみられる。墳丘造出しは上下２段から成り、上段に樹立された状態で円筒埴輪が検出されるなど、遺存状況は比較的良好である。上段のプランが方形であるため、下段も方形であった可能性が高い。なお、埼玉古墳群内の前方後円墳で半円形の墳丘造出しはない。墳丘東側くびれ部は観音寺があったとされる平坦地があるが、墳裾への影響は未発掘のため不明である。

（３）内堀・外堀・中堤について

内堀・外堀は昭和43年度の整備で大きく形を変えている。内堀は昭和43年度に盾形に近い形で復原された。今回の調査で、復原された位置と異なる位置から内堀のプランが検出され、内堀の平面形状が台形に近い長方形であることが判明した。今回の調査で検出した内堀の底面の標高は概ね16.5～16.8mで、昭和42年度の調査の結果と一致する。旧表土標高は17.4m～18.3mであるが、平均17.9mとすると堀の深さは1.4m程度であったとみられる。

外堀の形態については、墳丘の北東隅部で外堀と中堤の境界が検出されたことで、方形プランをもつことが明らかになった。外堀の堀底の標高は、16.3～16.5mと内堀と同じかやや浅い。墳丘西側の中堤には中堤造出しが存在し、外側に向かって撥状に開く台形であり、外堀の一部がブリッジ状に掘り残されている点が昭和42年度に確認されている。平成30年度の発掘調査により、外堀が中堤造出しの突出に合わせて外側に屈曲することが判明した。この中堤造出しの屈曲は稲荷山古墳、鉄砲山古墳と共通した特徴であり、一部がブリッジ状に掘り残される点も同様である。なお、中堤については今回の調査で盛土は検出されていない。

なお、図108の墳丘北側や東側外堀については、数本のトレンチで把握した遺構をつないで復原線を引いているが、外堀の立ち上がりは緩やかであるため不明瞭な部分が多い。

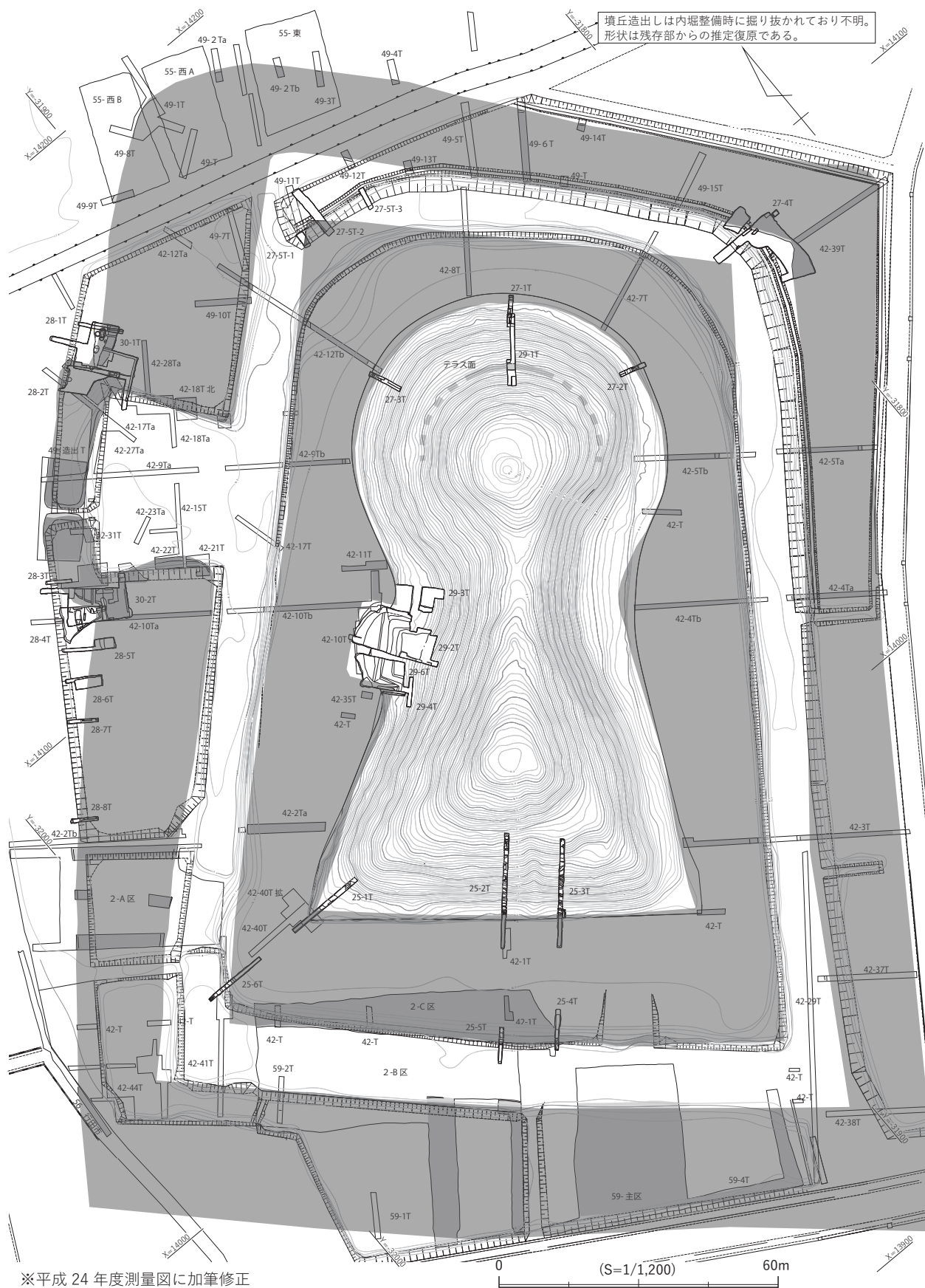


図 108 二子山古墳墳丘推定復原図

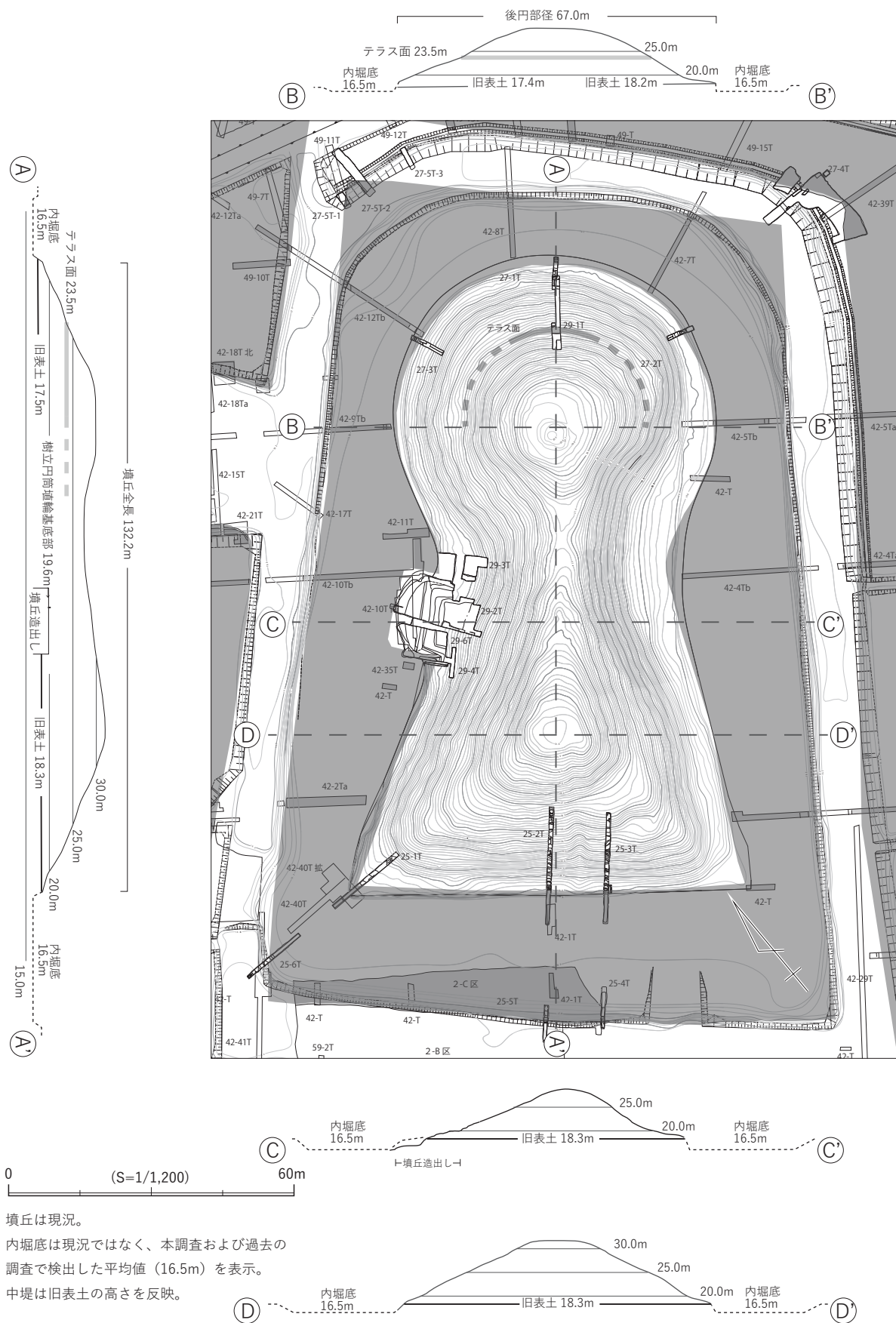


図 109 墳丘横断図

第2節 出土遺物について

(1) 円筒埴輪について

埼玉古墳群の埴輪の研究については、埴輪のハケ目の分析により、工具の一致や埴輪窯の前後関係、埴輪窯と古墳の供給関係が明らかにされている。これらの分析により、二子山古墳の赤褐色系統の埴輪は生出塚埴輪窯産のDE8C類型、M6B類型とされ、5条6段構成に同定されている。両者はよく似た特徴をもち、鴻巣市新屋敷25号墳でも共伴する。なお、DE8類型は条数を一段下げた4条5段の円筒埴輪が瓦塚古墳で見つかり、この両古墳への埴輪生産を契機に北支台での生産活動が始まったとみられる。同時に、二子山古墳・瓦塚古墳への供給を画期として生出塚埴輪窯が本格的に大規模生産を開始したとされる。他に、橙褐色系統の方形透かし孔の円筒埴輪は、桜山遺跡9号窯の焼台、諏訪山7号墳の周溝、毛塚32号墳出土の円筒埴輪との一致が判明しており（桜山G）、いわゆる「プレ桜山」に属することがわかっている（城倉2011）。

今回の調査で出土した円筒埴輪は5条6段であるとみられ、器高や口径、底径が著しく大きい、あるいは小さい個体は確認されていない。二子山古墳では、黄白色系統・橙褐色系統・赤褐色系統の3系統が確認されており、今回出土した資料に限れば、橙褐色系統と赤褐色系統の個体数は均衡する。黄白色系統の出土はいずれも破片で、少量である。今回出土した円筒埴輪の中にも、DE8、M6類型のハケ目をもつ個体が確認されている。生出塚埴輪窯跡は二子山古墳への埴輪の供給を契機に本格的に稼働し、埼玉古墳群を主要供給先として鉄砲山古墳の段階まで機能し続けたとみられる。

今回出土した円筒埴輪の特徴を各系統から述べる。赤褐色系統の埴輪の胎土は均質で、比較的精良であるといえる。胎土には酸化鉄や角閃石を含み、鮮やかな赤色に発色することが多い。突帯は断面「M」字形でやや扁平であり、ナデ付けは蛇行するなど雑である。口縁部の開きは弱く、口唇部の断面は凹状を呈する。底部は分厚く、篠状圧痕がみられる個体が多い。透かし孔は円形であり、突帯を切るほど大きく穿孔されるものも存在する。上から2段目が穿孔領域であったとみられる。

橙褐色系統は、比較的大粒のチャートや小石のほか、砂粒が胎土に含まれ、器壁はザラザラしている。赤褐色系統に比べ特徴にバラつきがある。突帯は比較的高く、丁寧にナデ付けられている。透かし孔は円形と方形の個体が確認されている。器壁は全体的に薄く、底部も極端には肥大化しない。口縁部の開きは弱い、口唇端部の断面は丸い。口縁部の段（6段目）が長い。

(2) 線刻をもつ円筒埴輪について

二子山古墳出土の埴輪の整理作業の過程で、表面に線刻が施された個体が多く見つかった。第2章第5節の「線刻をもつ埴輪」でまとめたとおりであるが、そのすべてが墳丘造出し周辺のI区から出土した。形象埴輪の一部である可能性も考えられるが、I区から明確に形象埴輪片であると同定される資料が少ないことや、器壁の曲率が完形の円筒埴輪と近似する破片が多いことから、線刻が施された円筒埴輪片であると判断した（図110）。

全国的に円筒埴輪へ線刻を施す例は5世紀中頃～後半に盛行するが、6世紀に入るとあまり見られなくなる。今回報告した資料以外の生出塚埴輪窯産の円筒埴輪にも斜格子などのヘラ記号が施される例はあるが、いずれも裏面であり、外面への線刻は少なく、絵画に近いものはみられない。

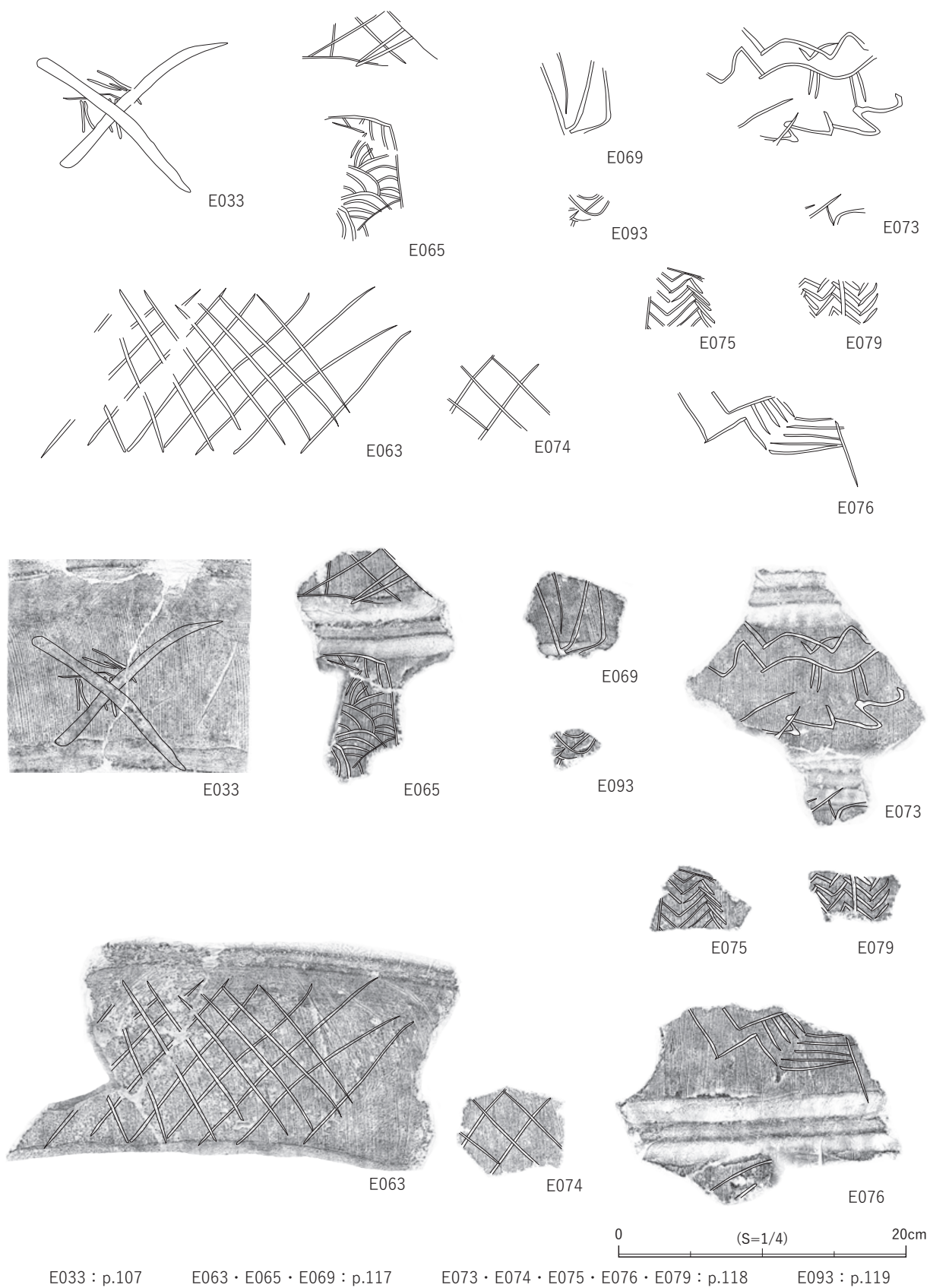


図 110 線刻をもつ埴輪（線刻部分、抜粋）

E033は口縁部最上段に鹿の線刻とその上から×印をつけられた円筒埴輪である（図110左上）。鹿と×印の組み合わせは、埼玉県さいたま市東宮下出土の人物埴輪でもみられ、毘であるとも、弓矢であるとも考えられる。鹿の上から×印が施される理由は想像の域を出ないが、胎土がまだ動く段階に施されていることから、一度刻んだ鹿の線刻をナデ消す意図ではないと考えられる。

鹿の線刻の出土事例は、大阪府や京都府、岡山県に集中しており、関東地方における事例は非常に稀有である。管見に触れる限り、関東地方では、栃木県塚山古墳・塚山西古墳の円筒埴輪（写真図版37）、群馬県剣崎長瀬3号墳の円筒埴輪、埼玉県さいたま市東宮下出土の人物埴輪（写真図版38）に例がある。二子山古墳を除く関東の事例は鹿の胴体をふくらませて描かれていることにも注目される。

（3）形象埴輪について

第2章第6節のとおり、今回の発掘調査では中堤造出し周辺から多くの形象埴輪片が出土した。完形に復元された資料はないが、既往の調査も含めると、腕や佩刀の柄頭、鬚などの人物（男・女）、鈴や鞍、障泥、円形杏葉などの馬形、家形、蓋・盾・靱などの器財が出土しており、稲荷山古墳同様に、中堤造出しにおける埴輪祭式の一端が伺える。福岡県八女市・岩戸山古墳における別区や、大阪府高槻市・今城塚古墳における中堤張り出し部と近い役割が与えられていたと想像するのは難しくない。

（4）須恵器について

平成29年度の調査で、墳丘造出しから多くの土器が出土した。その主体は須恵器の坏と土師器の高坏である。須恵器の詳細は第2章第7節で述べたが、今回出土した器種は、坏（身・蓋）、提瓶、横瓶、甕、大型器台、臚のほか、高坏、壺の蓋とみられる破片が出土している。坏の中には、底部、または天井部を穿孔する例がある。二子山古墳の出土須恵器については、今回の調査前まではMT15型式まで遡るとされてきた（利根川2003、酒井2018）。今回大量に出土した須恵器坏については、稜が甘いものや受部が緩いものもあるが概ね立ち上がりが高く、TK10型式古相とみられる。埼玉古墳群の中で、TK10（古）に位置づけられている瓦塚古墳との併行期に当たる（藤野2019）ことから、円筒埴輪で示された編年とも整合する。産地については判断材料がなく不明であるが、在地産、群馬県域産のものは少ないとみられ、東海以西からの搬入品が多い可能性が高いとの見解を得ている。

埼玉古墳群においては、稲荷山古墳、二子山古墳、瓦塚古墳、奥の山古墳、將軍山古墳で墳丘造出しから土器が出土している。埼玉古墳群では、墳丘の規模の大小によらず、一貫して墳丘造出しにおける土器を用いた儀礼が行われていたとされ、時期によって器種構成が変化する点が指摘されている（酒井2018、藤野2019）。稲荷山古墳は個人用の食器である有蓋高坏が主体を占める。二子山古墳においては提瓶や大型器台など、稲荷山古墳では見られなかった器種が登場する一方で、須恵器の主体は属人具である坏蓋・坏身である。二子山古墳から甕や提瓶など、貯蔵具が導入されるようになるが、これは二子山古墳併行期の瓦塚古墳や後続する奥の山古墳と同様の特徴である。將軍山古墳段階になると、大型器台が姿を消し、甕や提瓶などの貯蔵具が主体となる。

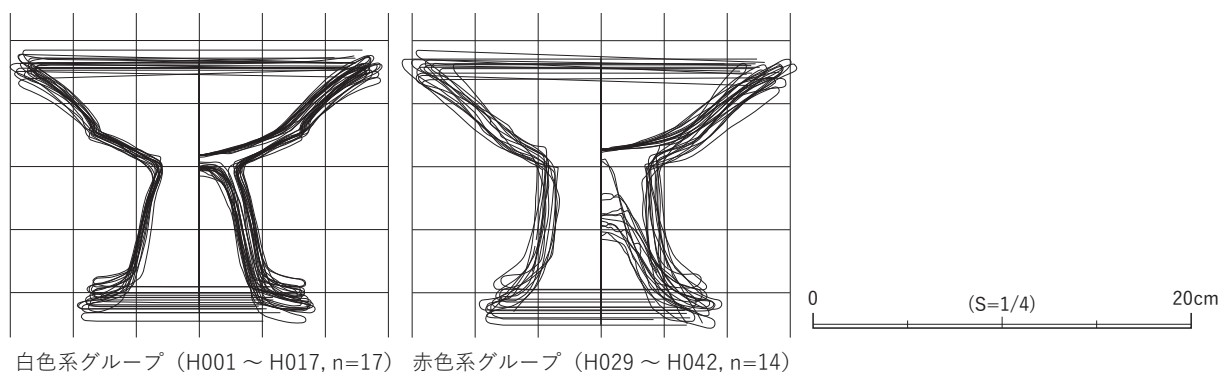


図 111 土師器（高坏）重ね合わせ図（N=31）

埼玉古墳群全体の墳丘造出しの全容は明らかではないが、今回二子山古墳で出土した多くの土器により、埼玉古墳群の墳丘造出しにおける儀礼について研究が進展することが望まれる。

（5）土師器について

高坏には赤、白の2グループの存在が確認された。その特徴については第2章第8節でまとめたとおりである。今回の墳丘造出しの調査で出土した高坏は、白色系グループが22個体、赤色系グループは17個体確認されている。図111は各グループに属する完形品の実測図の重ね合わせ図である。

白色系グループは調整が丁寧で技術的に洗練されており、非常に規格性が高いことがわかる。脚部は中空となり、坏部と脚部の接続には円盤状粘土の充填が確認されている。一方赤色系グループは、調整は粗削りで技術的にバラつきがあり、偏差が大きい。製作方法や胎土に差はあるものの、赤・白ともに法量は概ね一致しており、同じサイズに作ろうとしている意図が感じられる。H041、H042は赤色系グループの特徴を示すが、脚部の製作技法は白色系グループと似ており中空である。高坏製作にあたって複数工人、複数グループが関与したことは間違いなさであろう。

埼玉古墳群においては、これまで、稲荷山古墳、瓦塚古墳、将軍山古墳で墳丘造出しから土師器が確認されていた。須恵器と比べると少数であり、器種構成については坏を中心に甕や壺が確認されている。今回の調査で確認された二子山古墳の墳丘造出しにおける大量の高坏の出土は、上述の古墳とは異なる特徴を示す。また須恵器の高坏や土師器の坏がほとんど確認されないことも、二子山古墳の墳丘造出しで執り行われていたであろう儀礼の内容の一端を示している。

引用文献（「第5章 第1節 調査成果について、第2節 出土遺物について」に関わるもの）

酒井清治2018「埼玉古墳群出土の須恵器について」『史跡埼玉古墳群総括報告書I』埼玉県教育委員会

城倉正祥2011『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

杉崎茂樹ほか1987『二子山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会

利根川章彦2003「『武蔵国造の乱』はあったか—6世紀前半以降の上野・武蔵地域の政治勢力の所在—」『調査研究報告』第16号 埼玉県立さきたま資料館

藤野一之2019『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房

若松良一ほか1992『二子山古墳 瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会

第3節 整備について

(1) 昭和42年度の発掘調査と昭和43年度の整備について

昭和43年度の整備に先立って行われた昭和42（1967）年度の発掘調査は、周堀を中心に40箇所以上のトレンチを設定して行われた。調査により、墳丘西側の造出しや方形の中堤造出し、二重の周堀の存在が明らかになった。調査成果を受け昭和43（1968）年度に堀の復原整備が行われ、現在の姿に復原された。

昭和43年当時、発掘調査は博物館が行っていたが整備工事は公園部局が担当していたこともあり、設計図等の工事記録は博物館内に残っていない。今回の発掘調査や内堀埋立工事により、昭和43年度に行われた整備の実態が明らかになってきた。

昭和43年度の整備では、内堀の堀底を一部掘削し、水堀として整備したことが明らかになった。特に墳丘造出し周辺では、昭和42年度に検出された半円状の溝（B溝）に沿って堀を掘削し、墳丘造出しを復原していると判明した。昭和43年度整備では、狭小なトレンチで検出した遺構を基にした推定復原を反映している。個々のトレンチで検出した遺構を直線的に結んでいるため、実際の墳裾や堀の立ち上がりが遺存していた箇所も整備により掘削され失われた可能性が高い。

(2) 平成19・24～26年度の整備について

水位の変動による墳丘の崩落は、平成10年代より目立つようになったという（佐藤2015）。平成19（2007）年度に大規模な崩落が確認され、東側くびれ部において護岸工事を実施した（井上2009）。

平成19年度の工事は応急措置的な側面が強く、墳裾の崩落の根本的な対策を講じる必要があった。護岸工事以来、他の水堀をもつ古墳の事例を収集し工法を検討した後、平成24年度から内堀の全面埋立工事が実施されることとなった。埋立工事については下記文献（佐藤2015）で詳細にまとめられている。この工事により墳丘の崩落の進行は止まった（図112・113）。



図112 埋立前の様子（平成25年2月撮影）

(3) 今後の整備に向けて

埼玉県教育委員会では、特別史跡埼玉古墳群の中・長期的な保存・活用等を図るため、令和3年度に『特別史跡埼玉古墳群整備基本計画』（埼玉県教委2022）を策定した。この中で、二子山古墳の整備に関する課題が以下のとおりまとめられた。

課題

○保存のための整備



図113 埋立後の様子（平成27年3月撮影）

①周堀を含めた範囲の追加指定及び公有地化。

②未整備範囲の発掘調査。

③過去の整備により影響を受けた墳裾の保護。

④周堀内への流水遮断。

⑤遺構上の市道の取扱い。

○活用のための整備

⑥古墳築造時の姿を現地で体感するための外堀等の整備。

⑦県道、市道と高低差のある外堀整備の安全性。

⑧途切れずに回遊できる園路の整備。

⑨中堤から墳丘への見通しの確保。

⑩県道に面した立地を生かした活用。

⑪史跡標注の取扱い。

課題③については、平成25年度から30年度の発掘調査により、昭和43年度の造成土が、本来の墳裾を覆うように存在することが明らかになった。このことにより、墳裾の整備を立案する際の重要な情報を得ることができた。

課題⑥に関連する主な調査成果は以下のとおりである。

墳丘北側の内堀、中堤は、現況のような隅丸ではなく隅角であることが確認された。昭和43年度の整備で、外堀は長方形、内堀は盾形に「復原」され、疑問視されることがあったが(渡辺1978)、今回の調査で、内堀も長方形であることを初めて確認することができた。

墳丘西側の外堀は、中堤造出し付近の形態が中堤造出しに沿ってクランクすることが判明した。これにより稲荷山古墳の中堤造出しに似る形であることが明らかになった。

墳丘造出しについては、後世の溝等によりオリジナルの形状が失われていることが明らかになったが、埼玉古墳群の墳丘造出しにおいて、初めて上段方形の2段築成であることが確認された。

以上、課題⑥「古墳築造時の姿を現地で体感するための外堀等の整備」を立案する際に極めて重要な調査成果があった。

今後は、上記諸課題解決に向けた検討、追加調査の必要性の検討、今回の調査成果を反映させた整備計画の立案などを関係機関の指導・助言を受けながら実施していく予定である。

引用文献（「第5章第3節 整備について」に関するもの）

井上尚明2009「二子山古墳の内堀護岸整備について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

佐藤康二「二子山古墳の再整備について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第8号 埼玉県立さきたま史跡の博物館

埼玉県教育委員会2022『特別史跡埼玉古墳群整備基本計画』

渡辺貞幸1978「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐって」『考古学研究』第25巻第3号

写真図版



昭和 42 年度調査時の航空写真

写真図版 2



昭和 42 年度調査 42-10T 南拡張区
半円形のプランを検出し、この成果を基に造出しを復原



昭和 42 年度調査 42-10T
墳丘造出しの北側から溝が検出された



Ⅰ区 全景 墳丘造出し完掘状況



Ⅰ区 全景 墳丘造出し完掘状況（西から）



I 区 全景 墳丘造出し完掘状況（上空から）



I 区 29-2T 墳丘造出し完掘状況（上段）
墳丘造出しの上段外縁に樹立した状態で円筒埴輪を2点検出



I 区 29-2T 墳丘造出し完掘状況（上段）



I 区 29-2T 北壁（南から）



I 区 29-2T 墳丘造出し 遺物出土状況（上層）



I 区 29-2T 円筒埴輪 (E063) 出土状況



I 区 29-2T 円筒埴輪出土状況



I 区 29-2T 須恵器出土状況



I 区 29-2T 土師器・須恵器出土状況



I 区 29-2T 墳丘造出し 遺物出土状況（中層）



I 区 29-2T 土器出土状況



I 区 29-2T 土器出土状況



I 区 29-2T 須恵器（提瓶）出土状況



I 区 29-2T 須恵器（提瓶）出土状況



I 区 29-2T 墳丘造出し 埴輪列出土状況（中層）



I 区 29-2T 土器出土状況



I 区 29-2T 須恵器出土状況



I 区 29-2T 土器出土状況



I 区 29-2T 土器出土状況



I 区 29-2T 造出し下層土器集中検出状況



I 区 29-2T 土師器 (H015) 出土状況



I 区 29-2T 須恵器 (S017) 出土状況



I 区 29-2T 須恵器 (S006) 出土状況



I 区 29-2T 土師器 (H034) 出土状況



I 区 29-2T 墳丘造出し北側 遺物出土状況



I 区 29-2T 墳丘造出し北側 遺物出土状況



I 区 29-6T 墳丘造出し 検出状況



I 区 29-6T 墳丘造出し南側 遺物出土状況



I 区 29-6T 墳丘造出し南側 遺物出土状況



I 区 29-6T 墳丘造出し南側 遺物出土状況



I 区 29-6T 南壁



I 区 29-6T 南壁



I 区 29-6T 南壁土壌サンプル採取状況



I 区 29-6T 墳丘造出し南側 接続部検出状況



I 区 29-3T 全景



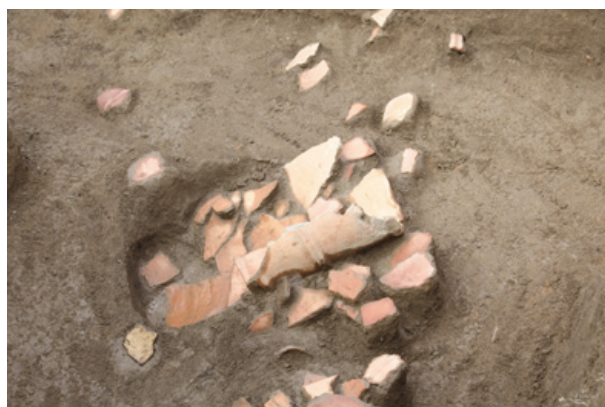
I 区 29-3T 円筒埴輪 (E076) 出土状況



I 区 29-3T 円筒埴輪出土状況



I 区 29-3T 円筒埴輪出土状況



I 区 29-3T 円筒埴輪出土状況



Ⅱ区 27-2T 後円部東側 全景



Ⅱ区 27-2T 旧表土検出状況



Ⅱ区 29-1T 後円部北側 トレンチ上部



Ⅱ区 29-1T テラス面 検出状況



Ⅱ区 29-1T 平坦面 検出状況



Ⅱ区 29-1T 円筒埴輪出土状況



Ⅱ区 25-1T 発掘前 墳丘裾部崩落状況



Ⅱ区 25-1T 全景



Ⅱ区 25-2T 全景



Ⅱ区 25-2T トレンチ上部



Ⅱ区 25-2T 板碑（Z007）出土状況



Ⅱ区 25-2T 土壌検出状況



Ⅱ区 25-2T 土壌検出状況



II区 25-3T 全景



II区 25-3T トレンチ上部遺物出土状況



II区 25-3T 人骨出土状況



II区 25-3T 土壌検出状況



II区 25-3T 土壌検出状況



Ⅲ区 27-4T 全景（東から）



Ⅲ区 27-4T 全景（西から）



Ⅲ区 27-4T 中堤ライン（北から）



Ⅲ区 27-4T 中堤ライン（拡張区）



Ⅲ区 27-4T 中堤ライン（西から）



Ⅲ区 27-5T-2 全景（西から）



Ⅲ区 25-4T 全景（北から）



Ⅲ区 25-5T 全景（北から）



Ⅲ区 25-5T 中堤付近（北から）



Ⅲ区 25-6T 全景（東から）



Ⅲ区 25-6T 中堤付近（東から）



IV区 30-1T 全景（北西から）



IV区 30-1T 全景（南東から）



IV区 30-1T 外堀覆土（西から）



IV区 30-1T 外堀覆土堆積状況



IV区 30-1T SK1・2・4 検出状況



IV区 SK1・2・4 遺物出土状況



IV区 SK1・2・4 遺物出土状況



IV区 SK1 形象埴輪 (K006) 出土状況



IV区 SK2 検出状況



IV区 28-1T 全景（北西から）



IV区 28-1T 土壌サンプル採取状況



IV区 28-2T 全景（北西）



IV区 30-2T 全景（北西から）



IV区 30-2T 全景（南から）



IV区 30-2T 中堤造出し付近



IV区 28-3T 全景（北西から）



IV区 28-4T 全景（北西から）



IV区 28-4T 北壁



IV区 28-5T 全景（南東から）



IV区 28-6T 全景（北西から）



IV区 28-6T 全景（南から）



IV区 28-7T 全景（北西から）



IV区 28-8T 全景（北西から）



IV区 28-7T 全景（南から）



IV区 28-7T 外堀覆土検出状況



IV区 28-7T 土壌サンプル採取状況



IV区 28-8T 外堀覆土検出状況



IV区 28-8T 土壌サンプル採取状況



IV区 28-8T 外堀外側立ち上がり検出状況



Ⅱ区 25-2T 調査風景



Ⅱ区 25-2T,3T 調査風景



Ⅱ区 28-1T 埋め戻し重機風景



Ⅰ区 墳丘造出し調査前風景



Ⅳ区 30-2T 中堤造出し調査風景



I 区 29-2T 墳丘造出し調査風景



整理作業風景（遺物洗浄）



整理作業風景（接合）



整理作業風景（復元）



整理作業風景（撮影）

円筒埴輪



E001



E002



E003



E004



E005



E006



E007



E008



E009



E010



E011



E012



E013



E015



E014



E016



E017



E018



E017 裏 (突帯ウラ指オサエ)



E020



E019



E021



E022



E023



E025



E024



E027



E026



E028



E029



E030



E031



E033



E033 線刻部分



E032



E034



E035



E036



E037



E038



E039



E041



E042



E040



E043



E044



E045



E048



E046



E047



E049



E050



E051



E052



E058



E060



E054



E053



E055



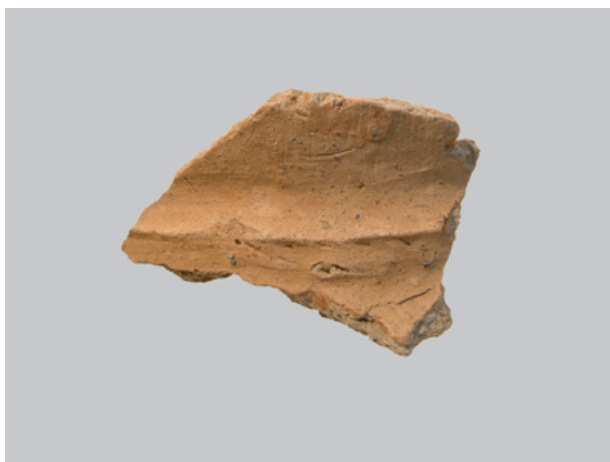
E057



E056



E059



E061



E062



E063



E066



E067



E068



E069



E070



E071



E064



E065



E072



E074



E075



E079



E073



E076



E077



E078



E080



E081



E082



E083



E084



E085



E093



E094



E086



E087



E088



E089



E090



E091



E092



E103



E104



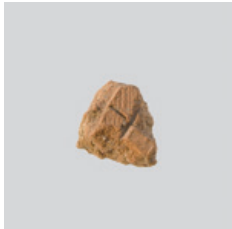
E095



E096



E097



E098



E101



E099



E100



E102



E105



E106



E107



E108



E109



E110



E119



E111



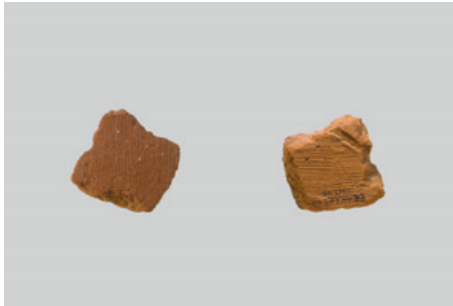
E112



E113



E114



E115



E116



E117



E118



E122



E120



E121



E127



E123



E124



E125



E126



E128



E129



E130



E131



E132



E133



E135



E134



E136



E137



E138



E139



E140



E141



E142



E143



E144



E145



E146



E147



E148



E149



E150



E151



E152



E153

形象埴輪



K001



K002



K003



K005



K004



K006



K007



K008



K009



K010



K011



K016



K012



K015



K013



K014



K017



K018



K022



K024



K019



K026



K020



K021



K023



K027



K039



K025



K028



K029



K030



K031



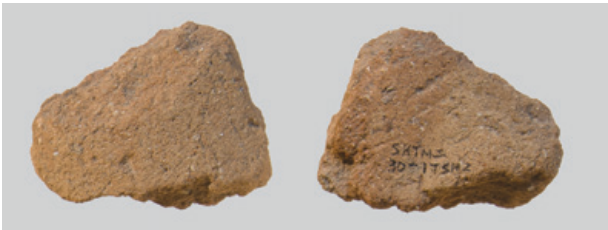
K033



K032



K037



K038



K036



K040



K034



K035



K041



K042



K043



K044

須恵器



S001



S002



S003



S004



S005



S006



S007



S008



S009



S010



S011



S012



S013



S014



S015



S016



S017



S018



S019



S020



S021



S022



S023



S024



S025



S026



S027



S028



S029



S030



S031



S032



S033



S034



S035



S036



S037



S038



S039



S040

写真図版 66

甗



S041



S042



S043

壺蓋



S044

器台



S046



S047

高坏



S045



S048



S049



S050

提瓶



S053



S058



S051



S052



S056



S057



S055

横瓶



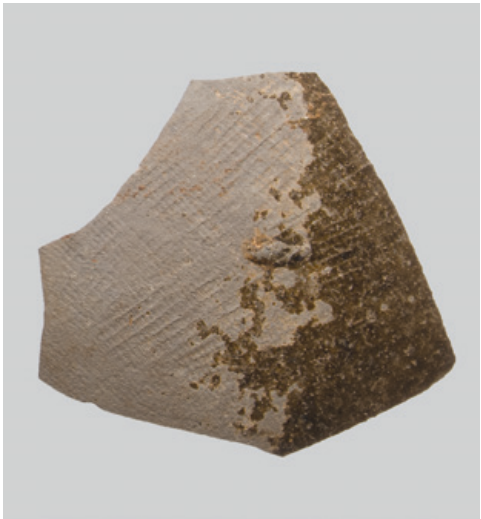
S054



S059



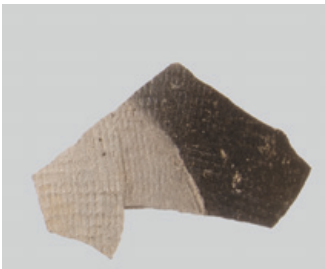
S060



S063



S061



S062

甕



S064



S065



S066



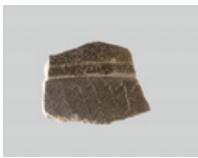
S067



S071



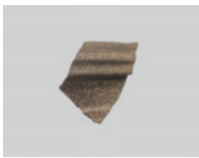
S068



S069



S072



S073



S074



S086



S087



S070



S075



S076



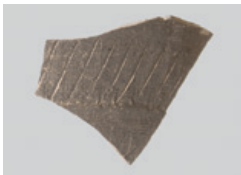
S077



S078



S079



S080



S081



S082



S083



S084



S085



S088



S089



S092



S093



S094



S095



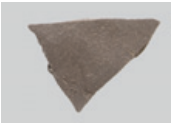
S100



S090



S096



S097



S098



S091



S099

写真図版 70

土師器



H001



H002



H003



H004



H005



H006



H007



H008



H009



H010



H011



H012



H013



H014



H015



H016



H017



H018



H019



H020



H021



H022



H023



H024



H025



H026



H027



H028



H029



H030



H031



H032



H033



H034



H035



H036



H037



H038



H039



H040



H041



H042



H043



H044



H045



H046



H047



H048



H049



H050



H051



H052

縄文土器



Z001



Z002



Z003



Z004



Z005



Z006

写真図版 78

中世遺物



Z007



Z009



Z008



Z010



Z011



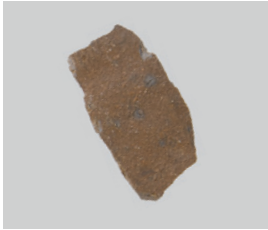
Z012



Z013



Z014



Z015



Z016



Z017



Z018



塚山古墳出土 円筒埴輪 (栃木県立博物館蔵)



塚山西古墳出土 円筒埴輪 (栃木県立博物館蔵)



塚山古墳出土 円筒埴輪 線刻部分



塚山西古墳出土 円筒埴輪 (栃木県立博物館蔵)

参考写真 2



東宮下出土 人物埴輪（さいたま市立博物館蔵）



東宮下出土 人物埴輪 線刻部分



東宮下出土 人物埴輪 線刻部分



東宮下出土 人物埴輪 線刻部分

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきさきたまこふんぐん ふたごやまこふん							
書名	特別史跡埼玉古墳群 二子山古墳発掘調査報告書							
副書名								
編著者名	ナワビ 矢麻							
編集機関	埼玉県立さきたま史跡の博物館							
所在地	〒 361-0025 埼玉県行田市埼玉 4834 TEL 048-559-1181							
発行年月日	西暦 2023（令和 5）年 3 月 17 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ふたごやまこふん 二子山古墳	さいたまけん 埼玉県 ぎょうだし 行田市 さきたま 埼玉 ほか 5170 他	11206	058	36° 07' 35"	139° 28' 45"	20130910- 20131126	99 (H25)	史跡 整備
						20151201- 20160310	178 (H27)	
						20170214- 20170309	144 (H28)	
						20170905- 20180305	241 (H29)	
						20190115- 20190308	234 (H30)	
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
二子山古墳	古墳	古墳時代後期 中世		墳丘 内堀・外堀		円筒埴輪・形象埴輪・須恵器・土師器・ 板碑・中世陶器・縄文土器		
要 約								
前方後円墳である二子山古墳は、昭和42年度に発掘調査が行われ翌年度堀や中堤が復原整備された。この時、内堀は水堀として整備したため、季節による水位変動に伴い墳丘の崩落が確認された。平成24年度から行った水堀の埋立工事に伴い発掘調査を実施したところ、墳裾は前回の整備時に造成されている点が明らかになった。前方部前面は中世土壙等により墳丘面、墳裾が失われており、現地形で観察可能な平坦面が本来の墳丘構造を反映していない点を明らかにした。後円部調査区では墳裾を検出し、二子山古墳の墳丘全長が132.2mに変更となったほか、テラス面を確認した。 墳丘造出しからは須恵器の坏や土師器の高坏がまとまって出土し、線刻が施された円筒埴輪も出土した。造出し縁辺では樹立した状態で円筒埴輪が2個体検出された。墳丘北側の堀隅角の調査では、堀や中堤が現在整備された隅丸の形状とは異なる点を把握した。中堤造出し周辺の調査では、外堀の形状が前回の整備で整えられたものであり、本来は中堤造出しの形状に沿うように造られていた点が明らかになった。中堤造出し周辺では形象埴輪片が多く出土した。								

特別史跡埼玉古墳群

二子山古墳発掘調査報告書

令和 5（2023）年 3 月 10 日 印刷

令和 5（2023）年 3 月 17 日 発行

発行 埼玉県教育委員会

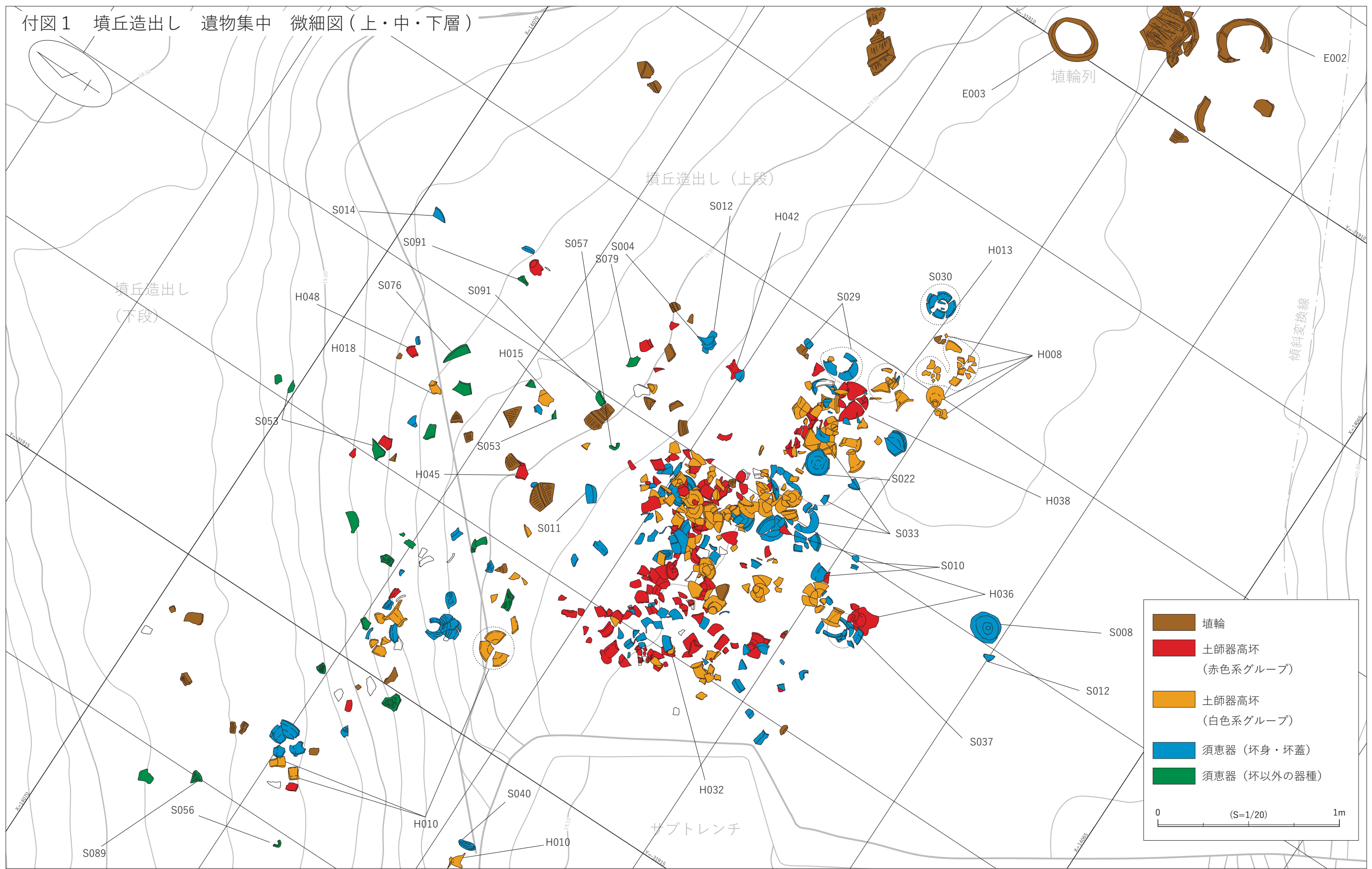
編集 埼玉県立さきたま史跡の博物館

住所 〒361-0025 埼玉県行田市埼玉4834

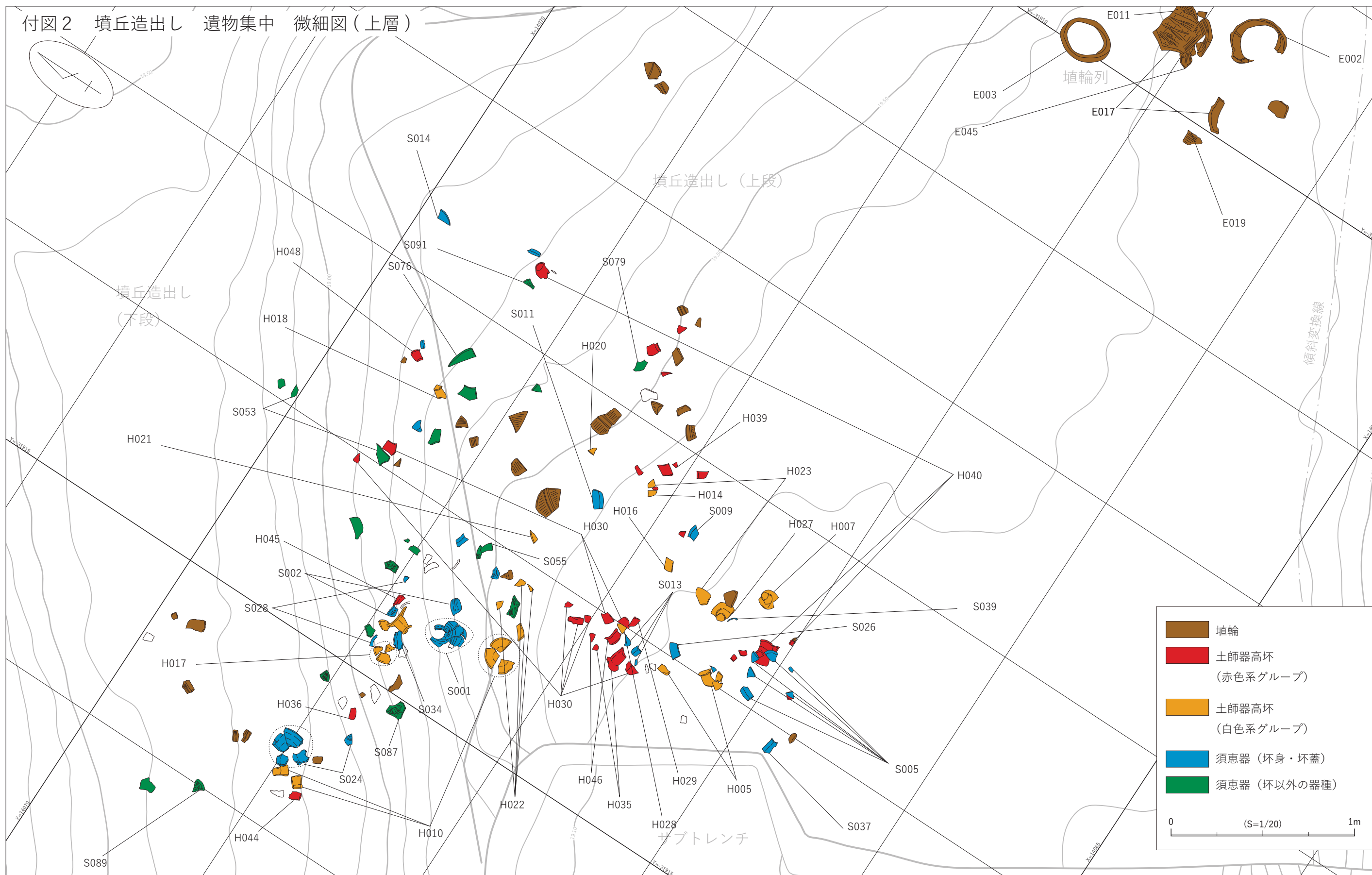
電話 048-559-1181

<http://sakitama-muse.spec.ed.jp>

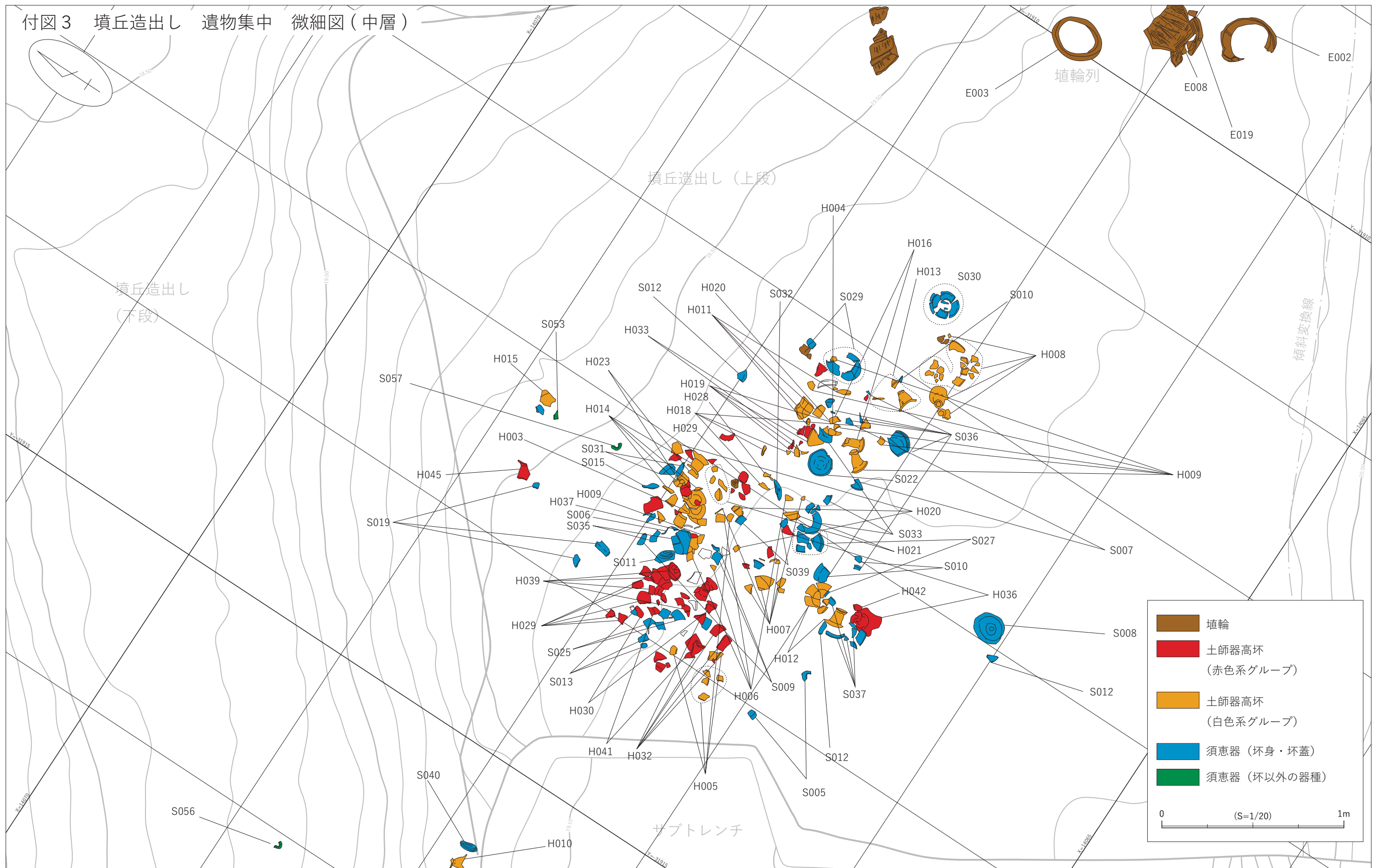
印刷 山進社印刷株式会社



付図2 墳丘造出し 遺物集中 微細図（上層）



付図3 墳丘造出し 遺物集中 微細図(中層)



付図4 墳丘造出し 遺物集中 微細図（下層）

